日本古典全集刊行會板

日本古典全集

古風土記集　下卷

常陸風土記　播磨風土記

肥前國風土記　箋釋豊後風土記

與謝野寛
正宗敦夫　編纂
與謝野晶子　校訂

望覧四方云此土丘原野甚廣大而見此丘如鹿兒
名曰賀古郡狩之時一鹿走登於此丘鳴其聲比〻故号
日岡此岡有比礼墓 坐神大御津歯命子伊波都比古命 所以号褶墓者昔
大帯日子命誂印南別嬢之御佩刀之八咫劒之上結爾
八咫勾下結爾麻布都鏡繋時賀毛郡山直等始祖息
長命 一名伊志治 為媒而誂下行之時到攝津国高瀬之濟
請欲度此河度子紀伊国人小玉申曰我為天皇贄人否
爾時勅云朕公雖然猶度度子對曰遂欲度者宜賜
度賃於是即取為道行儲之弟縵投入舟中則縵光
明炳然満舟度子得賃乃度之故云朕君濟遂到赤
石郡廝御井供進御食故曰廝御井爾時印南別嬢
聞而驚畏之即遁度於南毗都麻嶋於是天皇乃到
賀古松原而覓訪之於是白犬向海長吠天皇問云是

西三條家所藏播磨國風土記卷頭
（據古典保存會本）

古風土記集

下巻

古風土記集下卷解題

一、此「古風土記集」下卷には、上卷の解題に於て述べた如く、常陸、播磨、肥前、豐後等四國の風土記を收めた。此中の「播磨風土記」に就いては、井上通泰先生に解說を乞ひ得て別に添へたから、此處には他の三國の「風土記」に就いて述べる。

一、「常陸風土記」は上卷の解題（三頁）にある如く和銅年間の撰であらう。狩谷棭齋（一七七五「安永四年」——一八三五「天保六年」）は「毎條千金」に於て「常陸風土記は神龜以前と見えて、鄉名をみな何里と有り」と云つてゐる。また菅政友は此「常陸風土記」に就いて精細な考證を書いてゐる。上卷の解題と重複する所も有るが、次にその政友の文を參考として引用して置かう。

一、「風土記ヲ國國ニ召サレシハ、和銅六年ト延長三年トノ兩度ナルガ、此書ハ蓋シ和銅ノ詔ニ依リ記シテ上レルモノナリ。伴信友翁ノ說ニ、和銅六年五月甲子、制、畿內七道諸國郡鄉名著二好字一、令レ作二風土記一、其郡內所レ生銀銅彩色草木禽獸魚虫等物、具錄二色目一、及土地沃堉、山川原野名號所レ由、又古老相傳舊聞異事、載二于史籍一言上、トアルニ、仙覺ガ萬葉集抄ニ、和銅六年令レ註二進風土記一之時、任二太政官下之旨一、定二二字一用二好字一也」ト云ヘルヲ思ヒ合セテ辨フベシ。其ハ此風土記ノ發端ニ、常陸國司解申、古老相傳舊聞事、問二國郡舊事一、古老答曰、云云ト書出タルハ、全ク和銅ノ詔ヲ奉タル文ナルコト著ク、

又白髮郡トアルハ、式、和名鈔等ニモ載セタル眞壁郡ナレバ、光仁天皇ノ御諱ヲ避ケザル延暦以前ナルコトモ決ク、（續紀延暦四年ノ詔ニ、先帝御名及朕之諱云云、自今以後宜二並改避一、於レ是改二姓白髮部一爲二眞髮部一。）マタ出雲風土記ニ、郷字者依二靈龜元年式一改レ里爲レ郷トイヘルニ、此書、郡ニ隷ケテ里ト書キタルハ、和銅ナルベキ慥キ證トゾ思ハルル、ト云ハレシハ、實ニサルコトゾカシ。播磨風土記ニモ、郡ノ下ニ里ヲ記シ、其中ニ安相里（本名阿沙部云、後里名依改二字二字一、註爲二安相里一、）トイヘルハ、萬葉抄ニ定二二字一ト記セルニ考ヘ合スベク、又小宅里、（本名漢部里。）川原若狭祖父娶二少宅秦公之女一、即號二其家少宅一、後若狭之孫智麻呂任爲二里長一、由レ是庚寅年爲二小宅里一、トアル庚寅年ハ、風土記ヲ召サレシ明ル和銅七年ト覺シキニ、カク歳月ヲ隔テヌ書サレザマナル、是モ亦和銅ノナルコキ證トハナシツベシ。サレド常陸ノハ、多珂郡條ニ、名二多珂之國一、（今多珂石城所謂是也。）マタ至二難波長柄豐前大宮臨軒天皇之世癸丑年一、云云、以二所部遠隔往來不便一、分二置多珂石城二郡一、（石城郡今存二陸奥國堺内一）トアリテ、石城ハ當時既ク陸奥國ニ屬キタレバ、續紀ニ、養老二年五月乙未、割二陸奥國（陸奥者須本ニ常陸ニ作ルハ非ナリ、今一本及ビ令抄ニ據レリ。）之石城、標葉、行方、宇太、亘理、菊多六郡一、置二石城國一、割二白河、石背、會津、安積、信夫五郡一、置二石背國一、割二常陸國多珂郡之郷（〇靈龜後ナレバ里トハ記サレズ。）二百一十烟一、名曰二菊多郡一、屬二石背國一焉、（石背國ハ蓋シ石城國ノ誤ナラン、菊多郡ハ國造本紀ニモ、道奧菊多國ト見エテ、往古ヨリノ稱ナルヲ、名曰二菊多郡一ナド新ヲシク記サルベクモ思ハレネバ、此ハ陸奥國

ナル菊多等ノ六郡ヲ割キテ、石城國ヲ置カルルニ就キテ、僻ナル多珂郡ノ二百一十姫モ、山ノ川ナドノ便リニヨリ、菊多郡ニ加ヘテ石城國ニ屬ケラレシコトハ、今多珂石城所謂是也トアルニテモ知ラレタリ。今モナホ多珂郡ハ、陸奥國菊多郡ト勿來ノ山脈ヲ隔テテ相違レリ、）ト見エテ郡ヲ割キタル後ナルコト著キニ、靈龜前ノ舊稱以テ記サレシハ、如何ニトイフニ、常國ノ管郡ハイト廣クテ、査點モ急ニハナリ難ケレバ、奏上モ自ラ養老割郡ノ後ニハ至リツレド（和銅二年ヨリ養老二年マデハ六年ニナレリ、）モト和銅ノ勅ニヨリシモノナレバ、書式名稱スベテ和銅ノ舊ヲ用ヒシモノト知ラレタリ。サテ古風土記ノ今世ニ存在レルモノハ、播磨、出雲ト常陸ノ三國ノミニテ、（肥前豐後ハ和銅ヨリ後ノモノナルベシ、）其中播磨出雲ノハ、トモニ山川村里產物古傳說等ヲアリノママニ記サレタル古樸ナル文ナルニ、此記ハ西土唐ノ世ニモハラ行ハレシ對偶排比ノ體ニナラヒテ、イタク文ヲ飾ラレシニツキテ、ナホ按フニ、續紀ニ養老三年七月庚子、始置二按察使一、常陸國守正五位上藤原朝臣宇合管二安房上總下總三國一、ト見エタルノニヨレバ、宇合朝臣（朝臣ハ不比等公ノ第三子ナリ、始メ馬飼トモ云フ、養老元年三月遣唐副使ニテ唐國ニ到リ、十二月ニ歸レリ。此頃ヨリ宇合トハ書キ改メラレタリ。和銅七年十月丁卯、以二從四位下石川朝臣難波麻呂一爲二常陸守一、トアレバ、朝臣ハ歸朝ノ後幾程モナク常陸國守ニハ任サレシモノナランカ。懷風藻ニ在二常陸一贈二倭判官留在一レ京トイヘル、即チ朝臣ガ詩序ニ、待二君千里之駕一于今三年、懸二我一箇榻一於レ是九秋、トハ三年ヲ經シ後ナリ。神龜元年四月丙申以二式部卿正四位上藤原朝臣宇合一爲二持節大將軍一ト見エ

タレバ、是ヨリ前ニ式部卿ニハナサレシナリ。サラバ常陸ノ在官ハ、養老二三年ヨリ五六年ノ間ナルベシ。天平三年參議ニナサレ、後正三位ニ叙シ、式部卿ニテ太宰帥ヲ兼ネ、同九年八月年四十四ニテ薨リヌ。大日本史ニ尊卑分脈ヲ引キテ、宇合器宇弘雅、風範凝深、博渉二墳典一、旁達二武事一、雖レ經二營軍國一、特留二心文藻一、爲二當時翰墨之宗一、有二集二卷一傳レ世、以二其官一式部卿ハ、世稱二式家一ト記シタリ。）ノ常陸ニ在官セラレシ年限ハ明文ナケレド、コノ四五年ノ程ト覺シク、風土記ノ奏上モ亦其際ノ事ナルベシ。朝臣ハ名ダタル文人ナレバ、懷風藻ニモ其文頗ル駢儷體ヲ得ラレシモノト思ハルレバ、是記モ亦朝臣ノ潤色セシ疑ヒ無キニアラズ。是ハ確證少ケレド、試ニイヘルノミ。其記セル大凡ヲイハバ、開卷ニ國名ノ起レル所由ヲ辨ヘ、次ニ郡ヲ分チ、其郡名ノ下ニハ四至ヲ分註シテ境域ヲ明ニシ、郡ノ首每ニ古老ノ傳說ヲ擧ゲテ、郡名ノ起源建置ノ沿革ヲ詳ニス。サテ一條每ニ郡家ヲ距ル四方ノ里數ニヨリテ、各里及ビ山川ノ遠近ヲ定メタリ。此書今ハ水戸彰考館ニ在ル鈔本ノミニテ、全本ハ世ニ絶エタリ。（此ハ延寶中松平加賀守ノ藏本ヲ以テ寫セル由、同館ノ舊記ニハ見エタレド、如何ニシケム、原本ハ今其家ニ傳ハラズト聞ケリ。當時ノ加賀守ハ參議綱紀卿ナリ。）此鈔本ハ、卷首ト行方郡ニハ不レ畧レ之トアリ。他ハ每條ノ末ニ大カタハ已下畧レ之ト記シ、中ニハ最前畧レ之トイヘル所モアリ。新治郡ハ僅ニ二條ヲ抄キ、次ニ已下畧レ之トシルシテ、直チニ筑波郡ニ續ケリ。（筑波郡ノ終ニ、東筑波郡、南毛野河、西北幷新治郡、艮白壁郡、（艮トシルセルハ分註ニ例無シ。）トアル艮ハ、蓋シ闕ノ字ノ寫誤ニテ、按フニ鈔寫後ニ白壁郡ヲ悉ク除キ

タルニ心付キテ、ココニ其郡名ノ下ナル分註バカリヲヌキテ、是ハ白壁郡ナル由知ラシメタルモノナラン。塙本ニハ、此一條ヲ新治郡ノ次ニ移セリ。又筑波郡ノ末段ニ、已下落丁アリ。此内ニ河内郡可レ有レ之、多珂郡ノ終ニモ、私曰、此以後本欠了ト記シシハ鈔本ヲ更ニ寫セルモノノ筆ニテ、是ハ抄セル後ニ脱葉アリシヲ知ルベシ。河内郡ノ全ク闕ケシモ是故ナリ。殊ニ誤字、衍字、脱字、脱語ナドイト多ケレバ、更ニ寫スモノノ心ナラズ書キヒガメモシ、又ハサカシラニ改メモシ、或ハ古書ニ引ケルモノヲ採リテ補ヒモシタルモノト覺シキヲ、世ニ何ノ本、カレノ本トテ、モテハヤスメレド、全ク一字二字ノ異同ニ過ギネバ、モト同本ナル證トスルニ足レリ。今不レ略レ之トアル行方一郡ヲ以、他ノ十郡ヲ推セバ、鈔本ハ舊シ全本三分ノ一ニ過ギズト按ハルレド、今ニ在リテ崇神、景行兩朝ノ東國ヲ經綸シ給ヒシ方略ヲ尋ネ、日本武尊ノ蝦夷ヲ征討セラレシ巡路ヲ知ルベキモノハ、殘簡ナガラ此書ノ存ルニヨリテナリ。天保中、西野宣明氏（西野ヲ後ニ西宮ト改メ稱ヘリ）其遂ニ亡ナムコトヲ思ヒ、諸本ヲ以テ訂正シ、板ニヱラセタレバ、大方ハ讀ミ得ルヤウニハナリニタレド、中ニハ按ヒ得ラレヌコトモ、考ヘ誤ラレシフシモ無キニアラズ、ナホヨク正スベキモノゾカシ。明治廿六年九月十二日稿」（常政友全集六二九頁）

一、茲に「日本古典全集」に收錄した「常陸風土記」は、右の文中に有る西野宣明が校訂し頭註を加へたる本を其儘寫眞凸版に複製して印刷した。原本の振假名に二三の誤が有つたから訂正した以外は、すべて原本の通りである。序跋、凡例、奥附等までも併せて揚げたから、原本たる「西野本」に就いては別に言を

敍ふべき所も無い。西野宣明の傳は「水戸文籍考」に、「諱を宣明と云ひ、字を叔和と呼ぶ。莘次と稱し、松宇と號す。小山田松屋の門生なり。天保十二年弘道館訓導と爲る。後西野を更めて西宮と云ひ、出でて朝廷に仕ふ。歿年詳ならず。著述、竹生島辨才天考證、本朝牙笏考證、歷朝肉食興廢考、大閣禪閤小傳集考、大閣禪閤考、牛乳考、松宇雜錄、向岡遺事、松宇日記、常陸風土記校註」と有る。

一、次に「肥前風土記」に就いては、上卷の解題に引いた簡風の說の中に、「大概出雲のと同じ體裁なれば、同じ頃に進れる物なるべし」と云つてゐる。今有るのは抄本で、全本は早く散逸して傳はらない。茲に「日本古典全集」に收錄したのは荒木田久老の校本を其儘寫眞凸版に由つて複製したのである。卷末にある久老自記の奧書及び長谷川菅緒の序に據つて、本書の成立と傳來は明かである。

一、荒木田久老（「國學者傳記集成」などにヒサオイと訓んでゐるのは誤である。本人の自筆に「久於喩」と書いたのを屢見受ける。また現に此「風土記」の奧書の花押も久於喩である）は伊勢の外宮の祠官である。延享三年（一七四六）に生れ、文化元年八月十四日（一八〇四）年五十九で歿した。通稱は龍三郎、後に主税と云ひ、名は初め正恭と云つた。號は五十槻園である。加茂眞淵（一六九七「元祿十年」——一七六九「明和六年」）の門下の高弟である。性格は豪放不羈と評せられてゐるが、著述は精著してゐる。「萬葉集槻の落葉」、「日本紀歌解」、「竹取翁歌解」、「信濃漫錄」など、よく學徒の間に用ひられ、また此「校本肥前風土記」や「校本豐後風土記」も、學界に於て必要の書と成つてゐる。

一、特に「肥前風土記」は荒木田氏に由つて初めて刊本と成り、世に流布したのである。此刊本は後刷が多く現存し、決して稀覯本で無いが、磨滅して不明なる所が多く、從つて寫眞には成り難い。茲に「日本古典全集」の底本には、竹内文平氏から其初刷本を借りて寫眞に由り複製することを得た。然かも細字の所に少しく不明なる點の出來たのは遺憾ながら、何とも爲方が無かつた。讀者の諒恕を乞うて置く。

一、「豐後風土記」に就いては、平田篤胤は大概出雲のと同じ頃のものと云うてゐる（上卷解題三頁參照）が、狩谷棭齋は「毎條千金」に於て「豐後風土記には鄕も有り、里も有り、此書は疑はしければ今取らず」（「日本古典全集」の「狩谷棭齋全集」第三卷二一〇頁）と云つて居り、田能村竹田（一七七六「安永五年」――一八三四「天保五年」）は「僞書」と斷じてゐる。併し竹田も「豈鐵倉氏以降能出耶」と云つてゐるが、我我は未だ全く僞書であると斷言するだけの勇氣を持たない。多少の疑はしき點は有るにせよ、猶貴重なる古書として取扱ふべきものであると考へる。

一、此「豐後風土記」は荒木田久老の校本も有るが、其れは既に多く世に流布して居て、見る事も容易であるから、茲に「日本古典全集」には唐橋世濟（一七三六「元文元年」――一八〇〇「寛政十二年」）の著した「箋釋豐後風土記」を收める事とした。此書は近世の出版で有るが、極めて少部數を印刷したものらしく、從つて容易に見る事を得ないものである。我我は既に久しい間、此書の採訪に氣を附けてゐるが未だ手にも入らねば、且つ古本目錄にすら見掛けない。然るに井上通泰先生が珍らしく此書を手に入れら

れたので、其れを拜借して茲に收めることを得たのである。

一、唐橋世濟の傳に就いて「大日本人名辭書」は「續近世叢語」に據り、下の如く書いてゐる。「唐橋君山は豐後岡藩の儒なり。名は世濟、一の名は國亮、字は美卿、江都の人。高祖秀養始めて醫を甲斐の人長田德本に學ぶ。父秀成、室鳩巢の門に入り、兼ねて儒學に名あり。君山は父の業を承け、又詩文を善くす。始め高岡亭に從ひて詩を學ぶ。又餘熊耳と遊び、交道大に廣まる。天明四年岡侯召聘して侍醫として秩二百石を賜ふ。待遇特に渥し。侯、學館を岡に建て、君山を擢んでて教授となす。君山乃ち學制を定め、大に古聲法を唱へ、謹然として後進を誘ふ。兼ねて經史を講課し、傍ら詩文を教ふ。是に由りて生徒大に進む。寬政十二年、岡の備舍に歿す。年六十五。子孫世世藩に勝す。君山嘗て豐後風土記を註す。考證確實尤も詳悉とす。是時德川幕府、地志を編輯するの擧あり、君山、幕命を奉じて豐後國誌を編す。人物、山川、神社、佛閣、地蹟、古墳、物産等悉く蒐擧し、編輯册を成すこと九卷、未だ淨寫に及ばずして死す。後、侯、儒官伊藤寬叔、田能村竹田をして其書を大成せしめて、之を幕府に進む。」

一、此「箋釋豐後風土記」を田能村竹田が開版するに就いて、傳ふべき學界の美談が有る。即ち「田能村竹田全集」載する所の次の文は、其れを物語るものである。

謹で諸老先生、諸社友及び諸大雅高僧の力によりて、豐後風土記を刊行し、亡師唐君山先生の宿志を達せんと請ふ文

天平年間詔を天下に下し、諸國風土記を作らしむ。事は史に載す。今や相距ること千餘年、其際祝融に奪御せられ、或は河伯に侵掠せらる。況や室町以降の兵燹を經て、諸國殆ど餘すなし。其往往に存する所も、亦復斷簡隻字僅僅而已。特に吾豐後國の記、天地の神靈、山川の保護により全存するもの豈偶然ならんや。蓋し待つことありて爾り。肆に天、唐君山先生を生じて、賦するに淵厚文雅才藻典麗の質を以てし、古を考へ今を徴し、豐後國志を撰定す。此書多くは傳寫を經て誤謬寔繁く、終に湮滅に至らんことを悼み、審に詁解を作り、方に梓に上せ、以て萬世に遺さんとす。不幸にして未だ果さず、寛政季年病を以て卒す。今私に恐る、其業廢墮して、上は天地山川の恩に背き、下は亡師の想ひを空しくせん。因て此を浪華の書舗に謀るに、凡白鏹六兩を得て、彫刻全く備らんとす。然れども顧るに余が家、財乏しく、簞瓢を顏巷に比し、濁濕を原室に同す。既に術の施すべき無し。仰ぎ望む、諸老先生の賙濟の仁に依り、諸社友斷金の信を思ひ、諸大德高僧大慈の心を發し、各銅錢十五緡を齎し、夏冬二時相會、其法の如きは、俗間の例に從ひ以て三兩を募り得ば、其餘三兩は金の篋笥中に藏する所の書を鬻ぎ、通計六兩を具足、速に上梓を促さむ。斯の如くなる時は、余が區區の情を遂げ、高義を永永に感ずる而已ならず、上に懐する所の亡師の宿願を遂し、以て天地山川限り無きの恩に報むこと、實に此舉にあり。伏請、諸老先生諸社友及大德高僧、俯賜照鑒、千萬希祈る。

享和三年十二月十四日

晩生館村孝憲頓首

一、右は種種の事を物語る有益なる一文である。常時に於ける木版の彫刻料なども知ることが出來る。殊に後半は卒讀に堪へざるものが有る。因に云ふ。右の文中「豐後國志」と書いてあるのは、「豐後風土記」と書くべきを、君山に其名の著述があるので誤つたものであらうか。若し誤つたので無くば紛らはしき書き方である。「豐後國志」九卷も竹田が大成した事は傳に見えてゐるが、右の文中のが其れでは無い事は確かである。後人の疑を恐れて一言して置く。

一、「箋註豐後風土記」に有る竹田の跋文の句讀點は、井上先生が一讀せられる折に朱を以て加へられたものである。先生は削除して置くが善からうと云はれたが、讀者の便宜の爲めに存して置いた。是れは原本の體裁と相違するから申し添へて置く。

一、また此書の七丁裏七行にある「飲」は「飯」の誤。九丁裏八行、九行の「小片鹿」は「小竹鹿」の誤。何れも原本の版下の書き誤である。

一、此「古風土記集」の下卷にも、上卷の例に由つて「參考」を附した。「常陸風土記」は栗田寛氏も我我の收錄したものと同じ本を用ひて、其頭註を增補せられた。我我は原本の頭註以外に栗田氏の頭註を書き拔いて茲に加へ、猶吉田東伍氏の「大日本地名辭書」等からも參考として書き拔いた。「肥前風土記」もまた栗田氏の頭註を書き拔き、「大日本地名辭書」からも少しく書き拔いた。「豐後風土記」は「箋註本」を收錄した關係上、外の「風土記」とは異つて、國文流の訓が附して無いから、別に頭書本を添へ、「參

考」は同じく栗田氏等のを抜き書きした。「播磨風土記」に就いては、井上通泰先生に乞うて新たに本會の爲めに、特に校訂本を書いて頂いたのであるから、我我が別に何を添ふる必要も無いやうであるが、猶初學の人人の爲めに「參考」を添へた方が好からうと考へて敷田年治氏の標註（圈印にて表はす）と栗田寛氏の頭註と抜き書きした。但し敷田氏のに出たる註の、栗田氏の分にも出て同じきものは、すべて敷田氏の分を存して、栗田氏のを省いた。また兩氏のと井上先生の校本との間に、文字や說の合はぬ所が少なからぬ所の有るのを見受けるが、唯だ此「參考」は、諸家の說を取捨せずに抜き書きして讀者の爲めに謂ゆる「參考」とするに過ぎない。敷田氏の「標註本」も今は容易に求め難いものである。

一、序でに云ふ。井上先生は遠からぬ内に「播磨風土記」の譯文を書かれる筈であるから、其れが世に出でたならば學界を益する事が甚大であらう。

一、此「古風土記集」の爲めに、井上通泰先生は「播磨風土記」の校訂本を我我の乞ふままに新しく執筆せられたと共に、「箋釋豐後風土記」の稀覯本を貸與せられ、竹內氏は「肥前風土記」を、大阪圖書館は敷田氏の「播磨風土記校本」を貸與された。是等の御厚意を併せて玆に深謝する。また「播磨風土記」の底本とした三條西家本の寫眞を「古典保存會本」から同會の寛諾を得て轉載した事に就ても古典保存會に感謝する。

常陸風土記

訂正常陸國風土記

天保己亥仲夏刊于水戸聴松軒

常陸風土記序

詩云。不愆不忘。率由舊章。故在昔盛時。政治設為。皆誦法先王。言重舊事。故令各國。上古老所傳。尚可以徵古事者。名曰風土記。而千載之久。漸々散逸淪滅。今所存四國也已。我常陸居其

一。而鈔本多缺誤。為可憾矣。尚野村和好學嗜古。溪悦之。取數本校讐。積功刊謬。豐勘附釋。庶乎面目復全矣。其言曰。我熟讀風土記。其書之成非一時。自龢銅至延長。之間二百餘年。故所編得失互有。特記常陸。但舉古

者。而出雲肥前豐後。皆既上木。
常陸未有其槧。我韋生于本土。
豈可默而止邪。歇棒以供三國
並行。又息得古老之言。署之卷
首。徵信一世。因屬余以序。嗟世
多文人。斯和不乏之名流。而於
斯何也。以予仝鄉。且同嗜好邪。

予頗吾鄉。古老先生皆盡彫落。予雖固陋。肩鉅可辭。乃泚筆以充其需。但予以鄉老見待。豈敢當之哉。

天保戊戌四月小官山昌彜識

時年七十有五

直原任書

常陸風土記序

皇化之被東方。蓋昉於健雷氏云。在昔
天祖之授天下於
皇孫。先使健雷氏定北地。東至斜塱。獲田氏至伊勢。史籍所載。雖以於此。而常與之地。多祠健雷及其孫子。狶

曰當裔之神。則其世鎮東陬可見。而功績所暨。亦可知也。神武之朝。天富播種於總國。崇神朝。使皇子豐城鎮毛野。又奉兵器鹿島神。命將帥平定東陲。及日本武尊西討東征。然後　帝績大熙。國造之建置。日益增廣。至

孝德朝。始置國司。而阪東八國。安使往來。常陸實稱水陸之府焉。夫諸國有史以記事則昉於履中之朝。而大化中作天下圖籍。和銅以後。相繼令國郡勘進其記。於是天下風土人情可坐而察也。及至壞世。四方騷擾。而諸國之記。散逸略盡。

列聖所拮据。其迹湮滅。可勝歎哉。然今其託猶存者四國。而僅居其一。苟就其存者而觀之。當時天下形勢。雖不可悉知。而亦足以窺豹之一斑焉。夫土地人民者。人君之所寶。而著四方之志者。帝王之所賴以治天下也。載籍雖闕。而舉一隅。反之以三隅。

温古以知新。亦在其人耳。西野林和雅素好古。懼斯書之久而或亡。欲梓以傳之。而惜其闕河内眞壁二郡。爲方購求。終不能獲。奈謂天下之志而存者不過四國。則一國之志。而纔亡二郡。亦猶不亡也。今闕其亡者。而存其存者。使其永世不亡。則古者

昊朝所以經綸天下者獨有可觀。而稽古者亦將有所徵。其功多矣。辨和校訂將訖。問序於余。余〻非是學言。天保戊戌季春之望水府居會澤安識

凡例

一凡標註。引六國史及諸書。然畫線狹窄。不能詳載之。故特撮其要者。而節略書之。以備史氏之採摭。

一此書固鈔本而不全。是以各條之下。有以下略之四字。故今存之以備考。又記中所逸之文。今僅散見釋日本紀及萬葉鈔詞林採葉等。故補之卷末。

一此書嘗募四方異本。所得凡八。以十干標之。曰

甲本。本國鹿島神宮所藏。曰乙本。本藩彰考館所藏。曰丙本。京師松下見林所校正。曰丁本。昌平文庫所藏。而係幕府侍醫岡丈庵所獻納。曰戊本。備中笠岡祠官小寺清先所校訂。曰己本。撿校塙保己一印行本。曰庚本。伊勢貞丈所藏。曰辛本。伊勢祠官荒木田久老所比校。以上八本。互有異同。故字字詳訂之。間復有涉兩是者。則不敢妄加改竄。悉據正本。註某字某本作某字。以竢博古者訂之耳。

宣明按續日本紀和銅六年五月下官符於五畿七道諸國司令勘造風土記其文略曰土地沃堉山川原野名號所由又古老相傳舊聞異事載于史籍言上云據此則聞下疑脫異字

吉田令世云孝德紀大化元年八月丙申朔庚子拜東國國司等云同二年三月癸亥朔甲子前以良家大夫使治東方八道按當時置國司郡司郡縣之制蓋始於此也景行紀廿八年

常陸國司解。申古老相傳舊聞事。

問國郡舊事。古老答曰。古者自相摸國足柄岳坂以東諸縣。總稱我姬國。是當時不言常陸。唯稱新治筑波茨城那賀久慈多珂國。各遣造別令檢挍。其後至難波長柄豐前大宮臨軒天皇之世。遣高向臣中臣幡織田連等。總領自坂以東之國。于時我姬之道分爲八國。常陸國居其一矣。所以

日本武尊毎有顧弟橘媛之情故登碓日嶺而東南望之三歎曰吾嬬者耶故因號山東諸國曰吾嬬國也云云

按萬葉仙覺抄所引天皇作尊然此書皆稱天皇又阿波風土記稱倭健天皇命蓋當時人民服其威武稱曰天皇故二書皆稱天皇也

按萬葉抄所引停乘輿三字作傍乗輿洗字下有御字又諸本漬字下無國字今據萬葉抄及己本補正之

然號者。往來道路。不隔江海之津濟。郡郷境堺。相續山河之峰谷。取近通之義。以爲名稱焉。或曰。倭武天皇巡狩東夷之國。幸過新治之縣。所遣國造毗那良珠命。新令掘井。流泉淨澄。尤有好愛。時停乘輿。翫水洗手。御衣之袖垂泉而沾。便依漬袖之義。以爲此國之名。風俗諺曰。筑波岳黒雲挂衣袖漬國是也。

和名鈔日國府在茨城郡管十一田四萬九十二町六段百十二歩正公各五十萬束本稻百七十九萬六千束雜稻七十九萬六千束

甲本乙本肥行作肥御丙本巳本並同前田夏陰本行字欠今据茂本及辛本

丙本此地下有或曰日高見國六字按信太郡條下曰此地本日高見國則重復故今削之

甲本乙本亢陽作兂陽丙本或作它陽丁本作元陽今据茂本

夫常陸國者。堺是廣大。地亦緬邈。土壤沃墳。原野肥衍。墾發之處。山海之利。人人自得。家家足饒。設有身勞耕耘力竭紡蠶者。立即可取富豐。自然應免貧窮。況復求鹽魚味。左山右海。植桑種麻。後野前原。所謂水陸之府藏。物産之膏腴。古人曰。常世之國。蓋疑此地。但以所有水田上小中多。年遇霖雨。即聞苗子不登之難。歲逢亢陽。唯

字典曰。旱曰亢陽。唐杜甫詩曰。亢陽乗秋熱。國造本紀曰。新治國造。志賀高穴穗御世。美都呂岐命兒比奈羅布命。定賜國造。按波太岡未詳其所在。伴信友云。自遠益伯遠誤也。當訓志良登保布也。萬葉集上野國歌云。志良登保布。小新田云云。冠新田枕詞也。因按白遠亦冠新治枕詞也。笠間村今隸茨城郡。華總山與浦山相連。而在茨皮山之北。

見穀實豐稔之歡歟。[不略之]

新治郡。東那賀郡堺大山。南白壁郡。西毛野河。北下野常陸二國之堺。即波太岡。

古老曰。昔美麻貴天皇馭宇之世。爲平討東夷之荒賊。俗曰阿良夫流爾斯母乃。遣新治國造祖。名曰比奈良珠命。此人罷到。即穿新井。今存新治里。隨時致祭。其水淨流。仍以治井。因著郡號。自爾至今。其名不改。風俗諺曰。自遠新治之國。[以下略之]

按萬葉集歌曰
事之有者小泊
瀬山乃石城尓
母隠者共尓莫
思吾背云
小山田與清云
小初瀬者古謂
陵墓之地石城
石槨也大和國
今有小初瀬名
亦以此義也
白壁郡諸本脱
今据已本補之
按白壁郡即今
真壁郡也續日
本紀延暦四年
詔改姓白髪部
為真髪部是避
光仁天皇諱也
據此則郡名亦
當時所改也
國造本紀曰志
賀高穴穂朝以
忍凝兒命孫阿

自郡以東五十里在笠間村。越通道路。稱葦穂山。古老曰。古有山賊。名稱油置賣命。今社中在石屋。俗歌曰。許智多雞波。乎婆頭勢夜麻能。伊波歸爾母。爲弖許母郎奈牟。奈古非叙和支母。

以下略之

白壁郡。東筑波郡。南毛野河。西北並新治郡。

筑波郡。東茨城郡。南河内郡。西毛野河。北筑波岳。

古老曰。筑波之縣。古謂紀國。美萬貴天皇之世。遣采女臣友屬筑波命於紀國之國

開色命定賜筑波國造
續日本紀曰神護景雲二年常陸國筑波采女為本國國造云云
令世云筑波之波本居宣長讀為清音今為濁音者從方言也
甲本丙本寓宿作遇宿乙本作過宿据己本
乙本丙本置字作四言二字非据己本

造時筑波命曰欲令身名者著國而後世流傳即改本號更稱筑波者　風俗說曰握飯筑波之國

古老曰昔祖神尊巡行諸神之處到駿河國福慈岳卒遇日暮請欲寓宿此時福慈神答曰新粟初嘗家內諱忌今日之間冀許不堪於是祖神尊恨泣詈告曰即汝親何不欲宿汝所居山生涯之極冬夏雪霜冷寒重襲人民不登飲食勿奠者更登筑

神名式筑波郡筑波山神社二座一名神大一小

諸本雖字欠今据戊本補之

甲本乙本詞字作諱字己本作語字据丙本

甲本乙本西峰作両峰据己本及辛本

波岳。亦請容止。此時筑波神答曰。今夜雖新粟嘗。不敢不奉尊旨。爰設飲食。敬拜祗承。於是祖神尊。歡然謌曰。愛乎我胤。巍哉神宮。天地並齊。日月共同。人民集賀。飲食富豐。代代無絶。日日彌榮。千秋萬歲。遊樂不窮者。是以福慈岳常雪。不得登臨。其筑波岳。往集歌舞飲喫。至于今不絶也 〔己下略之〕

夫筑波岳。高秀于雲。最頂西峰崢嶸。謂之

信友云萬葉集九卷檢税使大伴卿登筑波山時歌謂男神女神因按昇降泱屹下蓋脱謂之雌神四字也
騂闐萬葉抄脱闐字乙本作圓已本作圓諸本共誤故今改之按李白詩云嗟昭乎區宇騂闐乎闕外云
萬葉集登筑波嶺爲嬥歌會日作歌其唫曰未通女壯士之往集加賀布嬥歌尓云嬥歌者東俗語曰賀我比按今此謂筑波峯之會者亦謂嬥歌會也

雄神。不令登臨。但東峯四方磐石。昇降泱屹。其側流泉。冬夏不絕。自阪以東諸國男女。春花開時。秋葉黄節。相携騂闐。飲食齎賚。騎步登臨。遊樂栖遲。其唱曰。

都久波尼爾阿波牟等伊比志古波多賀己等岐氣波加彌尼阿須波氣牟也
都久波尼爾伊保利弖都麻奈志爾和我尼牟欲呂波波夜母阿氣奴賀母也。

詠歌甚多。不勝載車。俗諺曰。筑波峯之會。不得娉財者兒女不爲矣。

按騰波江萬葉集歌曰新治乃鳥羽能淡海云未詳其所在
按自東筑波郡至白壁郡十八字原本大書屬上文益河内郡分註而脱河内郡三字誤以分註為本文決不可疑故今補訂之已本在新治郡下者恐傳寫之誤也
按自古老曰以下至日高見國諸本欠今據戊本補之釋日本紀所引文與此小異矣
碓井未詳其所在或云在新治郡土浦城北

郡西十里在騰波江。長二千九百歩。廣一千五百歩。已下略之

河内郡

東筑波郡。南毛野河。西北新治郡。艮白壁郡。

信太郡。東信太流海。南榎浦流海。西毛野河。北河内郡。

古老曰。難波長柄豐前大宮馭宇天皇之世。癸丑年。小山上物部河内。大乙上物部會津等。請摠領高向大夫。分筑波茨城郡七百戸。置信太郡。此地本日高見國也。郡北十里碓井。古老曰。大足日子天皇幸

浮島在于信太湖中今有安場明神社蓋是也雄栗村高來里共未詳其所在小宮山昌秀云雄栗後世作小栗者疑是也古語拾遺曰經津主神是磐筒女神子今下総國香取神是也按荒梗丁本作荒便戊本或作荒脥諸本不詳晉書杜曾傳曰永嘉亂荆州荒梗註曰三蜀之奥區一都之會夷民紛雜蠻陬荒梗也云云按諸本分註川恵二字欠今補之姑存備考

浮島之帳宮。無水供御。卽遣卜者訪占。所所穿之。今存雄栗之村。從此以西高來里。古老曰。天地權輿。草木言語之時。自天降來神名稱普都大神。巡行葦原之中津國。和平山河荒梗之類。大神化道已畢。心存歸天。卽時隨身器仗。俗曰。伊川乃【川恵】甲戈楯劒。及所執玉珪。悉皆脱履。留置茲地。卽乘白雲。還昇蒼天。【已下略之】

狩屋望之云風俗之上恐有脱文此一行不可解甲本丙本若字作苦字己本作苦字不知孰是今據乙本諸本無常陸下總四字今据丙本補之按飯名社未詳其所在鹿島郡有飯名村坂戸與當間相接今世云古本將門記日著常陸國信太郡等前津益等前津古名榎浦津即今江戸崎是也和名鈔信太郡乘濱郷未詳其所在

風俗諺曰。葦原鹿其味若爛。喫異山宍矣。常陸下總二國大獵。無可絶盡也。其里西飯名社。此即筑波岳所有。飯名神之別屬也。榎浦之津。便置驛家。東海大道。常陸路頭。所以傳驛使等。初將臨國。先洗口手。東面拜香島之大神。然後得入也。〔以下略之〕

古老曰。倭武天皇巡幸海邊。行至乘濱。于時濱浦之上。多乾海苔。（俗曰乃理）由是名能理

昌秀云浮島村今在信太之湖中人戸繁殖然無有炊塩者湖亦淡水而無塩

古事記曰天津日子根命茨木國造等之祖也國造本紀曰輕島豊明朝御世天津彦根命孫筑紫刀禰定賜茨城國造按越後風土記曰越國有人名八掬脛其脛長八掬多力太強云云與景行紀所載以七掬脛爲膳夫名相似焉

波麻之村。以下略之

乘濱里東有浮島村。長二千歩。廣四百歩。四面絶海。山野交錯。戸一十五烟。里七八町餘。所居百姓。火鹽爲業。而在九社。言行謹諱。以下略之

茨城郡。東香島郡。南佐禮流海。西筑波山。北那珂郡。

古老曰。昔在國巣。俗語曰都知久母。又曰夜都賀波岐。山之佐伯。野之佐伯。普置掘土窟。常居穴。有人來。則入窟而竄之。其人去。更出郊以遊之。

甲本乙本乏字作他字誤据丙本乙本族字作挨字丙本作候字今据戊本丙本庚本出遊作幽遊据甲本乙本諸本無塞字据丙本補之甲本乙本而字欠丁本作向字今据戊本今世云按倭名鈔茨城郡有茨城郷今城府中南半里許有地號婆良技疑茨城郷是也

狼性梟情。鼠窺掠盜。無被招慰。彌阻風俗也。此時大臣族黑坂命。伺候出遊之時。以茨蕀塞施穴内。即縱騎兵。急令逐迫。佐伯等如常欲走而歸土窟。盡繫茨蕀。衝害刺傷。終疾死散。故取茨蕀以著縣名。所謂茨城郡。今存那珂郡之西。古者郡家所置。即茨城郡内。風俗諺曰。水依茨城之國。或曰。山之佐伯。野之佐伯。自為賊長。引率徒衆。横行國中。大為刼殺。時黑坂命。規滅此賊。

按古事記曰其玉作稻城以待戰云云垂仁紀曰積稻作城其堅不可破此謂稻城也云云旧事紀曰茨城國造祖建許呂命兒意富鷲意彌命爲師長國造大布日意彌命爲須恵國造深川意彌命爲馬久田國造屋主乃彌爲菊多國造宇佐比乃彌爲岐閇國造建彌依米命爲石背國造云云按今加筑波使主爲七人其一人無所考并存以俟博雅君子耳

以茨城造所以地名。便謂茨城焉。茨城國造初祖。天津多祁許呂命仕息長帶比賣天皇之朝。當至品太天皇之誕時。多祁許呂命有子八人。中男筑波使主。茨城郡湯坐連等之初祖也。

從郡西南近有河。謂信筑之川。源出自筑波之山。從西流東。經歷郡中。入高濱之海。（以下略之）

夫此地者。芳非嘉辰。搖落凉候。命駕而向。乘舟以游。春則浦花千彩。秋是岸葉百色。

甲本渚干作渚才丙本並同乙本丁本作渚戊諸本共不可讀按詩小雅云秩秩斯干毛註云干澗也又水涯也云據此今補訂之
甲本朝字作潮乙本己本並同今據戊本
甲本乙本蒸字作丞丁本作至共誤己本或欠據丙本訂之
今世云諸本祛作社或作社益祛誤今訂之
甲本乙本共無古字今据丁本已本補之
諸本無毛字据戊本補之

聞歌鶯於野頭、覽舞鶴於渚干。社□漁孃逐濱洲以輻湊、商豎農夫棹艄艖而往來。况乎三夏熱朝、九陽蒸夕、嘯友率僕、並坐濱曲、騁望海中。濤氣稍扇、避暑者祛鬱陶之煩、岡陰徐傾、追涼者軫歡然之意。詠歌曰。

多賀波麻爾支與須留奈彌乃意支都奈彌與須止毛與良志古良爾志與良波。

又曰。

多賀波麻乃志多賀是佐夜久伊毛乎古比門麻止伊波波夜志古止賣志門毛。

按桑原岳未詳其所在

玉里村今隷新治郡高濱玉里皆臨信太流海而與行方郡接界也

按行方郡之西即茨城郡之南也茨城郡下云南佐禮流海則此條奪脱西佐禮流海之五字也

按大建孝德紀三年制七色十三階之冠七曰建武天智紀三年增換冠倍階名其冠有廿六階自大織至大建小建是爲廿六階當時分建武爲大小建也

郡東十里桑原岳。昔倭武天皇停留岳上。進奉御膳。時令水部新掘清井。出泉淨香。飲喫尤好。勅曰。能渟水哉。俗曰。與久多麻禮留彌津可奈。由是里名謂田餘。以下略之

行方郡。□□□東南並流海□□北茨城郡

古老曰。難波長柄豐前大宮馭宇天皇之世。癸丑年。茨城國造小乙下壬生連麿呂。那珂國造大建壬生直夫子等。請摠領高

令世云原本茨
城下脱那珂之
三字下文曰合
七百餘戸則其
割茨城那珂之
地合七百餘戸
也可知也
海北乙本作海
此已本欠今据
戊本及庚本
槻野玉清井未
詳其所在頓幸
諸本作頓華己
本作頓花今据
戊本訂正之
和名鈔行方郡
荒原郷按今玉
造村芹澤村等
之地謂荒原郷
也
甲本乙本可怜
作可於丙本作
可遊諸本並非
按垂仁紀曰是

向大夫中臣幡織田大夫等割茨城地八
里合七百餘戸別置郡家所以稱行方郡
者倭武天皇巡狩天下征平海北當是經
過此國即頓幸槻野之清泉臨水洗手以
玉落井今存行方里之中謂玉清井更廻
車駕幸現原之丘供奉御膳于時天皇四
望顧侍從曰停輿徘徊擧目騁望山阿海
曲參差委蛇峰頭浮雲谿腹擁霧物色可

神風伊勢國則常世之浪重浪歸國也傍國可怜國也欲居是國云又萬葉集舒明天皇御製阿怜國曾蜻島八間跡能國者云據此今改之
按和名抄鹿島郡大屋鄕今鹿島茨城二郡堺之川謂大矢川蓋是也無梶河未詳其所在
藤田一正云部陸恐部之誤那珂郡今有部埀村蓋是也
按玉造村有加茂地又有小山土俗稱鴨宮蓋上古神社所在地而今爲廢趾

怜鄕體甚愛宜。可此地名稱行細國者。後世追跡。猶號行方。風俗曰。立雨零行方之國。其岡高敞。名之現原。倭武命降自此岡。至大益河。乘艤舟上時。折棹梶。因名其河稱無梶河。此則茨城行方二郡之堺。河鯉鮒之類。不可悉記。自無梶河。達于部陸。有鴨飛度。天皇躬射。鴨迅應弦而墮。仍名其地謂之鴨野。土壤塉埆。草木不生。野北櫟柴鷄頭樹。斗

故云爾按栟池其所在未考香取神子之社未詳其所在按下文重複郡中蓋有二社故再載之也行方之津濟者所謂佐禮流海即今霞浦是也按日本武尊東征也蓋經此地當時橘媛命經相摸國而至郡中相加村舟楫所航蓋復取針路於此津也類聚國史曰貞觀八年五月十一日叙常陸國國都神從五位下按今行方村有國神明神社

之木。往往森森。自成山林。即有栟池。此高向大夫之時所築池也。北有香取神子之社。社側山野。土壤腴衍。草木密生。郡西津濟。所謂行方之海。生海松及燒鹽之藻。凡在海雜魚。不可勝載。但如鯨鯢。未曾見聞。

郡東國社。此號縣祇。杜中寒泉。謂之大井。緣郡男女。會集汲飲。郡家南門。有一大槻。

蓋是也大井其所在未考

倭名鈔行方郡提賀郷按今玉遺村南有手賀村郷名今廢

按香島神子社今在鹿島神宮中詳見鹿島志故略之

倭名鈔行方郡曾禰郷兵部式驛馬曾尼五疋未詳其所在

乙本無之驛二字据丙本丁本及己本補之

其北枝自垂觸地。還聳空中。其地昔有水之澤。今遇霖雨廳庭濕潦。郡側居邑橘樹生之。

自郡西北提賀里。古有佐伯名手鹿。為其人居追著里。其里北在香島神子之社。社周山野地沃草木椎栗竹茅之類多生。

從此以北曾尼村。古有佐伯。名曰疏禰毘古。取名著村。今置驛家。此謂曾尼之驛。

石村即磐余繼體天皇所都也甲本乙本括字作栝字据已本乙本丙本點字作獻字据戊字及已本訂之

按分註難字丁本作雜字非率紀二字未詳信友云率紀兎難四字恐誤寫率槩誤當訓於保年禰紀似誤當作槩似兎也

古老曰。石村玉穗宮大八洲所馭天皇之世。有人箭括氏麻多智。點自郡西谷之葦原墾闢新治田。此時夜刀神相群引率。悉盡到來。左右防障。令勿耕佃。俗曰。謂蛇爲夜刀神。其形蛇身頭角。率紀兎。難時有見人者。破滅家門子孫不繼。凡此郡側郊原甚多所住之。於是麻多智大起怒情。著被甲鎧之。自身執仗打殺駆逐。乃至山口。標梲置堺堀。告夜刀神曰。自此以上聽爲神地。自此以下。

甲本乙本大言作大宮丙本或作天皇共非据己本甲本丙本在字作爲字乙本作孟字共非据戊本乙本民字作氏字非

須作人田自今以後。吾爲神祝。永代敬祭。冀勿祟勿恨。設社初祭者。即還發耕田一十町餘麻多智子孫相承致祭。至今不絶。其後至難波長柄豐前大宮臨軒天皇之世。壬生連麻呂初占其谷。今築池堤時夜刀神昇集池邊之椎樹經時不去。於是麻呂舉聲大言。令修此池要在活民何神誰祇。不從風化即令役民曰。目見雜物魚虫

椎井未詳其所在甲本池面作池西乙本或作他西非据丙本及己本

和名鈔行方郡小高鄕今郡中有小高村鄕名廢爲村

昌秀云鯨岡者畑本之祖高尾左中之故居而在小高村又有城址其所有今宮明神社每年九月九日致祭

粟家池未詳其所在

按香取神子社今四鹿村有香取社里俗相傳距鯨岡廿四町許因名曰四鹿村

之類無所憚懼隨盡打殺言了應時神蛇避隱所謂其池今號椎井也池面椎株淸泉所出取井名池卽向香島陸之驛道也

郡南七里男高里古有佐伯小高爲其居處因名國宰當麻大夫時所築池今存路東自池西山猪猴大住艸木多密南有鯨岡上古之時海鯨匍匐而來所臥卽有栗家池爲其栗大以爲池名北有香取神子

和名鈔行方郡麻生郷今郡中有麻生村
按筋字丁本作筋字已本或筋字諸本共不詳扶桑略記曰天智天皇七年五月自常陸國進白雉并生角馬蓋是事也天智天武不同者傳聞之異而已筋字未詳按筋字恐生角二字訛合為一字也
郡中有大生村有大生明神社十一月十五日鹿島齋女來而參之也
和名鈔行方郡香澄郷呂秀云今郡中富田村

之社也。
麻生里。古昔麻生于渚沐之涯。圍如大竹。長餘一丈。周里有山。椎栗槻櫟生。猪猴栖住。其野出筋馬。□飛鳥淨御原大宮臨軒天皇之世。同郡大生里建部袁許呂命得此野馬。獻於朝廷。所謂行方之馬。或云茨城之里馬非也。
郡南二十里香澄里。古傳曰。大足日子天

有地名霞者以小高板來里程推之古香澄里為此地無疑矣今世按景行紀五十三年秋八月丁卯朔天皇詔群卿曰朕顧愛子何日止乎冀欲巡狩小碓王所平之國是月乗輿幸伊勢轉入東海道冬十月至上總國從海路渡淡水門云云而不載幸下總常陸風土記所書可以補史闕文也日本後紀云弘仁六年十二月戊午廢常陸國板久等之驛按和名鈔板久鄉

皇登坐下總國印波鳥見丘留連遙望顧東而勅侍臣曰海即青波浩行陸是丹霞空朦國在其中朕目所見者時人由是謂之霞鄉東山有社榎槻椿椎竹箭麥門冬往往多生此里以西海中北洲謂新治洲所以然稱者立於洲上北面遙望新治國小筑波之岳所見因名也從此往南十里板來村近臨海濱安置驛家此謂板來之

盐坂板誤也今作潮來鹿島有潮宮方言訓潮字謂伊太故我義公改爲潮今謂潮來村也

天武紀曰四年三位麻績王有罪流因幡國一云

古事記曰神八井耳命者伊余國造常道仲國造等之祖也則知建借間命是神八井耳命之裔也

國造本紀曰仲國造志賀高穴穗朝御世伊豫國造同祖建借馬命定賜國造

按安場村今隸信太郡此謂安場島若疑浮島

驛。其西榎木成林。飛鳥淨見原天皇之世。遣麻績王居處之。其海燒鹽藻海松白貝辛螺蛤多生。

古老曰。斯貴瑞垣宮大八洲所馭天皇之世。爲平東夷之荒賊。遣建借間命。即此那賀國造初祖。引率軍士。行略凶猾。頓宿安婆之島。遙望海東之浦。時烟所見。爰疑有人。建借間命仰天誓曰。若有天人之烟者。來覆我上。

之地也今浮島有安塲明神社祭神大己貴命安塲村亦祭之里俗謂大杉明神也

按天之鳥琴諸本重復載之 今據已本削之今世云鳥琴恐謌琴誤鳥琴鳥笛共無所見俟後考耳

若有荒賊之烟者。去靡海中。時烟射海而流之。爰自知有凶賊。即命徒衆。禱食而渡。於是有國栖。名曰夜尺斯夜筑斯。二人自爲首帥。掘穴造堡。常所居住。覘伺官軍。伏衛拒抗。建借間命縱兵驅追。賊盡逋還。閉堡固禁。俄而建借間命大起權議。校閲敢死之士。伏隱山阿。造備滅賊之器。嚴餝海渚。連舩編桴。飛雲蓋張。虹旌天之鳥琴。天

乙本杵島作島杵頭倒丁本或作杵島共非也按杵島曲者起肥前國杵島郡杵島岳也萬葉抄所引肥前國風土記曰鄉閭士女提酒抱琴毎歳春秋携手登望飲樂歌舞曲盡歸歌詞曰阿羅禮符縷耆資麼賀多懺塢嵯峨紫彌刀區差刀理我禰弖伊誄我提塢刀縷是杵島曲也云山是觀之其事相似益今世俗所歌舞之調豐後曲或潮來曲等之類是也布都奈按奈字

之鳥笛。隨波逐潮。杵島唱曲。七日七夜遊樂歌儛。于時賊黨聞盛音樂。擧房男女。悉盡出來。傾濱歡咲。建借間命令騎士閇堡。自後襲擊。盡囚種屬。一時焚滅。此時痛殺所言。今謂伊多久之鄉。臨斬所言。今謂布都奈之村。安殺所言。今謂安伐之里。吉殺所言。今謂吉前之邑。板來南海有洲。可三四里許。春時香島行方二郡之男女。盡來

當作蔡信太郡安場浮島之際挟河有古戸村和名鈔行方郡當麻鄉按今當閒村隷鹿島郡訓多宇麻記中所載當麻坂戸飯名之三村相接如鼎足峙焉按屋形野今鹿島郡有八方村蓋此地也古事記倭建命曰今吾足不得步成當藝斯形故號其地謂當藝也臣和名抄柁訓多伊之引唐韻云施正船木也蓋以柁譬道路之屈曲凸凹日本紀謂路迂曲者為哆嗜

拾津白貝雜味之貝物矣。

自郡東北十五里當麻鄉。古老曰。倭武天皇巡行過于此鄉。有佐伯。名曰鳥日子。緣其逆命隨便略殺。即幸屋形野之頓宮車所經之道狹地深淺。取惡路之義。謂之當麻。俗曰。多支多支斯。野之土埆。然生紫艸。有香島香取二神子之社。其周山野。櫟柞栗柴往往成林。猪猴狼多住。從是以南藝都里。古

知即是也和名鈔行方郡藝津郷未詳其所在里俗或云今郡中當間村南有化蘇沼村古所謂藝津里而後世傳聞之訛也因按藝津化蘇國音相近蓋言便訛也

按郡中有小貫村四方原野其云小貫野蓋此地也

按宇流波斯小野又田里二所共未詳其所在諸本南字欠今從丁本補之

有國栖。曰寸津毗古。寸津毗賣二人。其寸津毗古。當天皇之幸。違命背化。甚无肅敬。爰抽御劒。登時斬滅。於是寸津毗賣。懼悚心愁。表舉白幡。迎道奉拜。天皇矜降恩旨。放免其房。更廻乘輿。幸小抜野之頓宮。寸津毗賣。引率姊妹。信竭心力。不避風雨。朝夕供奉。天皇欵其慇懃。惠慈。所以此野。謂宇流波斯之小野。其南名田里。息長足日

賣皇后之時。此地人名曰古都比古。三度遣於韓國。重其功勞賜田。因名。又有波都武之野。倭武天皇停宿此野。修理弓弭。因名也。野北海邊在香島神子之社。土塉櫟柞楡竹一二所生。從此以南相鹿大生里。古老曰。倭武天皇坐相鹿丘前宮。此時膳炊屋舍構立浦濱。編艀作橋。通御在所。取大炊之義。名大生之村。又倭武天皇之后。

息長足日賣皇后神功皇后之諱也紀曰元年秋九月庚午詔令諸國集船舶練甲兵云因按當時古都比古益從王師而征三韓也然其名古史無所見波都武野未詳其所在

按丙本柞楡下欠諸本未詳今据乙本塡字

和名鈔行方郡大生鄕逢鹿鄕按今有大生大加二村相接臨北浦之流海又大生村有大生明神社例祭十一月十五日鹿島齋女來祭之

按古事記橘媛到相摸國走水海遇暴風沒海而今曰到此地則二說相異矣不知孰是

按安是湖未詳北條時鄰云今神池蓋是也云阿多可奈湖未詳一正云今涸沼浦疑是也

按己酉謂孝德天皇大化五年丁未中臣下久恐脫鎌字故今補之以備考

和名鈔鹿島郡輕野鄉按萬葉集荊野橋別大伴卿時歌有自輕野出船而向下總國海上句蓋謂此地也

大橘比賣命自倭降來。參遇此地。故謂安布賀之邑。〔行方郡分不略之〕

香島郡。東大海。南下總常陸堺。安是湖。西流海。北那賀香島堺。阿多可奈湖。

古老曰。難波長柄豐前大朝馭宇天皇之世。己酉年。大乙上中臣〔鎌〕子。大乙下中臣部兎子等。請總領高向大夫。割下總國海上國造部內輕野以南一里。那賀國造部內。寒田以北五里。別置神郡。其處所有。天

按郡中坂戸村有坂戸神社祭神天兒屋根命沼尾村有沼尾神社祭神經津主大神神道集日鹿島三處者沼尾坂戸云云延喜神名式日鹿島神宮名神大月次新嘗續日本紀日寶龜八年七月叙鹿島神正三位續日本後紀日承和三年五月奉授常陸國鹿島郡從二位勲一等建御賀豆智命正二位同六年十月奉授從一位文德實錄日嘉祥三年九月朔奉叙建

之大神社。坂戸社。沼尾社。合三處惣稱香島之大神。因名郡焉。風俗說曰。霰零香島之國。清濁得糺。天地草昧以前。諸祖天神。俗曰。謂賀味魯彌賀味魯岐。會集八百萬神於高天之原。時。諸祖神。告曰。今我御孫命。光宅豐葦原水穗之國。自高天原。降來大神。名稱香島天之大神。天則號曰香島之宮。地則名豐香島之宮。俗曰。豐葦原水穗國所依將奉上始留爾。荒振神等。又石根木立草乃片葉辭語之。

御賀豆智命正一位云云與清云火字下益脫螢字乎信友云光字疑箟字訛光箟字相似當作箟也鶴峰戊申云初國所知美麻貴天皇謂崇神帝紀曰是以天神地祇共和享而風雨順時百穀用成云云故稱謂御肇國天皇也佐原義濤云汝聞下勝字按恐後人所爲之字也荒木田系圖云神聞勝命自孝照天皇至開化天皇之御世奉仕云云

晝者狹蠅音聲夜者火光明國此乎　其後事向平定大神從上天降供奉之至初國所知美麻貴天皇之世奉幣大刀十口。鉾二枚。鐵弓二張。鐵箭二具。許呂四口。枚鐵一連。練鐵一連。馬一疋。鞍一具。八咫鏡二面。五色絁一連。俗曰美麻貴天皇之世大坂山乃頂爾白細乃大御服坐而白桙御杖取坐識賜命者我前乎治奉者汝聞勝看食國乎大國小國事依給等識賜岐于時追集八十之伴緖擧此事而訪問於是大中臣神聞勝命答曰大八島國汝所知食國止事向賜之香島國坐天津大御神乃擧教

按續日本紀云天平寳字二年九月常陸國鹿島神奴二百十八人便爲神戸云々又神護景雲元年四月放鹿島神賤男八十人女七十五人從良云々又寳龜四年六月神賤一百五人自神護景雲元年立制置一所不許與良婚姻至是依舊居住更不移動其同類相婚一依前例云々同十一年十二月常陸國言脱漏神賤七百七十四人請編神司許之三代實録云貞觀八年

事者。天皇聞諸。卽恐驚。奉神戸六十五烟。納前件幣帛於神宮也。本八戸。難波天皇之世。加奉五十戸。飛鳥淨見原大朝。加奉九戸。合六十七戸。庚寅年。編戸減二戸。令定六十五戸。淡海大津朝。初遣使人造神之宮。自爾以來。修理不絕。年別七月。造舟而奉納津宮。古老曰。倭武天皇之世。天之大神宣中臣臣狹山命。今社御舟者。□

□臣狹山命答曰。謹承大命。無敢所辭。天之大神昧爽復宣。汝舟者置於海中。

舟主仍見在岡上。又宣汝舟者置於岡上也。舟主因求、更在海中。如此之事、已非二三。爰則懼惶。新令造舟三隻、各長二丈餘。初獻之。又年別四月十日、設祭灌酒。卜氏種屬、男女集會、積日累夜、飲樂歌舞。其唱曰。安良佐賀乃。賀味能彌佐氣乎。多義止伊比祁婆賀母。與和我惠比爾祁牟。神社周匝。卜氏居所。地體高敞。東西臨海。峰谷

正月鹿島大神惣六箇院廿年間一加修造所用材木五萬餘枝工夫十六萬九千餘人料稻十八萬二千餘束云延喜式云常陸國鹿島神社正殿廿年一度改造其料便用神稅如無神稅即充正稅云按臣狹山命鹿島大宮司系圖云天兒屋根命十世孫臣狹山命御子狹山彥命中臣鹿島連初祖也云云續日本紀云天平十八年三月常陸國鹿島郡中臣部廿烟占

郎五岡照中臣鹿島連之姪云丙本藩籬作蕃蕃甲本乙本潤流作潤流丁本作澗流今据己本不知何是按諸本百草下有朽損二字疑後人校語而誤入本行也故今削之和名鈔鹿島郡沼尾郷沼尾社之倚有池蓋是也夫木集有藤原光俊歌其詞云康元元年十一月五日詣鹿島社其次見沼尾池之蓮風土記所謂不老不死之語今徒存古語耳絶矣云因按甘美

犬牙邑里交錯。山木野艸。自屏内庭之藩籬。潤流嵯泉。□涌朝夕之汲流。嶺頭構舍。松竹衛於垣外。谿腰掘井。薜蘿蔭於壁上。春經其村者。百艸□花。秋過其路者。千樹錦葉。可謂神仙幽居之境。□異化誕之地。佳麗之豐。不可委記。其社南郡家北。沼尾池。古老曰。神世自天流來水沼。所生蓮根。味氣太異。甘美絶他所之。有病者食此沼

下當有服之不老不死等之語俟來哲之是正信友云前郡下恐脫司等之字也矣

按高松濱未詳其所在高字恐若字誤或云若松濱之地指其高處謂高松濱也

丙本積成高丘作民居其丘今據己本

諸本無卜字據丁本補之冶字並同之

按今神也之傍深芝村二三里許間謂若松濱古輕野若松濱之地而沙山松林也

蓮。早差驗之。鮒鯉多住。前郡所置。多蒔橘。其實味之。

郡東二三里高松濱。大海濱邊。流著砂貝。積成高丘。松林自生。椎柴交雜。既如山野。東西松下出泉。可八九歩。清渟太好。慶雲元年。國司采女朝臣。卜率鍛冶佐備大麻呂等。採若松濱之鐵。以造劍之。自此以南至輕野里。若松濱之間。可卅餘里。此皆松

伏神甲本乙本並無伏字今據丙本補之丁本掘字作搰字按本草綱目云茯苓抱根者名謂伏神云云佐原義淳云上文慶雲以下廿九字當移在穿鐵也之下恐傳寫誤也
和名鈔鹿島郡幡麻郷未詳其所在
北條時鄰云寒田今神池是也
諸本無沼水流漑四字今據丁本及戊本補正之
諸本五丈作五里誤據戊本及辛本

山。産伏苓伏神。毎年掘之。其若松浦。即常陸下總二國之堺。安是湖之所有。沙鐵造劒大利。然爲香島之神山。不得輙入伐松穿鐵也。

郡南廿里濱里。以東松山之中。有一大沼。謂寒田。可四五里。鯉鮒住之。沼水流漑輕野田二里許。所有田少潤之。輕野以東大海濱邊。流著大船。長一十五丈。濶一丈餘。

按童子女松原未詳其所在釋日本紀引風土記松原作杉原蓋傳寫所致乎河海抄幻巻云常陸國童女松原云然不載其文

釋日本紀形容作貌容又光華作光遠又郎子歌爲孃子歌訛甲本乙本及丙本心熾作心滅非據茂本

今世云乎或作乎非蓋乎與示同古本將門記或作乎皆保省文也以彰考館本作乎者爲是乙本郎子歌作大字今据丙本

朽摧埋砂。今猶遺之。謂淡海之世。擬遣覔國。令陸奧國石城船造作大船。至于此。著岸。即破之。以南童子女松原。古有年少童子。俗曰加味乃乎止古。加味乃乎止賣。稱那賀寒田之郎子。女號海上安是之孃子。並形容端正。光華郷里。相聞名聲。同存望念。自愛心熾。經月累日。嬥歌之會。俗曰宇太我岐。又曰加我毘也。邂逅相遇。于時郎子歌曰。伊夜是留乃。阿是乃古麻都爾。由布悉弖弖。和乎布利彌由母。阿是古志麻波母。孃子報歌曰。宇志乎爾波多

多乎止伊閇止。奈西乃古何。夜蘇志麻加久理。和乎彌佐婆志理之。便欲相語。恐人知之。避自遊場。蔭松下。携手促膝。陳懷吐憤。既釋故戀之積疹。還起新歡之頻咲。于時玉露抄。候金風之節。皎皎桂月照處。唳鶴之西洲。颯颯松颸吟處。度雁之東路。山寂寞兮巖泉舊。夜蕭條兮烟霜新。近山自覽黃葉散林之色。遙海唯聽蒼波激磧之聲。茲宵于茲樂。莫之樂。偏耽語之

甲本乙本語字作晤字丁本作晤字皆非据己本訂正之

甲本促膝作依膝據丙本丁本及己本

甲本乙本東路作東怙戊本作東烙共不可讀按唐謝曹詩云延朝向秋方回首瞻東路云云據此則傳寫之誤故今訂正之

乙本東路下有處字今据諸本削之

甲本乙本耽字作沈字据己本

甲本乙本闕字作閒字據丙本乙本丙本童字作僮字据己本

和名鈔鹿島郡白鳥鄕今郡中大和田村主石神社梁牌銘有白鳥莊德宿鄕字今德宿村有白鳥社又府中税所氏古文書有白鳥鄕名按今大和田德宿等之地古謂白鳥鄕是也

甘味頓忘。夜之將闌。俄而鷄鳴狗吠。天曉日明。爰童子等。不知所爲。遂愧人見。化成松樹。郎子謂奈美松。孃子稱古津松。自古著名。至今不改。

郡北三十里白鳥里。古老曰。伊久米天皇之世。有白鳥。自天飛來。化爲童女。夕上朝下。摘石造池。爲其築堤。徒積日月。築之築壞。不得作成。童女等唱曰。志漏止利乃芳我都都彌

按丁本斯呂作斯呂與清云呂字下恐脱烏字蓋白鳥之誤乎按角折濱鹿島神宮北三里許今有角折村今世云按文正草子曰常陸國角岡磯盖亦指此地也按謂古以下乙本己本爲分註者恐傳寫之訛今据丙本及戊本補訂之古事記曰神八井耳命者常道仲國造等之祖國造本紀曰志賀高穴穗朝御世伊豫國造同祖建借馬命定賜仲國造云

乎。都都牟止母。安良布麻斯呂唱歌昇天。
目右疑波古歟□

不復降來。由是其所號白鳥郷。

以南所有平原。謂角折濱。謂古有大蛇。欲通東海。掘濱作穴。蛇角折落。因名之。或曰。倭武天皇停宿此濱。奉羞御膳。時都無水。卽振執鹿角掘地。爲其角折。所以名之。

以下略之

那賀郡。東大海。南香島茨城郡。西新治郡。下野國堺大山。北久慈郡。

諸本最前略之四字脫據乙本按圖鈔本不全然此係蓋折中之文也故載之姑存以備考平戸大串二村相接今隷茨城郡古那珂郡地昌秀云今大串西隣東前村有地今此謂屎穴趾者蓋是也和名鈔那珂郡茨城郷不知其所在晡時臥山並詞說見下按國造本紀曰茨城國造筑紫刀禰後額田部造子努賀直之祖也云云今此謂努賀毘古者蓋其種族也

最前略之

平津驛家。西一二里。有岡。名曰大櫛。上古有人。體極長大。身居丘壟之上。採蜃食之。其所食貝。積聚成岡。時人取大朽之義。今謂大櫛之岡。其大人踐跡。長卅餘步。廣廿餘步。屎穴趾可廿餘步許。

以下略之

茨城里。自此以北高丘。名曰晡時臥之山。古老曰。有兄妹二人。兄名努賀毘古。妹名努賀毘咩。時妹在室。有人不知姓名。常就

蠍眉小說云今新治郡茨城村西北二里許有村上村其山上有村上鮑神社里俗相傳上古所祭小蛇祠也所謂瓮甕所存片岡村亦接近因按晡時臥山蓋謂此地也云按今新治郡與那珂郡之境間茨城郡而其地邃遠十里許古今土壌谷峯雖後世不可測前說頗近誣雖然往往膾炙人口何必妄意臆斷不可以爲無斯事也

求婚。夜來晝去。遂成夫婦。一夕懷妊。至可産月。終生小蛇。明若無言。闇與母語。於是母伯驚奇。心挾神子。卽盛淨杯。設壇安置。一夜之間。已滿杯中。更易瓮而置之。亦滿瓮内。如此三四。不敢用器。母告子曰。量汝器宇。自知神子。我屬之勢。不可養長。宜從父所在。不合有此者。時子哀泣。拭面答曰。謹承母命。無敢所辭。然一身獨去。無人共

按今新治郡有片岡村然其地隔遠益與此異按粟河未詳和名鈔那珂郡阿波郷又税所氏古文書那珂郡西粟郷今那珂川南有粟村益因此稱粟河也然挾字乙本作疾小原俊智云疾粟疑今常葉村在中河内村南故稱疾粟河也和名鈔那珂郡洗井郷萬葉集九巻曝井歌曰三栗乃中爾向有曝井乃不絶欲通彼處爾妻毛須一正云自常葉

去。望請矜副一小子。母曰。我家所有。母與伯父而已。是亦汝明所知。當無人可相從。爰子含恨。而事不吐之。臨決別時。不勝怒怨。欲震殺伯父而昇天。時母驚動。取瓮投之。觸神子不得昇。因留此峰。所盛瓮甕今存片岡之村。其子孫立社致祭。相續不絶。

以下略之

自郡東北挾粟河而置驛家。本近粟河。謂河内驛家。今

村拯中河内村中間歴袴塚村路傍有涌泉其地曰曝臺坂曰瀧坂疑古曝井今隷茨城郡

國造本紀曰志賀高穴穗御世物部連祖伊香色雄命三世孫船瀬足尼定賜久自國造云云

淡海大津天智天皇所都藤原内大臣益謂鎌足也天智紀曰八年十月遣東宮於藤原内大臣家授大織冠與大臣位仍賜姓爲藤原氏自此以後通謂藤原大臣云云

按鹿島郡下生

随本名之。當其以南泉出坂中。水多流尤清。謂之曝井。縁泉所居村落婦女。夏月會集。浣布曝乾。〔以下略之〕

久慈郡。東大海。南西那珂郡。北陸奧國堺岳。

古老曰。自郡以南。近有小丘。體似鯨鯢。倭武天皇因名久慈。〔以下略之〕

至淡海大津大朝光宅天皇之世。遣使檢藤原内大臣之封戸。輕直里麻呂造堤成

村有鎌足社皆曰鎌足常陸人見大鏡簾中抄及字類抄等

按河内里未詳今宮河内村蓋是也里俗相傳古稱河内里

按鏡石在生井澤村宮河内村相接而所出於鏡山之石也俗云月鏡石其色紫黑有潤澤可鑒

和名鈔郡珂郡倭文郷神名式靜神社按今在靜村祭神天手力雄命主計式常陸國倭文卅一端自餘輸縣布又新猿樂記常陸綾布云

池。其池以北謂谷會山。所有岸壁。形如磐石。色黄穿。腕獼猴集來。常宿喫歠。

自郡西北六里河内里。本名古古之邑。俗說謂猿聲為古古。東山石鏡。昔有魑魅萃集。翫見鏡則自去。俗曰疾鬼面鏡自滅。所有土色如青紺。用畫麗之。俗云。阿乎爾。或云。加支川爾。時隨朝命取而進納。所謂久慈河之濫觴。出自猿聲。以下略之

郡西□里。靜織里。上古之時。未識織綾之

按今東野八田兩村中有小流謂玉川其水中有碼碯燧石及扁青碧青之類琢磨造玉尤有潤澤為佳品又出砂金故呆其川橋號謂金玉橋也

按日本後紀云弘仁三年十月癸丑建小田驛今世云小田里未詳其所在按下文曰墾田則小字下蓋脫墾字

按今此謂清河者蓋云淺川也其源出於宮河內村而南流會久慈川又臨其河潭有岩手村

機。未在知人。于時此村初織。因名之。北有小水。丹石交雜。色似璵碧。火□鑽尤好。故以號玉川。

郡東□里小田里。多爲墾田。因以名之。所有清河。源發北山。近經郡家南。會久慈河。多取年魚。大如腕。之其河潭謂之石門。慈樹成林。上卽幕歷。淨泉作淵。下是瀉湲。□□青葉自飄。蔭景之蓋。白砂亦鋪。翫

此謂石門者蓋謂此地也門手音相通至今年魚亦多之焉
大伴村未詳其所在丙本丁本作大伊共不詳因按今自静村至太田村之間有大平大里大門等之名字相似恐傳寫之誤也
和名鈔久慈郡太田郷今有太田村按佐竹氏世爲居城所而今尚人戸稠密之地也
神名式長幡部神社主計式長幡部絁七疋云云按今太田村東幡村有長幡部

波之席。夏月熱日。遠里近郷。避暑追凉促膝攜手。唱筑波之雅曲。飲久慈之味酒。是雖人間之遊。頓忘塵中之煩。其里大伴村。有涯。土色黄也。群鳥飛來啄咀所食。

郡東七里太田郷。長幡部之社。古老曰。珠賣美萬命自天降時。爲織御服。従而降之神名綺日女命。本自筑紫國日向二神之峰。至三野國引津根之丘。後及美麻貴天

神社祭神大幡主神。按二神丙本作二折恐誤也。釋日本紀所引日向風土記曰、瓊瓊杵尊天降於日向之高千穗二上峰云云。按强兵利劔戊本作重兵内劔、諸本重字欠脱、今皇字補弓字以為訓讀、姑存備考。按今有里宮村、有薩都宮神社、祭神大幡主神、神名式薩都神社。按白堊乙本丙本作白土、据戊本山海經曰大次其南多白堊。

皇之世長幡部遠祖多弖命避自三野還于久慈造立機殿初織之其所織服自成衣裳更無裁縫謂之内幡或曰當織絁時輙爲人見故閉屋扉闇内而織因名烏織强兵利劔不得裁斷今每年別爲神調而獻納之自此以北薩都里古有國栖名曰土雲爰兎上命發兵誅滅時能令殺福哉所言因名佐都北山所有白堊可塗畫之

本草綱目曰白堊下品陶景弘曰即今畫家用物甚多而賤云云按今多賀郡宮田村有神峰山蓋是也山上有社謂神峰山權現宮田助川會瀨三村之鎮守也例祭四月十日九日山下造假殿迎神輿十一日還輿

神宮雜例集曰天永元年伊勢大神宮御遷宮山口祭採心柱安置宮處造立假殿彼心柱者宮地坤方乃松保尓安置志天假殿造立之云云

東大山謂賀毗禮之高峰。即有天神。名稱立速日男命。一名速經和氣命。本自天降。即坐松澤松樹八俣之上。神祟甚嚴。有人向行大小便之時。令示災致疾苦者。近側居人。每甚辛苦。具狀請朝。遣片岡大連。敬祭。祈曰。今所坐此處。百姓近家。朝夕穢臭。理不合坐。宜避移可鎮高山之淨境。於是神聽禱告。遂登賀毗禮之峰。其社以石爲

按里川源出陸奥圖堺多賀郡里川村經里宮村入久慈川益此文即已下十九字當移在上文可塗畫之下和名鈔久慈郡高市鄉今不知其所在按高市上恐有脱文水木村今隸多賀郡有水木明神社俗云泉杜有清泉涌出人至其側發聲踊躍則隨發聲而沸騰出人以爲一奇觀按豊後風土記曰玖倍理湯井在郡西湯色黑埿常不流人竊至井邊發聲大言驚鳴

垣中種屬甚多。并品寶弓桙釜器之類。皆成石存之。凡諸鳥經過者。盡急飛避無當峰上自古然。爲今亦同之。即有小水。名薩都河。源起北山流南同入久慈河。以下略之

所稱高市自此東北二里密筑里村中淨泉。俗謂大井。夏冷冬溫湧流成川。夏暑之時。遠邇鄉里酒肴齎賚男女集會休遊飲樂。其東南臨海濱。魚貝等類甚多。西北帶

涌騰二丈餘許
和名鈔久慈郡助川按今隷多賀郡日本後紀云弘仁三年十月廢助川驛
按今會瀨村古稱相賀元祿戊寅改謂會瀨村其地與助川相接蓋後世分而爲二村也
按諸本無川字據茂本鮭胆作鮭祖不可讀今據丁本
國造本紀曰高國造志賀高穴穗朝御世彌都侶岐命孫彌佐比命定賜國造斯我高穴穗宮安康天皇所都也

山野。椎櫟榧栗生。凡山海珍味。不可悉記。自此艮卅里助川驛家。昔號遇鹿。古老曰。倭武天皇至於此時。皇后參遇。因名之矣。至國宰久米大夫之時。爲河取鮭。改名助川。俗語謂鮭胆爲須介。

多珂郡。東南竝大海。西北陸奥常陸二國堺之高山。

古老曰。斯我高穴穗宮大八洲照臨天皇之世。以建御狹日命。任多珂國造。茲人初

按武烈紀影媛歌擧暮摩矩羅柁箇幡志須擬云三代實錄曰薦枕高御產神薦枕者爲謂高之冠字也日本私記云師說古以蔣爲枕云高之眼目須流故欲言高之始有此言乎矣和名鈔多珂郡道口鄕鄕名今發

按苦麻村未詳鍋田三善云陸奧國岩城相馬之界有川謂熊川東北半里許標葉郡有熊川村其驛家謂熊町益是也

至歷驗地體。以爲峰險岳崇。因名多珂之國。謂建御狹日命者。即出雲臣同屬。今多珂石城所謂是也。風俗說曰。薦枕多珂之國。建御狹日命當所遣時。以久慈堺之助河。爲道前。今猶稱道前里。去郡西北六十里。陸奧國石城郡苦麻之村。爲道後。其後至難波長柄豐前大宮臨軒天皇之世。癸丑年。多珂國造。石城直美夜部。石城評造部志許赤等。請申惣領高向大夫。以所部遠隔。往來不便。

按續日本紀曰養老二年五月割常陸國多珂郡郷二百一十烟名曰菊多郡屬石背國云云郡中今有相田村蓋是也按古事記曰淡海之久多綿之蚊屋野多有猪鹿其立足者如荻原指擧角者如枯樹云云又景行紀曰此野也麋鹿多氣如朝霧足如茂林云云又雄略紀曰其戴角類枯樹末其聚脚如弱木林呼吸氣息似朝霧云云按橘媛命名稱比之皇后故此

分置多珂石城二郡。石城郡今存陸奥國堺内。其道前里飽田村。古老曰。倭武天皇爲巡東陲。頓宿此野。有人奏曰。野上群鹿無數甚多。其聳角如蘆枯之原。比其吹氣。似朝霧之立。又海有鰒魚。大如八尺。幷諸種珍味遊理□多者。於是天皇幸野。遣橘皇后臨海令漁。相競捕獲之利。別探山海之物。此時野獵者。終日驅射。不得一宍。海漁者。須臾才

書皆稱皇后古事記亦稱后可以証

甲本乙本爲字作鳥字丁本作魚字共非今据丙本及己本

乙本丙本皇后作家后据戊本及己本

按佛濱未詳其所在或曰田尻村山中岩窟所彫刻之度志觀音像蓋是也鍋田三善云今陸奥國楢葉郡有佛濱村蓋是也

和名鈔多珂郡藻島郷按日本後紀曰弘仁三年十月廢常陸國安侯河内石

採盡得百味焉。獵漁已畢。奉羞御膳。時勅陪從曰。今日之遊。朕與皇后。各就野海。同爭祥福。俗語曰。佐知。野物雖不得。而海味盡飽喫者。後代追跡名飽田村。國宰川原宿禰黒麻呂時。大海之邊石壁。彫造觀世音菩薩像。今存之矣。因號佛濱。以下略之

郡南卅里藻島驛家。東南濱碁子。色如珠玉。所謂常陸國所有麗碁子。唯是濱耳。昔

橋助川濼島棚島六驛更建小田雄薩田後等三驛　長久保玄珠云郡中伊師町村有號目島地古濼島驛蓋是也基石濱今伊師濱是也

倭武天皇乘船浮海。御覽島磯。種種海藻多生茂繁。因名。今亦然。〔以下略之〕

按今多賀郡有黑坂村其山謂竪破山有立破權現社里俗相傳古坂上田村麻呂征討陸奥國悪賊凱旋時留宿此山時有靈夢因造立之其頂上有大石謂竪破石方二丈餘高八尺許其形分裂為三恰如削成故俗謂立破山蓋即黑前山是也

日高見國未詳景行紀廿七年春二月朔武内宿禰自東國還之奏言東夷之中有日高見國云同廿八年蝦夷既平自日高

補缺

黑坂命征討陸奧蝦夷事了。凱旋。及多歌郡角枯之山。黑坂命遇病身故。爰改角枯號黑前山。黑坂命之輸轜車。發黑前之山。到日高見之國。葬具儀。赤旗青幡交雜飄颺。雲飛虹張。瑩野耀路。時人謂之幡垂國。後世言便稱信太國。按此文仙覺萬葉集註釋所引。而本國風土記逸文也。蓋信太郡所載。鈔本略不載之。故今補之。姑存以備後考。

見國還之西南歷常陸到甲斐國酒折宮云云神名式陸奥國桃生郡日高見神社蓋謂陸奥國也和名鈔新治郡巨神鄉今按小神爲筑波郡和名鈔鹿島郡大屋鄉今郡中有大失川村風土記所載大蓋川亦疑是也又茨城郡有大谷村不知孰是

新治郡驛家。名曰大神所以然稱者。大蛇多在因名驛家。同萬葉集註釋所引。而新治郡之逸文。詞林採葉鈔亦載此文。然小異。故今補訂之。并存以備異聞。

常陸國記云。採大谷村之大榛。本伐造鼓末伐造琴。俗謂比佐頭。按此文壒囊鈔所載也。謂常陸國記云。則蓋謂本國風土記矣。故今補之。以俟來哲之考耳。

書常陸風土記後

昔和銅年閒。令諸國獻風土記。至延長中。下符於五畿七道。搜索之。其或湮滅不傳者。蓋新上進焉。爾後地志之撰。寥寥無聞。而千載之久。各國之記。又復散逸。今僅存斯記及出雲豐後肥前之記焉。而出雲之記成於天平。則其應和銅之命所上也亾論已。至豐後肥前之記。則論者往往以爲

延長之撰。但斯記未詳成於何時也。然記中書曰白壁郡。曰藻島驛家。曰板來驛。是可以徵焉。桉史延暦中。改白髪部姓。爲眞髪部。然則改白壁郡。爲眞壁郡。亦在當時。使斯記成於延暦之後邪。不宜有白壁之文。又桉廢藻島及板來驛。倶屬弘仁年間。使斯記成於弘仁之後邪。不宜有二驛之名。由是推之。則斯記亦應和銅之命而作

也必矣。特未知與出雲孰先後耳。嗚呼各國之記存者僅四。而斯記居其一。固既奇矣。況其所傳之遠。獨與出雲之記同。不亦滋奇乎。余性好古。既深喜斯記存於今。而亦深憾逸河內眞壁二郡。且傳寫之久。謬誤非一。乃取諸家藏本。撿閱挍讐。有年於茲。魚魯之辨。雖如小有所得。而二郡之逸。遂不能獲也。今姑舉其存者。粗攷異同。標

衆說於上。以授諸梓。淺見寡聞。非敢以自足。葢其存也則喜之。逸也則憾之。苦逸者之不易獲。而慮存者之或就散逸。是余之所以有斯舉也。

天保己亥五月西野宣明謹識

渡邊糺書

水府御藏版

頒行書林
江戸横山町三丁目
和泉屋金右衛門

常陸風土記參考

【一オ】六行。■中臣幡織田連ハ舊印本ニ中臣幡ヲ句トシテ織田連ヲ一氏トセリ。小山田與淸ハ、中臣幡織田連ヲ一姓トシテ「ナカトミノハタオリダノ連」ト讀メリ。是ニ從フベシ。下文ニモ、中臣幡織田大夫トアルヲ思フベキナリ。〇八行。■八國ハ孝德記二年東方八道トアルニ同ジク相摸、武藏、上總、下總、上毛野、下毛野、常陸、陸奧ヲ云ヘリ。〇常陸ノ名稱ハ古事記、續日本紀ニ常道國トモアル如ク偏續キニ道ノ續ケル由ナリ。往來道路不レ隔二江海之津濟一云云ト有ルニテ辨フベシ。一說ニ「ヒタチ」ハ「ヒタカチ」ナリト古今顯注ニアリ。サテ風土記信太郡條ニ此地本日高見國トミエ、神名式陸奧桃生郡日高見神社アルニ由テ伴信友ノ考ニ、日高ハ景行紀ヲ考ルニ、今ノ蝦夷地ニテ、常陸ハカノ日高ヘ通フ道ナレバ日高道ナルベシト云ヘリ。

〇諸國名義考云。和名抄に常陸（比太知國府在二茨城郡一）名義は古事記傳に古今顯注にはヒタカチなりといへるを、契沖が陸をカチとよめる事いまだしらず、ヒタチはヒタミチなりといへる誠に然り。古歌に東路の道のはてなるひたちとよめるは東海道の極みなればなり云云とあり。誠に然るべし。常陸ノ國ノ風土記に往來ノ道路不レ隔二江海之津濟一、郡鄕ノ境堺相續二山川之峰谷一、取二近通之義一以卽名稱焉云云。抄云。此國中道路江海陸地一續之直路とあり。また萬葉集に衣手常陸國云云とよめるは同風土記に倭建尊巡二狩東夷之國一、幸過二新治縣一、所レ遣二國造毘那良珠命一、新令レ堀レ井、流泉淨澄尤有二好愛一、時停二乘輿一、翫レ水洗二御手一、御衣之袖垂レ泉而沾、依二漬レ袖之義一以爲二此國之名一、風俗諺云筑波岳黑雲挂 衣袖 漬 國是矣とあり。また、曝井當其以南出二坂中水一、多流尤淸謂二之曝井一、緣レ泉所レ居村落婦女月會集院布曝乾云云ともあり。こもまたひとつの傳へなり。又は東方の極みなれば日高見の約り轉りたるにてはあらざるか。日本書紀景行天皇卷に日本武尊云云蝦夷既平自二日高見國一、還之西南歷二常陸一至二甲斐國酒折宮一云云、また武内宿禰自二東國一還之奏言、東夷之中有二日高

見國ハ、其國人男女推結文レ身、爲レ人勇悍、是揔曰二蝦夷一ハ、亦土地沃壤而曠。また此國風土記を萬葉註釋に引きたるには自二果前之山一到二日高之國一云云、時人謂二之幡垂國一ハ、後世言便稱二信太國一とあり。釋日本紀に引きたるには古老曰ク御二宇難波長柄豐前宮一之天皇御世云云、分二筑波茨城郡七百戸一置二信太郡一ハ、此地本日高見國云云とあり。延喜神名式に陸奧國桃生郡日高見神社あり。立人ノ信友云ク日高は景行天皇紀を思ふに今の蝦夷地にて常陸はかの日高へ通ふ道なれば日高道なるべしといへり。この說いとめでたし。ここを思へば顯昭が說も捨てがたし。或書に風土記とて引きたるには此國之道常陸滿民家多有レ煩、故宜曰此國千立成レ陸則百姓安、故曰二飛多智一也とあるはいかがとぞおもはる。【二ウ】二行。[illegible]和名鈔新治、[illegible]比波理トアリテ此郡ニ十二鄕アリ。坂門、竹嶋、沼田、伊讃、博多、巡廻、月波、大幡、新治、下眞、巨神、飯田コレナリ。○同行。波太岡。[illegible]笠間ノ北ヨリ西小栗マデ山嶺連續ニ國ヲ界セルモノヲ總テ云ヘル內ニ波太岡ト云フガアリシナリ。[illegible]今按、新治郡大幡鄕と云ふは、やがて波太岡の岡本の里落なるべく、今の佛頂山の古名を、波太岡の峰ともと呼べることと推測に足る。佛頂山は佛山とも呼ばれ、波太岡なまりて、ハタケと爲り、ホトケに移れるに似たり。○五行。[illegible]曾斯母乃、奥書曰、[illegible]ハ衰シ衣ノ訛、又按ニ本與ニ作ル「エシモノ」ハ後ノ「エセモノ」ナリ。○六行。[illegible]按。比奈良珠命ハ崇神朝ノ人ナレバ其子ヲ美都呂岐命ト云ヒテ其子比奈羅布命トキコユルヲ名ノ同ジキニヨリテ、祖孫同人トスルハ非ナルベシ。比奈良珠ハ「ヒナラタマ」ナラン。○同行。新井ハ今笠間郡古郡村ノ中ニ諸所ニ讚アル靈泉ト云ヒテ土人ノ尊崇スル清泉ノ湧出スル者アリ。○八行。白遠。[illegible]中山信名曰。白遠ハシラトホフニテ萬葉ニシラトホフヲニヒタ山トヨメルモニヒタノニヘカケシナリ。思フニハ丹ナリ。シラトホフトハ白キモノニホフト云フ意ニテホフハニホヒ　ニホフノホヒヲホフト通ジ及ボス意モアリ。今ノ諺ニ物ヲヌルコトヲハクト云ヒ、ヌル器ヲハケト云フ皆ホヒ　ホフト同ジケレバ白キ所ヲハフト云フ心ニテシラトホフトハカケタルナリ。【三オ】一行。業穗山。[illegible]今足尾ニ作ル。萬葉常陸歌ニ筑波

爾曾我比爾美由流安之保夜麻安志可流登我毛左爾見延奈久爾トアリ。此山筑波ノ北背ニ接續シテ高キコト加波山ニ亞ゲリ。〇三行。[標]與淸又云。此歌ノ意ハ、言痛ク人ニ云ヒ騷ガルレバ、小泊瀨山ノ石城ニ率テ共ニコモラム故サマデ物思ヒナセソトナリ。「コチタケバ」ハコト痛カラバニテ、人言ノ多キヲ云フ。〇五行。[標]白壁郡四至ノミヲ存セレバ建置ノ時代知リガタシ。サレド新治ノ地ヲサキテ一郡トセラレシモノナルベシ。和名鈔眞壁郡ニ七郷アリ。神代眞壁長貫伴部大苑大村伊讃トミユ。〇八行。筑波命[標]波ヲ筑ト改メテ云。舊印本ニ筑波トアレド今古本ニヨル。〇和名鈔筑波郡ニ九郷アリ。大貫、筑波、水守、三村、栗原、諸蒲、淸水、佐野、方穗コレナリ。【三ウ】二行。[標]與淸云。握飯ハニギリイヒ歟、又柔飯(ニギイヒ)ノ借字歟。强飯ニ對ヘテニギ飯ノ名モアルベキコトナリ。後ニ比女飯ト云フ。今ノタキホシノ飯ナリ。サテ柔飯ノ菅鑑トツヅケタルナルベシ。[標]二行の終に「以下略」之ノ四字加賀本ニヨル。として加ふ。〇三行。祖神[標]寛按。下文香島郡ニ諸祖天神又諸祖神ヲ「カミルキ」、「カミルミ」ト訓ルヲ思フニ、祖神尊モ然カ讀ムベキカ。又上ノ祖神ヲ加賀本ニ神祖トモアレバ此モ神祖ヲ倒置セシカ。〇五行。[標]新粟初嘗を「ワセノニヒナメシテ」と訓みて云。新粟初嘗ハ平田篤胤曰。和勢能邇比那米志弖ト讀ムベシト云ヘリ。今之ニ從フ。萬葉十四ニ多禮曾許能屋能戸於曾夫流爾布奈未爾和家世乎夜里氏伊波布許能戸乎トアルヲモ思ヘ。【四オ】一行。[標]神名式筑波郡筑波山神社二座一名神大一小。寛云。コノ祭神ヲ諸冉二神ト云フハ證ナシ。筑波男ノ神筑波女ノ神ト正史ニアルヲ見ルベシ。〇同行。[標]雖新粟嘗コノ新字加賀本无シ。與淸曰。蓋粟上脫新字トアルガ如シ。舊印本ニ新ノ字アルハ補ヘルモノナリ。コレモ篤胤曰。ニヒナメスレドモトヨムベシ。萬葉十四下總歌ニ、爾保杼里能可豆思加和世乎爾倍須登毛曾能可奈之伎乎刀爾多氏米也母トヨメルニ思ヒ合スベシ。〇六行。[標]福慈ハフクジト字ノママニヨムベシ。寛按ニフハ火ニテクジハ奇ナリ。富士ノ山ハ火山ナル故ニ云ヘリ。高千穗峰ヲバ槵日ト云ヒ、此ハフクジト云フ。共ニ奇火ノ義ナリ。【四ウ】五行。[標]寛按。都久波尼爾ノ

歌ノ加彌尼ヨミガタシ。思フニ加禰豆ノ誤リカ。扨歌ノ意ハ筑波嶺ニ將逢ト云ヒシ女子ハ誰子ニヤ。知ラヌ人ナリト思ヒテ尋ネシカバ、乘テ言モ通ハシテ遊ビケル人ニテアリケリトナリ。次ノ歌ハ筑波嶺ノネロニ廬シテ妻无シニイヌレバ速ケク夜ノ明ケンコトヲ思フ。ト云ヒテ記シ心トキコユ。欲呂ハ夜ロニテロハ助語ナリ。　都久波尼爾ノ爾ハ乃ニテ其下ニ尼呂爾ノ三字脫タルベシト色川三中云ヘリ。【五オ】一行。[illegible]按。騰波江萬葉集歌曰。新治乃鳥羽能淡海云云未ㇾ詳ニ其所ㇿ在。コハ騰波湖ニテ俗ニ大寶沼ト云フ。眞壁郡下妻ノ北ニアリ。[辭書]騰波江址。今高道祖の西北にして、眞壁郡上野村、鳥羽村と同郡黒子村、騰波江村、大寶村との間なる卑濕、蓋是なり。古風土記に「筑波郡西十里、在騰波江、長二千九百步。廣一千五百步。東筑波郡、南毛野河、西北新治郡、長白壁郡」。と載せしにて明白す。古の筑波、白壁、新治、及び毛野河（此には、高道祖の西なる絹川の舊河道。糸繰川ともいへるものが、新治郡と豐田郡の間を東へ流れ、高道祖に至る者を毛野河と云ふ）の中間なる、一大澤にして、子飼川之に灌し、渺渺たる江海を成せるなり。筑波郡家より測れば、古代里數二十里許、十恐らくは廿の訛のみ。然るに萬葉集筑波山の歌に、之を「新治の鳥羽の淡海も、秋風に白波立ちぬ。筑波嶺のよけくを見れば、長きけに、念ひつみこし、憂はやみぬ」とよみたるに拘泥し、新治郡內の地に、騰波江を求めて、大寶沼を以て之に充てしは、甚しき誤なり。新國志、郡鄕考以下、皆此誤を免れざるのみならず、西野氏標註本の如きは、騰波江の四至を、河內郡の四至と疑へり。惟ふに、騰波江は其廣さ大略南北四十九町、東西三十二町と推算せらるれば、其廣大今の大寶沼の比に非ず。大寶沼の東岸なる大串、若串、一帶の高丘を兩澤の交界とし、相隣比して碧波を漲らししたり。且其汎濫、及び消滅の所以を考ふるに、主として毛野河の流勢に因れり。即、毛野河の屈折して、新治郡下眞鄕の南を、東へ流れ、筑波郡佐野鄕に至るや、子飼川の細流、其委口を、毛野の大水に支障せられ、此に渟滯して、汎濫の形狀を呈したる者と判知せらる。されば、其渟水の減退は、毛野河の河道を變じて、豐田郡へ

走りしに因れり。而て、毛野の河道を豐田郡の中に取りしは、已に承平以前なるが如し。……騰波江の其「秋風に白波たてる」形狀を消滅せしも、頗久しき世の事と思はる。〇二行。[illegible]和名鈔河内郡ニ七郷アリ。嶋名、河内、大山、八部、眞幡、菅田、大村コレナリ。兵部式云。傳馬河内郡五匹。〇三行。[illegible]和名鈔信太郡ニ郷十四アリ。大野、高來、小野、朝夷、高田、子方、志萬、中家、島津、信太、乘濱、稲敷、阿彌、驛家コレナリ。[辭書]信太郡の四至を錄し「東信太流海……」とあるに就き、諸家の疑義あり。信太流海とは、香澄浦の信太の東北面に瀕するを指せるなれば、實は東と爲し難し。又榎浦を小野川の江戸崎入に擬する說あれど、固より信け難し。谷原の沼澤こそ古の榎浦にして、毛野川之に通じたれば、西毛野河とあるは、最疑ふべしと雖、已に東北を東に見做せる四至なれば、西と云ふは實、西南にして、稲敷郷、朝夷郷の西南、相馬郡文間臺との間を、毛野河流れたるをいへるなり。北河内郡とあるも、實は西北なること、上の例に準じて知られたり。〇八行。[illegible]宮本元球云。郡北十里ノ郡ハ信太郷ニシテ信太ノ北十里ハ今馬掛大山ノ村ニテ、本郷ニ屬セル地形ナリ。大山ノ高隴ニ岡平ト云フアリ。〇長者ノ宅跡ト云フ。其地ニ涌泉湧出、コレ碓井ニテ、大山村ハ即雄栗之村ナリト云ヘリ。按。今信太郡竹來ノ隣村二三町南ニ若栗村アリ。本文以西トアルニ合ハザレドモ、古ハ阿見、竹來トモニ竹來ト云ヒシモ知ル可カラズ。其東若栗村アルヲ思フニ、雄栗ハ稚栗ノ誤ナルコト知ルベシ。東寺嘉曆四年文書ニモ塙郷若栗ト云フモ見エタリ。[辭書]「郡北十里、碓井、古老曰。大足日子（景行）天皇、幸浮島之帳宮、無水供御、即遣卜者、訪占所所、穿之、今存。」今按、原書「今存」の下に「雄栗之村、從此以西高來里」云云と載せたり。諸家の句讀、「今存雄栗之村」とよみ、因りて、碓井、即雄栗村に存在すと釋けるは誤れり。碓井とは、雄栗以下の句と相連なる所なし。且雄字は稚の譌にて、若栗村現存す。されば碓井は木原、もしくは安中の邊にありしならんも、後世其名を傳へざるのみ。又云。高來郷。今朝日村にあたる。阿彌郷の西にして、志萬郷の北なり。之を以て、鳥津郷の竹來に

引きあつるは古風土記の文意に背くのみならず、形勢にも合はず。【五ウ】二行。■雄栗村云云後世作ニ小栗ニ者疑是也。寛按此說非ナリ。〇四行。■普都大神圓滿院永和元年信太庄上條寺社供僧等言上狀ニ就中木原竹來兩社者庄內第一之惣廟也トミエ、神名帳本郡楯縫神社今木原村ニアリ。此時ノ由緣ニテ祀レルナラン。六行。■寛云。川悪二字恐クハ蛇足ニ近シ。按ズルニ塵袋五ニ器杖ヲ和語ニイツノトヨム。武士ノ具足ドモナリ。ト見エレバナリ。與淸云。イツノハ嚴ノ字ノ義ナリ。【六オ】一行。■元球曰。風俗諺云云ハ稍敗鄕ノ殘簡ナリ。鄕ハ今河內郡八代村ナリ。村ニ稍塚アリ。土人之ヲ筑波山トモ云フ。稍塚ハ飯名塚ノ約ナルベシ。〇二行。常陸下總。■寛按ズルニ加賀本ニコノ四字ヲ二國ノ旁ニ注セリ。因テ考フルニ旁注ノ攙入ナリ。〇四行。■驛家ハ今ノ羽賀村ニテ、兵部式ニ云、常陸國驛馬榛名五匹トアル是ナリ。〇七行。栗濱■今河內郡神宮寺卽東濱鄕ナリ。栗田次寄等ニ所謂神宮寺城ノアリシ所ニシテ、北畠准后籠城ノ故蹟ナリ。【六ウ】五行。■和名鈔茨城郡ニ鄕十八アリ。夷針、山前、城上、島田、佐賀、大幡、生國、茨城、田餘、(〇編者云。和名鈔、田宮と誤る) 小見、拜師、石間、安飾、白川、安侯、大津、立花、田籠コレナリ。〇本塲佐賀鄕今ノ坂村ナリ。其南邊流海ニ臨ム處ナレバ佐禮ハ佐賀ノ誤カ。〇六行。■寛按。國巢ハ其國ニ住着キタル由ニテ云フ稱ナルベシ。吉野ノ國樔モ同ジ。都知久母ハ書紀マタ風土記等ニ土蜘蛛トアルモノニテ其土地ニ公トシテ勢アリシ由ノ名ナメレド之ヲ鄙メテ土蜘蛛トハ云ヘルナルベシ。【七オ】二行。■大臣族ハ古事記ニ神武天皇ノ皇子神八井耳命者意富臣云云之祖トアル意富ヲ多トモ大トモ書ケルコト史ニミユ。此ニ大臣トハ神八井耳ノ裔ナル多氏ノ族ニテ黑坂命ト云フガアリシ由ナリ。〇五行。■死傷終三字加賀本无シ(〇編者云。死は誤植か)。〇六行。■水依茨城國ノ水依ハ「ミヅエ」トヨムベシ。茨ハコチタキ物故多クハ刈リソグルモノナルニ、アヤニクニ此木春ニナレバ若枝(シモト)ノスグレテ多クサスヲ民其ノ殊更ニ心ニトマリテ、サハロアソビニモ云ヒナレタルモノナルベシ。ウバラカリ除ケノ歌萬葉ニアリ。色川三中曰。水依ハ水ヨロ

シ、ウマラキト係リタル枕詞ナリ。【七ウ】一行。[illegible]寛按ズルニ國造本紀云。茨城國造輕島豐明朝御世天津彥根命筑紫刀禰定二賜國造一トアルヲ合セテ八人ニアタルベキカ。〇四行。[illegible]信筑川。萬葉ニ師付東鑑志筑トカケル皆同ジ。本文ニ源出自筑波之山ト云ヘルハ其露雫ヨリ滴リナレル川ト云フニヤ。サレド其水源ハ筑波山ニ起ルニアラズ。別ニ一源アリ。筑波郡澤邊今泉ヨリ起リ北流シ茨城郡ニ入リ、佐谷稻吉ノ間ヲ過ギ野寺中津川ヲ經、三村高濱ノ間ニテ流海ニ歸スト云フ。當時高濱ハ府下ノ地ニテ遊士モ多カリシナルベシ。【八オ】六行。[illegible]多賀波麻爾ノ歌ハ高濱ニ來寄ル沖ツ浪ハヨセクルトモ我ハソノ浪ニハヨラジ。只子等ニシ依ラントナリ。次ノ歌ハ高濱ノ下風サヤグ吾ガ妹ヲ戀フ心モコレニ同ジ。其妹ヲ妻トハイハバヤ。彼妹ニシコト召シ云ハルルトモ其ハ耻ト思ハヌト云ヘルニヤ。【八ウ】二行。[illegible]今玉里村ノ鎭守大宮ノ後ニ玉ノ井ト稱スル古井アリ。〇五行。[illegible]淡海人立綱云。歌ニ駒ナベテトアルヲ萬葉ニ馬並而トカキ、女郎花ヲヲミナベシトヨム、ヲミナメシトモ云フ。行方モナベカタナルヲナメカタトハヨメルナルベシト云ヘルハベトメトノ詞ノ考ナリ。地形ヲ以テ並形トホメシナルベシ。〇同行。[辭書]行方は和名鈔、奈女加多と註し、十六鄕に分つ。風土記に「行方郡、東南並流海、北茨城郡」と載せたれど、西は見えず。別に「郡西津濟、所謂行方之海」云云とあれば、西行方海の四字を脫せるなり。又建置の事を云ひ、「割茨城地八里、合七百餘戸」と見ゆるは疑ふべし。一里五十戸の數に合はず。宮本氏因りて「那珂地七里」の五字を補へり。然れども尙疑あり。說、那珂考に詳なり。又風土記に「此地名稱行細國」とあれど、細にカタの訓なし。疑はくは緣(カト)の誤にて、行緣(ナメカタ)ならん。【九ウ】一行。[illegible]信友云。鄕士ノ並體ノ物色ヲ受ケテ行體ト負セ玉ヘル由ナリ。體ハ細ノ寫誤ナラン。與清云。行ハ行列ノ義、細ハクハシニテ押並テクハシキ國トホメ云ヘルナリ。〇二行。[illegible]寛按。立雨トハ夕立雨ノ義ニテ夕立ノ零リ來ル雨足ノ行列ヲナスニ似タリ。故ニ行方ト續ケタリト見ユ。出雲風土記ニ波夜雨ノ降ルヲ久多美山ト冠セルニ同ジ。〇六行。[illegible]藤田一正云。……寛云。コノ說非ナリ。加

賀本部陸トアルニ仍テヘタレニ非ルコト著ルケレバナリ。[解書]部陸は、藤田幽谷の考に、已に那珂郡部[illegible]の地名を引きて、之を解かれしに、栗田氏の一本を引きて、陸は陸字の譌と定められしは却て飽かず。○八行。[illegible]寛按。斗ハ栰ノ字ノ偏ヲ脱シタルナリ。下文栰池ニテ論ルベシ。【一〇オ】七行。[illegible]縣祇ハ國神ト云フ。行方村岡阜ノ梅リタル松林ノ内ニ祀アリ。大井ハ土人オモ井ト云フ。國神ヨリ稍近キ大北ト稱スル島ノ側ニテ根堀ト云フ水田ノ上ニ清泉出デタリシガ今ハ水涸レタリトゾ。【一〇ウ】五行。[illegible]コノ香島神子社ハ玉造村鎮守大宮ナルベシ。行方景幹ノ孫玉造幹政ノ次子手賀政家アリ。此ノ地頭タリ。○七行。[illegible]曾尼村ハ曾禰郷ノ地今手賀村ノ内曾根ト云フ地ナリ。【一一オ】三行。[illegible]寛按夜刀ハ東國ノ語ニ谷合ノ地ヲヤツト云フニ同ジク、其谷ツノ地ニハ蛇モ多ク住ミタルベシ。故ニ之ヲ名ケテ夜刀神トハ云ヘリシナリ。○五行。[illegible]元珍ガ考ニ、紀ハ巨ノ誤ナリ。コノ文時有見人者巨绝難ト句ヲ上下ニ置易ヘテ見レバ能ク通ズト云ヘリ。今之ニヨリテ訓ヲ加ヘタリ。[illegible]訓トキニミルヒトアレバ、オホムネワザハヒヲマヌカレガタク。【一二オ】四行。[解書]風土記に「郡南……傷其居處、因名」と載せたれば、ヲタカは夾言に出で、邦言にはあらず。○五行。[illegible]今村中ニ大小ノ池三所アリ。是常陸大夫ノ築キシモノナルベシ。【一二ウ】四行。[illegible]筋……寛按ズルニ、此說非ナリ。筋ハ筋ノ誤。新撰字鏡ニ筋肉之有レ力也、須知トアリ。(○編者云。天治本新、享和本筋。)○八行。[illegible]東津大海謂地考曰。コノ香澄ノワタリヨリ信太ノ浮島カケテ見ワタサルル海ヲ霞浦ト云ヒシナルベシ。【十三オ】一行。鳥見丘。清宮秀堅曰。今下總印旛郡萩原村鎮守鳥見神祠アル處印旛沼中ニ斗出シテ常陸ノ方ヲ眺望スルニ、一點ノ障翳ナクシテ景勝ノ地ナリ。是鳥見丘ナルコト必セリ。【一四オ】八行。[illegible]按天之鳥琴……寛云。鳥琴鳥笛ハ它〔他〕ニ見エザレドモ、モトヨリサル樂器ノ名アリシモノトスベシ。【一四ウ】三行。[illegible]寛云。建借間命ハ神八井耳命ノ裔ニシテ意富臣肥直等ノ同族ナレバ思フニ肥ノ國ヨリ來リケン。故ニ杵島曲ヲ唱ヘシナルベシ。○五行。臨レ斬を[illegible]段レ斬とす。[illegible]御嶽鹿嶋ノ節ハ斷際トア

ル如ク、段斬ハフツニキリツナド訓ムベキニヤ。段斬舊印本ニ段ヲ臨ニ作ル誤レリ。今加賀本ニヨル。按安伐元ハヤスキリ又ヤスウチナド呼ビケンヲ安伐ノ字ニツキテアバト云フコトトナリシガ如シ。此例它ニモアリ。又安殺ヲアマク殺ストモ訓ムベキカ。アマハ大山津見神ノ詞ニ木花之阿摩比能微トアル阿摩ノ意ニテ容易ク殺セル由ナランモ知ル可ラズ。然ラバアマノ言ノ訛リテアバトナレルナリ。〇五行。[illegible]布都奈ハ古高村ナルベシ、フツタカト呼ブ。安伐ハ古高ノ内安波臺ト云フ所ナリ。吉前ハ延方村ノ内江崎アリ。【一五ウ】八行。宇流波斯云云 [illegible]カクアレド宇流波斯之小野ハ小抜野タルコト明カテリ。推古紀ニ斷金ヲ今本ムツマシトアレドモ古本ウルハシナリ。紀伊國名草郡斷金郷モウルハシニテ此宇流波斯之野ト同名ナルベシ。〇同行。田里ハ中山信名曰。是田里ハ卽道田郷ナリ。其故ハ道臣命丹波ヲ討平セシ功ニテ、丹波道主ノ稱ヲ賜ハリシ類ニテ三度マデ遠國ニ使セル道路ノ功ニテ賜ヒタル功田ナレバ道田ト云フナリ。今ハ其名絶エタレドモ、大生相鹿ノ北ニ小牧村アリ。村中ノ鉾明神ハ鹿島ノ攝社ナルハコノ御子神ナルベシ。サレバ其南ノ原野ハ波都武之野ナルコト知ルベシ。【十六ウ】三行。宮本元球云。安是ハ淺瀬ノ義ニテ今ノ銚子口ト云フ所其常陸原ト稱スル鹿島郡ノ方ハ渚汀遠ク淺ケレバ安是ト云フナルベシ。〇同行。[illegible]阿多可奈湖云云……是也。トミエ、元球ガ考ニ阿多可奈ハ寒田ニ對ヘテ其水ノヌルメルヲ云フカ。今涸沼ナリト云ヘルハ當レリ。〇六行。下總云云ハ下總ノ下海上國造ノ部內輕野以南ト那賀國造部內寒田以北五里ヲ割テ鹿島ノ神郡ヲ置キシナリ。【一七オ】一行。信名曰。鹿島神宮ノアル所今ニ至テ鹿島ト稱ス。又宮中ト云フ郡家ノアリシ所ハ今ノ掘內ト云ヘル所ニシテ中世以後鹿嶋氏ノ居城トナセル所ナリ。〇五行。[illegible]寬按。水穗之國下恐有脫文、義理不通、今私以注文四字補之。（〇[illegible]に事向平定の四字補入せり）。【一七ウ】二行。鶴峰戊申云。初國……後人所レ爲之字也。[illegible]ト云ヘルヨロシ、今勝字ヲハブキテヨメリ。（〇六行。汝聞勝云云の勝字をはぶきミマシキコシメスクニと訓めり）〇三行。[illegible]寬云。鐵弓ハ金弓ト讀ムベキ歟。金弓ノコト出雲風土

記ニ見ユ。物部金弓連ト云フ人モアリ。物部某記ニ記シオケリ。サテ此ナルハ總テ鐵モテ弓モ矢モ作レル故ニクロガネト訓ムガ當ルベキカ。○七行。追集。[illegible]伴信友云。追集ハ追ヒ集メト訓ムベシ、一人モ遺ラズ出ヅベシトノ意ナリ。追ノ字徒ラニ書クベキニアラズ。ト云ヘレドコハメシツドヘト訓ムベキナリ。追ヲ召トヨム例ハ續日本紀大寶二年二月追諸國國造等入京天平九年四月追常陸上總云云等六國騎兵公式令追徵科造マタ別勅追喚ナドアリ。【十八ウ】六行。[illegible]栗東雄曰。多義ノ下多義ノ二字ヲ脫セルナリト。今此考ニ據テ私ニ之ヲ補フ。寛按、皇極紀二年童謠ニ伊波能坏爾古佐屢渠梅野俱渠梅多儞母多礙底騰褒囉栖歌麻之之能烏膩、マタ法皇帝說聖德太子歌曰。伊我留我乃止美能井乃美豆伊加奈久爾多義弖麻之母乃止美能井能美豆。マタ萬葉二妻毛有者採而多宜麻之トアリ。荒木田久老云。タケハ手揚ナリ、吾鄕ノ俚言ニ物ヲ盜ミ取ルヲタゲルトモ又アゲルトモ云ヘリ。俗言ニ膳ヲアゲルト云フモ、アゲルハ取ルナリ。ト云ヘルガ如ク、常陸ノ方言ニモ人ノ物トスルヲタゲルト云ヒ、越後人ノ言ニ物ヲ手ニ持ツヲタガイルト云フ。共ニ多義ノ轉音ニテ多義ハ持捧（モタゲ）ノ義ナルベシ。○コノ歌ハ與清云。安良佐賀ハ新酒ナリ。加味能彌佐氣ハ神之御酒ナリ。多義止三字脫アリテ讀ミガタシ。イヒケバカモヨハ云ヒケレバカモニテヨハ助辭ナリ、ワガエヒニケンハ我醉ニケンナリ。

[illegible] 安良佐賀は御[illegible]酒にて、新醸ならんと云へど疑ふべし。もしくは地名にて、大坂山を荒坂と云ひ、此神彼山に現れましゝことあれば、大阪神とも、荒坂神と唱はれしに非ずや。【一九オ】六行。沼尾池云云[illegible]信友云。其始メハ沼尾池ノ邊ニ郡家アリシト見エテ前郡所置トモアルナリ。沼尾ハ後ニ分レテ一鄕トナル。沼尾鄕コレナリ。和名鈔ノ頃ヘ未ダ鹿島鄕ニ屬シテアリトミエタリ。【一九ウ】三行。高松濱。[illegible]信名云。高松濱ハ今ノ高天原ナリ。○同行。大海濱邊[illegible]之字舊印本无シ。今加賀本ニ據リテ補フ。舊印本大海ノ下ニ濱邊ノ二字アルハ信友ノ考ニヨリテ補ヒシモノナレド无クトモ義ハ通ズルナリ。【一九ウ】五行。[illegible]松下淸泉ハ今求ナシ川トテ洪流トナリテ海ニ歸スルモノ是ナリ。本郡初那賀郡ニ隷セシ寒田以北ハ皆岡阜高

原ニテ喬木多シ。故ニ高松ノ名アリ。海上郡ナリシ處ハ地勢平遠ニシテ斧鹵ノ地ナレバ松モ矮小ナル多シ。故ニ若松濱ト云フナリ。〇六行。采女〔補〕婇舊印本采ニ作ル、今加賀本ニヨル。【二〇オ】一行。（伏神云云〔補〕寛按、伏神加賀本ニ神母ニ作ル、母ハ丹ノ誤ナルベシ。本草和名云。茯苓一名伏菟一名伏神有根者云云。一名神丹云云如飽者也トアレバナリ。〇五行。〔補〕元球云。今高濱村ハ[illegible][illegible]鄉ノ遺ナリ。塞田ハ今ノ神ノ池ニテ高濱ヨリ東ニアリ。而ルヲ塞田ハ三田村ナリト云フ說ハ非ナリ。〇七行。〔補〕輕野ハ和名鈔輕野鄉ノ地ナリ。此ニ池アルヲ以テ輕野池ト云フ。舊名安是湖マタカンノイケヨリ轉ジテ神ノ池トモ云フ。奥谷村ノ西ニアリ。萬葉集苅野橋ノ苅野モ輕野ナリ。【二一ウ】二行。〔補〕童子ノ下女字ヲ脫シ、稱ノ上ニ童ノ字ヲ脫スルニ似タリ。今私ニ補フ。（〇有二年少童子女。……童稱……）〇七行。〔補〕歌ノイヤゼルハ冠辭ノ如クニキコユレド未ダ他ノ例ヲ考ヘズ。アゼノコマツニハ阿是ノ小松ニナリ。ユフシデテハ木綿垂ナリ。ワヲフリミユモ吾ヲ振招キテ見ユルトノ義歟。ヒレフルノ振モ招クコトナリ。孃子ノ歌ヨミガタシ。ウシホニハ潮ニヘナリ。タタムトイヘドハ將立トイヘドモノ義カ。ナセフコガ汝夫之子ガニテ童子ヲ親ミ玉ヘルナリ。ワヲミサバフリシ詳ナラネド我ヲ見玉ハバソレト知ラルベシトノ義乎。試ニ云ハバ、我思フ汝夫ノ子ガ八十島隱リテ海潮ノタツ間ニアリト雖吾ヲ一目見バ知リナムモノゾト云ヘル意ニヤアラム。【二一オ】四行。〔補〕玉露抄侯金風々節ト加賀本ニアルヲ、舊印本ニ々ヲ之ト改メタルハ誤レリ。又訓點モ非ナリ。風節ノ風ハ凉ナドノ誤リカ。〇六行。〔補〕路、加賀本帖トアリ。帖ハ跍ノ誤カ。【二一ウ】七行。〔補〕舊印本堤下乎字アリ。コハ加賀本ニ提ノ旁ニ堤乎トアルヲ見誤リテ本文トセルナレバ訂セリ。として乎を削れり。〇八行。〔補〕此歌誤脫アリテ讀ミガタキヲ強テ考フルニ、志滿知止利乃芳我（比）（爾都）（知乎）都々牟止母都都彌波古叡（亘）安良布厳目右疑ニモヤアラム。闕ヲツケシ五字ハ私ニ補ヒタルナリ。カクテ一首ノ意ハ白鳥ノ羽ガヒニ土ヲ包ミ持テ堤ヲ築カントスレドモ、其堤ハ古叡亘（崩テナリ）此ニ在ランコトモ心憂キガ故ニ天ニ昇ルトナリ。

○投丁本……賞白鳥誤乎 標 斯呂ハ信友云。斯ロロ（○鳥の誤か）ニ作ルベシト云ヘル、ヨロシキ說ナリ。

【二二オ】八行。標 和名抄那賀郡ニ郷廿二アリ。入野、朝妻、吉田、岡田、安賀、大井、河内、川邊、常石、全隈、日下（○部脫カ）志萬、阿波、芳賀、石工、鹿島、茨城、洗井、那賀、八部、武田、幡田トミユ。

【二二ウ】一行。標 平津驛家ハ式ニノセズ。後ニ廢セシナリ。サレド平戸村ノ西ニ東前村アリ。藥王院文書志戲ニ作リ六段田六藏寺文書東馬屋ニ作ル。コノ邊ソノ驛ヲ置キシ處ナルベシ。○標 平戸大串二村……藷是也。マタ大太郎坊ノ足跡トモ云ヘリ。傳ヘ言フ。コノ大人一マタギニ大串村ヨリ海邊ニ至リテ貝ヲ採レリト。美濃古蹟考ニ、石津郡大淸水兜村ノ近キニ大平（タタヒラ）法師足跡トテ足蹤アリト里人戲談ス。此法師近江湖水一跨ニ跨ギ踰エタリトアルモ似タルコトナリ。○六行。標 中山信名云。茨城里ハ今茨城郡小原村ニテ卽古那珂郡ノ地ナリ。小原ハ茨城郡ノ西ノ極ニアリ。晡時臥之山ハ今俗ニアサボウト云フモ晡時マデ臥テ居ル人ヲアサネボウト云フ意ノ如シ。小原ノ北ニ牛伏村アルモ訓相似タリ。晡時臥ハ式内ノ藤内神社ナリ。藤内今ハ又牛伏ト云フ。石川久徵ガ云。藤内ハ今ノ牛伏村ナルベシ。南ニパラ山ト呼ブ山アルヲ是古茨城ノ山ナレバナリ。又牛伏北ニ三ケ野村アル飛野村ナルベシト云ヘリ。寬按。コノ說此故事ニツキテ由アルニ似タレド藤内神社ナリト云フコトイカガアラン。余別ニ說アリ。

【二三ウ】八行。標 中山信名云。栗河ハ那珂川ノコトナリ。栗河ト云ヒシコトハ水源ハ下野國ヨリ本國ニ入リ、南岸ハ悉ク本郡ノ阿波郡ニツキタルヲ以テ常國ニテ水源ノ名ヲトレルナリ。又河内ノ郷、今ノ上河内、中河内村ナリ。鹿島久壽二年神領目錄ニ、モト上中下ノ三村アリ。今ハ下村廢ス。栗河ハ那珂川ノ一名ナリ。コノ驛ハ那珂川ノ南ニアレバ臨栗河云云トカケルナリ。其驛長ノ居宅ハ長者屋敷ナリ。俗傳一守長者ト云フ渡村ハ古ノ河内郷ノ屬邑ナレバナリ。那珂ノ郡家ハ今ノ茨城郡ナル河和田村ナリ。渡村上中河内皆其東北ニアリ。風土記ノ文ト吻合ス。上古ハ栗河ハ驛家ノ下ニツキテ流レシト見ユ。今ハ長者宅ヨリ東北ノ地ハ圷ト云フ田畠トナレリ。故ニ本近栗河ト

モカケルナリ。〇挟字云云 ■コノ疾栗河ノ說從フベキカ、イカニトナレバ挟栗河ト云フトキハ河ノ東西ニ驛家ヲ置キシ如クキコユレバナリ。又疾栗河トスルトキハ而ノ字妥帖ナラザルニ似タリ。又案ニ字書ニ挟帶也、挾也、又齊語注在挾田挟トアリ。然ラバ挟栗河トハ栗河ノ流ヲ腋ニ帶ビテ驛家ヲ河内鄕ニオケルトノコトナルベシ。然ルニ信名ガ古本ニ疾ノ字ハ誤リトシテ私ニ臨字ニ改テ說ヲナセルハ信ガタシ。【二四オ】四行。■和名鈔久慈郡ニ鄕廿一アリ。岡田、八部、倭文、高日（〇月ノ誤カ）助川、美和、志萬、眞野、神前、久米、大田、山田、河内、楊島、世矢、佐竹、高市、木前、佐野、薩都、餘戸、是ナリ。【二四ウ】一行。■谷會山ハ今棚谷村ノ山ニテ河内鄕ノ屬ナルベシ。池ハ未ダ其處ヲ知ラズ。〇三行。■與清按。■本今昔物語猿ノナクサマヲ云ヒテキキメク、カガメクナド云ヒ、萬葉ニ筑波根ニカガナク鷲トモヨメリ。カガ、キキ、ココ何レモ通音ナリ。〇同。五行。■青紺ハ顚倒カ。和名鈔金青。更級日記ニこんじやう云云トアリ。〇同。八行。■寛按。靜神社祭神ハ倭文神建葉槌命ニシテ日本紀葛疏建葉涓命在常陸出倭文地故呼爲倭文神トアル卽靜里織ニテ、ココニ所謂綾ハ卽倭文ヲ云ヘリ。サテ天手力雄ハ大同中ニ配享セル神ナリ。〇同行。■上古之時ノ下舊印本未識ノ二字アレド加賀本ニナキゾ宜キ。故ニ之ヲ削リツ。【二五オ】二行。■舊印本火下一字ヲ空ク。加賀本火々ニ作ル。重點衍ナリ、今之ヲ訂ス。（〇火續トセリ）〇四行。■小田里ハ山田ノ訛リ。　和名鈔山田鄕是ニテ、今松平村山田入ト云フ所鄕名ノ遺ナリ。　村南ニ山田川アリ。　〇六行。■石門ハ今岩手村飯野文書建武三年佐竹義篤ト廣橋經泰、　小田治久二將久慈東郡岩手河原ニ戰フトアル所ナリ。山田川ノ南岸ニテ久米村ヨリハ西ニアタレリ。大伴ハ今其名ヲ失フ。土色黄トイフニヨラバ其近邑ナル赤土村ナルベシ。〇八行。絙波、信友云。皷波ニハアラザルカ。皷ハ鼓ノ古字ナリ。【二五ウ】五行。長幡部之社の頭註に續けて ■コハ伊勢度會神主ノ祖大若子命ノ一名ニテ此ニ由ナキヲ、カク云ヘルハイミジキ誤ナリ。〇七行。■日女、加賀本、與淸本本（〇本衍カ）共ニ日安トアリ。綺ハ和名鈔加无波太似レ

錦而薄者トアリ。神服ノ義ナルベシ。垂仁紀ニ綺戸邊仁德紀幡梭皇女ナドアリ。日安ハ梭安ニテ著織由ノ名ナルベシ。○同行。■按ニ神……誤也トアレド、加賀本ニモ折トアル、辨(ワキマヘ)ガタキニ似タリ。考フベシ。釋日本紀所レ引日向風土記曰瓊瓊杵尊天降於日向之高千穗二上峰一云云。【二六オ】三行。■内幡ハ栽繞ヲ俟タズシテ識リシママニテ衣裳トナル者ナレバ全服ノ意ナルベシ。カカル織機ノ一種アリシナリ。神祇令義解麻績連績麻以織敷和衣以供神明トアルヲ集解ニ敷和者宇都波多也トアルモコレナルベシ ○四行。■屋原ノ原ヲ加賀本扇ニ作ル。○同行。■カラスバタト云フ、イカガ。信友云、烏織クロオリト訓ムベシ。クラオリノ訛言。【二六ウ】一行。■按今多賀郡……十一日還見。コノ說誤レリ。神峰山ニアラズ。今世ニ入四間山ト云フガ卽古ノ加毘禮ノ高峰ナリ。余ガ常陸式内神社考ニ證ヲ擧テ記シオケリ。○二行。按加賀本、立速男命トアリテ日字ナシ。【二七オ】五行。■密筑里ハ和名鈔高月鄕ニ作ル。高ハ密ノ誤リ、今ノ水木村是ナリ。【二七ウ】二行。■寛按。遇鹿ヲ會瀨ナラムト思ヒテ改メタルハ古ヲ考ヘザルノ誤ナリ。是義公ノ御後ナレバ風土記ニ徴スルコトヲモ忘レシニヤアラム。○五行。■鮭腿……寛按。腿トアルハ非ナリ。今加賀本ニ據テ訂セリ。○鮭ハスケト訓ム。栗河春村曰。新撰字鏡、類聚名義鈔共ニ鮭ヲ佐介トアリ。名義鈔マタ鮭ヲノセテ俗作レ鮏非トモミエタリ。鮭祖ハスケノ親ナル由ニテ大ナル物ヲ云ヘリ。中山信名云。魚鳥平家ト云フ草紙ニ軍兵ノ名ニ鮭大介鰭長ト云フガアルモ大鮭ヲ須介ト稱スルナリ。ト云ヒ、元珠ノ說ニ今陸奥南部松前等ノ土人鮭ノ大ナルヲ須介ト稱スト云ヘリ。○七行。■國造本紀曰……所レ都也。出雲臣ハ出雲國造ト同ク、天穗日命ノ裔ナルコト古事記ニ天菩比命之子建比良鳥命此出雲國造无邪志國造云云等之祖トアレバ、高國造ノ祖ト御兄弟ノ筋ニヨリテ誤レルモノカ。高國造ハ古事記ニ天菩比命ノ弟ニテ天津日子根命ノ裔ナリ。其ハ天津日子根命者凡川内國造云云茨木國造道尻岐閇國造云云等之祖也トアルニテ知ルベシ。サテ國造本紀ニヨルニ、高國造道奧菊多國造道口岐閇國造石背國造石城國造ハミナ茨城國造ノ別レニテコノ

同族ナリ。【二八オ】二行。[illegible]即是舊印本是字ナシ。今加賀本ニヨル。(○即是出雲臣とす) 同行。[illegible]和名鈔。多珂郡ニ八鄕アリ。梁津、伴部、高野、多珂、藻島、新居、賀美、道口コレナリ。○同行。[illegible]多珂石城所謂是也。ハ後ニ多珂國ヲ割テ多珂郡ト石城郡トノ出來タルヲ云フ。○四行。[illegible]道前ハ和名鈔鄕名道口是ナリ。今上下相田村ナリ。道口岐閇國ト云フモコノ邊ナルベシ。○七行。[illegible]石城直ハ多珂國造ノ同族ニテ即石城國ニモ關係アリシナルベク、石城評造ハモト石城國造ニテ孝德ノ時ニ石城郡領トナリシモノトミユ。評造ハ評督ニ同ジ。評督ハ天武紀ニ衣評督、那須國造碑評督被賜、太神宮儀式帳評督仕奉ルトアルモミナ郡領ノ事ナルニテ辨フベシ。【二八ウ】二行。飽田村。[辭書]田後(タシリ)、今小木津と相合せ日高村と改む。宮田、滑川の北東なり。又驛路に係る。中山氏、之を以て風土記飽田村と判せられしは、敬服すべきも、延喜式田後驛をも、之に援引せられしは從ひ難し。海濱を佛濱といふ。【二九オ】七行。[illegible]宮本元球云。今伊師濱ノ南川尻村ニ小貝濱ト呼ブ所アリ。種種ノ小貝五色ノ小石多ク、砂モ顆粒麁ニシテ金銀ノ光彩アリ。是碁子濱ナリ。【二九ウ】二行。[illegible]以下略之ノ下ニ加賀本私曰此以後本欠了トアリ。【三〇オ】三行。[illegible]寛云。舊印本遇病故身遇病身ニテ句トセルハ誤レリ。今訓讀ヲ訂セリ。(○遇病(ヤマヒニアヒテミウセヌ)身故。とせり)【三〇ウ】一行。[illegible]和名鈔新治郡……元球云。今茨城郡大鄕戸稻田等ノ地ナリト云ヘリ。兵部式コノ驛ナキハ早ク廢セシナルベシ。○四行。[illegible]和名鈔鹿島郡……元球云。今夏海村松川ト田崎村トノ間大谷ト云フ所アリ。大屋ト同訓ナリ。是御名ノ遺ナルベシ。其地ヨリ出デ田埼ノ東ヲ經、太田村ノ西ニテ涸沼ニ入ル。小流ヲ大谷川ト稱ス。

〔編者追補。この參考の九頁五行〔一五ウ〕の上に〔一五オ〕四行。頭註按屋形野……此地也[illegible]寛按車下駕ヲ脫スルカ。を加ふ。〕

播磨風土記

井上通泰校訂

播磨風土記

解說

續日本紀の元明天皇紀に

和銅六年五月甲子△畿内七道ノ諸國ノ郡鄕ノ名著ニ好字一△其郡內所レ生銀銅彩色草木禽獸魚虫等ノ物具錄ニ色目一及土地ノ沃塉、山川原野ノ名号ノ所レ由又古老相傳ノ舊聞異事載ニ于史籍一言上

とあり。甲子の下に制の字をおとしたるか又は略したるか。此文の前後には丁已制已已制などあり。いづれにしても制の字を補ふべきなり。はやく伴信友の風土記考（比古婆衣巻十三）に此文を引けるには制の字を補へり。信友は又扶桑略記等に據りて其郡內の上に令レ作ニ風土記一の五字を補へるが末に載ニ于史籍一言上とある史籍が即所謂風土記の事なればもし初に令レ作ニ風土記一といはば載ニ于史籍一とは書かじ。又著ニ好

字一は好字ヲ著ケヨと訓み言上は言上セヨと訓むべきなれば其間に風土記ヲ作ラシメとありては文を成さず。然らば續紀の今本のまゝにてよきかと云ふに元來此制は郡鄕の名に好字を著くる事と郡内云々の事を史籍に載せて言上する事と二つの事を命ぜられたるなれば其郡内の上に又といふ字無かるべからず。さて扶桑略記を撿するに又令レ作二風土記一の六字あり。然るに信友は又の字を捨てゝ令作風土記の五字を取れり。今述べし如く令作風土記の五字はあるべきにあらざれば此五字を捨て又といふ字を取りて今本の續紀に補ひ入るべきなり

さて右の制に從ひて諸國より所謂風土記を奉りしなるべきがやうやくうせ果てゝ今日まで傳はれるは常陸、播磨、出雲、肥前、豐後の五國のものに過ぎず。それも多くは完本ならず。爾餘の風土記の壽命はいかがといふに類聚符宣抄第六に（朝野群載にも）

太政官符　五畿七道ノ諸國司應三早速勘二進風土記一事

右如聞。諸國可レ有二風土記ノ文一。今被二左大臣（〇忠平）ノ宣一偁。宜下仰二國宰一令上レ

勘ニ進一レ之。若無ニ國底一探ニ求部內一尋ニ問古老一早速言上者。諸國承知シ依レ宣行レ之

不レ得ニ延廻一。符到奉行。

參議左大辨從四位上兼行讃岐權守源朝臣悅　外從五位下行左大史阿刀宿禰忠行

延長三年十二月十四日

といふ文あり。延長は醍醐天皇の御世なり。されば初の風土記の大部分は夙く壹千年の昔にうせたりしなり

此符にはまさしく風土記といふ名あらはれたり。但いつより風土記といひそめしかは知られず。右の文中の若無國底はモシ國底ニ無クバと訓むべし。國は國衙にて國底は國衙の手許なり。日本紀略延喜十三年正月の下に

前太宰大貳源朝臣不レ赴ニ太宰府一。召ニ位記一不レ毀ニ留官底一

とある官底は太政官の手許にてこゝの國底と相對せり。用明天皇紀なる門底、本風土記託賀ノ郡賀美ノ里の下なる山底も門ノモト、山ノモトなり。此外にも古典に何底

といへる例多し

此延長の官符に從ひて諸國より古き風土記を清書して奉りしもあるべく新に作りて奉りしもあるべく思はるれどその新作の分も今は殘らざる如し。されど播磨風土記の如く此後いづくよりか現れむも知るべからず

然らば五國以外のものは少しも殘らざるかといふに其斷片は釋日本紀、仙覺萬葉抄其他の古典に引用せられて殘り傳はれり。それを博く集めたるが栗田寛博士の古風土記逸文なり

立返りて五國の風土記の成りし時代を說かむに出雲風土記には末に天平五年二月卅日勘造とあり。されば此書は今より一千一百九十四年前に成りしものなり。さて郡の下、村の上をいにしへは里といひ後には鄉といひしなるが出雲風土記に

右件ノ鄉ノ字者依二靈龜元年ノ式一改レ里爲レ鄉

とあり。靈龜元年は天平五年より十八年前なり。然るに常陸播磨二國の記には里とあ

り肥前豐後二國の記には鄕とあり。されば常陸播磨二國の記は靈龜元年以前に成りしものにて肥前豐後二國の記は其以後に成りしものなり

此二國の分は延長新撰のものならむと云へる人あれどなほ奈良朝のものならむ

又播磨風土記揖保郡越部ノ里の下に

別ノ君玉手等ノ遠祖本居ニ川内國泉郡一

といふ文あり。河内國和泉郡等の三郡を割きて和泉ノ監を置かれしは靈龜二年四月なり。されば播磨風土記は靈龜二年四月以前に成りしものなり。否同元年以前に成りし事前に云へる如し

又此記の餝磨郡安相ノ里の下に

本名△沙△部云。後ニ里名ヲ依ニ改レ字二字ニ注一爲ニ安相里一

といへるは仙覺の萬葉抄に

於ニ國郡鄕村等ニ用ニ二字ハ用ニ好字一元明天皇御宇和銅六年被レ召ニ諸國ノ風土記一時事

也。其以前ハ國郡郷村名或一字二字又郷村等ハ眞名假名ニテ或三字四字モアリケル

也。而令レ注二進風土記一之時任二太政官宣下之旨一名定二二字一用二好字一也

とあり又延喜民部式に

凡諸國部內ノ郡里等ノ名並用二二字一必取二嘉名一

とあるにかなへるが、ただ萬葉抄に和銅六年被レ召二諸國風土記一時事也とあるは不審なり。もし此時の制ならば冒頭に揭げたる元明天皇紀の文のうち著二好字一の上に用二二字一を脫したりとせざるべからず。又風土記安相里の下の文のうちに後とあるも穩ならず。前にも云へる如く此風土記は靈龜元年以前に成りしものにてその靈龜元年と和銅六年とは僅に中間一年を隔てたるに過ぎざればもし和銅六年に二字を用ふる事を制せられしならば依二新制一とか從二前年ノ符一とか書かざるべからず。されば二字を用ふる事は夙く和銅六年より前に制せられしならむ

播磨風土記ははやく亡せしものとのみ思はれたりしに嘉永五年即今より七十四年前に

谷森善臣翁が學界に傳へられしなり。即同氏手寫本の奥書に

播磨風土記は既く亡せて今の世には傳はらず。さきつとし三條西殿の文庫に古くより秘藏(ヒメヲサメ)たまへる御書どもの目錄の中にたまたま此書の名を見出てこの六年のほど懇切にねぎまをしつるをやうやうことし三月廿三日ことさらに召れて御手づから借したまはりて寫しとごむべきよし仰あり。いとうれしくよろこばしくてすなはち本のまゝに寫しをへぬ。嘉永五年三月廿九日平種松

とあり。所謂「この六年のほど」の谷森翁の苦心察するに餘あり。原本はいつの世の筆寫なるか知らねど誤脫錯亂頗多し。されど此本の外には其後も古寫本の現れし事なければ極めて貴重なる本なり。敷田年治氏標註本はその奥に

右播磨風土記以二或家ノ古巻一令レ寫レ之。當時出雲豐後之外諸國風土記逸(於二後人ノ擬作一者餘國猶存)。最可二奇珍一矣 寛政八年六月廿六日(同日令二一校一。而所々有二不審一。重以二正本一可レ校者也) 正二位藤原紀光

とあれば別本かと思ふ人もあるべけれど巻首を缺けるを始として三條西本の誤脱は此柳原本にも誤脱となりたれば柳原本は三條西本と同本なり。紀光卿が或家ノ古巻といへるはおそらくは三條西家の本ならむ。さて此柳原本は敷田氏の標註の跋に

此記は安政元年の春京師なる學友ら或家に秘もたるを辛して取出しを予も寫しとりて云々

といへるを見れば谷森翁が三條西家の本を取出でしより後に現れしなるが敷田氏が三條西本との異同を言はざるは不審なり

此記には栗田寛氏の標註と敷田年治氏の標註とあり。前者は跋に文久三年夏とあれど上版せられしは明治三十二年十二月なり。又後者の成りしは跋文によれば安政元年に發見せしより間のなき事と見ゆれど刊行せられしは明治二十年（？）なり

敷田氏標註の版本はいまだ手に入らず。余の一讀せしは阪正臣氏が明治十四年に敷田氏よりその稿本を借りて寫しし本なり

此記に見えたるは賀古（今加古と書く）印南（今インナミと唱ふ）餝磨、揖保（今イボと唱ふ）讃容（今佐用と書きてサヨウと唱ふ）宍禾（今宍粟と書きてシサウと唱ふ）神前（今神崎）託賀（今多可）賀毛（今加東加西二郡に分れたり）美嚢（今ミノと唱ふ）の十郡なり。民部式及和名抄と對照するに彼に有りて此に無きは明石郡と赤穂郡となり。就中明石郡はもと巻頭にありしが次なる賀古郡の初數行と共に亡せしならむ。釋日本紀に播磨國風土記曰として明石ノ驛家駒手ノ御井の文を引けるを見ても、賀古郡鴨波ノ里の下に赤石郡林ノ潮の事をいひて事與二上ノ解一同といへるを見てももと明石郡の記事のありし事は知らる。又赤穂郡は地理より見ても式、抄所載の順序より見ても揖保郡の次、讃容郡の前にあるべきなるが揖保郡の末の文と讃容郡の初の文と共に全きを思へば赤穂郡の記事は此間にありしが全部脱落したるなりとも思はれず。されば赤穂郡の記事無きは

一、此記の成りし時には赤穂郡は揖保讃容二郡の中に屬したりしか

二、又は備前國に屬したりしか

三、此郡の記事は初より無かりしか

以上三樣の推測を下さゞるべからず。然るに揖保郡の十八里一驛家と讃容郡の六里とはよく今の村々と一致し赤穗郡の村々に當つべきもの無し。又和名抄に出でたる赤穗郡の鄕名は一も風土記に見えず。されば赤穗郡はいにしへ揖保讃容二郡の中に屬したりしかといふ疑問は成立せず。次に赤穗郡は海上よりすれば備前との交通たやすく土人の發音も專備前人に近ければ、いにしへ備前國に屬したりしかといふ疑問は理由なき事にはあらねど新撰姓氏錄に

和氣朝臣……神功皇后征二伐新羅一凱旋[歸]明年車駕還レ都。于レ時忍熊別ノ皇子等竊構二逆謀一於二明石堺一備レ兵待レ之。皇后監識シ遣二弟彦王於針間吉備ノ堺一造レ關防レ之。所レ謂和氣ノ關是也

とありて和氣關を針間吉備堺と云ひたれば赤穗郡はおそらくは古くも備前に屬した

りしにあらじ。されば殘る所は「此郡の記事は初より無かりしか」といふ疑問のみ

此記には誤脱錯亂の多きこと前に云へる如くなるが就中錯亂の最甚しきは飾磨郡の記事なり。

一、他郡の記述は地理の順序にかなひたれど本郡の記述のみは然らず。即もし國府の所在地より筆を立てば

伊和、漢部、麻跡、英賀、賀野、萱生、韓室、巨智、枚野、大野、少川、英保、安相、美濃、因達、安師

とすべきを

漢部、萱生、麻跡、英賀、伊和、賀野、韓室、巨智、安相、枚野……

としたり

二、伊和漢部ニ里の記事ニ箇處に分れて出でたり

三、英賀ノ里のニ章誤りて少川ノ里に入れり

四、伊和ノ里のうち手苅ノ丘の一章は昔大汝命之子云々の章より後にあるべきなり

右のうち三と四とは或は傳寫の際に生じたる錯亂なるかも知られざれど一と二とはまさしく起草のまゝなり。されば此郡の文は未清撰を經ざりしものと見るべきなり

前にいひし如く赤穗郡の記事の初より無かりし事と飾磨郡の文のいまだ清撰を經ざりし事とを思へば三條西家に傳はれる此本はおそらくは太政官に奉りしものの寫ならで國衙に殘りしものの寫ならむ。なほ云はば延長の官符に從ひて國庭に殘りしものを奉りし寫ならむ

此書は文躰の全篇一定したると賀古郡の下に明石郡の記事を指して上ノ解ト云へるとを見れば各郡錄上のままならで少くとも國廳にて潤色したるなり

又此書は從來柳原紀光卿の寫したるものと谷森善臣翁の寫したるものとのみ世に行はれて三條西家なる原本は見ることを得ざりしに(少くとも余は明石志に載せたる一葉の模本寫眞によりてのみ三條西家本の風丰を偲びたりしに)今年に入りて古典保存會

より其本の複製を公にせられしは余一人の喜にあらざらむ

前にも云へる如く此書には栗田氏と敷田氏との標註あれど（此外に某氏の書入本、某氏の考ある由なれど未刊本にて見ることを得ず）遺憾ながらなほ研究を要すべき所多多なるが如し。余は昨年四月より本書の新考を作らむとせるが少くとも今一年を費さずば世に問ふことを得ざるべし。玆に日本古典全集の編纂者より本書の訂正本を乞はれしによりて管見に誤脱錯亂と思はるゝ所を訂正して提出したるもの即是なり。讀者此本を見てもしうべなひがたく思はるゝ事あらば余の註釋の出づるを俟ちて批判せられたし。但余の研究の進むに從ひて此本に訂正したるを更に訂正する事もあるべし

大正十五年七月　　井上通泰　識

凡例

△は脫字の符
字の左傍の小さき△は誤字の符
□を以て圍めるは衍字の符なり
（）を以て括せるは原の分註なり
躰裁は必しも原本に從はずして見やすきを主とせり
原本の躰裁は添附したる一葉の寫眞版に就いてうかがふべし
古字俗字略字は今躰正躰に改め誤字も望覽を望賢とせる如き顯著なるものは初より改めたり。かくせるは書籍の性質と活字の使用とに顧みてなり
訓の欄内に書き入れがたきは欄外に記したり。其外言はずして已まれざる事も

播磨風土記

△賀△古△郡

所△以△号△賀△古△者△品△太△天△皇△巡△行△之△時△登△一△丘望覽四方云。△此△立（立此）丘原野甚廣大。而見此丘如鹿兒。故名曰賀古郡。狩之時一鹿走登於此丘鳴。其聲比々。故号日岡。此岡有比禮墓（坐神大御津齒命子伊波都比古命）。所以号褶墓者昔大帶日子命誂印南別孃之時御佩刀之八△咫（握）劍之上△結（緒）爾

品太訓ほむだ

之ハ助字訓ムベカラズ

八握劔訓やつかつるぎ　上緒訓うはを

否ノ下ニ脱文アルベシ

八咫勾△下結緒△爾麻布都鏡繫[時]賀毛郡山直等始祖息長命(一名伊志治)爲媒而誂下行之時到攝津國高瀨之濟請欲度此河。度子紀伊國人小玉申曰。我爲天皇贄人否。爾時勅云。朕公雖然猶度。度子對曰。遂欲度者宜賜度賃。於是即取爲道行儲之弟縵投入舟中。則縵光明炳然滿舟。度子得賃乃度之。故云朕公濟。遂到赤石郡廝御井供進御食。故曰廝御井。爾時印南別孃聞而驚畏之

即遁度於南毗都麻嶋。於是天皇乃到賀古松原而覓訪之。
於是白犬向海長嚨（△吠）。天皇問云。是誰犬乎。須受武良首對
曰。是別嬢所養之犬也。天皇勅云。好告哉。故号告首。
乃天皇知在於此少嶋即欲度。到阿閇津供進御食。故号阿
閇村。又捕江魚爲御坏物。〔故号御坏物〕故号御坏江。又乘
舟之處以楉作樹。△△（從此）津遂度相遇。勅云。此嶋隱愛妻。
仍号南毗都麻。於是御舟與別嬢舟同編合而榧（△渡）。△杪△挾（挾杪）伊志

樹ノ下ニ脫文アルカ

挾杪訓かぢとり

治爾△(賜)名号大中伊志治。還到印南六繼村始成密事。故曰六繼村。勅云。此處浪響鳥聲△(甚)其譁。南遷於高宮△△△△(村造高宮)。故曰高宮村。是時造酒殿之處即号酒屋村造贄殿之處即号贄田村造△(假)宮之處即号館村。又遷於城宮田村仍始成昏也。以後別孃掃床仕奉出雲臣比須良比賣給於息長命。墓有△△(宮在)賀古驛西。有△(年)手別孃薨於此宮。即作墓於日岡而葬之。擧其尸度印南川之時大飄自川下來纏入其尸於川中求△(而)不

以後以下二十一字ハ註文ト認ムベシ

藥者訓くすりはもと

藥者也ノ下ニ脫文アルカ

得。但得匣與褶。即以此二物葬於其墓。故号褶墓。於是天皇戀悲誓云。不食此川之物。由是其川年魚不進御贄。後得御病勅云藥者者藥也。即造宮於賀古松原而還。或人於此堀出冷水。故曰松原御井

○望理里土中大帶日子天皇巡行之時見此村川曲勅云此川之曲甚美哉。故曰望理

○鴨波里土中昔大部造等始祖古理賣耕此之野多種粟。

故曰粟々里

此里有舟引原。昔神前村有荒神。每半留行人之舟。村（於是）

往來之舟悉留印南之大津江上於川頭自賀意理多之谷弘出（引上）

而通出於赤石郡林潮。故曰舟弘原（引）。又事與上解同

○長田里土中　昔大帶日子命幸行別孃之處道邊有長田。

勅云長田哉。故曰長田里

○驛家里土中　由驛家爲名

印南郡

一家云ノ上ニ脱文アルカ

一家云。所以号印南者、穴門豐浦宮御宇天皇與皇后倶欲平筑紫久麻曾國下行之時、御舟宿於印南浦。此時滄海其〔甚〕平、風波和靜。故名曰入印南浪郡。

○大國里土中々。所以号大國者、百姓之家多居此。故曰大國。此里有山。名曰伊保山。所以号伊保者、帶中日子命乎坐於神而、息長帶日女命率石作連〔大〕來而、求讃伎國羽若石也。

大來訓おほく

自彼度賜。未定御廬之時、大來見顯。△故曰美△伊保山。山西有原。名曰池之原。々中有池。故曰池之原。々南有作石。形如屋。長二丈、廣一丈五尺。高亦如之。名号曰大石。傳云。聖徳王御世、弓削大連所造之石也

○六繼里　土中々　所以号六繼里者、已於見△。（見於上）此里有松原生甘茸菆。色似菆花、體如鶚茸菆。十月上旬生、下旬亡。其味甚甘

○益氣里　土中上　所以号宅者、大帶日子命造御宅於此村。故曰

宅村。此里有山。名曰斗形山。以石作斗與平氣。故曰斗形山。有石橋。傳云。上古之時此橋至天、八十人衆上下往來。故曰八十橋

○含藝里（本名瓶落）土中上 所以号瓶落者難波高津御宮△天皇△御世私部弓取等遠祖他田熊千瓶酒着於馬尻求行家地。其瓶落於此村。故曰瓶落

又有酒山。大帶日子天皇御世酒泉涌出。故曰酒山。百姓

比古汝弟誤字アラザルカ

飲者即醉相鬪相亂。故令埋塞。後庚午年有人堀出。于今猶有酒氣

○郡南海中有小島。名曰南毗都麻。志我高穴穗宮御宇天皇御世遣丸部臣等始祖比古汝弟令定國堺。爾時吉備比古吉備比賣二人參迎。於是比古汝弟娶吉備比賣生兒印南別孃。此女端正秀於當時。爾時大帶日古（子）天皇欲娶彼女下幸行之。別孃聞之即香（遁）度件嶋隱居之。故曰南毗都麻

餝磨郡

所以号餝磨者大三間津日子命於此處造屋形而座時有大鹿而鳴之。爾時王勅云牡鹿鳴哉。故号餝磨郡

○漢部里土中上　右稱漢部者讚藝國漢人等到來居於此處。故号漢部

○菅生里土中上　右稱菅生者此處有菅原。故号菅生

○麻跡里土中上　右号麻跡者品太天皇巡行之時勅云見此二者山

者△山能似人眼割下。故号曰割

○英賀里土中上　右稱英賀者伊和大神之子阿賀比古阿賀比賣二神在於此處。故處故因神名以爲里名

○伊和里土中上

船丘、波丘、琴丘、匣丘、箕丘、日△子(女)△逢(道)丘、△花(藤)丘、

稻丘、冑丘、△麻(鹿)丘、犬丘、甕丘、筥丘

右号伊和部者積△磻(紗)郡伊和君等族到來居於此。故号伊和

積紗磻訓
しさは

此一節ハ日苦齊ノ次ニアルベシ

部

所以号手苅丘者近國之神到於此處以手苅草以爲食薦。故号手苅。一云。韓人等始來之時不識用鎌但以手苅稻。故云手苅村(丘)。右十四丘者已詳於上

昔大汝命之子火明命心行甚强。是以父神患之欲遁(遁)棄之。乃到因達神山遣其子汲水未還以前即發船遁(遁)去。於是火明命汲水還來見船發去即大瞋怨。仍起風波追迫其船。

於是父神之船不能進行遂被打破。所以号其處曰波丘。琴落處者即号琴神丘、箱落處者即号箱丘、梳匣落處者即号匣丘、箕落處者仍号箕形丘、甕落處者仍處者仍曰甕丘、稻落處者即号稻牟禮丘、冑落處者即号冑丘、沈石落處者即号沈石丘、綱落處者即号藤丘、鹿落處者即号鹿丘、犬落處者即号犬丘、蠶子落處者即号日女道丘。爾時大汝神謂妻弩都比賣曰。爲遁惡子返遇風波被太辛苦哉。所以

苦齊訓くるしみのわたり

其處号△苦△日膃鹽曰告齊

○賀野里（カヤノ）中ノ上

幣丘（ミテグラノ）

右稱加野者品太天皇巡行之時此處造殿仍張蚊屋。故号加野。山川之名亦與里同

所以稱幣丘者品太天皇到於此處奉幣地祇。故号幣丘

○韓室里（カラムロノ）中ノ中 右稱韓室者韓室首寶等上祖家大富饒造韓

室。故号韓室

○巨智里　土上下

草上村、大立丘

右稱巨智者。巨智等始作屋居此村。故因爲名

所以云草上者。韓人山村等上祖柞巨智賀那請此地而墾田之時。有一聚草。其根尤臭。故号草上

所以稱大立丘者。品太天皇立於此丘見之地形。故号大立丘

（之ハ助字ナリ除キ）

テ見ベシ

山前訓やまのさき

不嚴訓よそはず

阿胡尼訓あこね

○安相里 土中々

長畝川

右所以稱安相里者、品太天皇從但馬巡△（行）之時、△△△△△△（御蔭墮於山前）緣道不△撤（嚴）御△刷（冠）。故号陰山前。仍國造豐忍別命被象△（罪除）名。爾時但馬國造阿△朝（胡）尼、命申給△（救）。依此赦罪。即奉鹽代［鹽］田廿△（五）千代。△（故）有名鹽代田。△（後）飼但馬國朝來人到來居於此處。故号安相里（本名△（阿）沙△（久）部云。）後里名依改字二字注爲安相

里）

所以号長畆川者昔此川生蒋（菅）。于時賀毛郡長畆村[村]人到來苅蒋（菅）。爾時此處石作連等爲奪相闘。仍殺其人即捉棄（投）於此川。故号長畆川

（文）本又阿胡尼命娶英保村女卒於此村。遂造墓葬。以後正骨運持去之云來（爾）

○枚野里

本文以下二十九字ハ註文ト認ムベシ

云爾訓とぞ

新羅訓村、筥岡

右稱枚野者昔爲少野。故号枚野

所以号新羅訓者昔新羅國人來朝之時宿於此村。故号新羅訓（山名亦同）

所以稱筥丘者大汝少日子根命與日女道丘神期會之時日女道丘神於此丘備食物及筥器等具。故号筥丘

○大野里 土中

砥堀

右稱大野者本爲荒野。故号大野。志貴嶋宮御宇天皇之御世村上足嶋等上祖惠多〔志貴〕請此野而居之。乃爲里名。

所以稱砥堀者品太天皇之世神前郡與餝磨郡之堺造大川岸道。是時砥堀出。故号砥堀。于今猶在。

〇少川里（本名　私里）

高瀬村、豐國村、英馬野、射目前、檀坂、多取山、

〔多ハ名ノ誤カ〕

田又利ハ田々利ト書カムニ同ジ

此一節ハ英賀里ノ下ニアルベシ

國ハ誤字カ又ハ國

御竪△（立丘）、伊刀嶋

右号私里△△△（者志貴）嶋宮御宇天皇世私部弓束等祖田又利君鼻留志貴請此處而居之。故号私里。以後庚寅年上△（野）大夫爲宰之時改爲小川里。一云。小川自大野△（里）流來此處。故曰小川

所以稱高瀬者品太天皇登於夢前丘而望見者北方有白色物。△（勅）云彼何物乎即遣舍人上野國麻奈毗古令察之。申

ノ下ニ造ヲオトセルカ

此一節モ亦英賀里ニ屬スベシ

云自高處流落水是也。即号高瀨村

所以号豐國者筑紫豐國之神在於此處。故号豐國村

所以号英馬野者爲品太天皇此野狩時一馬走逸。勅云誰馬乎。

侍從等對云朕御馬也。（△爾時勅云朕馬乎△）即号我馬野。是

時立射日之處即号射日前弓折之處即号檀丘御立之處即号

御立丘。（是時）時是大牝鹿泳海就嶋。故号伊刀嶋

○英保里上中　右稱英保者伊（賀）豫國英保村人到來居於此處。

故号英保村

○美濃里（土中下）

　繼潮

右号美濃者讚伎國彌濃郡人到來居之。故号美濃

所以稱繼潮者昔此國有一死女。爾時筑紫國火君等祖（不知名）到來復生。仍取之。故号繼潮

○因達里（土中々）　右稱因達者息長帶比賣命欲平韓國渡坐之時

坐ハませしトヨムべシまさしめしトイフ意ナリ

坐于御船前伊太代之神在於此處。故因神名以爲里名

○安師里土中々　右稱安師者倭穴无神々戶託仕奉。故号穴師

○漢部里　多志野、阿比野、手沼川

里名詳於上

所以稱多志野者品太天皇巡行之時以鞭指此野勅云彼野者

宜造宅及墾田。故号佐志野。今改号多志野

所以△阿比野者品太天皇從山方幸行之時從臣等從海方△百參

會。故号會野

所以稱手沼川者品太天皇於此川洗御手。故号手沼川（生

年魚有味）

〇貽和里船丘北邊有馬墓池。昔大長谷天皇御世尾治連等

上祖長日子有善婢與△馬。並合之意。於是長日子將死之

（之ハ助字ナリ省キテ讀ムベシ）

時謂其子曰。吾死以後皆葬准吾。即爲之作墓。第一爲長日子墓第二爲婢墓第三爲馬墓。併有三。後上生石大夫爲國司[有]之時筑墓邊池。故因名爲馬墓池

所以稱餝磨御宅者大雀天皇御世遣人喚意伎、出雲、伯耆、因幡、但馬五國造等。是時五國造卽以召使爲水手而向京之。以此爲罪。卽退於播磨國令作田也。此時所作之田卽号意伎田、出雲△、伯耆田、因幡田、但馬田。卽彼田稻

收納之御宅。即号餝磨御宅。又云賀和良久三宅

揖保郡

事明下

○伊刀嶋　諸嶋之總名也。〔昔〕名品太天〔皇〕立射人〔目〕日〔人〕於餝磨〔郡〕射目前爲狩之。於是自我馬野出牝鹿過此阜入於海泳渡於伊刀嶋。爾時翼〔翟〕人等望見相語云。鹿者既到就於彼嶋。故名伊刀嶋

翟人訓いめびと

山々岑々ハ山岑山岑ナリ

阿豆訓あつ

○香山里（本名鹿來墓）上下　所以号鹿來墓者伊和大神占國之時鹿來立於山々。岑々是亦似墓。故号鹿來墓。後至道守臣爲宰之時乃改名爲香山

家內谷　即是香山之谷。形如垣廻。故号家內谷

佐々村　品太天皇巡行之時猴嚙竹葉而遇之。故曰佐々村

豆
阿笠村　伊和大神巡行之時告（苦）其心中熱控絶衣紐。故号阿

豆
笠。一云。昔天有二星落於地化爲石。於此人衆集來談論。

故名阿笠（豆）

飯盛山　讚伎國宇達郡飯神之妾名曰飯盛大刀自。此神度來占此山而居之。故名飯盛山

大鳥山　鵝栖此山。故（名）大鳥山

○栗栖里（土中）　所以名栗栖者難波高津宮天皇勅賜刊栗子若倭部連池子。即將退來殖生此村。故号栗栖。此栗子由本刊後无澁

廻川ハもとほり川トヨムベキカ其下ニ脱文アルベシ

廻川

金箭川　品太天皇巡行之時御苅（狩）金箭落[此]於此川。故号金箭

阿爲山　品太天皇之世紅草生於此山。故号阿爲山。住不知名之鳥。起正月至四月見、五月以後不見。形似鳩色如紺

○越部里（舊名皇子代里）土中々　所以号皇子代者勾宮天皇之世寵人但馬君小津蒙寵賜姓爲皇子代君而造三宅於此村

令仕奉之。故曰△〔皇〕子代村。後至上野大夫結△卅〔卌〕戸之時改号

越部里（一云。自但馬國三宅越來。故号越△〔戸〕口村）

鷁住山　所以号鷁住者昔鷁△住〔多〕△多〔住〕此山。故因爲名

棚坐山　△〔山〕石似棚。故号棚坐山

御橋山　大汝命積俵立橋。山石△〔亦〕似橋。故号御橋山

狹野村　別君玉手等遠祖本居川内國泉郡。因地不便△遷〔遷〕到

此土。仍云。此野雖狹猶可居也。故号狹野

出雲國以下五十四字ヲ今次ナル上岡里ノ下ニ移シツ

出雲國阿菩大神聞大倭國畝火香山耳梨三山相闘此欲諫

止上來之時到於此處乃聞闘止覆其所乘之船而坐之故号

神阜々形似覆

○上岡里（本名神阜△林田里）下土中　所以号神阜者△△△△△△出雲國阿菩大神聞大倭國畝火、香山、耳梨三山相闘此欲諫止上來之時到於此處乃聞闘止覆其所乘之船而坐之。故号神阜。々形似覆△船

宗々我々志ハ宗我志ナリ

△△△菅生山　菅生山邊。故曰菅生。一云。品太天皇巡行之時闢井此岡水甚清寒。於是勅曰。由水清寒吾意宗々我々志。故曰宗我富

殿岡　造殿此岡。故曰殿岡。々生柏

○日下部里土中　因人姓爲名

立野　所以号立野者昔土師努美宿禰往來於出雲國宿於日下部野乃得病死。爾時出雲國人來到連立人衆運傳上川

詳ハ誤字ナラム衍字ニハアラジ

之ハ助字

礫作墓山。故号立野。即号其墓屋爲出雲墓屋

○林田里（本名談奈志）（淡）下土中　所以稱淡奈志者伊和大神占國之時御志植於此處。遂生楡樹。故詳名淡奈志

松尾阜　品太天皇巡行之時於此處日暮。即取此阜松爲之燎。故名尾（松）

鹽阜　惟追（阜）之南有醎（鹹）水。方三丈許。與海相潤卅里許。以礫爲底以草爲邊。與海水同往來。滿時深三寸許。牛馬鹿

等嗜而飯之。故号鹽阜

伊勢野 所以名伊勢野者此野毎在人家不得靜安。於是衣縫猪手、漢人刀良等祖將居此處立社山本敬祭在山岑神伊和大神子伊勢都比古命、伊勢都比賣命矣。自此以後家々靜安遂得成里。卽号伊勢

伊勢川 因神爲名

稲種山 大汝命少日子根命二柱神在於神前郡堲岡里生野

之岑望見此山云。彼山者當置稻種。即遣稻種積於此山。山形亦似稻積。故曰稻積山

○邑智驛家 土中下 品太天皇巡行之時到於此處勅云。吾謂狹地此乃大內之乎。故号大內

冰泳山 惟山東有流井。品太天皇汲其井之水而冰泳之。故号冰泳山

槻折山 品太天皇狩於此山以槻弓射走猪。即折其弓。故

冰山訓ひやま

冰之訓こほらしめき

曰槐折山。此山南有石穴。々中生蒲。故号蒲故号蒲阜。至今不生

○廣山里（舊名握持）所以名都可者石比賣命立於泉里波多爲社而射之。到此處箭盡入地唯出堀許。故号都可村。以後石川王爲總領之時改爲廣山里

○麻打里 昔但馬國人伊頭志君麻良比家居此山。二女夜打麻卽麻置於己胷死。故号麻打山。于今居此邊者至夜不

讃伎國ノ下脫文アルベシ

意此川訓おしがは

櫟山ハ誤字カ

打麻矣。俗人云。讃伎國

意比川　品太天皇之世出雲御蔭大神坐於枚方里神尾山每

遮行人半死半生。爾時伯耆人小保弖、因幡人布久漏、出

雲人都伎也三人相憂申於朝庭。於是遣額田部連久等々令

禱。于時佐屋形於屋形田作酒屋於佐々山而祭之。宴遊甚

樂。即櫟山柏挂帶捶衽下於此川相壓。故号壓川

○枚方里土中上　所以名枚方者河內國茨田郡枚方里漢人來到

始居此村。故曰枚方里

佐比岡　所以名佐比者出雲之大神在於神尾山。此神出雲國人經過此處者十人之中留五人五人之中留三人。故出雲國人等作佐比祭於此岡遂不和受。所以然者比古神先來比賣神後來。此男神不能鎭而行去之。所以女神怨怒也。然後河內國茨田郡枚方里漢人來至居此山邊而敬祭之僅得和鎭。因此神在名曰神尾山。又作佐比祭處即号佐比岡

五々人々八五人五人ナリ

鎭ハ俟ノ誤カ

佐岡　所以名佐岡者、難波高津宮天皇之世、召筑紫田部令墾此地之時、常以五月集聚此岡飲酒宴樂。故曰佐岡

大見山　所以名大見者、品太天皇登此山嶺、望覽四方。故曰大見。御立之處有盤石。高三尺許、長三丈許、廣二丈許。其石面往々有窪跡。此名曰御沓及御杖之處

盤磐通用

三前山　此山前有三。故曰三前山

御立阜　品太天皇登於此阜覽國。故曰御立岡

魚戸津
なべつ訓

○大家里（舊名大宮里）土中上 品太天皇巡行之時營宮此村。故曰大宮。後至田中大夫爲宰之時改大宅里

大法山（今名勝部岡） 品太天皇於此山宣大法。故曰大法山。今所以号勝部者小治田河原天皇之世遣大倭千代勝部等令墾田。卽居此山邊。故号勝部岡

上筥岡、下筥岡、△黑戸津、朸田 宇治天皇之世宇治連等遠祖兄太加奈△、弟太加奈志二人請大田村與冨等地墾田

蒋ノ上半蝕セリ將ノ字ナラム

△蒋來時厮人以杤荷食具等物。於是杤折荷落。所以奈閇落處卽号黑戸津、前筥落處卽名上筥岡、後筥落處卽日下筥岡、荷杤落處卽曰杤田

〇大田里上中所以稱大田者昔吳勝從韓國度來、始到於紀伊國名草郡大田村。其後分來移到於攝津國三嶋賀美郡大田村其△又遷來於揖保郡大田村。△是本紀伊國大田以爲名也

慇懃訓ゆめ

言擧阜　右所以稱言擧阜者大帶日賣命之時行軍之日御於此阜而敎令軍中日。此御軍者慇懃勿爲言擧。故号曰言擧前

鼓山　昔額田部連伊勢與神人腹太文相鬪之時打鳴鼓而鬪之。故号曰鼓山（山谷生檀）

○石海里（土上中）　右所以稱石海者難波長柄豐前天皇之世是里中有百便之野生百枝之稻。即阿曇連百足仍取其稻獻之。

爾時天皇勅曰。宜墾此野作田。乃遣阿曇連太牟召石海人夫令墾之。故野名曰百便、村号石海也

酒井野　右所以稱酒井者品太天皇之世造宮於大宅里闢井。此野造立酒殿。故号酒井野

宇須伎津　右所以名宇須伎者大帶日賣命將平韓國度行之時御船宿於宇[伎]頭川之泊。自此泊度行於伊都之時忽遭逆風不得進行。仍而從船越々御々船々猶亦不得進。乃追發

從船越云越越御船云ハ從船

御船猶亦不得進ト書キタラムニ同ジ

僞負上云々訓おのがおへる子をおひあげむとして

百姓令引御船。於是有一女人爲△資〔負〕上己之△莫〔負〕子而墮於江。

故号宇須伎（新辭伊△波〔須〕須久）

宇頭川　所以△〔名〕宇頭川者宇須伎津西方有絞水之淵。故号

宇頭川。即是大帶日賣命宿船之泊

伊都村　所以稱伊都者御船水手等云。何時將到於此所見

△〔土〕之乎。故曰伊都

雀嶋　所以号雀嶋者雀多聚於此嶋。△〔故〕曰雀嶋（不生草木）

○浦上里土中上　右所以号浦上者。昔阿曇連百足等。先居難波浦上。後遷來於此浦上。故因曰本居爲名

御津　息長帶日賣命。宿御船之泊。故号御津

室原泊　所以号室者。此泊防風如室。故因爲名

白貝浦　昔在白貝。故因爲名

○家嶋　人民作家而居之。故号家嶋（生竹、黑葛等）

神嶋伊刀嶋等　所以稱神嶋者。此嶋西邊在石神。形似佛

所流訓ながされし

像。故因爲名。此神顏有五色之玉。又胷有流涙是亦五色。所以泣者品太天皇之世新羅之客來朝。仍見此神之奇偉以爲非常之珍玉屠其面色上堀其一瞳。神由泣。於是大怒即起暴風打破客船漂沒於高嶋之南濱人悉死亡。乃埋其濱。故号曰韓濱。于今過其處者愼心固戒不言韓人并不拘盲事

韓荷嶋　韓人破船所流漂之物漂就於此嶋。故号韓荷嶋

高嶋　高勝於當處嶋等。故号高嶋

萩原訓はりはら

○荻原里（土中） 右所以名荻原者息長帶日賣命韓國還上之時御船宿於此村一夜之間生荻根。高一丈許。仍名荻原。即闢御井。故云針間井。其處不墾。又墫水溢成井。故号韓清水。其水朝汲不出朝。爾造酒殿。故云酒田。舟傾乾。故云傾田。舂米女等陰陪從婚斷。故云陰絶田。仍荻多榮故云荻原也。爾祭神少足命坐

萩原ハ桑村ノ誤カ

鈴喫岡　所以号鈴喫者品太天皇之世田於此岡鷹鈴墮落

之八助字

求而不得。故号鈴喫岡

○少宅里（本名漢口里）土下中 所以号漢部者漢人居之此村。故以爲名。所以後改曰少宅者川原若侠祖父娶少宅秦公之女即号其家少宅。後若侠之孫智麻呂任爲里長。由是庚寅年爲少宅里

細螺川 所以稱細螺川者百姓爲田闕溝細螺多在此溝。後終爲川。故曰細螺川

○揖保里（土中）所以稱粒者此里依於粒山。故因山爲名

粒丘　所以号粒丘者天日槍命從韓國度來到於宇頭川底而乞宿處於葦原志許乎命曰。汝爲國主。欲得吾所宿之處。志擧乎命即許海中。爾時客神以劒攪海水而居之。主神即畏客神之盛行而先欲占國巡上到於粒丘而湌之。於此自口落粒。故号粒丘。其丘小石皆比能似粒。又以杖刺地。即從杖處寒泉涌出遂通南北。北寒南温（生白朮）

妹神訓せがみ

神山　此山在石神。故号神山（生椎子。八月熟）

〇出水里　此村出寒泉。故因泉爲名

美奈志川　所以号美奈志川者、伊和大神子石龍比古命與妹石龍賣命二神相競川水。妹神欲流於北方越部村、妹神欲流於南方泉村。爾時妹神蹈[尒]山岑而流下之。妹神見之以爲非理即以指櫛寒其流水而從岑邊闢溝流於泉村格。爾妹神復到泉底之川流奪而將流於西方桑原村。於是妹神遂

密樋訓したび

不許之而作密樋流出於泉村之田頭。由是川水絶而不流。

故号无水川

○桑原里（舊名倉見里）土中上　品太天皇御立於欟折山覽之時森然所見倉。故名倉見村。今改名爲桑原。一云。桑原村主等盗讃容郡人桉見將來。其主認來見於此村。故曰

桉見

琴坂

所以号琴坂者大帯比古天皇之世出雲國人息於此

坂。有一老父與女子倶作坂本之田。於是出雲人欲使感其女乃彈琴令聞。故号琴坂。此處有飼（銅）刃（牙）石。形似雙六之綵

讃容郡

所以云讃容者大神妹妋二柱各競占國之時妹玉津日女命捕臥生鹿割其腹而種稻其血。仍一夜之間生苗。即令取殖。爾大神勅云。汝妹者五月夜殖哉。即去（云彼）他處号五月夜郡神名贊用都比賣命。今有讃容町田也

鹿放訓かをはなちし

奉獻之初訓たてまつりはじめき

稲狹部云云訓いなさべのおほえこ

即鹿放牧山号鹿庭山。々四面有十二谷。皆有生鐵也。難波豊前於朝庭始進也。見顯人別部犬。其孫等奉獻發之文初

○讃容郡里　事與郡里同　土上中

吉川（本名玉落川）　大神之玉落於此川。故曰玉落。今云吉川者稲狹部子大吉川居於此村。故曰吉川（其山生黄連）

桉見　佐用都比賣命於此山得金桉。故曰山名金肆、川名

桉見

伊師　即是桉見之阿（河）上。川底如床。故曰伊師（其山生精△△（升）麻）

〔精下一字不詳〕

〔散用訓さよ〕

○速湍里土上中　依川湍速△△（為名）。々（速）湍社坐神廣比賣命△故△那（散用）

都比賣△（命）弟

凍野　廣比賣命占此土之時凍氷。故曰凍野、凍谷

〔飡訓をす〕

○邑寶里土中上　彌麻都比古命治井△滄（飡）粮。即云吾占多國。故

曰大村。治井處号御井村

鍫柄川　神日子命之鍫柄令採此山。故其山之川号曰鍫柄川

神日子命或誤字

室原山　屏風如室。故曰室原（生人參、獨活、監〔藍〕膝〔漆〕、升麻、白朮、石灰）

久都野　彌麻都比古命告云。此山踰〔蹶〕者可崩。故曰久都野。後改而云宇努。其邊爲山、中央爲野

○柏原里　由柏多生号爲柏原

筌戸　大神從出雲國來時以嶋村岡爲呉床坐而筌置於此川。故号筌戸也。不入魚而入鹿。此取作鱠食不入口而落於地。故去此處遷他

○中川里　土上下　所以名仲川者苫編首等遠祖大仲子、息長帶日賣命度行於韓國之時船宿淡路石屋之。爾時風雨大起百姓悉濡。于時大中子以苫作屋。天皇勅云。此爲國富。即

賜姓爲苫編首。仍居此處。故川〔号仲川里〕△△△△号仲川里

船引

引船山　近江天皇之世道守臣爲此國之宰造官船於此山令引下。故曰船引。此山住鵲。一云韓國烏。栖枯木之穴春時見、夏不見（生人參、細辛）

昔近江天皇之世有丸部具〔臣〕也。是仲川里人也。此人買取河內國兔寸村人之賚劒也。得劒以後擧家滅亡。然後苦編部犬猪圃彼地之墟土中得此劒。土與△〔劒〕相去廻一尺許。其

兔寸訓不詳

圃ハはたにはるとトヨムベキカ

廼ハ誤字ナラム

此山云云ノ一節ハ靈劔ノ一節ト前後シタルカ

柄朽失而其及不澁光如明鏡。於是犬猪即懷怪心取劔歸家。仍招鍛人令燒其及。爾時此劔屈申如蛇。鍛人大驚不營而止。於是犬猪以爲異劔獻之朝庭。後淨御原朝庭甲申年七月遣曾禰連麿返送本處。于今安置此里御宅

此北山之邊有李五根。至于仲冬其實不落

彌加都岐原　難波高津宮天皇之世伯耆加具漏、因幡邑由胡二人大驕无節以清酒洗手足。於是朝庭以爲過度遣狹井

速佐夜召此二人。爾時佐夜仍悉禁二人之狹（族）赴參之時屢（漬）清水中酷拷之。中有女二人玉纏（經）手足。於是佐夜怪問之。答曰。吾此服部彌蘇連娶因幡國造阿良佐加比賣生子宇奈比賣、久波比賣。爾時佐夜驚之（云）。此是執政大臣之女。即還送之。所（還）送之處即号見置山、所溺之處即号美加都岐原

○雲濃里 土上中 大神之子玉足日子、玉足比賣命生子大石命。

此子稱於父心。故曰有怨

鹽沼村　此村出海水。故△号鹽沼村

宍禾郡

所以名宍禾者伊和大神國作堅了以後堺△山此川谷尾巡行之時大鹿出己舌遇於矢田村。爾勅云。矢彼舌在者。故[故]号宍禾、[鹿]村名号矢田村

○比治里　土中上　所以名比治者難波長柄豐前天皇之世分揖保

郡作宍禾郡之時山部比治任爲里長。依此人名故曰比治

里

宇波良村　葦原志許乎命占國之時勅此地小狹如室戶。故曰表戶。今人云宇波良△△△△△△

比良美村　大神之褶落於此村。故曰褶村。今人云比良美

村

川音村　天日槍命宿於此村勅川音甚高。故曰川音村

糆ハ麹ノ通用ナリかびトヨムベシ

庭音村（本名庭酒） 大神御粮枯而生糆。即令醸酒以獻庭酒而宴之。故曰庭酒村。今人云庭音村

奪谷 葦原志許乎命與天日槍命二神相奪此谷。故曰奪谷。以其相奪之由形如曲葛

稱春岑 大神令春於此岑。故曰稱稻春前（生味栗）。其粳飛到之處即号粳前

○高家里（土中下） 所以名曰高家者天日槍命告云。此村高勝

於他村。故曰高家

都太川　衆人不能得稱

鹽村　處々生鹹水。故曰鹽村。牛馬等嗜而飲之

○柏野里上ノ中　所以名柏野者柏生此野。故曰柏野

伊加奈川　葦原志許乎命與天日槍命占國之時有嘶馬遇於

此川。故曰伊奈加川

土間村　神衣附土上。故曰土間

敷草村　敷草爲神座。故曰敷草。此村有山。南方去十里

許有澤二町許。此澤生菅。作笠最好。生柂（梔）、枌（杉）生鐵住猨

罷栗、黃連、葛（黒）等（生鐵住猨羆）

飯戸阜　占國之神炊於此處。故曰飯戸阜。々形亦似檜、

箕、竈等

○安師里（本名酒加里）上中上　大神喰於此處。故曰須加。

後所以号山守里。（所以）者山部三馬任爲里長。故曰山守。

所以訓そのゆゑは

今改名爲安師者安因師川爲名。其川者因安師比賣神爲名。伊和大神將娶誂之。爾時此神固辭不聽。於是大神大嗔以石塞川源流下於三形之方。故此川少水

此村之山生梔、杉、黑葛等住狼羆

○石作里（本名伊和）中上下 所以名石作者石作首等居於此村。庚午年爲石作里

阿和賀山 伊和大神之妹阿和加比賣命在於此山。故曰阿

和加山

伊加麻川　大神占國之時烏賊在於此川。故曰烏賊間川

○雲箇里（上々下）　大神之妻許乃波奈佐久夜比賣命其形美麗。

故曰宇留加

波加村　占國之時天日槍命先到此處伊和大神後到。於是大神大怪之云。非度先到之乎。故曰波加村。到此處者不洗手足必雨（其山生梔、杉、檀、黒葛、山薑等住狼熊）

非度云云訓さきにいたらむとはからざりしを

黑土志爾葛ハ誤字アルカ

○御方里上ノ上所以号御形者葦原志許乎命與天日槍命到於故黑土志爾嵩各以黑葛三條著足投之。爾時葦原志許乎命之黑葛一條落但馬氣多郡、一條落夜夫郡、一條落此村。故曰三條。天日槍命之黑葛皆落於但馬國。故占但馬伊都志地而居在之。一云。大神爲形見植御杖於此村。故曰御形

大內川、小內川、金內川 大者稱大內、小內者稱小內、生鐵者稱金內。其山生梔、杉林、黑葛等住狼熊

云於云云
訓おわとい
ひてをがみき

於伊和村（本名神酒）大神釀酒此村。故曰神酒村。又云。於和村。大神國作訖以後云於和等於我美岐。故曰於和

神前郡

右所以号神前者伊和大神之子建石敷命在於山使村在於神前山。乃因神在為名。故曰神前村

○堲岡里土下々

生野、大內川川內、湯川、粟鹿川內、波自加村寸

所以号聖岡者昔大汝命與小比古尼命相爭云。擔聖荷而遠行與不下屎而遠行此二事何能爲乎。大汝命曰。我不下屎欲行。小比古尼命曰。我持聖前欲行。如是相爭而行之。逕數日大汝命云。我不能忍行。即坐而下屎之。爾時小比古尼命咲曰。然苦。亦擲其聖於此岡。故号聖岡。又下屎之時小竹彈上其屎行於衣。故号波自賀村。其聖與屎成石于今不亡。一家云。品太天皇巡行之時造宮於此岡勅云。此

土爲聖耳。故曰聖岡

所以号生野者昔此處在荒神半殺往來之人。由此号死野。以後品太天皇勅云。此爲惡名。改爲生野

所以号粟鹿川內者彼自但馬阿相郡粟鹿山流來。故曰粟鹿川內（生椽）

大川內　因大爲名（生檜、枌。又有異俗人卅許口）

湯川　昔湯出此川。故曰湯川（生檜、枌、黑葛。又在異

俗人卅許△口）

○川邊里 土中下

勢賀川、砥川山

此村居於川邊。故号川邊里

所以△号勢賀者品太天皇狩於此川内猪鹿多約出於此處

殺。故曰勢賀

所以云砥川山者彼山△出砥。故曰砥川山

此十一字ハ故日勢賀ノ次ニアルベキカ

至于星出狩殺。故山名星肆

○高岡里 土中々

神前山、奈具佐山

右云高岡者此里有高岡。故号高岡

神前
前神山 與上同

奈具佐山 (生檜) 不知其由

多駝訓ただ

駝
○多馳里 土中下

直訓あたひ

院訓かき

邑曰野、八千軍野、糠岡

所以号多駞（駝）者品太天皇巡行之時大御伴人佐伯部等始祖阿（直）我乃古申欲請此土。爾時天皇勅曰。直請哉。故曰多駞（駝）

所以云邑曰野者阿遲須伎高日古尼命神在於新次社造神宮於此野之時意保和知苅廻爲院（院）。故曰邑曰野

所以云△△△糠岡者伊和大神與天日桙命二神各發軍相戰。爾時大神之軍集而舂稻之。其糠聚爲丘。△△△△（故曰糠岡）。一云掘城

處者品太天皇御（世）俗參度來百濟人等隋有（隨其）俗造城居（之）云。又其簸置粳云（爲）墓。故曰粳岡。又造城處者云城牟禮山。其孫等川邊里三家人夜代等（也）

> 三家人云々誤字アルカ

所以云八千軍者天日桙命軍在（有）八千。故曰八千軍野

○蔭山里 土中下

蔭岡、冑岡

云蔭山者品太天皇御蔭墮於此山。故曰蔭山。又号蔭岡。

爾△△（以鎌）除道及鈍。仍云磨布理許。故云磨布理村
云胄岡者伊與都比古神與宇知賀久牟豐富命相闘之時胄墮
此岡。故曰胄岡

○的部里　土中々

　石坐神山、高野社

右的部等居於此村。故曰的部里

云石坐山者此山戴石。又在△（有）豐穗命神。故曰石坐神山

云高野社者此野高於他野。又在玉依比賣命。故曰高野社

（生椀社）

託賀郡

右所以名託賀者昔在大人常勾行也。自南海到北海自東巡行之時到來此土云。他土卑者常勾伏而行之。此土高者申而行之。高哉。故曰託賀郡。其蹤迹處數々成沼

○賀眉里

他土ノ下ニ天ノ字ヲオトセルカ

蹈訓ふみし

賀眉訓かみ

大海山、荒田村

右由田居川上爲名

所以号大海者昔明石郡大海里人到來居於此山底。故曰大海山。生松

所以号荒田者此處在神名道主日女命、无父而生兒。爲之釀盟酒作田七町七日七夜之間稻成熟。意（爾）乃釀酒集諸神遣其子捧酒而令養（奉）之。於是其子向天目一命而奉之。乃知

爾乃訓すなはち

其父。後荒其田。故号荒田村

○黑田里 土下上

袁布山、支閇岡、大羅野

右以土黑爲名

云袁布山者昔宗形大神奥津嶋比賣命任伊和大神之子到來

此山云。我可産之時訖。故曰袁布山

云支閇丘者宗形大神云。我可産之月盡。故曰支閇丘

云大羅野者昔老夫與老女張羅於袁布中山以捕禽鳥。衆鳥多來負羅飛去落於件野。故曰大羅野

○都麻里 土下上

都多支、比也山、比也野、鈴堀山、伊夜丘、阿富山、高瀬、日前、和爾布多岐、阿多加野

所以号都麻者播磨刀賣與丹波刀賣堺國之時播磨刀賣到於此村汲井水而飡之云此水有味。故曰都麻

冰上訓ひかみ

建石ノ下ニ敗ヲオトセルカ

翟人訓いめびと

云都太岐者昔讚伎日子神誂氷(冰)上刀賣。爾時氷(冰)上刀賣答曰否。日子神猶强而誂之。於是氷(冰)上刀賣怒云。何故(强)吾。即雇建石命以兵相鬪。於是讚伎日子負而還去云我其(甚)怯哉。故曰都(太)岐

云比也山者品太天皇狩於此山。一鹿立於前鳴聲比々。天皇聞之即止翼(翟)人。故山者号比也山、野者号比也野

鈴堀山者品太天皇巡行之時鈴落於此山雖求不得。乃堀土

而求之。故曰鈴堀山

伊夜丘者品太天皇獦犬（名麻奈志漏）與猪走上此岡。天皇見之云射乎。故曰伊夜岡。此犬與猪相鬪死。即作墓葬。故此岡西有犬墓

阿富山者以朸荷宍。故云阿富

云高瀨村者因高川瀨爲名

目前田者天皇獦犬爲猪所打割目。故曰目割

宍訓しし

阿多加野者品太天皇狩於此野。一猪負矢爲阿多岐。故曰阿多賀野

○法太里 上中下

甕坂、花波山

所以号法太者讚伎日子與建石命相鬪之時讚伎日子負而逃去以手匍去。故云匍田

甕坂者讚伎日子逃去之時建石命逐來此坂云。自今以後更

不得入此界。即御冠置此坂。一家云。昔丹波與播磨堺國之時大甕堀埋於此上以爲國境。故曰甕坂

花波山者近江國花波之神在於此山。故因爲名

賀毛郡

所以号賀毛者品太天皇之世於鴨村雙鴨作栖生卵。故曰賀毛郡

○上鴨里上中　下鴨里中中　右二里所以号鴨里者已詳於上。但

後分爲二里。故曰上鴨下鴨。所以品太天皇巡行之時此鴨發飛居於△條（修）布井樹。此時天皇問云。何鳥哉。侍從當麻品遲部君前玉答曰。住於川鴨。勅令射時發一矢中二鳥。即負矢從山岑飛越之處号鴨坂、落斃之處者仍号鴨谷、煮羹之處者△△（仍号）煮坂

下鴨里有碓居谷、箕△（谷）、酒屋谷。△（昔）此大汝命造碓稻舂之處号碓居谷、箕置之處者号箕谷、造酒屋之處者号酒屋谷

修布井訓すふゐ

修布訓すふ

横ハ鹿又ハ柞ヲ誤レルカ

食ハ之三ヲ一字ニ

○條（修）布里（土中）所以号條（修）布者此村在（有）井。一女汲水即被吸沒。故曰号條布（号曰修）

鹿咋山　右所以号鹿咋者品太天皇狩行之時白横咋己舌遇於此山。故曰鹿咋山

品遲部村　右号然者品太天皇之世品遲部等遠祖前玉所賜此地。故号品遲部村

○三重里（土中）所以云三重者昔在（有）一女拔鏑（筍）以布裹食△（之三）重居

誤レルナラム

椋ハ櫃ノ略字ナリ

不能起立。故曰三重

○椅原里 所以号椅原者柞生此村。故曰柞原

伎須美野　右号伎須美野者品太天皇之世大伴連等請此處之時喚國造黒田別而問地狀。爾時對曰。縫衣如藏櫃底。故曰伎須美野

飯盛嵩　右号然者大汝命之御飯盛於此嵩。故曰飯盛嵩

粳岡　右号粳岡者大汝命令舂稻於下鴨村。散粳飛到於

> 不陰訓かげらぬ

此岡。故曰粳岡

有玉野村　所以△△△（号玉野）者意奚袁奚二皇子等坐於坐美嚢郡志深里高宮遣山部小楯誂國造許麻之女根日女命。於是根日女已依命訖。爾時二皇子相辭不娶。于△（逕）日間根日女老長逝。于時皇子等大哀即遣小立勅云。朝△（日）夕日不隱△（陰）之地造墓藏其骨以玉餝墓。故縁此墓号玉丘其村号玉野

○起勢里　土中下

臭江、黑川

右号起勢者巨勢部等居於此村。仍爲里名

臭江　右号臭江者品太天皇之世播磨國之田村君在百八十村君而己村別相鬪。之時天皇勅追聚於此村悉皆斬死。故曰臭江。其血黑流。故号黑川

○山田里　土中下

猪飼野

今訓いまも

右号山田者人居山際。遂由爲里名

猪養野　右号猪飼者難波高津宮御宇　天皇之世日向肥人朝戸君天照大神坐舟於猪持參來進之。可飼所求申。仰仍所賜此處而放飼猪。故曰猪飼野

○端鹿里上下　今在其神右号端鹿者昔神（今有其神）於諸村班菓子至此村不足。故仍云間有哉。故号端鹿。此村至于今山木無菓子（生眞木、梔、杉）

○穗積里（本名鹽野）土下上

小目野

所以△鹽野者△醎水出於此村。故曰鹽野。今号穗積者穗積臣等族居於此村。故号穗積

小目野　右号小目野者品太天皇巡行之時宿於此野仍望覽四方勅云。彼觀者海哉河哉。從臣對曰。此霧也。爾時宣云。大體雖見無小目哉。故△曰△号小目野。於是從臣開井故

云佐々御井又因此野詠歌

宇都久志伎、乎米乃佐々波爾、阿羅禮布理、志毛布留等毛、奈加禮曾禰、袁米乃佐々波

於是從臣開井。故云佐々御井
△△△△△△。△△△△△△

○雲潤里土中々　右号雲潤者丹津日子神法太之川底欲越雲潤之方。云爾之時在於彼村大太水神辭云。吾以宍血佃。故不欲河水。爾時丹津日子云。此神倦堀河事云爾而已。故号

雲彌。今人号雲潤

○河内里土中上　右由川爲名。此里之田不敷草下苗子。所以然者住吉大神上坐之時食於此村。爾從神等人苅置草解散爲坐。爾時草主大患訴於大神。判云。汝田苗者必雖不敷草如敷草生。故其村田今不敷草作苗代

○川合里土中上

腹辟沼

右号川合者端鹿川底與鴨川會村。故号川合里

腹辟沼　右号腹辟者花浪神之妻淡海神爲追已夫到於此處。遂怨瞋妾以刀辟腹沒於此沼。故号腹辟沼。其沼鮒等今无五藏

美嚢郡

所以号美嚢者昔大兄伊射報和氣命堺國之時到志深里許曾社勅云。此土水流甚美哉。故号美嚢郡

勒訓たづな

○志深里 土中 所以号志深者伊射報和氣命御食於此井之時信深貝遊上於御飯筥縁。爾時勅云。此貝者於阿波國和那散我所食之貝哉。故号志深里

於奚袁奚天皇等所以坐於此土者△(御)汝父市邊天皇命所殺於近江國擢綿野之時率旱部連意美而逃來隱於惟村石室。然後意美自知重罪乘馬等切斷其△(勒)觔逐放之。亦△(持)特物桉等盡燒廢之。即經死之。爾二人△(皇)子等隱於彼此迷於東西仍志深

狹鍫訓さぐは手拍訓てうつ

投ハ誤字カシバラク山投ヲやまとトヨマム

村首伊等尾之家所役也。因伊等尾新室之宴而二子等令秉燭。仍令擧詠辭。爾兄弟各相讓。乃弟立詠。其辭曰

多良知志吉備鐵狹鍫持如田打手拍子等吾將爲儛

又詠。其辭曰

淡海者水渟國、倭者青垣山、山投坐市邊之天皇御足末

奴[illegible]良麻

者即諸人等皆畏走出。爾針間國之山部領所遣山部連

少楯相聞相見語云。爲此△(皇)子△(等御)汝母手白髮命晝者不食夜者不寢△(或)有生△(或)有死△(泣)位戀子等。仍參上△(啓)碱如右件。即歎哀△(泣)位還遣少楯召上。仍相見相語[戀]。自此以後更還下造宮於此土而坐之。故有高野宮、少野宮、川村宮、池野宮。又造△(屯)倉之處即号御宅村、造倉之處号御倉尾高野里、坐於祝田社神玉帶志比古大稻△(男)女、玉帶志比賣豐稻女、志深里、坐於三△(坂)坦神八戸挂須御諸命大物主葦原志許△(乎)

命

△國堅以後自天下於三坂岑

○吉川里　所以号吉川者吉川大刀自神在於此。故云吉川里

○枚野里　因體爲名

○高野里　因體爲名

播磨風土記逸文

一（釋日本紀卷八熊野諸手船之下所引）

播磨國風土記曰。明石驛家駒手御井者難波高津宮天皇之御世楠生於吉（此井）朝日蔭淡路嶋夕日蔭大倭嶋根。仍伐其楠造舟其迅如飛一檝去越七浪。仍号速鳥。於是朝夕乘此舟爲供御食汲此井水。一旦不堪御食之時。故爲歌而止。唱曰

住吉之、大倉向而、飛者許曾、速鳥云曰、何速鳥

二（同書卷十一便到新羅時云云之下所引）

播磨國風土記曰。息長帶日女命欲平新羅國下坐之時禱於衆神。爾時國堅大神之子爾保都比賣命著國造石坂比賣命教曰。好治奉我前者我爾出善驗而比比良木八尋桙根底不附國、越賣眉引國、玉匣賀賀益國、苦尻有寶白衾新羅國矣以舟浪而將平賜伏。如此教賜於此出賜赤土。其

薦枕　丹　伏賜

薦枕訓こもまくら

以丹浪以下八字訓

になみもちてことむけたまはむ
艫舳訓ともへ
攪濁訓かきにごして

土塗天之逆桙建神舟之艫舳又染御舟裳及御軍之著衣又攪濁海水渡賜之時底潜魚及高飛鳥等不往來不遮前。如是而平伏新羅已訖還上。乃鎭奉其神於紀伊國管川藤代之峰

播磨風土記正誤

	誤	正
十頁三行	〇郡南海中有小島。	嶋
五十四頁頭書	たてまつりはじめき。	し

【一】□上文明石郡を闕く、但釋日本紀に引ける逸文あり。卷末に附す。是亦上文を闕く、惜むべし。■延喜民部式云、播磨國大、云云、右爲二近國一。倭名鈔、播磨國管十二、田二萬千四百十四町三段十六歩、正公各四十四萬束、本頴百二十二萬束、雜頴三十四萬束、明石、賀古、印南、餝磨、揖保、赤穗、佐用、宍粟、神崎、多可、賀茂、美嚢。□賀古の名義、應神天皇十三年の紀の一書に傳あり、此記と異なり。■按應神紀十三年注。載下號二鹿子水門一之事上、與二此說一異、宜二併考一。□日岡、播州名所巡覽記に、日岡大明神は大野村に在り。氷岡とも書く、と云へり。式に日岡ニ坐天伊佐佐比古神社。■延喜神名式曰。賀古郡一座、小、日岡坐天伊佐佐比古神社。播州名所巡覽記云、日岡大明神在二大野村一。□褶を宍粟郡の條に比良美(ヒラミ)と訓メれど、肥前風土記に用レ褶(ヒレ)振リ招ク因名二褶振峰一とあるに據りてよみつ。□大帶日子命は、景行天皇を申す。■古事記曰。大帶日子淤斯呂和氣天皇、坐二纏向日代宮一治二天下一也、此天皇娶二吉備臣等之祖、若建吉備津日子之女、名針間之伊那毘能大郎女一。景行紀曰、二年春三月戊辰立二播磨稻日大郎姬(イラツメ)一爲二皇后一。一云。稻日ノ稚(ワキ)郎姬(イラツメ)、郎姬此ヲ云二異羅菟咩(イラツメ)一。□印南別孃、景行天皇二年の紀に、立二播磨ノ稻日ノ大郎姬(イラツメ)一爲二皇后(キサキ)一。之の下時ノ字を脫(モラ)し、勾の下玉ノ字を脫せり、例を以て補ふ。又誂を誹に、据を咫に、尺を咫に誤れり。今改めつ。■誂、當レ作レ誂、與二聘問一同。次第二行時字衍、宜レ移二御佩上一。〇八咫劔、當レ作二八握劔一、八咫勾、咫當レ作レ尺、勾下疑脫二珠字一。神代卷曰、八咫鏡、一云眞經津鏡。

【二】□麻布都鏡、神代紀に八咫鏡一名眞經津(マフツ)鏡と有り。堅字を緊に誤れり。〇山直は、姓氏錄に天穗日命十七世ノ孫、日古曾乃巳呂命之後也。■姓氏錄曰、山直……後也。按二國圖一播津八部郡、播磨明石郡之界、有二界川一、又有二公見村一。□媒、新撰字鏡に、奈加太豆、催馬樂に名加比止(ナカヒト)、名義類聚抄に、ナカビ

ト。○度子、和名抄大須本、及萬葉十八に和多理母理。○贄人。催馬樂に、仁戸比止、丹生姫記に大贄人。○朕君上下落字あり。〔補〕崇神紀云。號₂叩頭之處₁曰₂我君₁、據ㇾ此、我君是恭敬之詞。○菅政友云。猶度、猶下疑脫₂不字₁。○播磨國圖、赤石郡、與₂攝津八部郡₁相接。〔補〕貫、日本靈異記に、備貫は知加良豆政乃比春。○茅を弟に、斷を斷に誤れり。賦役令義解に、斷猶ㇾ使也。給₂使波欲₁とあれど、讀みがたければ改めつ。雄略紀に、播磨國御井ノ隈人と有るは此地か。〔補〕斷、當ㇾ作ㇾ斷。延喜主税式、斷丁、訓₂加之波天乃與保呂₁。雄略紀有₂播磨國御井隈₁。【三】〔補〕南毗都麻島は、ナミツマとよむべし。島のシを略くは例なり。此島は印南郡の海中にあり。〔補〕按、南毗、蓋隱謝之義、別嬢避天皇而隱、故云₂南毗都麻₁。〔補〕賀古松原、拾遺集に、かこの島松原越に鳴くたづのあなながなかしきく人なしに。○須受武良ノ首。告ノ首、並に書に見えず。○對は對の省文。(○到の誤) 〔補〕號御坏物故の五字衍れり。削るべし。〔補〕同說。〔補〕樹は和名抄に、土ノ高曰ㇾ臺、有ㇾ屋曰ㇾ樹。字天奈とあれど、新撰字鏡に、阿波良又太奈と注せるによりて樹とよみつ。〔補〕同說。〔補〕國造婆、萬葉七に、住吉波豆麻君之。同四に、愛妻之兒云云。ナミは隱の原語にて、同十六に、隱作雜麻理豆居とあるは延語。同一に己津物隱乃山と有るは轉なり。○南毗都麻、萬葉四に、稻日都麻浦箕乎過と有るに同じきか。同一に、伊奈美とも書けり。續紀廿六に、播磨國賀古郡印南野とあり。〔補〕而字下、恐有₂脫文₁。〔補〕樹は渡の誤なるべし。〔補〕埋字不ㇾ詳。或渡字誤。〔補〕抄挾は下上に改むべし。大中の二字は姓か。〔補〕按倭名鈔、楊氏漢語抄云。柁從可切、和名多以之。船尾也。今按舟人呼₂挾抄₁爲₂舵師₁是。據ㇾ此、抄挾恐倒。【四】舒疑之訛。○迎字衍。○按國圖、印南、飾東二郡之界有₂御宿村₁、蓋古六繼村。〔補〕密事、續紀十に、武郷事止思曰。○其讚の其は甚の誤り。豐後風土記に、鵜人膝甚 讚、天皇勅曰₂大讚₁、古注に阿那美須。〔補〕其恐甚字、豐後風土記、鵜人膝甚讚。(○イトカマビスシと附訓す) 〔補〕酒殿、催馬樂に、佐加止乃波、比呂志末比呂之。西宮記に、酒殿₂有₂別當並預₁、納₂播磨ノ庸米₁造ㇾ酒。○酒殿内膳式に、

諸國所レ貢云云、ヽ收ニ贄殿ニ擬ニ供御ニ。西宮記に、贄殿在ニ內膳中ニ。[illegible]內膳式を引く。囯出雲臣、姓氏錄に、天ノ穗日命五世孫、久志和都命之後也。[illegible]同じ。[illegible]墓有、當レ作ニ墓在ニ、所レ謂褶墓是也。囯賀古驛、兵部式に、播磨國驛馬、賀古四十疋、○大颶、神功紀に、飄風忽チ起リ云云。和名抄に、颶ハ豆無之加世。[illegible]颶、當レ作レ飄。按字書、飄旋風也。倭名鈔云、颶兼名苑云。颶、暴風從レ下而上也。和名豆無之加世。囯求南の南ノ字は誤れるか。姑く字のままによみつ。[illegible]求南、當レ作ニ求而ニ。【五】囯匣の訓萬葉に據る。原本逆に誤れり。(○編云。匣の異躰ならん)古事記弟橘比賣ノ條に、御櫛依ニ于海邊ニ、乃取ニ其櫛ニ作ニ御陵ニ、而治置とあるに似たる傳へなり。景行五十二年ノ紀に、皇后播磨ノ大郎姫薨。囯御腦を御藥と云へるは、扶桑略記延長八年八月有ニ御讓位ノ事ニ、依ニ御藥ノ危ニ。同治曆四年四月御馬十六疋奉ニ諸社ニ、依ニ御藥ノ重キニ也。源氏若菜上に、御くすりの事、猶たひらぎ給はぬにより。[illegible]者藥、恐倒、按者又疑有。○還疑遷。○按國圖、有ニ小松原村ニ。囯冷水、景行紀にサムキミモヒとよみ、催馬樂飛鳥井に、美毛比毛左牟之、美末久左毛與之。[illegible]同じ。囯望をマグとも、マガともよめるは古讀にて、和名抄三河國寶飫郡にも同名の鄉あり。上總國望陀郡をも、マグダとよむべし。國造本紀に、馬來田ノ國造見ゆ。同地なり。[illegible]倭名鈔曰、賀古郡望理鄉。囯鴨波里、和名抄に洩せり。鴨をアハの音に用へるは、肥後國郡名合志を、和名抄に加波之と注せるもおなじ例なり。[illegible]鴨波鄉、和名抄不載。按國圖、有ニ栗津村ニ。囯大部造、姓氏錄に、大部ノ首、贍杵穗ノ命之後とあり。古理賣ノ下、耕ノ字を𦓙に作れり。今改めつ。[illegible]大部造、姓氏錄曰、大伴造、任那國主龍主王孫、佐利王之後也。○𦓙、一本作耕、是也。(○原本𦓙なり)。【六】囯神前村、郡名に神埼あり。是か。𦓙は留の一躰。圡は土の古文なるべし。古書に往往見ゆ。[illegible]按國郡全圖、明石郡明石川傍、有ニ舟上村、林村ニ。○加古川、在ニ印南郡ニ、接レ之有ニ神前村、印南村ニ。○村、當レ作レ於。囯賀意理多、地名ならんとは見ゆれど文字の用法如何が。○林潮は疾潮なるべし。○弘字二所あり。引の誤なり。又事與云云落字あるべし、

とよみがたし。(○弘原本、朳。引の異躰。〔新〕事與二上ノ解一同、とよめり)〔栗〕弘、一本作レ引、可レ從。〔敷〕長田里、和名抄に奈加太と注せり。〔栗〕倭名鈔曰、賀古郡長田(奈加太)郷、按御國帳、今有二長田村一。〔敷〕驛家、和名抄に洩れたり。凡諸國に驛家と云ふ郷名、同書に載せたる其數七十七あれど、總て訓注を脱せれば訓みがたし。神功紀に驛をツマヤダチとよめるは驛館なり。孝徳紀に驛馬をハユマとよめるは早馬の約りなり。今按に和名抄に、驛を無末夜と注し、萬葉十四に、須受我禰乃、波由馬宇馬夜能云云。古今六帖に、あづま路の里の遠さもあらなくに、うまやうまやと君を待つ哉。かかる例を以て、驛家の二字を、姑くウマヤと訓みつ。〔新〕兵部式曰、播磨國驛馬、加古四十疋。按和名抄、不レ載二驛家郷一。【七】〔新〕一家云の上に(印南郡)の三字を補ひて云。印南郡、三字據レ例補レ之。按印南、蓋由二南毗都麻之稱一。然則一家上、恐脱下所三以號二印南一者、已見二於上一十字上。萬葉十三卷、納浪來依濱丹云云。納、說文水相入曰レ納。〔敷〕豐浦宮仲哀天皇二年ノ紀に、興二宮室于穴門一而居之。是謂二穴門豐浦宮一。〔新〕仲哀紀二年二月戊子、幸角鹿云云、卽日定二淡路屯倉一、三月丁卯、天皇巡二狩南國一云云。當二是時一熊襲叛之不二朝貢一、天皇於レ是將レ討二熊襲國一、自二德勒津一發之、浮レ海而幸二穴門一。〔敷〕滄海の下、甚を其に誤り。浪ノ字を落せり。按に海上の穩かなるをイナミと云へるか。其は正しき說を得ざれど、然かよまざれば印南と云ふ據に適はず。〔新〕其平、當レ作二甚平一。〔敷〕印南、和名抄に、伊奈美と注し、原本入浪の浪ノ字を落し、郡名に加へて印南浪に誤れり。今改む。〔新〕印南二字衍。故原文勾レ之也。○倭名鈔曰。印南郡大國(於保久邇)郷。按國帳、今有二大國村一。〔敷〕伊保山古歌に、いほの湊とよめり。卽其わたりの山なり。〔新〕名跡志曰。伊保庄曾根村。○以二(號二伊保一者)帶として云。號二伊保一者、四字例補。〔敷〕帶中日子命は、仲哀天皇を申す。坐二於神一とは殯宮に在を云ふ。萬葉二。弓削皇子薨時の歌に、久方乃天宮爾、神隨神等座者云云。〔新〕乎坐於神、不詳、疑有二脫誤一。又按、坐於神、蓋猶云天皇崩御、而神靈見存、因謂美保山、卽御殯山也。伊保亦廬也。御廬蓋謂二殯殿一也。〔敷〕息長帶日女命

は、神功皇后を申す。〇石作連、姓氏錄に垂仁天皇ノ御世云云。作石棺獻之、仍賜姓ヲ石作ノ大連公ト
類聚國史天長元年十二月詔石作乃山陵ヲ申給フ云云。是は天智紀に、石椁之役とあるにおなじ。[illegible]姓氏錄
曰、石作連、火明命六世孫、建眞利根命之後也。垂仁天皇御世奉爲皇后日葉酢媛命、作石棺獻之。
仍賜姓石作大連公也。〇石作連大來と改めて曰。據下文、來上當塡大字。[illegible]羽若。和名抄に、同（〇
讃岐）國阿野郡、鄕名羽床ハ（波以可）とあれば、若は床の誤りなり。[illegible]同。【七】[illegible]廬、當作廬。[illegible]
大來の大は、人の誤りなるべし。此件脫字多かりと見ゆ。[illegible]顯下恐脫故字。〇按三才圖會云、靜窟
在生石村、祭大己貴少彥名、稱生石子大明神、神殿號石寳殿、其高二丈六尺、經營甚奇。又按、萬葉集有
生石村主靜窟歌、故後人附會石室、爲靜窟耳。據前說所謂美保山地勢與本文不合。因按美保似
當作伊保、然今不輙改、姑從舊文。〇傳云、上恐脫二字。[illegible]弓削大連は、物部守屋大連なり。此公は
用明天皇二年蘇我馬子がために、命を失ひき。爰に聖德王の御世とあるは不審し。彼王の攝政は、推古天皇
元年より後にて、大連の甍に後るる事七年なり。此大石は世に所謂石ノ寳殿にて、是を社傳に大名持少彥名
の神の作らしし狀に云へるは非なり。爰に大石ノ傳を脫せるは惜むべし。〇六繼里、和名抄に洩れたり。
[illegible]同。[illegible]見於、原文作於見、而上字闕、今依本書例訂補。按國圖、餝東郡有御着村與本郡相接。
[illegible]甘菽未ダ考へえず。[illegible]倭名鈔曰、印南郡益氣。高山寺本倭名抄、益氣作呑國。名跡志曰、益氣鄕、今
稱升田。伴信友云、按國圖隣郡餝東郡有八家蓋此。【九】[illegible]斗形山云云、度量の制既く神化より定まれ
れど爰に斗を製らしめ給ひしも又久し。〇八十橋、夫木集に、雪ふれば天の羽衣白妙に風さえ渡る八十の
岩はし。神社考に、播磨風土記云、八十橋者陰陽二神及八十二神之降迹也とあれど、逸文の躰に似ず。今
升田村と云ふに、八十橋の跡なりとて、八十許ノ橋に似たる岩ありと云へり。[illegible]播磨名跡志曰、印南郡八十
岩橋、在平庄益田村、自麓至岑、皆天然之石階也。又有八十川原、卽加古川水區。[illegible]含藝里はカムキ

とよむべし。今同郡に神吉と書ける地あり。[illegible]含藝、一本含藝、瓶落一本作瓶落、並可從。（○原本旁、通）○倭名鈔曰、印南郡含藝。按御國帳、今有神木村。蓋此名跡志曰、神木庄神木村、含藝瓶落、一壁之轉。匡難波高津宮は、仁德天皇の御世なり。[illegible]御宮、御字衍、據下文例、宮下脫天皇二字。匡私部をキサイベと訓めるは音便なり。此訓義を委く云ふべけれど所挾ければ注しえず。敏達天皇六年紀に、詔置日祀部私部。局取は名なりと聞ゆれどよみえず。他田は姓氏錄に、膳臣同祖、大彥命之後也とあり。[illegible]私部局取、不詳。按、下小川里條、有私部弓束、可併考。○姓氏錄曰、他田膳臣同祖、又膳臣云云、大彥命之後也。○酒、舊作消、今從一本。【一〇】匡庚午は何年を云へりけん詳ならねど、疑ふらくは天智天皇九年を云へるか。[illegible]名跡志云、此郡海中有小島、號南島、又前島中山或云褒島、又稱印南島。匡志我高穴穗宮は、成務天皇の朝。○丸部臣姓氏錄に、彥姥津命五命孫と有り。姥津命は孝昭天皇の御末なり。此氏人の此國に在しし事は、三代實錄貞觀二年十二月、播磨國音博士正八位上和邇部臣宅繼、同六年八月播磨國餝磨郡人、[illegible]醫師正八位上和邇部臣宅貞など見えたるは比古汝弟の後なるべし。○令宗國撰、成務天皇五年紀に隔山河而分國縣、隨阡陌以定邑里。[illegible]同。匡吉備比古云云。古事記に、天皇娶吉備臣之祖若建吉備津日子之女、名針間之伊那毘能大郎女とある吉備津日子は孝靈天皇の御子なり。[illegible]丸部、當作吉備。日本紀曰、崇神天皇十年、吉備津彥遣西海道。古事記孝靈段、亦載此事曰、大吉備津日子命與若建吉備津日子命二柱相副、而於針間氷河之間、居忌瓮、而針間爲道口、以言向吉備也。景行段云。吉備臣等之祖若建吉備津日子之女、名針間之伊那毘能大郎女、云云。伊那毘大郎女之弟伊那毘能若郎女、出此參攷本文、比古汝弟、即爲若建吉備津日子命名矣。唯未詳比古汝弟之訓爲何耳。然此王之兄有日子刺肩別比古伊佐勢理日子寤間等之稱、則比古汝弟、恐當作比古汝茅、今不可得詳、附以備攷。又按吉備都彥裔孫、世居賀古郡印南野、事見於天平神護元年五月庚戌紀、可併考。匡通度の上な

る著ノ字は衍れり。件は摩訶壇嚢抄にクダリとよめれど、上ノ件となくては然はよみがたし。クダンは件の音便讀なり。■ 即者著、者字衍、著即邇字缺畫。【一一】囮 大三間津日子命は御眞津日子訶惠志泥命を申すか。然らば孝昭天皇の御事なり。此天皇を王と記せるは未ダ御位に即き賜はざりし以前なるべし。■ 按大三間津日子命、此宅無レ所レ考。下又讃容郡邑寶里條、有二彌麻都比古命一。延喜式阿波國名方郡、有二御間津比古神社一。國造本紀長國造條、有二觀松彦色止命一。然日本紀載二孝昭天皇御名一曰二觀松彦香殖稲天皇一。本文云大三間津日子命、又云王勅、據レ此大三間津日子、即孝昭天皇也。○壯、當レ作レ牡。○倭名鈔曰、餝磨郡國府、按國圖、餝磨今分爲二餝東餝西二郡一。御圖帳曰、餝東郡餝萬津村。○囮 漢部里、和名抄に洩れたり。同抄讃岐國郡名阿野を綾と注し、欽明天皇元年ノ紀に召二集秦人漢人等諸蕃投者一、安二置國郡一、編二貫戸籍一云云。○菅生里、和名抄に須加布と注せり。菅原もスガフとよまんか。萬葉十一に苧原之下草また三苑原之、又室原乃毛桃などあり。是は原をフとよめる例なり。然れど姑ク普通の訓に從ふ。古事記に多知迦阿禮那牟、阿多良須賀波良。囮 麻跡里、和名抄に洩れたり。訓義は目割にて、古事記に見二其大久米ノ命黥利目一而云云。履中紀に黥皆未レ差。■ 山者、舊作二著山一、今從二一本一。【一二】囮 英賀里、和名抄に安加。○■ 上英、舊作レ莫、下英作レ莫、今據二倭名鈔一訂レ之。囮 伊和大神は、宍粟郡ノ條に注ス阿賀比古云云。三代實錄元慶五年五月五日播磨國正六位上英賀彦神、英賀姫神並授二從五位下一。此二神、式に洩レて世に知る人なし。寛延二年刻の輿地を見るに餝西郡の川尻に添ひ中濱山崎と云フに夾リてアガと云ふ地あり。是れ英賀なるべし。此邊リを遍ク捜リなば舊祠も顯れ出づべし。■ 此處下、舊有二敵處二字一、今從二一本一削。○日本紀、仁德帝四十年有二播磨佐伯直阿俄能古一。三代實錄、元慶五年、播磨國英賀彦神英賀姫神、並敍二從五位下一。○倭名鈔云、餝磨郡、伊和。囮 船丘以下十四丘に足らず、沉石丘を加ふべし。又船丘の傳を闕キたり。手苅丘、神名式に高岳神社あり。印本にタカミクラと訓めれど此手苅丘の略にはあらじか。■ 菝、據二下文一、當レ作レ蔭。○日女

字一。【一五】日■日告、二日舊作レ日、今訂レ之。■■■、仁徳紀に■■始報破利摩波都■智云云、ミカもイカも相通ひ同義なり。■仁徳十六年紀、播摩國造祖速待歌云……猶レ云二慈濤一。■告濟は辛苦によりて、負せたる名なめれば苦濟の誤なるべし。■濟、恐濟。■賀野、和名抄に洩れたり。蚊屋は、大神宮式内宮儀式帳等に記せる外は古書に見えざりしを、既應神の御世に、此物のありしを以て其久しきを見るべし。■按國圖、飾西郡北有二賀■山■田村一。名跡志云、■田村、屬二賀屋鄉一。○蚊屋、按太神宮儀式曰、大神正殿裝束六物云云、內蚊屋作二絁四帳一條。○幣、舊作レ弊、今從二一本一訂。按二國圖及名跡志一曰、神木村南有二里村一、村屬二幣庄一。■韓室里、和名抄に辛室に作り、加良牟呂と注せり。■……高山寺本倭名抄曰、辛室今改二安室一、按安室鄉、又見二峰相記、書寫山行幸記一。【一六】■巨智里、原本臣智に作れり。和名抄に巨知は古知とあるによりて改めつ。■……按國圖、飾西郡、有二古知庄村一、姓氏錄曰、已智、秦太子胡亥之後也。巨、舊作レ臣、今從二一本一。○右字下有二脫文一、今塡二稱巨智者四字一。○始下祖字脫、而次行上祖下祚字衍、祚恐祖訛。原在二此行一。據二入于彼一、故今削レ彼補レ此。屋恐衍。■柞臣、按に柞ノ字をば、ハヘソとよめるが常なるに、下條に所三以號二楢原一者、柞生二此村一故曰二柞原一とあるに據ればナラとよむべくおぼゆ。又和名抄備後國御調郡鄉名柞原を美波良と注せれば、柞臣と訓まんか。新撰字鏡に柞を志比と注せり。姓氏錄に志悲ノ連あれど左にも右にも定めがたく、猶よく考ふべし。○草上は鄉名にて、和名抄に久佐乃加三と注し、■續紀卅二に、餝磨郡草上驛戶便田、今依二官符一捨二四天王寺一。■山村下疑脫二忌寸二字一。姓氏錄曰、山村忌寸、已智同祖、古禮公之後也。○延喜兵部式曰、播磨國、驛馬、草上四十疋。峰相記曰、安室鄉、高丘西原草上寺、又昌樂寺巨智大夫延昌之寺也。按國圖、神東郡有二岡加村一。○丘見、舊作レ覓、今從二一本一。【一七】■安相里、和名抄に洩れたり。萬葉十一に、往而見而來戀敷朝香方山越置代宿不勝鳴とあるは此安相にてアサカと淸音によむは非なり。猶古歌多かれど何れも淸濁を誤れり。■延喜神名式、揖保郡、阿宗

神社、今在二飾西郡保之原一、正條川上岡宗村、蓋古安相里此也ヿ。○巡字下脫二行字一、據レ例補レ之。按巡道至二蔭名一、疑有二脫誤一、又按蔭恐衍、劇恐脫誤、冠を原本、劇に誤れれば改めつ。飾磨郡蔭山ノ里條に、御蔭墮二於此山一とあるも御冠なり。祝詞式に天乃美賀秘冠ヿとある秘は既の誤りにてミカゲとよむべし。古事記に伊邪那岐命投二棄御冠一とある御冠に異き說を立つるの非なるを了解すべし。新 蔭疑罪訛。栗 但馬國造、國造本紀に、但遲麻國造ハ志賀ノ高穴穗ノ朝ノ世、竹野君同祖彥坐ノ王五世ノ孫船穗足ノ定二賜國造一。敷 胡、新 作レ朝、今據二下文一訂。○給恐衍。栗 鹽代田、仲哀紀に獻二魚鹽ノ地一とあるにおなじ。廿千代の代は借字にて頃なり。仁德紀に四萬餘頃、天武紀に五十餘萬頃などあり。拾芥抄に七十二步爲二十代一、五十代ヲ爲二一段一。爲弁千首に、十代にもたらぬ庭田の、早苗かな云云。此外五百代など思ふべし。新 鹽代已下十二字、錯誤回讀。按鹽代鹽田四字衍、宜削。廿千代當レ在二有名鹽代田下一、然今不二輒改一、備レ攷。按國圖、飾西郡有二鹽田村鹽山一。栗 朝來、和名抄に但馬國郡名朝來ハ安佐古。新 同。○按沙部、讀云二阿佐胡倍一乎。又按沙部云、恐阿沙古之倒寫。安相、即修二朝來一也。相讀佐胡、如二相摸相樂之相字一、猶行一聲之轉也。按沙部當レ作二阿沙古部一。又按、沙部恐阿。云恐古訛。而沙阿倒置乎。栗 改字二字云云、民部式に諸國部內郡里等名、並用二二字一、必取二嘉名一ヲと有、即和銅六年の格なり。【一八】 生薜の上に落字あり。新 薜、恐苷訛。按字鏡曰、苷蒔也、蒔根阿□奈。○按、蒔作レ提、今訂。○本文已下恐有二脫誤一。栗 阿胡尼命、筑後國內神名帳に、安子臂命。敷 安名鈔曰、飾磨郡英保。(安保) 栗 枚野、和名抄に、平野に作り、比良乃と注せり。新 按國圖御國帳、並有二平野村一、國二飾東郡一、神名式、飾磨郡白國神社、按國圖、飾東郡白國村、有二白國明神社一。【一九】 栗 少野は小野にあらたむべし。○新良訓、式に同郡白國神社、今白國村あり。因二云ヮ 訓をクニとよめる例は、和名抄山城國郡名、乙訓ハ於止久邇とあり、是なり。○少日子根命、神前郡蜺岡ノ里ノ條にも、少比古尼と有ヿ。記には少名毘古とのみあれど、舊事記にも少彥根命と記し、文德實錄八、及古語拾遺等に、

少比古奈とあるは此根の轉じたるなり。■按、少日子根、與二少比古奈一同。少日子根命、見二于舊事記一。又東大寺神名帳、有二大汝少汝之稱一。囯大野里、和名抄に、於保乃と注せり。然ルに前後野をヌとのみ訓めるは古言に據リてなり。是は既ク云ッべきを、所せければ後れつ。今同郡國衙莊の内に、大野鄕あり。■按國圖、飾東郡、有二大野村一。【二〇】囯砥堀の砥は砥の略なり。今土人はトヲリと呼ぶ。■秤、稱古字。○志貫二字、誤在二悪多下一、今削レ彼補レ此。（○志貫嶋宮御宇トス）皇原无、今從二一本一補。囯島宮、此宮號天武紀に屢見えて、大和國高市郡に在リ。萬葉二に、高光我日ノ皇子乃、萬代爾國所知麻之、島ノ宮婆毛。是は天武天皇の皇子、草壁ノ皇子の坐シ給ひし宮にて、此皇子持統天皇三年四月に薨じ給ひしを傷み奉れる歌なり。然ルに爰に、天皇としも稱奉れるは、朱鳥元年に天武天皇崩シ給ひ、翌年を持統元年として、其四年に持統天皇位に卽キ給ひしかば、三年の間は、此皇子皇統を繼ギ給ひし事疑ひなし。然ルを明治の追謚に洩れたるは口をしき業なり。續紀天平寳字二年の詔に、日並知ノ皇子命、天下未レ稱二天皇一宜レ奉レ稱二岡宮天皇一と宣ひ、紹運錄には、長岡ノ天皇と記シ奉れり。日並知皇子とは、此草壁ノ皇子を申す。■按國圖、神東郡有二上下砥堀村一、與二飾東郡一相接。○按國圖、飾東郡姬路ノ城北有二一水一、分流爲レ二、經二城東西一、西者接二砥堀村一、東者接二小川村一、由レ是按レ之、古昔蓋呼二東水一曰二小川一、呼二西水一爲二大川一、亦未レ可レ知、附以備レ考。囯小川里、和名抄に洩れたり。庚寅年は、持統天皇四年に當る。■多取山、三字衍、宜レ削。御取、疑御立訛。【二一】○志貫二字、原文誤在二次行鼻留之下一、今訂之。○私、私字古體。號私里下、疑脫二者字一。○田又利君、又恐當レ作レ作。姓氏錄曰、多多良公御間名國主爾利久牟王之後也、天國排開廣庭天皇（謚欽明）御世、投化獻二金多多利、金乎居等一、天皇譽レ之、賜二多多良公姓一也。○大野、今飾西郡夢埼川西、有二大野村一。○囯夢前、夫木集に、現にはさてもいはずは播磨なる夢前川の流れても逢はむ。三代實錄貞觀十年、閏十二月授二ク播磨國正六位上射目埼ノ神ニ從五位下一。【二二】豐國、此地の事を順覺記に聖德太子豐國と云ふ者に給

ひし領地なりと記せるは非説。■豐肥熊曾等國、上古隷于筑紫島、事見于古事記、書紀神代卷、按國圖、御圖帳、飾東郡有豐國村。按國圖、夢前川傍有阿賀村。■爲品太天皇の爲ノ字は天皇の下に置クべし。■品上者字、例補。■侍從、八雲御抄に、オモトビトと注ッ給へるに從ふ。和名抄に、於毛止比止、萬知岐美とあり。■對云下脱字、今補六字。（○御馬也天皇云）爲字原在上行品字之上、衍、故削彼補此。■立射目云云、萬葉六に、御山者射目立渡。略解に射目は射部にて弓射る人をいふと云へり。■賀茂眞淵云、萬葉八卷、射目立而跡見之岳邊之、卷六、見芳野之飽津之小野笑野上者跡見居置而御山者射目立渡朝獵爾十六履起之、十三卷、高山之峰之手折爾射目立十六待如、據此射目謂射部也、所謂射目之渡、猶云配置射部也。■檀丘、和名抄に檀ハ木名也、萬由三と注せり。檀は弓に作るに好キ木なるゆゑ然呼ビ倣へり。天武紀に檀弓ノ岡とあるは大和國高市郡なるを、諸陵式には眞弓丘に作れり。■按名跡志云、飾西郡木庭山、有檀森、傳云神功皇后屯軍處。○是時、舊作時是、今從一本。○名跡志曰、古記云、青山村夢崎川、昔祭伊流女崎明神。又曰、余部庄青山村、祭射目崎明神。按國圖、青山村夢前川、今屬飾西郡、又有御立村。■伊刀島、原本、伊乃島に作れり。揖保郡伊刀島に徵シて改メつ。伊刀の義下に見えたり。○英保里。和名抄に安母と注せり。今阿保と書けり。○伊豫國は伊賀國の誤リなるべし。和名抄に、同國伊賀郡に、阿保ノ鄕あり。續紀十三に、伊賀國安保ノ頓宮と見え、同卅八に、伊賀國阿保村とも見えたり。■英保、已往於上。【一三】■美濃里、和名抄に洩れたり。讚岐國郡名三野は、同書に美乃と注せり。○火君、古事記に、神八井耳ノ命ハ者、火ノ君大分ノ君等之祖也。肥後風土記に、肥ノ君等ノ祖健緒組とあり。○繼潮とは如何なる義ならん、強ヒて按に、蘇生して嫁するを云へりと聞ゆ。然ど書に見えざれば猶能ク考ふべし。■傍西郡、與神西郡相接。○按下説誤、國圖、御圖帳並有見野村、屬飾東郡、又村南有都麻村、蓋繼潮地。○按繼潮之義不詳、然今俗以潮汐往來占人之死生、蓋有所據也。萬葉集十六有

生死之ニ海乎服見潮干乃山乎之努比鶴鴨、又鯨魚取海哉死爲流山哉死爲流死許曾海者潮干而山者枯爲禮之句可ニ併考一。○復生仍取之上下、恐有ニ誤脫一。○按取、娶古字。圄因達、和名抄に迎達に作れり。迎は印の誤ゥにて辵の加ハりたるなり。圝倭名……高山寺本迎作レ印、可レ從。延喜神名式曰、餝磨郡射楯兵立神社二社。○坐于二字（○坐之時ノ下ニ補入セリ）舊無、今據ニ古事記仲哀段墨江三神云我之御魂坐ニ于船上一之文上補。【二四】○之神已下、原爲ニ分注ニ誤、今訂レ之。圄伊太代神、式に射楯兵主神社二座とあるを、或書に大已貴五十猛の二神を祭ると云へり。英賀筆記に大江山之賊徒追戮之祈願、平均後、正曆二年六月勅授シテ二正一位ヲ一。○安師里、和名抄に、穴無に作り、安奈アナシ之と注せり。式に大和國城上郡穴師兵主神社。圝倭名……御圖帳云、今飾東郡有ニ穴無村一。國圖、作ニ阿成一。安、恐當レ作レ穴。延喜式曰……按新抄格勅符神符部、穴師神五十二戸、播磨卅九戸。圄漢部里、和名抄に洩れたり。此里名既に見えたれば贅文なり。圝行字（○天皇巡の下）例補。○阿比野、國圖、御圖帳、揖東郡有ニ相野村一、與ニ飾西郡一隣。圄鞕は鞭の誤ゥなるべし。手沼川、今土人は手野川に訛れり。次に洗ニ御手ニ故號ニ手沼川一とあるを思ふに沼は洗の誤にはあらじか。圝稱（○所以の下）原本脫、今從ニ一本一。【二五】○海方、原作ニ海旨一。今訂。○按國圖、御圖帳、並有ニ上下手野村一。圄年魚、和名抄に、春生レ夏長シ秋衰へ冬死ス、故名ニ年魚一也。和名安由アユと注せり。年治按に、此アユてふ魚は、年毎に生るゆゑ年魚とは書けるにや。冬を俟たずして秋末に至ッて死ヌるものなり。○胎和里。和名抄に伊和に作れり。此鄕名宍粟郡にも見ゆ。圝里下、疑有ニ脫文一。圄大長谷天皇は後に雄略天皇と申ス。○尾治連、神代紀に天火明ノ命ノ兒。天ノ香山ハ是尾張連等ノ遠祖也とあり。姓氏錄舊事記の傳へ並ニおなじ。○婢ノ字は、書紀及遊仙窟等に依ッて訓つ。【二六】○上生石、よむべきを知らねば、姑ク訓を闕く。○大夫は、上の小川ノ里ノ條に上大夫とあり。越部ノ里ノ條に、上野大夫とあり。公式令に於ニ太政官一ハ三位以上稱ニ大夫ト一、於ニ寮以上一ハ四位以上稱ニ大夫ト一、司及中國以下五位稱ニ大夫ト一。西宮記節會ノ條に、以ニ侍從ヲ一稱ニ大

夫ト、和名抄に、職曰二大夫一、判曰レ頭云云。已上皆加美とあれば、大夫とよみてあるべけれど、當時其國の長官を字音に大夫と云へりしと聞ゆれば、姑ク字音のままに訓ムべし。■上大夫、見二小川條一、上野大夫、見二越部條一。據レ此上生石大夫、疑同人。■國司は天皇の御言を承て、國政を執るゆゑに、ミコトモチと云フ。○大雀天皇は、仁德天皇を申ス。○餝磨御宅は今國衙ノ莊餝万津に、御宅町あり。○意伎出雲云云國造に國造本紀に詳なり。○水手、和名抄大須本に、加古。■神紀に水手曰二鹿子一。蓋始起二于是時一也とあり。○■即（○僞罪ノ下）原作レ御、今訂。○出雲下脫二田字一、今從二一本一。○按國圖、餝東郡餝磨町餝磨津村、村北有二三宅村一。名跡志曰、村屬二餝磨郷一。【二七】○倭名鈔曰、播磨國揖保（伊比保）。按國圖、今分爲二揖東揖西二郡一。■揖保事明レ下とは、粒丘ノ條に傳あるを云へるなるべし。○郡はコホリとよまんは常なれど總てアガタとよむべし。其事委ク云フべけれど、此所に盡キざれば卷末に云フを見るべし。○伊刀島、上の小川里ノ條に、はやく見えたれど、名義は、爰に到二就於彼島一とある到の伊刀に轉じたるなり。■也下、名字衍。○皇字（天ノ下）脫、今從二一本一。○射目人、原作二射人目一、今訂。■翼人は狩人とよむべし。其義は多可郡都麻ノ里ノ條に云フを見よ。■翼人未詳、蓋言二上文所レ謂射目人一耶。【二八】■香山里、和名抄に、加古也萬と注せり。今香山村あり。■按國圖、名跡志、揖東郡有二香山村一。■伊和大神ノ式に宍粟郡伊和坐云云、彼條に注スべし。■式……大名持御魂神社。（名神大）■山山岑岑。仙覺抄に引けるには、山岑に作レり。○道守臣姓氏錄に、開化天皇ノ皇子、豐葉頰別命之後也とあり。■按國圖、香山西北、有二家氏村一。■家內谷。今平野と千本驛との間に在リと云へり。■按國圖、御國帳、揖東郡上下佐佐村、在二香山村東南一。○時下本書字闕損、僅存二犬偏一、疑猿。■阿笠。アッシとよまざれば語をなさず。笠は必誤字なるべし。■阿笠、據レ若二其心中熱一、及二人衆集來等語一、恐當レ作二阿豆一。■二星落云云、續紀卅二に、有レ星隕二南北一各一、其大如レ缶。史記始皇本紀に有二墜星一、下二東郡一、至レ地爲レ石。【二九】○宇達郡、この達を

ダリとよむは古訓なり。和名抄に、讃岐國鵜足、宇多利と注せり。式に同郡飯神社あり、今飯犬神と稱す。祭神詳ならず。奚、字鏡集、色葉字類抄等に據りてよめり。猶應神紀欽明紀等に例あり。〔標〕名跡志曰、揖東郡有二飯盛村一。〔注〕鵝、和名抄に、訓を脱し、類聚名義抄、字鏡集等にノセ、カリ、クヽヒなど注せれど、オホトリの訓なし。雄略紀に身狭（ムサ）ノ村主（スクリ）青、將二呉ノ所レ獻二鵝一、到二於筑紫一云云。鵝鶏同字なり。古事記に内二鵠鵝ノ皮一とあるも、クヽヒの類と見えたれば、大鳥とよむべし。〔標〕名字（〇大島山ノ上）原無、今從二一本一。〔注〕栗栖里、和名抄に、久留須と注せり。刊は刺の譌か。行宗集に、いが栗は心よわくぞ落にけるこの山媛のゑめる顏見て。扨栗栖と云ふ地名の和名抄に多かるも、捴べて京に近き國國に見えたれば是は供御の料に生（オホ）し立てけん地のおのづから地名とはなりしにこそ。〔標〕倭名……栗原作レ粟今從二一本一。按名跡志、龍野領有二栗栖川一。〔注〕若倭部連、姓氏錄に、神魂命七世孫、天箇草命之後也。【三〇】廻川ノ上に落字あり。苅は狩の借字。〔標〕按御圖帳、揖西郡有二金屋村一御苅、蓋御獵之義。〇名跡志曰、揖東郡大市鄕、有二阿爲能村一。〔注〕紅草、和名抄に、紅藍ハ久禮乃阿非。〇紺、孝德紀に、フカキハナダとよめるは義訓なり。字鏡集にフタヱとあるに從ふ。猶國典字徵紺ノ字ノ注に數多其證を引けり。〇越部里、和名抄に、古之倍（コシベ）と注し、兵部式に播磨國驛馬越部五疋とあり。今越部莊と云。〔標〕注里原作レ星、今從二一本一。〇安閑紀曰、二年五月甲寅、置二播磨國越部屯倉一。延喜兵部式曰、播磨國驛馬、越部五疋。十六夜日記、越部庄。〔注〕勾宮、安閑紀に、遷二都于大倭國勾金橋（ノ）一、因爲二宮號一。皇子代は、古事記標注に委く注しおきつ。〇寵人（ハシヒト）は、愛妻（ハシツマ）の例に倣ひてよみつ。姓又名に間人（ハシヒト）とあるもおなじ。〇但馬君は但馬諸助の後なるべし。〇三宅、安閑紀に、置二播磨國越部屯倉（ミヤケ）牛鹿屯倉（ミヤケ）。【三一】結卅戸は戸令に、戸以二五十戸一爲レ里。義解に若滿（シ）二六十戸一者、割二十戸一（ヲ）立二一里一とあり。按此時卅戸餘れる故に一里を立てしにや。〇但馬國三宅、式に丹波國桑田郡三宅神社。年治按、越部は子代の轉訛なるべし。〔標〕皇子代、皇字原脱、今從二一本一。〇注越部、原作二越口一、口蓋ア訛。ア

即部字省、故今訂レ之。〇名跡志曰揖西郡庵村、有二鷲栖山一、至レ今鷲猶栖焉。塵添壒囊鈔、引播州記曰、揖保郡鵤住山アリ、昔鳥多栖二此山一、故云レ爾。多住、原作二住多一、今據二上文一訂。囯鵤、新撰字鏡に、佐支と注せり。〇欄は字書に見えず。和名抄に闌を多奈と注せり。即木扁の加はりたるなるべし。圖山石、山字原脫、今據二下文例一補。〇按國圖、揖東郡有二佐野村一、囯川内國泉郡、續紀靈龜二年春三月割二河内國和泉日根兩郡一令レ供二珍努宮一。夏四月割二大鳥和泉日根三郡一、始置二和泉監一焉。天平十二年八月和泉監并二河内國一焉。天平寶字元年五月和泉國依レ舊分立とあり。未分立せざりし時を云フ。圖按、靈龜二年、割二河内國和泉等郡一。置二和泉監一據レ此。風土記成二靈龜以前一。故云レ爾。囯不便、書紀に、モヤモヤモアラズとよめれどよしなし。漢書文帝紀に省二繇賦一以便レ民とあるに據る。狹野、今佐野村あり。【三二】圖神阜二字(〇出雲ノ上)例補。囯阿菩太神所見なし。萬葉一なる三山爭ひの歌を見るに、大神印南郡迄來坐しを闘止て後仿磨郡英保に止マり給ひけん。今東阿保西阿保と云フ村あり。かかれば地名を以て神名に稱ならひしにや。彼處に後藤大明神と申ス社あり。或阿菩太神を祭れりと云へり。能ク土人に問フべし。〇覆、神代紀に覆槽を、ウケノセと訓めるに從ふ。〇上岡、和名抄に、上岡ハ加無都乎加、闘は關の譌なるべし。宗は宗の古文。古事記に我御心須賀須賀斯。故其地者於レ今云二須賀一也とあり。此に宋ニ我ニと書けるは古文の書法なり。圖名跡志曰、揖東郡有二上岡村一。〇按土中下之下、蓋有二脫誤一。〇名字(〇注本ノ下)例補。【三三】宗我岡、岡舊作レ富、今訂レ之。囯日下部、和名抄に脫因二入姓一と有れば、日下部ニ某と云傳のありけんを失ひしにこそ。〇立野は、今龍野と云へる是なり。圖垂仁紀曰、出雲國有二勇士一曰二野見宿禰一。三十二年條曰、野見宿禰云云、喚二上出雲國之土部壹佰人一、自領二土部等一取レ埴以造二作人馬及種種物形一、獻二于天皇一曰、云云、天皇厚賞二野見宿禰之功一、亦賜二鍛地一、即任二土部職一、因改二本姓一、謂二土部臣一。囯運傳云云、崇神紀百襲姫命の御墓作時に、人民相踵以レ手遞傳而運云云。伊辭務邏塢多誤辭珂固佐廢とあるに似たれば其意以てよみ

たり。【三四】○墓屋今昔物語十九に、嵯峨野ニ大ナル墓屋有リ。其墓屋ニ我レ年來往云云。按に墓は死者のためには屋なれば然云ッめり。○林田、和名抄に波也之多とあり。談は淡の草書より誤れるにや。圖御岡帳曰、揖東郡林田村、神名式、祝田神社、稱ニ林田社一。囲淡奈志八、梨の一種にて味の淡ゆゑ名づくめり。今按に楡は槇の誤リにや。圖波奈志、奈疑夜誤、神名式有ニ林神社一。囲御志上下落字あるべし。圖御心上下、猶よく考ふべし。兵衛式にカラナシとよめり。是は俗にクワリンと云へれば上代淡梨と云ひけん、疑有ニ闕脫一。又按植下當レ補ニ楡字一。○詳字恐衍。囲松尾、今松屋村あり。和名抄に、燎庭火也邇波比とあれど此所は然はよみがたし。軍防令義解に松明とあるに叶ひ、源氏夕顏ノ卷及古歌に、マツとのみもよめれど、姑ク字鏡集、類聚名義抄等にトモシビと注せるに從ふ。圖御國帳曰、揖東郡松尾村。○暮（○日ノ下）舊作レ墓、今從ニ一本一。○松（○此阜ノ下）字舊脫、今從ニ一本一。惟阜原作ニ惟過一、今從ニ一本一。【三五】飲舊作レ飯、今從ニ一本一。囲伊勢野、今龍野より林田へ行く間に然云ッ地名ありとぞ。圖按國圖、揖東郡有ニ上下伊勢村一。○在（○毎ノ下）當レ作レ有。○姓氏錄曰、衣縫、百濟國神靈命之後也。又曰、漢人、漢人黑之後者、不レ見。囲山岑、大祓詞に高山之末短山之末云云。齊明紀に宮材爛矣、山椒埋矣。文選月賦に山頂曰レ椒とあり。○伊和大神は大穴持神なり。此神の御子に然御名の神、紀記をはじめ見えざるは洩れたるなり。伊勢風土記に、伊勢津彦と云ふ神あれど別神。圖比古、原脫ニ比字一、今從ニ一本一。○積（○稻ノ下）原作レ種、今從ニ一本一。御國帳曰、揖東郡伊勢村上伊勢村、……按國圖、揖西郡有ニ稻富村一、按倭名鈔、神埼郡有ニ埴岡鄕一、據レ此壁里間恐脫ニ岡字一。囲大汝命云云、此二神の事神崎郡壁岡里條に傳あり。【三六】邑智、和名抄の鄕名に大市於布知と有は假名違へり。兵部式に播磨國驛馬大市二十疋今欅坂の東に大市と云ふ地あり。圖御國帳曰、揖東郡大市谷村、橫大市村。名跡志曰、大市鄕合野村。囲氷之の氷は冰の誤なるべし。萬葉一に磐床等川之冰凝とあるに依リて訓つ。今龍野の町つゞきに日山あり。圖按氷疑沐（○沐誤植カ）

訛。按國圖、立野西南有二日山一。〔田〕櫃。新撰字鏡に豆支と注し、楔におなじ。三代實錄卅三に、下二符相摸國一。令レ採二進槻弓百枝一など有り。皇后紀に菟區喩彌珥末利椰塢多具陪云云蒱は蒲なり。不生の不は衍字か。大の誤か。　棍村は𡍷に改むべし。下の塩も同じ。■櫃、原作レ椀誤、今據二上文一訂。【三七】故號蒱三字、一本無、可レ從。蒱即蒲之或體。〇倭名鈔曰、揖保郡廣山。按御國帳、揖東郡有二廣山村一。注、揖村原作二揖持一、今從二一本一訂。名跡志曰、廣山庄、按下文出水里有二石龍比古命妹石龍比賣命一、此云二泉里一云云。據レ此、石比賣命、石字下疑脫二龍字一。〔田〕石比賣命、式に伊豆國賀茂郡伊波比咩命神社有り。紹運錄に孝元天皇ノ後葛城國津彥女に、磐姫あるは、イハノヒメと訓みて別なり。宣化天皇の皇女に石姬と申は、イシヒメとよむべし。〇波多爲、地名なるべし。〇搖領。孝德紀にスペヲサと訓み、天武紀にズブルヲサと訓みたれどヲサにて有るべし。■摑舊作レ堀今從二一本一。〔田〕石川王、天武紀に見えたれど、分明詳ならず。〇搖領。孝德紀にスペヲサと訓み、天武紀にズブルヲサと訓みたれどヲサにて有るべし。■按垂仁紀、三年春三月新羅王子天日槍來歸焉、將來物云云、出石小刀一口、出石桙一枝云云、並七物、則藏二于但馬國一。古事記云云、幷八種也、此者伊豆志之八前大神也。倭名鈔、但馬國出石（原本右ニ誤ル）郡出石鄕。神名式、同國出石郡伊豆志坐神社八座、並名神大。【三八】〔栗〕讃伎國云云の六字、爰に用なければ恐らくは衍文ならん。■俗人已下六字、蓋注文、誤混二本文一。〔田〕出雲御蔭ノ神、考へなし。今按に朝庭より額田部氏の人を擇び遣し給ひて神靈を和め奉りしを思へば、御蔭神は天津彥根命の御子、天ノ御影命にぞ坐けん。額田部は其神の御末なればなり。■枚方、枚作レ牧誤、據二下文一訂。〔田〕半死生、筑後風土記に昔此堺上有二麁猛神一、往來人半生半死、其數極多云云。かかる事上代は常多かりき。■半生、原無二半字一、今補レ之、筑後風土記有二其文例一。〇都伎也、倭名鈔、出雲意宇郡有二筑陽鄕一、蓋因二此地一、命レ名。〇作、原作レ佐、今從二一本一。〔田〕屋形は齋場なり。酒屋は酒殿なり。上代の祭儀見べし。〇搖。神代紀に搖レ䉤伏レ馬と訓み、猶古書に例有り。■〇槻山、山名。〇屋形、即宮殿、酒屋即酒殿也。柏桂帚云云、猶如二大嘗祭眾柏葉

而舞一。○厭川、猶レ曰二意須比川一。挂二柏葉於帶腰一、蓋似レ披二襲衣一。○厭、原本作レ猒、今從二一本一。囯枚方、河内國共に和名抄に漏る。■繼體紀に、比播耶馱喩輔曳輔枳能明樓とあるぞ、茨田郡の枚方なる。■按御圖帳、攝東郡有二平方村一、今河内國茨田郡、有二枚方村一。【三九】囯出雲ノ大神は右に見エたる御蔭ノ大神なり。十人は履中紀に數十人をトタアマリと訓メリ。十人餘(トタリアマリ)なり。五人は垂仁紀に、五婦人をイツトリノヲムナと有ルに倣ふ。後拾遺集ノ序に五人をイツツノヒトとあるは五歳の人と聞えて非なり。■按留五人下疑脱二五人二字一、今意補レ之。囯佐比、齋場所を云フ。■按、佐比、與二鋤持神之鋤一同、作小刀祭神也。囯和は推古紀に以レ和(アマナヒ)爲レ貴、繼體紀に和(アマナヒトカシム)解、續紀十一に和(アマナヒカフテ)買、遊仙窟に甘心(アマナヒム)など有ルに據る。○佐比、詳ならず。

【四〇】○佐岡は稻岡(サ)なり。五月(サツキ)は稻を植る月なれば然いふ。なほ國典字徵稻ノ字に詳なり。■高（○難波ノ下）字例補、囯田部、和名抄筑前國早良郡鄕名田部ハ多倍と有ルに據て訓みつ。景行紀に、令二諸國一興二田部(タブス)屯部(ミヤケ)一。是は朝庭の御料の田を作らしむる民等を云フ。■筑紫田部、按倭名抄……有二田部鄕一、卽此、今本郡亦有二田井村一。囯盤石の盤は磐に作ルべし。此二字神代紀に據(ヨリ)てイハと訓みつ。■磐盤古通用。囯宧ノ字譌みえず。穿の誤なるべし。穿をウゲとよむ事音韵啓蒙に委く論ジおきつ。■宧、疑窪之或體。囯登ノ下立ノ字を脫せり。今義を以テ補ひつ。覽を賢に誤れり。■飾磨郡小川里條、有二御立丘一、可二併考一。【四一】囯大家、和名抄に大宅ハ於保也介と注せり。今千本驛ちかき邊に大屋と云フ村有リとぞ。囯河原ノ下宮ノ字を脫せり。小墾田宮は推古孝德皇極の紀に見えたれど、河原宮と續キたる例なければ詳ならず。齊明紀に飛鳥河原宮とは見ゆ。按に小治田も河原も共に飛鳥の地にあれば推古天皇を申すめり。■河原二字、恐衍。囯千代勝部は二人の名なり。○黑戸は魚(ナ)戸の譌か、次なるも同じ。■倭名抄、杁、杖名也、阿布古。字鏡曰阿保古、一臀之轉。延喜式、古今集、後撰集、阿不古。囯宇治天皇は、宇遲能和紀郎子を申す。○宇治連、姓氏錄に、宇治宿禰も宇治部連も共に伊香我色雄命の後なりと有リ。■兄太加奈志、志字原脫、今從二一本一。

囯富等、正訓をしらず。地は村の號にて富等(ホト)村にはあらじか。土人に問ふべし。【四二】所以、恐ハ衍文。奈閇は杓のなへかに擬みたる狀なり。源氏寄生、野分、初音等の卷に例あり。〇大田、和名抄に於保多と注せり。同ク名草郡鄕名にも見えたり。〔標〕按國圖、揖東郡有二太田、上大田、下大田村一。囯三島賀美郡、和名抄に、島上ハ志未乃加美、島下准レ之と有り。此地は史にも往往見えて、三島とのみ書キ來れるを島とばかり云ッは後なり。式に島下郡大田神社あり。是は同地にて島上に近く、上代は其邊も島上なりしと聞ゆ。攝津志島下郡に大田村有り。欽明紀に攝津國三島郡埴廬(ハニイホ)新羅人之先祖也云云。右に韓國より度リ來ルと有ルは新羅人にこそ有りけめ。〔標〕按倭名鈔、攝津國有二島上郡島下郡一。囯敎令、軍中神武紀に令二軍中一曰云云。神功紀に皇后親執二斧鉞一令二三軍一曰云云。【四三】〇鼓山、林田より塚本村へ行く道に大鼓と云ッ所あり。〇腹太文の腹は姓か。姓氏錄に原ノ造あり。文は夫の誤なるべし。〔標〕名跡志曰、揖東郡大田庄原村有二栖鼓原一。傳云昔皇后征韓日、設二栖鼓等一地。〇天武紀十三年十二月、額田部連賜レ姓曰二宿禰一。姓氏錄曰、明日名門命六世孫天由久富命之後也。又曰、神人、御手代首同祖、可北良命之後也。又云、御手代首、天御中主命十世孫天諸神命之後也。囯石海、和名抄に石見ハ伊波美、今石見庄あり。〔標〕名跡志曰、揖東郡石見庄。囯難波ノ云云孝德天皇の宮號なり。白雉二年十二月紀に、天皇從二於大郡一遷二居新宮一、號曰二云二宮一と有リ。史にしばしば幸二難波宮一と有ルは此宮なり。〇百便、よみ難し。類聚名義抄、宇鏡集に便をタルと注せるに據リて姑クモモタリとよみつ。其は阿曇連百足と云ふ名に依りて名づけけん。次の太牟召は百足を三字に誤ッしにはあらじか。〔標〕百便、訓讀未レ考。〇姓氏錄曰、安曇連、綿積命兒穗高見命之後也。【四四】囯人夫、仁德紀に役丁をエヨボロと訓メるに從ふ。〔標〕稱(〇酒井ノ上)宇原戝、今從二一本一。〇按國圖、神東郡有二酒井村一、可レ考。囯宇須伎津。今は魚吹津と書クよしなり。〔標〕按播磨古跡考、宇須幾濱八幡宮、一作二魚次宮一、在二網干浦一。囯人帶日賣命は息長帶日賣命なり。〔標〕宇伎頭川、據二下文一、伎字恐衍。〇泊、原作レ伯、今從二一

本一。囯逆風。神武紀に暴風をアカラシマカゼ、景行紀にアカシマカゼなど訓メるに從ふべけれど、齊明紀に
横二遭逆風一とあるにおなじくヨコシマカゼと訓むべき所なり。史に讒言をヨコシマゴトともよめり。標按
船越蓋地名、據國圖一、攝西郡伊津村東有二宍粟川一、川東又有二一水一、傍有二舟代村一、恐舟代或古舟越地。
一說云、從船者扈從臣僕之船、又越二越御船一、船當レ作二越御船御船一。蓋從船越二御船一、御船猶不レ得レ進
也。【四五】〇負、（〇子ノ上）原作レ員、今從二一本一。囯伊都は次に見えたる伊都村なり。〇宇須伎、源氏朝
顏にうすきいで來てとみにもえ開やらずとあるにおなじく、驚きあわつる狀なり。祝詞式に夜女能伊須須
伎と云へるも、古事記に立走伊須須岐伎とあるも同言なめり。標宇須伎、……驚惶之義、按御圖帳、隣郡宍
粟郡、有二宇津見村一。囯新をイマとよめるは書紀に例おほし。伊波須久は宇須伎の轉訛にて播磨ノ國の古キ方
言なり。標名（〇以ノ下）原脫、今從二一本一。囯絞水はウヅとよまむ外なければ渦を云へり。この假名未ダ定
まらざるを此條に見えたるを的證とすべし。標按國圖、攝西郡海濱有二伊津村一。〇敌（〇嶋ノ下）原本脫、
今從二一本一。【四六】囯浦上、和名抄に、宇良加三。今攝津國に然ル地名聞えず。今按に地名は文字に泥ミて
よみ替へたる例中昔に多かれば、始メは難波の浦のほとりと云フ意にて浦上とは書キけんも知リがたし。標因
（〇本居ノ上）原作レ日、今從二一本一。囯室原泊、今の室ノ泊を云フ。上代はムロフと呼ビけん。本朝文粹善相公
意見の文に、自二樫生泊一至二韓泊一一日行とあるは別地か、考フべし。標按國圖、攝西郡有二室津一、蓋室原也。
又按萬葉卷二、有室之浦、室之浦室原泊、卽今室津也。意見封事云、自二樫生泊一至二韓泊一一日行、與レ此
自別。囯昔在の在は、有ノ字の意に見るべし。標昔在、當レ作二昔有一。囯白貝、大和本草に、形扁ク淡白色
味不レ佳と有ッ。又貝子一名白貝と云フものあり。本草和名、醫心方等に、牟末乃都保加比と注し、是を大和
本草に大サ大拇指ノ如ク長一寸バカリ白キ小貝ナリ。腹兩方ニ開キテ相向フ處齒ノ如シと云ひ、啓蒙の說も
同じ。〇家島、式に家島神社。萬葉四に、家乃島荒磯之宇倍爾とあるも、この島にて古歌に數見えたり。陸

地を去ル事三里許リ大小二十餘の嶋島あり。■名跡志戴家嶋、記曰、攝東郡家嶋、距二陸地一三里。延喜式、攝保郡家嶋神社。□里葛の里は黒の譌。○神島、今上島と書けり。□在（○石神ノ上）、恐有。□石神は石體の神像なり。古書に石神と云へる總て是なり。文德實錄八に、有レ神新降云云有二兩恠石一云云彩色非レ常。或ハ形二沙門一と有リ。似たる古傳なり。【四七】■有五（○顏ノ下）二字、原无、今補。□瞳、和名抄に、眼（目子也云云、瞳、蔑奈古。○暴風、和名抄に、八夜知、又乃和木加世とあれど、姑ク神武紀の古訓による。○盲。和名抄に、目無二眸子一也。米之比。上に堀二一瞳一とあるに應じて甚奇なり。不レ拘と云フ事考べし。○韓荷島。古歌多し。引クに堪へず。室明神の山より東南一里許海中にあり。■名跡志曰、攝西郡唐荷嶋。按萬葉集六、有二辛荷島歌一。○攝西郡海中有二大高嶋、小高嶋一。【四八】□萩原、和名抄に脫。原本荻に作れれど詞林採要に萩原に作れり。■御國帳、攝西郡有二萩原村一、萩本作レ荻、今據二仙覺萬葉鈔所レ引訂レ之。□關御井の關ノ字、關に誤れり。詞林採要及仙覺抄に據リて改ム。○■。新撰字鏡に毛太比。韓清水、■國より還リ給ふ時なれば此名あり。古歌に野中の清水とよめるは若クは是か。■按埠與レ墫同、古作レ僾、後作レ墫、或作二墫埠一。○按、不出綱上下、恐有二脫誤一。○淸水、原脫二水字一、今從二一本一。○酒上原脫二云字一、今從二一本一。○按因圖、今有二片吹川片吹村一、與二萩原村一相近。□陰は陰門なり。古事記に於レ梭衝二陰上一云云。訓陰上云二富登一とあれど、催馬樂に陰名にくぼの名をばなにといふ。新撰字鏡に屎を久保とよめるも同からん。此外空穗物語、藏開新猿樂記等に見えたれば姑ク是に從ふ。■陰陪從婚斷、未レ詳。□婚をマグハヒとよみならへれど、類聚名義抄、字鏡集等にマグとよみ、今昔物語十四に女ノ背ニ付テ衣ヲ褰ケ婚グ。同十六に、汝ハ此レ我ガ妻ヲ婚ムトスル盜人法師也云云。按ニ味をアヂハヒ、幸をサチハヒと云フ如く。婚をマクハヒとは云へり。但シ古キ例によらば婚ハヒなるべきをマグと國語ニ云トすうる上は、おのづから然云フ事例おほし。○田は孟子に景公田。■鷹飴、按仁德紀云、四十三年秋九月庚子朔、依網屯倉阿弭古捕二異鳥一、

獻二天皇一云云、天皇召二酒君一示レ鳥曰、是何鳥矣。酒君對言云云、百濟俗號二此鳥一曰二倶知一。（是今時鷹也）、乃授二酒君一令二養馴一、未二幾時一而得レ馴。酒君則以二韋緡一著二其足一、以二小鈴一着二其尾一、居二腕上一、獻二于天皇一。【四九】〔注〕少宅。和名抄に、小宅古伊倍と有ルを今は小宅庄（ヲヤケノ）と呼ヒならへる由なれば、和名抄を却て誤とせんか。■倭名鈔、……高山寺本注云、乎也計可レ從。名跡志曰、揖東郡小宅庄。○注漢部、原作二漢口一、今據二下文一訂レ之。○川原若狹、按川原姓若狹名也。俠蓋狹古體。姓氏錄曰、河原連、廣階連同祖、陳思王植之後也、又廣階連魏武皇帝男陳思王植之後也。〔注〕祖父、和名抄に於保知。○庚寅ノ年は持統天皇四年なり。○細螺、和名抄に之太太美。大嘗祭式に細螺二十坩。【五〇】〔注〕揖保、和名抄に伊比奉（イヒホ）、式に揖保郡粒二坐天照神社。三代實錄二に從五位下勳八等粒二坐天照神。皇后紀に取レ粒爲レ餌（ヲ）。和名抄に肬目をよめるも形相似たればなり。■者（○天ノ上）字例補。〔注〕天日槍、アマノヒボコとよむべし。古語拾遺に海檜槍（アマノヒボコ）に作れり。垂仁紀ノ一書曰、初メ天ノ日槍乘レ艇（ヲブネニ）泊二于播磨國一、在二於宍粟邑一云云。按二天日槍は紀記に崇神垂仁の御代の人に傳へたれど、此記によりて見れば神代の人なり。實に然も有りけんかし。志學ノ下、原本乎を脱せり。今補ひつ。占國の占は與の誤り、判地の判は刺の誤字なるべし。○客神、日本靈異記に佛を客神と云へるとは別なり。■按盛恐威字、行字屬二下句一。○比（○小石ノ下）字恐當レ作レ皆。○北（○南ノ下）原作レ比誤、今意訂レ之。〔注〕白朮。新撰字鏡に乎介良。天武紀に令レ煎二白朮（ヲケラ）一。和名抄に朮をよみ、似レ莿生二山中一、故亦名二山莿一也と有り、莿は薊に作ルべし。【五一】○神山は上の神島に傳あり。○出水、和名抄に洩れたり。■和上原脫二伊字一今補レ之。〔注〕妹は妖の誤なり。妖は字鏡集、難字記等にセウトとよみ、和名抄、備中國賀夜郡鄉名庭妖ハ尒比世と注し、今は庭瀨と書けり。鎭火祭詞に吾奈妖（ナセ）とあるは伊弉諾尊（ナギノ）を申せり。■妖原作レ妹、今從二一本一、下倣レ此。○按呆、蓋東字缺畫。○塞、原作レ寒誤、今從二一本一。〔注〕格は挌に作ルべし。字書に擊也鬪也と注せり。底之の二字衍文なるべし。■格字未レ詳、按格恐落訛、似レ當レ在二於字上一。又按、萬葉、三山

歌相格訓二阿良曾布一。○按底字疑當レ在二川字下一。【五二】囮宮樋はシタビとよむべし。古事記に、阿志比紀
能夜麻陀袁豆久理夜麻陀加美斯多備袁和志勢とあるは、下樋を令レ走にて土中に水を通はしむる樋を云へり。
■樋、原作レ桶、今從二一本一。囮桑原、和名抄に、久波波良。○槻折山、右に出ッ。○森然、字鏡集、色葉
字類抄、類聚名義抄等に森ハイヨヨカと注せり。文選魏都賦に蘿蕦森。白氏文集廿四に、槍森ニ赤豹尾一。
もののつらなる事を云へるなるべし。○桑原村主、天武紀に、侍醫桑原村主訶都と云ッ人見えたり。村主は
諸蕃人の姓にて、姓氏錄に、桑原ハ狛國人漢賀之後也と有ッ。■容（○讃ノ下）原作レ客誤、今從二一本一。又
按見上下、恐有二脫誤一、按鞍歟。囮琴坂、穗野より一里許西にあり。■坂（○琴ノ下）原作レ叛誤、今從二
一本一。囮出雲人イヅモノとよむべからず。崇神紀に玉萋鎭石出雲人。【五三】○銅可は銅牙に作ルべし。典
藥式諸國進二年料雜藥一條に播磨國より銅牙一斤と有リ。本草和名に、銅芽を金牙の一名として、出二但馬上野
國一と注せれど、本草金牙石の集解に、金牙生二蜀郡一如二金色一云云、似二粗金一ハ大サ如二碁子一、而方ッ又有二銅牙一、
亦相似とあれば、金牙に並で大方同ジ物なるべし。康賴本草に、味鹹无レ毒如二金色一、和名之也世支と注したれ
ど、諸石と聞えて古言にあらず。本草の訓注には古加禰乃米伊志と注し、啓蒙にはカナザコと注せり。■銅牙
石不レ詳。牙殘牙字或脫。大須本將門記、角牙作二角牙一。本草和名、牙子一名狼牙、犬牙成牙、天牙、牙皆作レ
牙。再按、銅牙當レ作二銅牙一。典藥式諸國進年料雜物中、有二播磨銅牙一斤一、可レ證。囮雙六、和名抄に、須久
呂久、頭子ハ雙六乃佐以。萬葉十六に、三四佐倍有雙六乃佐叡。持統三年紀に禁二斷雙六一。彈正式亦おなじ。
○此次赤穗郡闕ケたり。惜むべし。○讃容郡の容を客に誤れり。和名抄に佐用ハ佐與。■御國帳日、佐用
村。按、下文讃容郡、事與里同、土上中十字、恐當レ在二此讃容郡上一、而此郡字當レ作レ里。○下讃容之容、
原脫、今從二一本一。按御國帳、國圖、赤穗郡有二作用谷村一。○神名式日、作用郡作用都比賣神社。按市杵島姫
一名也。○去他、疑當レ作二云此一。囮五月をサとのみ云ふべき理ッなし。是は稻をううる頃の夜と云ふ意をし

らしめんために、五月夜とは書けり。猶揖保郡佐岡ノ條の標注を對ヘ見ルべし。○汝妹、履中紀に汝妹此云ニ儺邇毛ー。○他處ノ下故ノ字を落せり。例によりて補ふ。○賛用都比賣命、式に載れり。續後紀嘉祥二年預ニ官社ー。國按、ニ神名賛用都比賣命八字、恐似レ當レ爲ニ分注ー、而神字上加ニ坐一字ー。○即字上下恐有ニ脫文ー。囯今有の有は在の意なり。【五四】國校（○鹿ノ下）疑殺。○難波已下、蓋有ニ謬誤ー。囯發文の文は之の誤。○讃容郡事與里同は、讃容ノ里事ハ與レ郡同シに作ルべし。和名抄に、佐用鄕あり。國讃容已下十字、蓋上文文錯出、說已見ニ于上ー。囯吉川、和名抄に江川に作ル。國按倭名抄、佐用郡有ニ江川鄕ー。國圖、赤穗郡有ニ大枝村ー、西有レ川、其源發ニ于因幡國界ー、其他有ニ吉川村ー。囯稻狹部は、出雲國の地名によりたる姓なるべし。國其山二字、宜下與ニ生黃蓮三字ー爲中分注上。囯黃連、和名抄、醫心方並加久末久佐と注し、古今六帖に、かくも草とよめるも同シからん。國按御圖帳、赤穗郡有ニ倉尾村ー、疑古按見乎。作用郡亦來見村。【五五】桉、即鞍字。囯故曰の曰ノ字は山名の下にあるべし。國山名曰、原本作ニ曰山名ー、據レ例改レ之。曰桉見、曰字例補、按御。國帳、作用郡金谷村。囯伊師、詳ならず。強て按に、中昔の書に、いしのおまし等云へるは、床をイシと云ひし古言の殘りけんを、彼倚子の字音ならんと思ひ誤り、我古言ハ何となく亡びしも知ルべからず。猶よく考ふべし。○精鹿、詳ならず。國精下本書蠶食作□□按字體似ニ鹿升ー、故今訂レ之。囯升麻、和名抄に止里乃阿之久佐。醫心方、本草和名等に、宇多加久佐とも注せり。俗にアハボとも水筆とも云フ。○速湍、和名抄に、速瀨に作る。國按國圖、作用郡有ニ阜瀨村ー。按湍字皆作レ㵐。○字鏡曰、湅、瀑雨、波也佐安女。按湅冰皆從ニン旁ー。囯廣比賣那都比賣所狹ければ卷末に云ふ。○邑寶。和名抄に脫す。○彌麻都比古命は上卷餝磨郡ノ條に大三間津日子命とあるにおなじかるべし。然ラば孝昭天皇を申せり。國彌麿都比古治井、或是御井神。○按倭名抄、有ニ佐用郡太田鄕ー、疑邑寶里也。囯滄は湌の誤なるべし。粮は和名抄に加天とあるは略にて、日本靈異記に可里豆。萬葉五に可利豆波奈斯爾とあるに據れり。【五六】○御井

村、今仁井村あり。○人參、和名抄に、加乃仁介久佐、一名久末乃伊。本草和名、醫心方等に介巳太とも注せり。○獨活、和名抄に宇止。○監膝ハ藍膝の誤なるべし。典藥式、播磨國年料雜藥の中、又出雲風土記等に見ゆ。○石灰、和名抄に以之波比。靈按國圖、讚郡宍粟郡有二久都禰村一、有二賓村一。○倭名抄曰、佐用郡宇野。名跡志曰、揖西郡宇野庄、宇野山。留中央、マナカとよむべけれど、天武紀に有レ虹當ルニ于天中央ミナカニ一とあるに據る。神武紀には中心をよめり。【五七】○柏原、カシハラと略キてよむべけれど、姑ク和名抄、讀河國駿河郡鄕名訓注の例に據ル。靈倭名抄曰、佐用郡柏原。○倭名抄曰、筌（和名宇倍）捕レ魚竹筍也。留呉床。和名抄に、胡床ハ阿久良。古事記、内宮儀式帳等に呉床をよめり。呉ハ呉の省文にて胡も同義。靈倭名鈔曰、佐用郡中川。延喜兵部式曰、播磨國驛馬、中川五疋。留苫編首、姓氏錄に、登美首豐城入彥命男云云、是か。○石屋、式に淡路國津名郡石屋神社。靈濁、原作レ獨。○按國圖及名跡志、餝西郡有二苫編村一。留天皇勅云。天皇は息長帶日賣命を申せり。即神功皇后の御事。【五八】靈船引、原作二引船一今從二一本及下文一訂。按國圖、佐用宍粟二郡界有二舟越村一。留近江天皇は、天智天皇を申す。○道守臣、姓氏錄に、豐葦頬別命之後也と有リ、即孝元天皇第八皇子なり。○船引は、引船の顚倒か。○韓、和名抄に、加佐佐木と注せれど、既ク訓蒙字會に見えたれば、朝鮮の方言なり。字鏡集に、豆豆万奈柱と注し、易林本節用集に、ヤマガラスとよめれど、姑ク普通の訓に從ふ。靈添塔襲抄に、此件の事を引けるに。一云を世俗云に作れり。○細辛、和名抄に、美良乃禰久佐。是は加茂ノ山に生フる二葉葵に似たる草なり。○丸部は、孝昭天皇の後なり。具ノ字は直又首などの誤リならんと思へど、姓氏錄並拾芥抄に直等見えざれば、臣の譌とすべし。○兎寸村、古事記下卷に、兎寸河之西有二一高樹一、其樹之影云云、當二夕日一者越二高安山一とあり。此兎寸を扶桑略記に厄寸に作れり。兎は厄の誤リとして、式に和泉國和泉郡に、夜疑神社あり。同郡に、八木郷あれば厄寸ならんと思へど、厄を假字に用ひたる例なければ、猶考ふべし。靈天智紀（即位年）曰、是

歳播磨國司岸田臣麿等、獻二寶劍一言於二狹夜郡人禾田穴内一獲レ焉。○按、今三日月驛西有二米田村一、據レ此。日本紀、禾田、恐米田譌。○滅、原作レ減、今從二一本一。囯土中得二此劍一云云、天智紀に、此歳播磨國司岸田臣麻呂等獻二寶劍一、言ッ於二狹夜郡ノ人禾田ノ穴内一獲焉。【五九】▣犬猪、原作二大猪一、今據二上下文一訂レ之。囯淨御原朝廷は、天武天皇を申す。○甲申は、白鳳十三年に當る。○倉根連は、姓氏録に、神饒速日命之後也とあり。▣今（○于ノ下）原作レ令、今訂レ之。囯安二置此里御宅一。按に劍の有ルばかりを云へるには、在と社あるべきに、安置としも記せるは、神體として祭れるなるべし。式に天一神玉ノ神とあるは、天目一神にして、此劍を祭れるにはあらじか。猶多可郡にも同神坐れば、何れも劍に由ある神なり。▣北山、當レ作二此山一。▣按國圖、佐用郡有三日月村。囯狹井連、姓氏録に佐爲連。速日命六世孫伊香我色乎命之後也。【六〇】▣旋（○赴ノ上）原作レ狹、漬原作レ瀆、並從二一本一。囯吾此云云。宇奈比賣久波比賣に係る詞。○美加都岐原は身瀦の謂なり。今は三日月と書けり。▣志曰、舟曳庄三日月。囯雲濃、和名抄に、宇野今宇根村あり。▣按佐用郡有二宇根村一、按御圖帳、赤穗郡宇野村。【六一】囯稱二於父心一の稱は、カナフと訓むべけれど、然ては雲濃ノ里てふ義を失へれば、曲げてよめり。但中昔の書にうなづくと云ッ語しばしば見えたれば古言なるべし。▣號（○故ノ下）字例補。按御圖帳、宍粟郡鹽野村。囯完禾、和名抄に、宍粟に作ッ志佐波と注せり。鹿遇の意なり。垂仁紀に、天日槍乘レ艇泊二于播磨國一在二宍粟邑一。▣按、宍禾、盖修鹿逢也。播磨專始云、宍禾肉多也、本郡山深猯鹿多栖、因名、亦通。○谷、疑谷訛。囯鹿ノ字は衍れり。○名號の名は亦の誤ッ。○比治、和名抄に比地に作ル。今比地ノ郷と云。▣按國圖、宍粟郡有二上下比地村一。川戸村、宇原村、平三村、皆相隣接。但平三村隸二揖東郡一。【六二】囯里長、ムラギミと訓むべき例なれど、姑ク文字の儘によみつ。戸命に九戸以二五十戸一爲レ里、毎レ里、置二長一人一。○裳戸の戸は、良の誤にて、ウバラとよむべきか、猶考ふべし。▣按國圖、御圖帳、並有二狹戸村一。

囝褶は、卷初にヒレとよみたれど、爰はヒラビと訓むべし。四時祭式に褶一條と有り。是は平帶の略にて、天武紀に褶、腰帶とあり。字書にはヒラミと注せり。圖褶、日本紀訓二比良於比一。衣服令集解、作二枚帶一、並平帶之義。囝白檜の白は日の誤。○川音村、今比治鄉に川戸村あり。【六三】○庭音村、式に庭田神社あり、此地か。○御粮、神武紀に嚴瓮之粮とあるに依りたり。カレヒと訓みてはわろし。圖按、粮糧古今通、猶俗糯字、糯粧編訛。囝庭音は庭宴の轉略なり。圖庭酒、蓋新嘗之酒。新嘗訓云二爾波乃阿比一、可レ證。○神（○二ノ下）字例補。囝稱春の稱は稻の誤り。圖稻春岑、稻、字原作レ稱誤、今從二一本一。春稻、原脫二稻字一、今從二一本一。○按、曰稱、恐當レ作二稱曰一。囝味栗、詳ならず。○高屋、和名抄に高家に作る。圖按名跡志、管野庄高家村。又高家鄉山崎、按御圖帳、有二都多下野村、都田上村高家村一。【六四】囝衆人、以下落字有んべし。○噉はタシムとよまんは常なれど、齊明紀に、積二綵帛兵鐵等於海畔一、而令二貪噉一と有り、ナとダは通へればツダミと訓みたり。飲之の下に故曰二都太川一の五字落ちたり。古歌に津太の細江とよめるは此地か。○柏野、和名抄に狛野に誤れり。今二十一村を柏野ノ庄と云ふ。圖按御圖帳、赤穗郡柏野村。○名柏下野字、者下柏字、原本並脫、今從二一本一。○伊奈加、原作二伊加奈一、今據二下文一訂。囝土間、今山崎より一里許西にヒヂマと云ふ所ありと云へり。圖倭名抄曰、宍粟郡土方鄉、高山寺本作二土万一、（比知末）、可レ從。【六五】囝嚴は最の譌。○枌、色葉字類抄、和玉篇等に、ニレと注し、詩ノ陳風に、東門之枌婆二娑其下一。又和名抄に、夜仁禮などあれど、新撰字鏡に、枌ハ符分ノ反須木、式に、武藏國都筑郡枌山神社とあるを、續後紀十八に、杉山名神に作れるを證とす。【六五】○鐵をマガネとよむ事國典字徵に注しつ。○羆、和名抄に之久萬。圖最、原作嚴誤、今訂。○生鐵已下五字、原在二栗字上一、今從二一本及下文一訂。○羆、原作レ熊、今訂レ之。（○生レ鐵。住二狼羆一トス）○按國圖、有二飯見村一。囝安師、和名抄に安志に作れり。圖御圖帳、有二安師町、須加村一。……按名跡志曰、安志庄東關村。圖國圖作二安知一。囝洽、源氏若紫にさるべき物つくりて

すかせ奉る云云。同總角に松の葉をすきてつとむる山伏だに云云。按に食と云ッに當れる古言なり。〇滔加の滔は須の誤にはあらじ、酒の異體なるべし。〔標〕所以二字、原在二後字下一、今從二一本一。【六六】〇因安、原作二安因一、今從二一本一。〔栗〕安師比賣神、此ノ件の事書(モノ)に見えず、此地の國津神なり。〔標〕安志濂神社書上帳云、三森村安志姫大明神、祭二湍津姫命、田心姫命、市杵島姫命一。〇按國圖、安知川北有二味方村一。〔栗〕黒葛、類聚名義抄にツヅラと注せり。肥前、出雲等の風土記を始メ古書に往往見えて、筑前風土記には、烏葛と記せり。同物なり。儀式に正殿一字葺ニ以二黒木一云云、以二黒葛一結レ之と有リ。是は東國にてフヂと云ヒ、西國にてシヅラと呼ビ、深山に生じ色黒く長ク強キ蔓草なり。但疑シきは齋宮式に曝黒葛七両と有ル曝と云ッ事考ッべし。防已と云へる草に數名ある中、ツヅラと云ッ名もあれど別種なり。〇石作、和名抄に石保に作れるは誤なり。姓氏錄に、石作連ハ火明命六世孫建眞利根命之後也。〔標〕倭名抄曰、宍粟郡石保、高山寺本作二石作一、(以之都久利)可レ從。名跡志曰、石保鄕棧村。〇伊(注ノ和ノ上)字原蠧食、存二其半體一、今考補。〇此(〇於ノ下)字原脫、今從二一本一。〇按、石作本屬二伊和里一、至二庚午年一、立爲二一里一也。【六七】〔栗〕烏賊、眞水にすめる事書(モノ)に見ゆ。〔標〕按國圖、宍粟郡有二五十波村一、讀云二伊加八一、卽烏賊間也。〔栗〕雲箇、和名抄に闕ク。今潤賀村と云ッ由なり。〔標〕大神は伊和大神にて卽大名持神なり。其御妻にかかる御名の神坐シけん事めづらし。〔標〕按國圖、宍粟郡有二閏加村一。〔栗〕波加村、今波加ノ庄と稱し九ケ村有リ。〔標〕此(〇處ノ上)字原脫、今從二一本一。〔栗〕山薑、本草に杜若の一名とし、又白朮の一名にも見え、本草和名、醫心方等も是に從ひ、又朮一名山薑、乎介良と注せれど、和名抄に、山葵、和佐比。漢語抄用二山薑二字一と有ルに從ふ。齋宮式に山薑(ワサビ)二斤。【六八】〇御方、和名抄に、三方に作リ、上の安師里ノ條に、三形と書けり。同地なり。式に御形神社。〔標〕按御圖帳及國圖、有二味方村一、或御形神社。按國圖、郡之西北、山嶺重疊、有二重土村一。按志、公文村有二御方谷一。〇鈴木重胤云、到故恐倒。〔栗〕故墨志尒の四字よみえず。試按に故は衍字、墨志尒は黒葛を誤りたるにはあ

らじか。[標]故黒土、原作故墨、回讀、故字恐衍、墨宜分爲黒土二字、今訂。○黒（○以ノ下）黒原作里、今從一本。○葛（○一ノ上）字原脱、今從一本。按但馬國有養父郡、出石郡、氣多郡。圉夜夫郡、和名抄に養父に作れ。但式に夜夫坐神社と記せり。伊都志は郡名にて出石に改めたり。[標]落字原脱、今從一本。按國圖、味方東北有落山。圉故占の占を、古事記傳卅四に、トノ字に改めて引けり。釋紀には在ノ字に作れり。[標]植（○御ノ上）原作植、今從一本。○按御國帳、有金宿村金谷村。圉梅、此記に枹に作り、或は枹に作れり、何れも梅の譌なるべし。神代紀に波茸の訓注あれど、新撰字鏡に、久知奈之と注せるに從ふ。[標]林、恐符許。【六九】圉伊和村、和名抄に郷名に出せり。大神は式に伊和坐大名持御魂神社とある是にて、三代實錄、貞觀元年從四位下元慶五年正四位下を授ヶ奉り、百練抄、平治元年八月燒亡の事見ゆ。記、中葦原志許乎命或伊和大神、又大神など記せる皆御同神なり。[標]倭名抄、……新抄格勅符神封部曰、播磨伊和神十三戸、（播磨國）。播磨金鑑云、伊和大明神、在宍粟郡伊和村。圉於和は勞り給ふ狀を云ふ。出雲風土記に、御杖衝立而意惠登詔。故云意宇とあるに同シ。[標]故曰於和四字、例補。（○美岐ノ下）○倭名抄曰、播磨國神崎、（加無作岐）、按今分爲神東、神西二郡。○在於、原在子字下今從一本。圉郎岡、和名抄に、堀岡に作れり。堲ハ壺の古文にて、說文に、以土增大道上とあり。[標]按、郎即堲字或譌。○大川内、原作大内川、粟鹿下脱川内二字、並從一本補之。【七〇】圉小比古尼ハ飾磨郡枚野里條に、少日子根命に作り、舊事紀に、少彦根命に作れり。小は少に改むべし。○堲荷ハ土を荷ふために構へたる物。[標]荷、原作蔺誤、今訂之。○爭而下恐脱行之二字、歟。○經（○相爭而ノ下）原作逕恐誤、今訂。圉小竹、皇后紀に、小竹此云之努。○行於の行は汗の誤か。[標]汗、（○於衣ノ上）原作行、恐誤、今訂。圉姓氏錄、佐伯直ノ下に景行天皇爲定國堺、車駕巡幸到針間國神崎郡瓦村ノ東崗上とあるは此巡幸のをりにや。【七一】圉爲堲云、堲は練りたる土を云ふ。○粟鹿山、和名抄に、但馬國朝來郡郷名粟鹿ハ安波加。式に粟鹿神社。[標]

按御圖帳、國圖、神東郡有栗鹿村、村邊有ㇾ川、蓋栗鹿川。匡異俗の上に有ノ字を脱せり。此に異俗は何のために記せるか詳ならず。次なるもおなじ。匯注在、(○黒葛又ノ下) 當ㇾ作ㇾ有、據二上文例一。【七二】匯許下當ㇾ有二口字一。匡川邊、今村名に存れり。匯按國圖、神東郡有二東西川邊村、上下世賀村一。匡勢賀、今瀬賀に改ノ上下二村に分チたり。○匯勢上號字原脫、今從二一本一。○名跡志曰、蔭山郷砥堀村砥堀山、與二飾東郡一相接、說見二于上一。匡約出はセガムとよむべし。此語十訓抄にしばしば見えたり。古言なり。【七三】匡星出、詳ならず。强ヒテ按に薄暮の頃を云ふか。然らば星肆は星闇の意なり。○高岡、和名抄に洩れたり。匯志曰、神西郡高岡庄。匡神前山與上同とは、郡名の條に傳あるを云ふ。匯神前、原作二前神一、今從二一本一。○名跡志曰、神西郡奈具佐山、又有二七種村一。匡不知其由は、奈具佐山と云へる由をしらずとなり。○多馳、和名抄に洩らせり。匯多馳、疑多駝、按國圖、有二多田村、西多田村一。【七四】匡佐伯部、仁德紀に、播磨ノ佐伯ノ直阿俄能胡。姓氏錄に、佐伯直、景行天皇皇子稻背入彥命之後也。男御諸別命ハ稚足彥天皇ノ御代中ニ分針間國ニ給ㇾ之、仍號二針間別一。男阿良都ノ命ハ譽田天皇爲ㇾ定二國郡一ハ、車駕巡幸到二針間國神崎郡瓦村ノ東ノ崗上一ハ、于ㇾ時青菜ノ葉自二崗邊ノ川一流下、天皇詔ㇾ應二川上有一ㇾ人也。仍差二伊許自別命一ヲ往問、卽答曰己等是日本武尊平二東夷一時、所ㇾ俘蝦夷之後也云云。詔曰、宜三汝爲ㇾ君治二之、卽賜二氏針閒別佐伯直姓一也。爾後至二庚午年一ハ脫二落針間別三字一ハ、偏爲二佐伯直一と有リ。是は此國に關カれる古傳なれば、くだくだしく引キたれど、全文にはあらず。匯邑曰、原作二邑日一非也、據二下文意保和知之語一ハ訂ㇾ之。下倣ㇾ此。○仁德紀四十年、有二播磨佐伯直阿俄能胡一。匡新次、式に新次神社。匯延喜神名式曰、神崎郡新次神社。匡意保和知、詳ならず。匯意富和知、按意富、大也、和知、弱茅也。苅ㇾ茅爲ㇾ垣、故云。今有二雨月村一ハ、讀云二和知一ハ、蓋其地。○院、古作ㇾ宾、又作ㇾ院、讀與ㇾ垣同。○所以云三字、例補。匡邑田の田は日の誤なり。○粳岡、宍粟郡奪谷ノ條なる粳前も粳前に作り。賀茂郡粳岡など總てヌカとよむべし。新撰字鏡に、秔俗作ㇾ粳、稻也、奴可と注し、續紀の人名に、阿倍ノ

朝臣稗虫、又紀寶祁臣之女稗女など、枚擧に遑あらず。■按一云已下恐有二脫落一。【七五】御俗の俗は伴の誤りかと思へど、世に借りてよむべし。隋は隨の誤。澄は造の誤りなるべし。〇三家以下落字ありと見ゆ。■在。（〇八千ノ上）當レ作レ有。〇倭名鈔曰、神城郡蔭山、……按名跡志、蔭山庄、出雲風土記、神門郡蔭山、古書冠爲二御蔭一。〇所以（〇云二蔭山一。ノ上）二字、例補。囮御蔭は、御冠なる事餝磨郡安相里ノ條の標注に云ひき。【七六】囮磨布理許、詳ならず。今按に眞振來か。其は劒を振て拂ひ作來（ツツキ）つと云ッ事なるべし。明日香非集に、夕附日けふ紅のまふりでに包む涙や色に出づらんと云ふマフリも、紅色を兼て眞振手とは云へるなり。〇伊與郡比古神、式に伊豫國伊豫郡伊豫豆比子命神社。■胄岡、胄原作レ胃、誤。今從二一本一。〇宇知賀久牟、戸之冠辭。〇豐富、豐穗、蓋一神。〇今神東郡陰山莊、有二豐富村一、多可郡又有二豐部村一、穗部一際相通。囮的部。和名抄に、射梁を以久波止古路と注し、筑後國郡名生葉ハ以久波とあるは、景行紀に見えたる的（イクハ）邑と同地なるにて、的をイクハと訓む事を知るべし。的部の氏祖の事は仁德紀に詳なれば、爰に略く。■倭名鈔曰、神城郡的部。按圖、神東隣郡多可郡有二的場村、又岩坐神村一。囮玉依比賣命、是は神武天皇の御母、又山城風土記等に同名見えたり。【七七】囮高野社、式にも洩れて世に隱れたるは惜むべし。普く郡中を搜りて顯はし奉らまほしき業なり。〇槻社の社ノ字よみえず、杜の誤か。然らば古字書に、ヤマナシとも、ユヅリハともよみて、槐と二種なり。■社字恐衍。囮託賀、和名抄に、多可に作れり。高者は天なり。所レ謂蹢レ天なれば、此大人は決（サダ）て人にはあらじ、神にぞ坐（マシマシ）けん。蹢は日本靈異記に不牟と注せり。〇賀負、和名抄に、賀美に作れり。此郡に那珂賀母の二郷あれど、此記に見えず。卽上中下にて略國に例あり。■按御圖帳、有二上村一。【七八】■因、原作レ田、今從二一本一。囮大海、オホミと訓むべけれど、爰に明石郡大海里とあるは、和名抄に、邑美に作り、於布美と注せるに據れり。■大海、倭名鈔曰、明石郡邑美鄕是也。按二國圖一今作二近江寺村一。〇生松二字、據レ例宜レ爲二分注一。〇倭名鈔曰、多可郡荒田。

〔匡〕盟酒は祈る事ありて、神に申して造る酒を云ふ。〔標〕意（成熟ノ下）恐竟。〔匡〕令養の養は饗の誤なるべし。
〔標〕同じ。〔匡〕天日一命、式に天目一神社と有り。日は目の誤り。〔標〕神名式曰。多可郡荒田神社、天目一神
社。新抄格勅符曰、荒田神社四戸、播萬國、天平神護元年充。〔匡〕知二其父一。かかる事上代は常にありけん。
山城風土記にも見ゆ。【七九】〔匡〕荒田村、和名抄に、荒田郷。式に荒田神社。○次土黒の次は、以の誤。
〔標〕倭名鈔曰。多可郡黒田。按圖、今有二黒田村一。下文條布里條有二國造黒田別一、豈居レ此邪。○古事記云。
大國主神娶下坐二胸形奥津宮一神多紀理毘賣命上生子阿遲鉏高日子根神。〔匡〕奥津島比賣命は、多紀理毘賣命な
り。○任は、妊の誤。古事記に、大國主神娶下坐二胷形奥津宮一神多紀理毘賣命上生子云云。〔標〕按妊古作レ
任。〔匡〕侍訖の侍は、時の誤か。○月盡、古言なり。萬葉五に、吉倍由久等志乃、同十五に、月日毛伎倍奴
云云。此伎倍を盡なりとしらで、來經てふ事に見て朝尒食尒など云ふケを、來經の切と云へるは云ふにたら
ぬ僻說なり。總て反切の格は、音韻啓蒙に論ひおきつ。〔標〕按古事記、美夜受比賣歌、阿良多麻能都紀波岐
閇由久。萬葉集（卷五廿六丁）阿良多麻能、吉倍由久等志乃、又（十一、十六丁）璞之寸戸我竹垣、又（卷
十四、四丁）阿良多麻能伎倍乃波也之之、皆言二歳月經過一也。【八〇】〔匡〕老女、和名抄に、嫗ハ老女之稱也。
於無奈。○都麻、和名抄に洩れたり。味の轉なり。都麻ハ、有味と音通ふ。〔標〕字末、都麻通音、故云二都
麻一。○按國圖、多可郡有二都麻町一。〔標〕舟（波刀ノ上）恐丹波。【八一】〔匡〕氷上、和名抄に、丹波國氷上郡
氷上郷ハ比加美とあるに據リてよみつ。〔標〕按播磨國賀東多可二郡、與二丹波國氷上、多紀二郡一相接。○吾
字上（○何故ノ下）疑脫二強字一、故今補レ之。〔匡〕建石命ハ、建石敷命の略か。神前郡の條に伊和大神の御子
と有リ。〔標〕建石命、神前郡條、有二建石敷命一疑同神。○我其の其は甚の誤なるべし。〔標〕同說。○太字（○
都ノ下）原脫、今從二一本一。○按國圖、今有二下比延、上比延、及比延町一。〔匡〕奚人ハ、揖保郡伊刀島ノ條にも
見えて、何れもカリビトと訓みおきつ。韻書に奚ハ與職切音弋とあれば、弋人の音を借りたるか。今按に、

周禮秋官に翨氏掌レ攻二猛鳥一とありて、翨謂爲二翅翼之翅一と注せり。かかれば、翼人も翨氏も、同義なる事を知るべし。〔標〕云字（〇鈴堀山ノ上）例補。【八二】〔匡〕麻奈志漏は、眞之白なり。犬に名ある事。垂仁記に、有レ犬名曰二足往一とあるをはじめ、しばしば書に見え、今も然り。〔標〕天皇（〇品太天ノ下）原脫二皇字一、今從二一本一。〇按、〔標〕古作レ猪、蓋相似而訛。〇云字例補。（〇阿富山ノ上）〔匡〕荷宗の宗は、家の誤なるべし。〔標〕云字例補。（〇目前田ノ上）〔匡〕目前田ハ、目割田なり。此次に和尓布多岐の傳を脫せり。【八三】〇阿多岐は、猪の怒狀なり。古事記、雄略天皇御世の件に、猪怒而宇多岐依來故天皇畏二其宇多岐一云云、夜美斯志能宇多岐加斯古美とあるに同ジ語なり。〔標〕打害之害、疑衍。〇云字例補。（〇阿多ノ上）〇古事記、雄略天皇條、猪怒而宇多岐依來、宇多岐、怒也。與二阿多岐一同語。〔匡〕法太、和名抄に脫せり。〔標〕法太、按高山寺本倭名抄、多可郡蔓田鄕。（波布太、國用這田）流布本倭名抄、作蔓莫、誤。法太、這田、音訓相同。按國圖、多可郡有二中畑、奥畑二村一、即法太之意乎。〇云字（〇冨田ノ上）原脫、今從二一本一。〔匡〕逐、神代紀の訓に從ふ。〔標〕逐下來字、今意補レ之。【八四】〔匡〕冠をミカゲとよむ事、前件にしばしば見えたり。〔標〕按、丹波播磨定レ堺事、已見二都麻里條一。〔匡〕堺國の上落字あり。〔標〕國界埋レ甕。〔匡〕花波之神、賀茂郡川合里條に花浪神に作れり。〔標〕按國圖、郡南有二板波村一。〇按神名式、近江國伊香郡、波彌神社。丹後國丹波郡、波彌神社。又丹後宮津志云、熊野郡花波里、今稱二波見一、據レ此波見、波彌蓋同地。波彌、花浪或同神。〔匡〕賀茂郡。和名抄に、賀茂に作れり。國造本紀に、針間鴨國造とあり。此地なり。〔標〕倭名抄曰、播磨國賀茂郡。〔匡〕下鴨、和名抄に脫せり。總て同郡鄕の名の上下に分れたるは、大方は上つ某下つ某と云ふべき例なれど、又然よまざるものあれば、姑くよまざる例に習ふ。詳二於上一は郡名の下に傳あるを云ふ。〔標〕倭名鈔曰、播磨國賀茂郡、上鴨。按國圖、加東郡有二上下鴨川村一。〔標〕按所以二字、（〇二里ノ下）本書在二次行下鴨里下一誤、今削レ彼補レ此。【八五】〔匡〕於居の於は、條布の上にありけんを、誤って爰に書入れしなら

ん。■篠布、疑修布訛、然下文皆作二篠布一、故不二輙改一、下倣レ此。侍從、原作二阿從一、今從二一本一。圉 當麻は、和名抄に、大和國葛下郡の鄕名にて、同郡に品遲ノ鄕もあり。古事記、垂仁ノ御件に定二品遲部一と有リ。垂仁紀に品遲部雄鯽と云フ人見ゆ。■按國圖、加西郡有二鴨谷村一。○號字（○煑坂ノ上）例補。○谷字（○箕ノ下）據二下文一補。○按國圖、加西郡酒見村有二酒大明神社一。○碓居、今有二加西郡牛居村一。○酒屋、今加東郡有二築枝村一、蓋是。【八六】圉 篠布、和名抄に脫せり。篠は修の誤リなるべし。■按國圖、加西郡有二吸谷村一。按篠布鄕、和名鈔不レ載。■在井、疑當レ作二有井一。圉 沒は沒なり。沒は沒にて仁德紀に沒レ水而死云云。■號曰、（○沒故ノ下）原作二曰號一、蓋倒、今訂レ之。圉 白鹿ハ、白鹿の誤なるべし。景行紀に、以レ蒜彈二白鹿一。仁德紀に、獲二白鹿一乃還之獻二于天皇一。■白橫不詳、蓋白猪訛。○倭名抄曰、加茂郡三重。○在（○昔ノ下）恐有。圉 笴は字書に見えず。是は筍の誤か。筍ハ平他字類抄に、ワカタケと注せれば、筍ノ字に通はし書きしならん。三重居ハ古事記倭建命の御件に、吾足如二三重ノ勾一而甚疲とあるに同じ。■笴疑筍字。○以布褁食。上下恐有二脫誤一、重上疑脫二三字一。古事記景行段、伊勢國三重村、名義與レ此稍同。○按夫木抄云、於伊良久乃、許志不多閇奈流、美奈禮杼毛、宇都惠哀都伎天、和加弥哀曾閇牟。大鏡云。此嫗伊止伊多宇老天、不多閇爾天爲太理。據レ此、一女拔レ筍負之、加以二褁糧一不レ能レ勝レ任、遂至二其身佝僂一不レ可レ起也。【八七】圉 楢原、和名抄に脫せり。楢は常にナラとよみ、柞はハハソと訓みならへるを、新撰字鏡に、楢を波波曾と注し、柞を奈良乃木と注せれば、何れによみても妨ケなきに似たれど、和名抄に、大和國葛上郡鄕名楢原ハ奈良波良と注せるに倣ヒて、柞ノ字をも然よみつ。■上楢字、原作猶、今據二下文一訂。圉 伎須美野、今來住村ありとぞ。隂は喚の誤リなるべし。橨底の橨は音を借リたるにはあらず。盃缶 ■ 棺などのきにて音訓假合の字なり。■按國圖、加東郡有二上下來住村一。○按、多可郡、有二黒田里一必有レ由矣。○按萬葉集云、伊奈太吉爾、伎須賣流玉者無二一。仙覺抄云、伊奈太吉者、頂也。伎須賣流者來住也。

言二明珠一在二掌中一也。今據二風土記一考レ之、佐須美之言藏也。倭姬世記有二國太摩佐志賣留國之語一、亦與二佐須美一同言。〓舂レ稻は、今云ヮ籾を舂くを上代は然云へり。催馬樂篠波に、あし原の以名川支加仁乃。玉葉集に、古へに今をくらぶの里人は、代代を越たるみしねをぞつく、廐牧令に稻三升と有り。【八八】〓按、所以下、據レ例脫二號玉野三字一。〓意奚は仁賢、袁奚は顯宗天皇を申す。〓坐字（〇美囊ノ上）恐衍。〇按國圖、加東郡黑川南有二玉埼村一。〓根日女老云云、是は雄略天皇の御世の、赤猪子の古事に殆似たり。〇長逝は、死める事を云ふ。扨根日女の身まかりしは、二皇子京に還りまして後にや。〇起勢、和名抄に脫たり。起は、假名に用ひたる例なければ、巨ノ字の誤なるべし。〓按國圖、加東郡有二西中東古世三村一。【八九】〓巨、原作レ臣、今從二一本一。〇等、原作レ寺、即草體、今訂レ之。〓播磨之國の之ノ字は衍なり。〓田村君、君字恐衍。〇在、（〇百八十ノ上）當作有。〇按國圖、加東郡有二黑川村一。〓山田、和名抄に漏らせり。〓按國圖、加東郡有二山田村一。【九〇】〓迻田の上下落字あり。〇肥人朝戶君、和名抄に、〓肥後國谷城郡鄉名〓部有り是なり。谷城は日向に堺ひ、上代は彼わたり迄日向と云ひし故に、日向ノ肥人とは云へり。姓氏錄未定雜姓に、朝戶ハ百濟國人〓廣使主朝戶之後と有り。〓和名鈔、肥後谷城郡有二〓部鄉一、即朝戶也。〓天照大神、式に揖保郡粒坐天照神社。〇申ノ下なる仰は衍字。〓同說。〓端鹿、和名抄に漏れたり。〓按國圖、加東郡有二椅鹿寺一。〓今在二其神一には猪飼野に書キつづけしが離れたるなめり。〓按今在二其神一未レ詳二何神一。〓良弼按、今在其神四字、宜下移二上文曰二猪飼野一下一爲中分註上。〇有今、有字恐衍。【九一】〓倭名抄曰、賀茂郡穗積御圖帳曰、賀東郡穗積村。〇號（〓野ノ上）字原脫、今從二一本一。〇臧（〇若ノ下）原作レ賊、今訂レ之。〓穗積臣、姓氏錄に、伊香賀色雄命ノ男大水口宿禰之後也。〓國圖、穗積西南有二小部野村一。〓無二小目一とは廣く一目に見ゆるを云ふ。〓故號曰、原作二故曰號一恐倒、今訂。【九二】〓佐佐御井、古歌に、たりま井とよめるは是か。愛き小目の篠葉に霰降とも勿枯ね小

目の篠葉なり。○雲潤、和名抄に脱たり。この雲潤を如此よみてはあれど、潤は韻鏡十八轉稕字の所屬にて、尒行の韵なれば、雲彌(ウレ)の轉じて、ウズニとはよみ難し。猶よく考ふべし。〔補〕按國圖、三木郡東西這田村北有ニ法太川一川北有ニ久留美村一。久留美、疑雲潤之轉。〔註〕云尒、この件に二所ありて、外に如此書ける例なし。【九三】〔註〕河内、和名抄に川内に作る。〔補〕御國帳曰、賀西郡河内村。〔註〕住吉大神は、式に長門國豐浦郡住吉坐荒御魂神社、筑前國那珂郡住吉神社と有る此二坐の中なるべし。然らざれば、上坐と云ふに叶はず。又此郡に、和名抄に住吉鄕あり。式に住吉神社坐ㇲるも、此件の事に依ッて祭れるなるべし。然ルに賀古郡明石郡に住吉ノ鄕ありて、和名抄に須美與之と訓注あれば、然よむべき理ッなれど、猶古訓に從ひぬ。〔補〕倭名鈔曰、賀茂郡川合。名跡志曰、河合鄕粟生川、是也。源出ニ丹波一、南流會ニ于高砂一。按國圖、賀東郡有ニ川井村一。【九四】〔註〕已夫、萬葉九に預(アラカジメ)已妻離而(オノツマカレテ)、同十三に已夫之步從行者(オノツマノカチヨリユケバ)。○妾、和名抄に、妾非ニ正嫡一故以レ接爲レ稱。和名乎無奈女(ヲムナメ)。○五藏、和名抄に、肝心脾肺腎とのみ有りて訓を洩せり。是は各其名あれど、五藏と總べ云ふ名をしらず。大同類聚方に奈可和太と云へるは、藏府を總(スベ)云へりと聞ゆれば姑く從ひて訓つ。○美囊、和名抄に美奈木と注し、今三木と書けり。〔補〕倭名抄曰、播磨國美囊(美奈木)、按美囊今作ニ三木一、按大兄伊射報和氣命、即履中天皇御名。〔註〕大兄伊射報和氣命は、履中天皇を申す。○甚美哉は、イトウルハシキカモと訓むべけれど、地名に疎し。神代紀に姸哉美哉を、然よめるに從ふ。甚ノ字添。たるは妨なし。【九五】〔註〕志深、和名抄に、之之美(シジミ)と注し、紀に縮見に作れり。〔補〕倭名抄曰、美囊郡志深(之之美)名跡志曰、有ニ志染庄縮見岩屋一、履仲天皇二皇子所レ隱云。按此二皇子、即履仲帝孫、此爲レ子誤。○伊射報、報、原作レ射誤、今從ニ上文一訂。〔註〕信深貝、和名抄に、蜆貝ハ之之美加比。萬葉六に、住吉乃粉濱之四時美(シジミ)開藻不見(アケモミズ)。○御飯筥、古代の狀仰ぎ見るべし。○和那散、式に阿波國那賀郡和奈佐意富曾神社。〔補〕按倭名抄、阿波國那賀郡和射鄕。國圖今猶有ニ和射村一、蓋古和那散地。〔註〕於奚袁奚の皇子等の御事

は、顯宗天皇前紀に詳なり。市邊天皇は市邊ノ押羽ノ皇子にて、履中天皇の御子なり。天皇と稱へ申すは、倭建命を常陸風土記に天皇と申せり准へ知るべし。[illegible]汝（○父ノ上）疑御訛。[illegible]顯宗紀云、穴穗天皇三年十月、天皇父市邊押磐皇子、及帳內佐伯部仲子、於二蚊屋野一爲二大泊瀨天皇一見レ殺、因埋二同穴一、於レ是天皇與二億計王一、聞二父見一レ射恐懼逃亡、自匿、帳內日下部連使主、與二其子吾田彥一、竊奉二天皇與二億計王一、避二難於丹波余社郡一、使主云云、尙恐レ見レ誅、從レ玆遁入二播磨國縮見山石室一而自經死。[illegible]推綿野の推は、縦の誤か。またクダリともよめれば妨なし。雄略紀に來田綿蚊屋野とあり。古事記も同ジかれど來田を久多に作れり。○日下部連意美、顯宗紀に帳內日下部使王に作れり。○石室、顯宗紀に縮見山石室と有リ。萬葉三に、皮爲許寸久米能若子我伊觸家留三穗乃石室者雖見不飽鴨。此歌の詞書に紀伊國とあるはおぼつかなし。顯宗紀に、弘計王更名ノ來目稚子とあれば、此所の石室なるべし。[illegible]持（○物桉ノ上）原作レ特誤、下文登持亦同。【九六】[illegible]伊等尾、紀に適せり。[illegible]顯宗紀、縮見屯倉首忍海部造細目也。古事記清寧段、山部連小楯任二針間國之宰一時、到二其國之人民名志自牟之新室樂一。○詠（○弟立ノ下）原作レ詠誤、今訂レ之。[illegible]多良知志伎、詳ならず。[illegible]按應神紀歟、有二阿羅知之吉備那流伊慕之句一、據レ此。多良知志、蓋冠辭。吉備貢レ鐵、見二三代格、延喜主税式一。[illegible]吉備鐵は、古今集に、まかねふく吉備の中山云云。○由打の由は、田の誤。[illegible]淳（○水ノ下）原作滴訛今訂。○按青垣々、々當作之、山按未詳、按山投恐山於訛、倭言大和山邊郡乎、蓋市邊皇子所居。[illegible]投歇、遊仙窟に、欲レ投二娘子一片時停歇上。○御足末、[illegible]播磨紀に枝孫をよめり。[illegible]末原作レ来誤、今訂レ之。[illegible]奴良麻云云、麻は助辭なり。紀に弟日僕と有リ。○領、和名抄に國曰レ守郡曰レ領、皆加美あれど、西宮記に、大領ハ古保乃見ヤツコ、少領ハ爪ナイミヤツコと注し、孝德紀に、國造郡ノ領と有るに從ふ。○山部連少楯、少は小に作るべし。紀に山部連先祖伊與來目部小楯。○手白髮命ハ仁賢天皇の皇女にてハ繼體天皇の大后なり。此二皇子の御母は、蟻臣ノ女荑媛なれば、母は伯母忍海命の誤なる事しるし。紀には此

命を、二皇子の御姉に傳へたれど、今古事記によりて論ふ。【九七】■ 蓑、原作レ蓑誤、今訂レ之、按手白髮命爲二繼體天皇皇后一非二三皇子母一也。囯 破、或人云、碕の誤りなり。碕は古き啓ノ字なりとぞ。■ 破疑啓字訛、古文啓作レ啓。囯 高野宮、次に高野里あり、件の宮は還幸前なる事紀に見えたり。○倉は屯倉と有るべし。■ 按倉上恐脫二屯字一。囯 高野、和名抄に多加乃。■ 按仁賢天皇紀元年注云、或本云、億計天皇之宮有二二所一焉、一宮於二川村一、二宮於二縮見高野一、其殿柱至レ今未レ朽。所謂或本蓋指二此風土記一也。■ 據レ此少野池野二宮、則弘計天皇所レ御也。○播磨御國帳、有二三木郡池野村一。囯 祝田、式に揖保郡祝田神社。■ 按、祝田當レ讀云二波布太一。倭名抄、山城祝園鄕訓二波布曾乃一、可レ例。今有二東這田、西這田二村一。播磨國東這田莊、見二東鑑一是也。囯 玉帶志比古、佐用郡引舟山條に大神之子玉足日子玉足比賣命とある、是なり。○大稻女神、詳ならず。■ 大稻女、女恐男。囯 帶志比賣は、神功皇后なるべし。○豐稻女は、三代實錄貞觀二年十一月、授二河內國從ノ五位下豐稻賣神正五位下一とあるに同神なるべし。○坐於は、志深の上に有るべし。【九八】○三坂は、式に同郡御坂神社。■ 三垣、恐三坂訛、神名式曰、美囊郡御坂神社。囯 八戶挂云云、考へなし。○志許ノ下乎字を脫せり。○吉川、和名抄に與加波。■ 倭名抄曰、美囊郡吉川（與加波）。囯 枝野の枝は、枚の誤なるべし。和名抄に平野比良乃。■ 倭名抄曰、美囊郡高野、（多加乃）、平野、（比良乃）。

明石郡逸文標注

於吉の吉ノ字を萬葉緯に井只に改め引けり。按に吉は井上を一字に誤り合せたるか。日本紀纂疏に引ける風土記に、明石驛家有二井一楠樹生二其上一と有り。是は略きて引きたる文にはあれど、其上は井上を換へたるなるべし。○朝日云云、明石の地理を推すに、淡路は正南聊カ東にふれたれば、朝日に蔭刺スべき方にあらず。

是は同ジ御世の古事を古事記に、免寸河之西有二一高樹之影云云を誤り語り傳へたるなるべし。○速鳥、續紀廿に、舶ノ名ハ播磨速鳥並敘二從五位下ハ其冠者各以レ錦造ヘ、入唐使所レ乘者也とあるは、此件の古事によりて、名づけしならん。○住吉、和名抄に、明石郡住吉ハ須美與之とある此地にて、大倉は今大倉谷と云フ所あり、是なり。○云因の因は、目の誤なるべし。○命ノ下ノ者は著の誤か。○出二善驗一而の而は下の以二舟浪一へ係れり。○八尋桙根の根は加たるなり。續紀二に獻二杜谷樹八尋桙根一。倭姫世記に以二比比羅木乃八尋桙根一云云。是は底附と云フに掛れる序なり。○底不附とは無レ限遠き國を云ふ。○誂寶眉引は、仲哀紀に如二美女之睩一とある是にて遠山陶に見ゆる狀を云ふ。○玉甲は、玉を磨き整へたる狀を云ふ。○苫尻有寶の四字考へなし。日本紀通證に苫を若に改め若レ尻とよみたるは如何。○白衾、仲哀紀に、栲衾に作れり。其織たる布の白き故に、義を以て白衾と書けり。○丹浪は、舟浪の誤なるべし。○平伏賜を、原本平賜伏とあるは、決めて誤リなめれば、今改メつ。○舟裳は、記傳に後世幕の類なるべしと云へり。通證に丹裳に改メたり。○藤代は、海部有田二郡の堺にありて、管川も其邊リにありと、或書に云へれど、介保都比賣命は、式に伊都郡丹生都比女神社とある是にて、海部郡とは遙に隔れり。猶土人に問ふべし。この比賣神は、大神之子とあれば大國主神の御子なるを、諸神記には伊弉諾伊弉册之御娘と記せり。

追次て云フ。

毎里ノ下に、土ハ上ノ中、或は下ノ中などあり。是は其地の沃塉により、定めたるものにて、外籍にも然る例間買に見えたり。

加古郡比禮墓ノ條に、赤石郡厨御井云云。東雅に、クリは黔色なりヤは屋なり。烟火のため、薰り黒き屋なれば、かく云ふなり、と云へる如く、煮炊キする處の名なり。上代は、供御の魚類野菜等進る地を、ミクリ

ヤと云ひしゆゑ、京近き國國に、かかる地名おほかり。類聚國史、天長八年五月、停ニ止河内國供御ノ堤外、赤江堤内、赤江二處ヿ云云。是は川魚を進りし、御厨にて、河内國にも其名(ノコ)存れり。西宮記に、内膳御厨別當筑摩長と記せり。別當は、御厨の長官にして、筑摩は近江國の地名なり。彼地より、御贄を進りし事、三代實錄、四十八に見えたり。扶桑略記、延長二年二月十四日ノ條に、停ニ廢高砂ノ御厨ノ魚ヿ。令レ供ニ精進物ヿとある高砂は、加古郡なり。上代播磨國より、供御の物を進りしは、一所のみならず。

佐用郡速湍ノ條に、速湍ノ社ニ坐神、廣比賣命故邪都比賣ノ弟云云。當郡に佐用都比賣神社と、天一神玉神社の外は、式に見えず。かばかり神名まで、著れたる舊社の、埋レ果つるは、甚甚(イトイト)歎クべき業なり。廣姫は繼體天皇の妃に、同名二人あり、敏達天皇の皇后にも、同名見ゆれど、其レらにはあらじ。邪都比賣は、仁賢天皇の御姉にして、紹運錄に載りたれば、廣比賣は、其御弟に坐て、史に洩れたるならん。此姫命の播磨ノ國に、下り給ふは、御兄弟の由緣あればなり。

記中郡ノ字はアガタと訓むべし。郡より縣を狹きものにして郡縣と次第するは、支那國の制(サダ)めにて、我古へにあらず。皇國にては郡も縣も差別なく總てアガタと訓み來れり。續紀二に、縣ノ犬養ノ連大侶と云ふ人を一本に郡ノ犬養に作れり。祝詞式に、倭ノ六ノ御縣と記せるは、今見にある六郡名なり。猶此例おほかり、委クは郡名私考に記せり。此郡ノ字をコホリとよめるは朝鮮の方言なれば、正訓にあらず。其は類合、又訓蒙字會等に見えたり。

此記に、某鄕と云フべきを某ノ里と記せり。戸令に凡戸ハ以ニ五十戸ニ爲レ里、義解に、若シ滿ニ六十戸ニ者、割ニ十戸ニ立ニ一里ヿとあり。出雲風土記、意宇郡、郡鄕ノ條に鄕ノ字者、依ニ靈龜元年ノ式ヿ改レ里爲レ鄕とあれば、此記は靈龜已前に撰びし事しるし。揖保郡、狹野村ノ條に、川内國泉郡とあるも、和泉國いまだ、分立せざりし前なる事を併せ見るべし。抑風土記は元明天皇、和銅六年五月二日に畿内七道、諸國郡鄕ノ名、著ニ好字ヿ

其郡内、所ﾚ生銀銅彩色、草木禽獸魚虫等、具錄ニ色目ﾆ、及土地沃塉、山川原野、名號ノ所由、又古老相傳、舊聞異事、載ニ于史籍ニ言上と布告し給ひし時、この紀をば編輯して進りし事論なし、其他、國國にも、往往作りしもあり、又湮滅せしも多かりけん。醍醐天皇延長三年十二月十四日に至り、再ﾋ撰錄の官符下りし事、朝野群載に見えたり。猶この風土記に關かる事どもは委ｸ諸國風土記考に論ひおけり。

美嚢郡志深ノ里の條に、近江國摧綿野云云、顯宗宅に來田綿蚊屋野とあり。是は近江國蒲生郡、日野村の古名を綿向と云ﾋ、其地に綿向ノ神社あり。其邊に北畑と云ﾌ地あり、來田綿の轉ならむと土人は云へり、其地に御墓と稱する所あり、また其ﾚより二十丁許ﾘ東、音羽村に古墳あり、押羽皇子改葬の地なりと傳へ云へり。此地の事古事記傳にも定めえざれば、聞えたる儘をしるす。

同郡同條、高野ノ宮少野宮、川村ノ宮、池野ノ宮とあるは、顯宗元年ノ紀の細字に、或本云、弘計天皇之宮有ニ二所ﾆ焉。一宮ﾆ於少野ﾆ、二宮ﾆ於池野ﾆ。仁賢元年ノ紀の細字に、或本云、億計天皇之宮有ニ二所ﾆ焉。一宮ﾆ於川村ﾆ、二宮ﾆ於縮見高野ﾆ。其殿柱至ﾚ今未ﾚ朽とあるを、書紀の注者、右の宮號を委ｼ大和國に說ﾃつけたるは、大く誤れり。

此風土記は、安政元年の春、京師なる學友ら、或家に秘めたるを、辛ｸして取出しを、予も寫しとりて、釋紀、通義、日本紀纂疏、仙覺萬葉抄、詞林採葉、塵添壒囊抄等に引けるに讀み比べ、訓を附けて、此標注をば書ｷ出ﾃつ。其は我家學に物しし播磨ノ國人らに撰かされてなり。

此風土記に見えたる地名等の中に知りがたき所所を、彼國に問に遣ﾂしを、其は是なりといひおこせしは、飾東郡射楯兵主神社、神主上月爲彥、揖西郡加茂神社、神主岡平保なりと、彼國のをしへ子、西松茂彥が書きて告げ來りぬ。○明治四年五月（○以上、敷田年治著、標註播磨風土記逸文の頭註及び追考）

井口、原作井吉、今據萬葉緯訂之。○按國圖、明石郡明石、與淡路岩屋相對。○綴毛、天平寶字二年三月丁亥、播磨國造具、並叙從五位下、但年代悠久疑同名異船。○目原作因、今據續紀伊澤本及古本訂之。○按名跡志、三木郡有丹生野、古所傳云、許許爾許須、加美乃止理毛毛、阿計衛保不、伊止能宇知久佐、國布能止波與夫、又按三木國會、三木郡丹生山田、有丹生山丹生寺、據此、本文蓋美囊郡之遍文。○著、原作者誤、今從伊澤本。○驗、原作臉誤、今據萬葉緯、宇佐八幡緣起所引訂之。○梓、原作杵誤、今據宇佐緣起訂之。○貴、原作責據萬葉緯宇佐緣起訂之。○原、原作甲、今從伊澤本。○苦、伊澤本云、異本作昔、緣起作苦、皆誤。今按苦尻當作薦枕、薦者作蘆、枕尻字畫相似、傳寫之久、遂誤作苦尻也。薦枕卽意之冠辭、神名式、有薦枕高御座日神、萬葉集、有薦枕高久會倭之語、可云之證。○賜伏、宇佐緣起作代賜。按、代賜疑當作伏賜。○舶、原作舶誤、今訂之。○攬、疑攬。○加納諸平云、按管川今訛稱筒香、卽天野邊之庄名也。又聞之鄉人云、今富貴、筒香、大和等高峰、稱水呑峰。又石堂峰、或子粒樣者、卽古名藤代峰是也。

此播磨風土記ハ、卷首闕タレド賀古、餝磨、揖保、讚容、宍禾、神前、託賀、賀毛、トアル次第ノ倭名鈔ト同ジクテ、但赤石郡ノミナキヲ思フニ、卷首ニ明石郡アリケンコト知ルベシ。サテコノ次第ノ鈔ト異ナルコトナキニ、赤穗郡ノアラザルハ疑ハシナド云ヒ思フ人モアメレド、此記ニ赤穗郡ナキハ、舊アリシガ失セシモノナルベシ。サレド赤穗郡ヲ置カレシコト書ニ見エネバ如何トモシ難シ。故レ本書ヲ考フルニ決メテ和銅ニ注進レルモノトゾ思ハルル。其ハ伴ノ信友ガ言ニ、マヅハヤク風土記ヲ召レタリシコトハ、續日本紀ニ、和銅六年五月甲子制ス、畿內七道諸國郡鄉ノ名著ニ好字ヲ、令レ作ニ風土記ヲ、其郡內ノ所レ生銀銅彩色、草木禽獸魚虫等物、

其鎭ニ色目ハ及土地ノ沃塉山川原野名號ノ所由、又古老相傳舊聞異事、載ニ于史籍ニ言上。マタ仙覺ガ萬葉集鈔ニ、大和國宇智郡ノ事ヲ說テ、和銅六年令レ註ニ進風土記ニ之時、任ニ太政官下之旨ニ、定ニ二字ニ用ニ好字ニ也、ト云ルヲ思ヒ合セテ辨フベシ。此和銅ノ度ニ注進レル風土記ノ今世ニ遺レルハ、常陸風土記ゾ其ガ中ノ一篇ナルベキトイハレタルガ如ク、是モ亦其ガ一ツナルベシ。サルハ此記ノ例、郡里ノ下ニ土ノ上中下、マタ所ニ以號ニ其里ニ者、所ニ以云ニ其山ニ者、ナドアルハ、卽カノ土壤沃塉山川原野名號所由ト見エタルニ合ヒ、又郡里ノ舊事ヲ專ト記シテ、宍禾郡都太川ノ條下ニ、衆人不レ能レ得稱ハ、マタ傳云一家云ナド、各處ニアルハ、卽チ古老相傳舊聞異事トアルニ符ヒ、又飾磨郡安相里ノ條下ニ里名依ニ二字注ニ爲ニ安相里ニ、トアルハ卽チ定ニ二字ニト云ニ符合テ聞ユルハ、共ニ和銅ノ詔命ヲ奉リテ書ケル文ナルコト著ク、又續紀ニ、靈龜二年四月甲子、割ニ大鳥、和泉、日根三郡ニ、始置ニ和泉監ニ焉ト見エテ、此時ヨリ河內ノ和泉郡ヲ和泉監ニ隷シ趣ナルニ、此書揖保郡狹野村ノ條ニ、川內國泉郡トアルハ旣ク靈龜二年ヨリサキニ書終タル故ナルベク思ハルルガ上ニ、出雲風土記ニ鄕ノ字者依ニ靈龜元年式ニ、改ニ里ヲ爲ニ鄕トミエタルヲ、此記ニハ倭名鈔ノ鄕名ヲモ、里トノミアリテ、鄕ト記サザルヲモテモ、靈龜元年ヨリ以前ニ注進レルモノナルコト決シ。カク考ヘ定メテ又此書ニ庚午ノ年、庚寅ノ年トアル書ザマ痛ク近世ノコトヲイヘル如ク聞ユルニ附テ按フニ、庚午ハ天智天皇ノ御世ノ九年庚午ニテ、庚午年籍ヲ造レル年ニアタリ、庚寅ハ持統天皇ノ御世、朱鳥四年庚寅ニテ是モ造籍アリシ年ナレバ、此記注進ラレケン和銅ノ四十四年乃至二十四年以前ナレバ、當時云ナレシ詞モテ、如此サマニ記セルモノナルベケレバ、是モ亦後ノモノナラヌ證トハスベキナリ。已ニ此記ヲ讀ココロブガ餘リ、私ニ訓試ミ、マタ標注ヲモ聊モノセントテ、カニカクニ取看ルニ附ケテ、如此在疑モ出來ニタレバ其書ノカハリニカクナム。文久二年夏

栗田寛（○以上、栗田寛著、標註古風土記の播磨國逸文の頭注及序言）

肥前國風土記
全

肥前風土記序

さきは大のくに〳〵の風土記なるを。近き年は
またまで。人皆名でのみきけど。往昔の文ともし
のこれる。文字は脱もあり。書はいとくちもありて。いと
いとよみえがたくなるをえがたく。れなるときく。かくて五十槻
園の大人は。故ありてのぼりまして。かの書を敬
承て。古しへ学びのすぢとひきこえて。まなびのさへぎりども
かくいひし。ことよきこと。まさに殊にたゞ。なほこれをまなび

まくしつるハ。是はかのとゝもに。伊勢路に旅だちし
ごとも安くとて。やうて学ぶらうていであーしやる
小ぶゐさん様のつゞりしことゞもけ移りし給ゐ
うきつゝむうしゝ粉もほえて。ゐ一し其清まかぼ
此ゆまうへまゝきる鳥とぶゝき傍ゝ具て。もゝゝとゝらし
よしをぶさゝの文のはしむ出つけつ。

寛政十一年卅月廿二日

長谷川菅緒

崇神天皇
頸猴二字一本脫。

風土記　肥前國

郡。壹拾壹所。鄉七十。里百八十七。下驛。壹拾捌所。小路。烽。貳拾所。下國。城。壹所。寺。貳所。僧寺。

肥前國者。本與肥後國合爲一國。昔者磯城瑞籬宮御宇御間城天皇之世。肥後國益城郡朝來名峰有土蜘蛛打猴頸猴二人。帥徒衆一百八十餘人。拒捍皇命。不肯降伏。朝廷勅遣肥君等祖健緒組伐之。於茲健緒組奉勅。悉誅滅之。兼巡國裏。觀察消息。到於八代

峯一本作宿

賊旧本作[illegible]

君字旧本脱。因思火之火従之誤乎。

景行天皇

大隅国熊毛郡贈於郡

葦北者肥後国葦北郡

郡白髪山。日晩止峯。其夜虚空有火。自然燎稍々降下就此山。燎之時健緒組見而驚怪。參上朝廷奏言。臣辱被聖命遠誅西戎。不霑刀刃梟賊自滅。自非威靈何得然之。更擧燎火之狀奏聞。天皇勅曰。所奏之事未曾所聞。火下之國可謂火國。即擧健緒組之勲賜姓名。曰火君健緒純。便遣治此國。因曰火國。後分兩國而為前後。又纏向日代宮御宇大足彥天皇誅球磨贈於而巡狩筑紫國之時。從葦北火流浦發船幸於火國。度海之間日

肥後國八代郡

和名抄云基肄木伊

筑後國御井郡

沒夜冥不知所着忽有火光遥視行前天皇勅棹人曰直指火處應勅而往果得着崖天皇下詔曰何謂邑也國人奏言此是火國八代郡火也但不知火主于時天皇詔群臣曰今此燎火非是人火所以号火國知其尓由

基肄郡　郷陸所　里十七　驛壹所　小路

昔者纏向日代宮御宇天皇巡狩之時御筑紫國御井郡高羅之行宮遊覧國内霧覆基肄之山天皇勅曰彼國可謂霧之國後人改号基肄國今以為郡名

長岡神社 在郡東

同天皇自高羅行宮還幸而在酒殿泉之邊於此薦膳之時御具甲鎧光明異常仍令占問卜部殖坂奏云此地有神甚願御鎧天皇宣實有然者奉納神社可為永世之財因号永世社後人改曰長岡社其鎧貫緒悉爛絶但冑并甲板今猶在也

酒殿泉 在郡東

此泉之季秋九月始變白色味酸氣臭不能喫飲孟春正月變而清冷人始飲喫因曰酒

胡一本作阿、依下文改之。

欲日本作設

比賣語曽社神見垂仁紀二年之條。

井泉後人曰酒殿泉

姫社郷

此郷之中有川名曰山途川其源出郡北山南流而會御井大川昔者此川之西有荒神行路之人多被殺害半凌半殺于時卜求祟由兆云令筑前國宗像郡人珂是胡祭吾社若合願者不起荒心覓珂是古令祭神社珂是古即捧幡祈禱云誠有欲吾祀者此幡順風飛往墮願吾之神邊使即擧幡順風放遣于時其幡飛往墮於御原郡姫社之社更還

飛來落此山途川邊之田村珂是古自知神之在家其夜夢見臥機（謂久都毗枳）絡垜（謂多々利）儛遊出來壓驚珂是古於是亦織女神即立社祭之自尓已來行路之人不被殺害因曰姫社今以為鄕名

養父郡　鄕肆所。里十二。烽壹所。

昔者纏向日代宮御宇天皇巡狩之時此郡佰姓擧部参集御狗出而吠之於此有一產婦臨見御狗即吠止因曰犬声止國於此訛謂養父郡也

和名抄豊後國海部郡日理。又肥後國菊池郡日理。日理日疑曰訛乎。

鳥樔郷　在郡東。

昔者軽島明宮御宇誉田天皇之世造鳥屋於此郷取聚雜鳥養馴貢上朝廷因曰鳥屋郷後人改曰鳥樔郷。

日理郷　在郡南。

昔者筑後國御井川渡瀬甚廣人畜難渡。於茲纏向日代宮御宇天皇巡狩之時就生葉山為船山就高羅山為梶山造備船漕渡人物因曰日理郷。

狹山郷　在郡南。

推古天皇

同天皇行幸之時。在此山行宮徘徊。望四方分明。因曰分明村。分明謂佐夜氣志。今訛謂狭山郷。

三根郡　郷陸所。里十七。驛壹所。小路。

昔者此郡與神埼郡合為一郡。然海部直鳴請分三根郡。即縁神埼郡三根村之名以為郡名。

物部郷　在郡南。

此郷之中有神社。名曰物部經津主之神。曩者小墾田宮御宇豊御食炊屋姫天皇令来

目皇子為將軍遣征伐新羅于時皇子奉勅
到於筑紫乃遣物部若宮部立社於此村鎭
祭其神因曰物部鄕
漢部鄕在郡東
昔者来目皇子為征伐新羅勅忍海漢人將
来居此村令造兵器因曰漢部鄕
米多鄕在郡南
此鄕之中有井名曰米多井水味鹹曩者海
藻生於此井之底纒向日代宮御宇天皇巡
狩之時御覧井底海藻即勅賜名曰海藻生

𢜶旧本作殃以例者改之。神埼之埼者字之誤字。

寐旧本為裏以例者改之。安穏之二字恐衍者。訓尓世久万。字恐有誤

井今訛米多井以為郷名。

神埼郡　郷玖所。里十六。驛壹所。寺壹所。僧寺

昔者此郡有荒神往来之人多被殺害。纒向日代宮御宇天皇巡狩之時。此神和平自尒以来無更有𢜶。因曰神埼郡。

三根郷　在郡西。

此郷有川。其源出郡北山南流入海。有年魚。同天皇行幸之時。御船従其川瀬来御宿此村。天皇勅曰。夜素御寐甚有安穏。此村可謂天皇御寐安村。因名御寐。今改寐字為根。

船帆郷 在郡西

同天皇巡狩之時。諸氏人等。擧落棄船。擧帆参集於三根川津。供奉天皇。因曰船帆郷。又御船沈石四顆。存其津邊。此中一顆。高六尺。徑五尺。一顆。高四尺。徑五尺。無子婦女。就此二石。恭禱祈者。必得妊産。一顆。高四尺。徑五尺。一顆。高三尺。徑四尺。亢旱之時。就此二石。雩祈者。必為雨落。

蒲田郷 在郡西

同天皇行幸之時。御宿此郷。西薦御膳之時。蝿甚多鳴其聲大囂。天皇勅云。蝿聲甚囂。因

景行天皇

下一本作下

又疑丈之誤乎

曰二蒲田郷一。今謂二蒲田郷一訛也。

琴木岡。高二丈。周五十丈。在二郡南一。此地平原元来無レ岡。大足彦天皇勅曰。此地之形。必可レ有レ岡。即令二郡丁起二造此岡一。造畢之時。登レ岡宴賞。興闌之後。竪二其御琴一。琴化為レ樟。高五丈。周三丈。因曰二琴木岡一。

宮処郷。在二郡西南一。同天皇行幸之時。於二此村一奉レ造二行宮一。因曰二宮処郷一。

佐嘉郡　郷陸所。里十九。駅壹所。寺壹所。

景行天皇皇子

昔者樟樹一株生於此村幹枝秀高莖葉茂朝日之影蔽杵島郡蒲川山暮日之影蔽養父郡草横山也日本武尊巡幸之時御覧樟茂榮曰此國可謂榮國因曰榮郡後改号佐嘉郡一云郡西有川名曰佐嘉川年魚有之其源出郡北山南流入海山川上有荒神往來之人半生半殺於茲縣主等祖大荒田占問于時有土蜘蛛大山田女狹山田女二女子云取下田村之土作人形馬形祭祀此神必在應和大荒田即隨其辭祭此神神歆此

年常二字未詳

奈遂應和之。於茲大荒田云此婦如是實賢女故以賢女欲爲國名因曰賢女郡。今謂佐嘉郡訛也。又此川上有石神。名曰世田姫。海神。年常謂鰐魚。逆流潛上到此神所。海底小魚多相從之。或人畏其魚者無殃。或人捕食者有死。凡此魚經二三日。還而入海。

小城郡　郷漆所。里二十。驛壹所。烽壹所。

昔者此村有土蜘蛛。造堡隱之不從皇命。日本武尊巡幸之日。皆悉誅之。因号小城郡。

松浦郡　郷壹拾壹所。里二十六。驛伍所。烽捌

所。

昔者氣長足姬尊欲征伐新羅行於此郡而進食於玉島小河之側於茲皇后勾針為鈎飯粒為餌裳絲為緡登河中之石上捧鈎祝曰朕欲征伐新羅求彼財寶其事功成凱旋者細鱗之魚呑朕鈎緡既而投鈎片時果得其魚皇后曰甚希見物[希見謂梅豆羅志]因曰希見國今訛謂松浦郡所以此國婦女孟夏四月常以針釣年魚男夫羅釣不能羅之

鏡渡 在郡北

宣化天皇

顯宗紀云弟日僕是也。万葉巻一。住吉乃弟日娘子

仙覺万葉抄所引肥前國風土記云松浦縣〻東三十里有帔搖岑〻頂有沼計可半町俗傳云昔者檜隈天皇之世遣大伴狹手彦鎮任那國于時奉命経過此墟於是篠原村有娘

昔者檜隈廬入野宮御宇武少廣國押楯天皇之世遣大伴狹手彦連鎮任那之國兼救百濟之國奉命到来至於此村即娉篠原村(篠謂志弩)弟日姫子成婚(日下部君等祖也)容貌美麗特絶人間分別之日取鏡與婦〻含悲啼渡栗川所與之鏡緒絶沈川因名鏡渡

褶振峯(在郡東烽家名曰褶振峯)大伴狹手彦連發船渡任那之時弟日姫子登此用褶振招因名褶振峯然弟日姫子與狹手彦連相分經五日之後有人每夜來與

有娘子名曰乙等比賣。容貌端正孤為國色。訓手比古便娉成婚。訓別之日。乙等比賣登此峯挙帔招。因以為名。

壅旧本作壅以擁格改之。誦旧本作語同改之。

志太者時節也。万葉巻十四。阿抱思太毛安波乃敝思太毛云云。於毛可多能和須礼牟志太波云云。猶有物語詞云左太過人無左太者忘太之類語乎。

婦共寢至曉早帰容止形貌似狹手彦婦抱其怪不得忍黙竊用績麻繫其人襴隨麻尋往到此峯頭之沼邉有寢蛇身人而沈沼底頭蛇而卧沼壅忽化為人即誦云志努波羅能意登比賣能古袁佐比登由母為祢弖牟志太夜伊幣尒久太佐牟也乎時弟日姫子之從女走告親族親族發衆昇而看之蛇并弟日姫子並亡不存於茲見其沼底但有人屍各謂弟日女子之骨即就此峯南造墓治置其墓見在

賀周里 在郡西北。

昔者此里有土蜘蛛。名曰海松橿媛。纏向日代宮御宇天皇。巡國之時。遣陪從大屋田子（日下部君等祖也。）誅滅時霞四含不見物色。因曰霞里。今謂賀周里訛之也

逢鹿驛 在郡西北。

昔者氣長足姫尊欲征伐新羅行幸時。於此道路有鹿遇之。因名遇鹿驛。驛東海有蚫螺鯛海藻海松等。

登望驛 在郡西。

拒旧本作狛以[illegible]按改之。

家嶷家誤歟。

昔者氣長足姫尊到於此處留為雄装御負之鞆落於此村因号鞆驛驛東西之海有蚫螺鯛雜魚海藻海松等。

大家嶋 在郡西

昔者纒向日代宮御宇天皇巡幸之時此村有土蜘蛛名曰大身拒皇命不肯降伏天皇勅命誅滅自尓以来白水郎等就於此嶋造宅居之因曰大家嶋嶋南有窟有鍾乳及木蘭廻縁之海蚫螺鯛雜魚及海藻海松多之。

値嘉嶋 在郡西南之海中有烽家三所。

志式島未詳。景行紀志我神。式疑我誤乎。

昔者同天皇巡幸之時、在志式島之行宮、御覧西海、海中有嶋、煙氣多覆、勅遣陪從阿曇連百足令察之、島有八十餘、就中二嶋、嶋別有人、第一嶋名小近、土蜘蛛大耳居之、第二嶋名大近、土蜘蛛垂耳居、自餘之嶋並人不在、於茲百足獲大耳等奏聞、天皇勅且令誅殺、時大耳等叩頭陳聞曰、大耳等之罪實當極刑、雖被戮殺不足塞罪、若降恩情得再生者、奉造御贄、恒貢御膳、即取木皮作長蚫、鞭蚫、短蚫、陰蚫、羽割蚫等之様、獻於御所、於茲

天皇垂恩赦放。更勅云、此嶋雖遠、猶見如近。可謂近嶋。因曰値嘉嶋。則有檳榔・木蘭・梔子・木蓮子・黒葛・篁・篠・木綿・荷・莧。海則有鮑・螺・鯛・鯖・雜魚・海藻・海松・雜海菜。彼白水郎、富於馬牛。或有一百餘近嶋。或有八十餘近嶋。西有泊船之停二處。一處名曰相子之停、應泊二十餘船。一處名曰川原浦、應泊一十餘船。遣唐之使、從此停發、到美禰良久之濟、即川原浦之西濟是也。從此發船、指西度之。此嶋白水郎、容貌似隼人、恒好騎射。其言語異俗人也。

知名抄云牂牁以繫船之所仙覚万葉抄所引肥前風土記云杵島郡縣南二里有一孤山從坤指艮三峯相連是名曰杵島坤者曰比古神中者曰比賣神艮者曰御子神一名軍神動則兵興矣郷閭士女提酒抱琴毎歳春秋携手登望樂飲歌舞曲盡而歸歌詞云阿羅礼符縷耆資麼加多嶮塢嵯峨紫弥刀區縒刀理我泥氐伊謀我提塢刀縷見肥前島也
捍旧本作捍以碍按改
之掩滅二字舊補滅誤

杵島郡　郷肆所里一十三驛壹所

昔者纒向日代宮御宇天皇巡幸之時御船泊此郡磐田杵之村于時從船牂牁之穴冷水自出一云船泊之處自成一島天皇御覧詔群臣等曰此郡可謂牂牁島郡今謂杵島郡訛之也郡西有湯泉出之巖岸峻極人跡罕及也

孃子山　在郡東北

同天皇行幸之時土蜘蛛八十女又有此山頂常捍皇命不肯降服於茲遣兵掩滅曰孃子山

藤津郡　郷肆、里九。驛壹所。烽壹所。

昔者日本武尊巡幸之時、到於此津、日没西山。御船泊之、明旦遊覽、繫船纜於大藤、因曰藤津郡。

能美郷　在郡東。

昔者纏向日代宮御宇天皇行幸之時、此里有土蜘蛛三人。兄名大白、次名中白、弟名小白。此人等造堡隱居、拒皇命、不肯降服。尓時遣陪從紀直等祖穉日子、令以誅滅於茲。大白等三人、但叩頭陳己罪過、共乞更入奉主人。因曰能美郷。

潮満之二字旧本作潮
詞以拘誤改之

託羅郷。在郡東臨海。

同天皇行幸之時、到於此郷。御覧海物豊多。勅曰。地勢雖少、食物豊足。可謂豊足村。今謂託羅郷。訛之也。

鹽田川。在郡北。

此川之源出郡西南託羅之峯、東流入海。潮満之時、逆流潮満、流勢大高。因曰潮高満川。今訛謂鹽田川。川源有淵。深二許丈。石壁嶮峻、周匝如垣。年魚多在。東邊有湯泉。能愈人病。

岡田本作晉

山田本作需

彼杵郡　鄕。肆所。里四。驛。貳所。烽。参所。

昔者纏向日代宮御宇天皇。誅滅球磨噌唹之時。天皇在豐前國宇佐海濱行宮勅陪從神代直遣此郡速來村捕土蜘蛛於茲有人名曰速來津姫此婦女申云妾弟名曰健津三間住健村之里此人有美玉名曰石上神之木蓮子玉愛而固藏不肯示他神代直尋覓之超山逃走落石岑之（郡以北山嶺）即逐及捕獲推問虛實健三間云實有二色之玉一者曰石上神木蓮子玉一者曰白珠雖比礦砆願

潮満之二字可是衍字以符前詳設之

託羅郷。在郡東臨海。

同天皇行幸之時、到於此郷、御覧海物豊多、勅曰、地勢雖少、食物豊足。可謂豊足村。今謂託羅郷、訛之也。

鹽田川　在郡北

此川之源、出郡西南託羅之峯、東流入海。潮満之時、逆流潮満、流勢大高。因曰潮高満川。今訛謂鹽田川。川源有淵、深二許丈、石壁嶮峻、周匝如垣。年魚多在。東邊有湯泉、能愈人病。

岡日本作留
山日本作崙

彼杵郡　郷肆所。里四。驛貳所。烽参所。

昔者纒向日代宮御宇天皇。誅滅球磨噌唹之時。天皇在豊前國宇佐海濱行宮。勅陪従神代直。遣此郡速來村。捕土蜘蛛。於茲有人。名曰速來津姫。此婦女申云。妾弟名曰健津三間。住健村之里。此人有美玉。名曰石上神之木蓮子玉。愛而固藏。不肯示他。神代直尋覓之。超山逃走。落石岑。郡以北之山嶺即遂及捕獲。推問虛實。健三間云。實有二色之玉。一者曰石上神木蓮子玉。一者曰白珠。雖比礦硤。頗

筌篊世記作此篦山路[illegible]
固秘二字、旧本作因並。
以得旁改之。

以獻之亦申云有又名曰篦簗住川岸之村
此人有美玉愛之固秘定無服命於茲神代
直迫而捕獲問之篦簗云實有之以貢於御
不敢愛惜神代直捧此三色之玉還獻於御
于時天皇勅曰此國可謂具足玉國今謂彼
杵郡訛之也
浮穴鄉　在郡北
同天皇在宇佐濱行宮詔神代直曰朕歷巡
諸國既至平治未被朕治有異徒争神代直
奏云波煙之起村未猶被治即勅直遣此村

日之上脫因字補

突出之二字旧本並无而以僻據畧之

叙旧本作裓今之下謂字脫。因例補之。

連疑速誤乎

有土蜘蛛名曰浮穴沫媛捍皇命甚無禮即誅之曰浮穴郷。

周賀郷 在郡西南。

昔者氣長足姫尊欲征伐新羅行幸之時御船繋此郷東北之海艫舳之牂牁化而為磯。高二十餘丈周十餘丈相去十餘町突出嵯峨草木不生加以陪從之船遭風漂波於茲有土蜘蛛名欝比表麻呂救濟其船因名曰救郷今謂周賀郷訛之也。

連来門 在郡西北。

別在之二字。舊本作刕石。以例按改之。

此門之潮之来者。東潮落者西涌。登涌響同雷音。因曰連来門。又有杉木。本者着地。末者沈海。海藻草生。以擬貢上。

高来郡　郷玖。所里十一。驛肆所。烽伍所。

昔者纒向日代宮御宇天皇。在肥後國玉名郡長渚濱之行宮。覽此郡山。曰彼山之形。似於別嶋。屬陸之山歟。別在之島歟。朕欲知之。仍勅神大野宿禰遣者之。往到此郡。爰有人迎來曰。僕者此山神。名高來津座。聞天皇使之來。奉迎而已。因曰高来郡。

濯滌二字旧本作濯滌以僻按改之

土歯池（俗言岸為比遅 在郡西北）

此池東之海邊有岸。高百餘丈。長三百餘丈。西海波濤常以濯滌。縁土人辞号曰土歯池。池堤長六百餘丈。廣五十餘丈。高二丈餘。池裏縦横二十餘町許。潮来之常突入。荷菱多生。秋七八月荷根甚甘。季秋九月香味共變不中用也。

峯湯泉（在郡南）

此湯泉之源出郡南高來峯西南之峯。流於東流之勢甚多。熱異餘湯。但和冷水。乃得沐

上之松、日本內紀

浴。甚味酸有流黃白土及松松其葉細有子大如小豆令得噄。

右一冊者肥前國長崎人大家惟年所齎朱書也原本謬誤尤多矣寛政十一己未年二月於京師旅寓拔正之加訓點畢蓋依城戸千楯長谷川菅緒等之需者也

皇太神宮權禰宜從四位下荒木田神主久老

宇治五十槻大人挍正

出雲風土記　近刻　一冊

同　豊後風土記　同　一冊

寛政十二年庚申五月

浪華書肆　柳原喜兵衛

肥前國風土記參考

【一オ】和名抄。肥前、比乃三知乃久知。二行―四行。〔標〕和名鈔、肥前國管十一、基肄、養父（夜不）、三根（岑）、神崎（加無佐喜）、佐嘉、小城（乎岐國府）、松浦（萬豆良）、杵島（岐志萬）、藤津（布知豆）、彼杵（曾乃岐）、高來（多加久）、マタ延喜民部式、肥前國上、管ニ基肄、養父、三根、神埼、佐嘉、小城、松浦、杵島、藤津、彼杵、高來ニ、マタ海東諸國記肥前州郡十一。〇鄕七十、按和名抄及高山寺本四十五鄕ヲノス。〇驛。兵部式、肥前國驛、基肄十四、切山、佐嘉、高來、磐氷、大村、賀周、逢鹿、登望、杵島、鹽田、新分、船越、山田、野鳥、各五匹トミエテ、凡十五所アリ。〇小路。厩牧令云、凡諸道置ニ驛馬ニ、大路廿四、中路十四、小路五匹、使稀之處、國司量置、不ニ必須ㇾ足。〇烽。軍防令、凡置ㇾ烽、皆相去卅里、若有ニ山岡隔絕ニ須ㇾ遂ㇾ便安置ニ者、但使ニ相照見ニ、不ㇾ必要ㇾ限ニ卅里ニ。〇下國。民部式、肥前國云云、爲ニ遠國ニ、拾芥鈔、肥前上、遠。〇城。日本紀、天智天皇四年、築ニ大野及椽二城ニ、續紀、文武天皇二年、令ニ太宰府ニ繕ニ治大野、基肄、鞠智三城ニ、按椽與ニ基肄ニ同、コノ城址ハ、基肄山ノ頂ニアリテ、坊中山ト云フ所ナリト云フ。〇寺。神埼郡寺一所、佐嘉郡寺一所トアル是ナリ。〇七行。〔標〕朝來名峰。不ㇾ詳。［辭書］國志云、福原村（今福田村と云ふ。福原川は加勢川と幷行し、津森鄕中を流る。長凡六里、朝來名峰は此源にて、飯田山船山と東西に相連續せる山脉ならん）に朝來名山といふ處ありて、其山の奧に石窟あり。大石を以て四壁とし、長さ三四丈の石にて覆とす。窟中數十人を容るべし。恰も石城のごとく人巧の物にあらず。今も人跡到ること罕なり。里人鬼の岩屋と呼ふ。此の外に郡中朝來名の山號なし。〇同行。〔標〕打猴。景行紀十二年十月、ト豐後風土記ニアリ。【一ウ】一行。〔標〕白髮山、今八代郡種山ナリト云フ。〇同行。〔標〕峰。一本作ㇾ密、又一本宿ニ作ル。〇同行。〔標〕標。一本㯺ニ作ル。〇七行。舊印本純ニ作ル。今一本ニ據テ訂ス。（〇標註かく標註したれ

とも純字を書きて訂正せず。案ずるに前文健緒組とあり。されば純は組の誤なるを一本に據りて訂したるつもりにて漏れしか）○同行。火。一ニ名ニ作ル。○九行。平田篤胤曰、能襲國ハ、後ニ定メラレタル日向ノ南方半國バカリヨリ、大隈薩摩ノ地マデヲ總テ云ヒシ上代ノ大名ナリ。○十行。葦北者。肥後國葦北郡、舊事記ニ葦北國造アリ、萬葉集三、葦北乃野坂乃浦。○同行。火流浦。藤村光鎮曰、葦北郡日奈久浦ナラントテ云ヘリ。[辭書]日奈久。葦北郡北端の海村にして、八代郡界に接す。（八代の南三里、佐敷の北五里）或は日奈子と呼ぶ。其温泉の出づる邊を湯村と稱し、小驛市を成す。肥前風土記に……從葦北火流浦……と見ゆ。火流は比奈賀とよみて、日奈久は其訛なり。【二オ】四行。火也。也を邑と改めて曰、邑舊印本也トアリ。今肥後風土記ニ據ル、火邑ハ長瀬眞幸曰。未レ詳、今八代郡氷川アリ。此レ肥伊郷ニシテ、火邑即此地カ。（○辭書火邑ヲヒフレと訓めり。而して書紀景行十八年に見えたる豐村をフフレと訓ず。蓋しフフレ、ヒフレ同處か）○六行。按日本紀略、弘仁四年三月、肥前國司今月四日解偁、基肄團校尉貞弓云云、コレニヨルニ、古ヘ軍團アリシナリ。[辭書]類聚國史云。弘仁四年太宰府言、肥前國司解偁。基肄團校尉貞弓等、去二月二十九日、新羅人一百十人、駕五艘船着小近島、與土民相戰、既打殺九人、捕獲一百一人と、これは基肄城即軍團なりしにや如何。○同行。和名抄、姫社、山田、基肄、川上、長谷凡五鄕アリ。○里七十 舊印本七十ニ作ル、今一本ヲ以テ訂ス。と云ひて里十七とす。○八行。高羅 神名帳、同郡高良玉垂命神社。○九行。基肄之山、青柳種信曰、今坊中山ト云フ、筑前國御笠郡ニ續ク、基肄之山ハ、基山ナリ。萬葉、城山道、記能夜麻、記夷城ナドアリ。【二ウ】一行。三橋五丸曰。長岡神社、蓋今永吉村カ。田代ノ東北十丁許ニアリ。今村中ニ八幡宮アリ。相殿ニ大名持命ヲ祭ル。神衣幟冑、鎧甥進大ニシテ、腐爛シテ其制知リ難シ、僅ニ冑形ヲ存スル耳、此レ所謂永世之財乎。○八行。五丸曰。太郡飯田村ニ、シケヌヰト云アリ。今ノ酒井村ハ其井ノ辰巳ニアリ。泉漑シテ篁原トナル、其側ニ池アリ。

池水時ニ變ズ、卽此說ト異ナルコトナシ。【三オ】一行。解後人ノ下、一本改字アリ。〇三行。解山途。一本ニ山道ニ作ル、山途川ハ今ノ秋水川ニアタルト云ヘリ。[辨書]按に山途川は今酒井川と云ふ。基山に發し、南流三里、基里村大字酒井に至り、筑後川に入る。御原郡姬社と云ふは詳ならず。舊三根郡漢部鄕姿原に姬方の字あれば、御原は御根の誤にや、又基肄の姬方には、八幡神社あれど、織姬神を祭らず。疑らくは其八幡は織姬の舊祠を轉したるにあらずや云云。〇同行。解五九云。郡北之山ハ、卽筑前御笠郡那珂郡ニ接ス。矢野幸夫曰。此地、今ノ姬方村ナリ。〇四行。解御井大川、糸山貞幹曰。從來千歲川トモ、一夜川トモ云フ、肥前筑後ノ界ニアリ。筑後川ト云フ。九州第一ノ大河ナリ。〇解糸山貞幹曰、是今ノ筑後御原郡大崎村ナル岩船ノ社ナリ。舊事紀ニ、物部阿遲古連公、水間君等祖ト云ヒ、神代記ニ、宗像神、筑紫水沼君等祭神是ナリトアリ。珂是古モ宗像ノ人ナレバ、則水沼君ニシテ、阿遲古ノ祖先ナドニハアラジカ。姬方ノ丑寅ノ隣村ヲ、旗崎村ト云フ。小丘アリ。拵子山ト云フ。山王社アリ。此旗ヲ擧ゲシ所ニテ、珂是古ノ社ナルヲ、後訛テ山王社ト稱スルニハアラジカ。此神常ハ姬方村ニ在リテ、人ヲ惱マス。今其幡姬社ノ社ニ墜ルヲ以テ、更ニ始メテ神社ノ所在ヲ知ル、因テ其神號ヲ取リ姬社ト云ヒシヲ、訛リテ姬方ト云フカ。大永三年文書姬方莊アリ。〇九行。使解便、舊印本使ニ作ル。今一本ニ據ル。【三ウ】二行。解臥機、和名抄、楊氏漢語抄云、臥機、和名久豆比岐トアリ。舊印本ニ、久都毘根ノ都ヲ那トアルハ誤レリ。一本ニヨリテ訂ス。〇同行。解絡垜、和名、多多利ト訓メル是ナリ。萬葉十三、娘嬬等之續麻之多田利打麻懸ナドアル亦同ジ。〇四行。解殺一本无シ。〇六行。解鄕。和名抄、養父郡狹山、屋田、養父、(也布)鳥栖、凡四鄕アリ。條地ハ、今村田村朝日山ノ頂ニアリ。貞幹云。今郡北ニ養父村アリ。解村ノ西ニシテ田代領ナリ。[辨書]按に養父は但馬にも同名ありて、藪澤の義なるべし。犬鳴止國といふは、附會の談のみ。後世郡界混亂し、三根郡の地をも籠めたり。〇九行。解此。一本今ニ作ル。【四オ】一行。解安樂寺草創日記、永

保三年鳥栖莊ミユ。貞幹云。郷村帳、三根郡東郷蓑原村ニ鳥ノ樔アリ、又今郡ノ東ニ鳥栖村アリ。田代領ナリ。[標註] 和名抄、養父郡鳥栖郷、訓止須。今轟(トドロキ)木村と改む。大字鳥栖存す。○五行。■日一大豆。稱信曰。豆理郷ハ、和名抄ノ屋田郷ノコトナリ。千葉八幡宮前ノ川、古ノ御井渡カ。五九曰。今水屋邑ニ倉處ト云フアリ。古老ノ說ニ曰ク。此ハ古キ渡ノアリシ處ナリ。郡ノ東南ニアリ。又和名抄豆理郷ナシ、屋田郷アリ、考フベシ。屋田、今水屋村、高田村ト二村相並、水屋村ハ今基肆ニ屬ス、古キ書付ニハ、屋田トアリ。コハ屋ノ上ニ水ノ字ヲ加ヘ、田ノ上ニ、高字ヲオケルモノナルベシ。○十行。■古語拾遺、阿那佐夜憩トアリ。是分明ノ字義ニテ、天照大神ノ岩屋戸ヲ出玉ヒテ、世ノサヤカニ明ラケクナレル由ナリ。此モ同語ナリ。貞幹曰。此郷所在詳ナラズ。郡南トアルニヨラバ、朝日山ノコトニハ非ルカ。[標註] 按に佐夜氣を狹山に訛ると云ふは疑はしと雖、此地精(シラケ)川の一水あり。志良氣は其佐夜氣の訛にあらずや。【四ウ】四行。■郷。和名抄、千栗、物部、米多(而多)、財部、葛木(加都良喜)、漢部、凡六郷アリ。○五行。■昔者。一ニ徃昔。○同行。■海部直。舊事紀、火明命裔、尾張中島海部直等祖、姓氏錄、但馬海道、火明命之後也。○同行。■島一本鳥トアリ。○八行。■郡南。一本右ニ作リ、又一北ニ作ル。物部郷、所在詳ナラズ。[標註] 和名抄、三根郡、物部郷。今詳ならず。蓋三川村にあたる。○九行。■古事記、建御雷之男神、亦名建布都神亦名豐布都神、コノ郷ノ神社今詳ナラズ。○十行。■推古紀十年二月、來目皇子爲擊新羅將軍、授諸神部及國造伴造等軍衆二萬五千人。【五オ】四行。■貞幹云。郷村帳(○張、帳カ)三根郡東綾部村アリ。鎭西要略曰。肥前國綾部四郎大夫通俊。ココニ出ルカ。○五行。■昔者。一本ニ徃昔。○同行。■神功紀五年三月、是時俘人等今桑原、佐糜、高宮、忍海、凡四邑漢人等之始祖也。○七行。■字佐大鏡、肥前米多莊アリ。郷村帳、西郷米多村アリ。○國造本紀。竺志米多國造、志賀高穴穗朝、息長公同祖、稚沼毛二股命、都紀米加、定賜國造、マタ古事記應神段、若沼毛二股王娶云云、生子大郎子、亦名意富杼

王者、筑紫米多君等之祖也。[解書] 和名抄、三根郡米多郷、訓女多。今詳ならず。上峰村などにや、大字牟田あり。千栗郷の西南に接す。又大字坊所、米多あり。……古事記明宮（應神）段云……米多君等之祖也。國造本紀……（二書とも前に引けり）この米多は三根郡の米多郷にも引證せられ、古人多く之を諾へり。然れども二書共に米多を末多に作る異本あり。且は筑前朝倉郷にも馬田郷ありて、彼地の方と想はるる節あり。何則、三根神崎は雄略紀に嶺縣にあるに當るにあらずや。（○編者云。宣長は記傳に記中末未を假字に用ひたる例なしとして眞福寺本の米と有るによれり。今眞福寺本を撿するに米と有り。したがふべきか）○八行。[標] 鮑者。一本往昔。○十行。[標] 海藻。和名抄本草云。和名爾岐米、俗用和布字。○[標] 底下、一本之アリ。【五ウ】二行。[標] 郷。和名抄蒲田（加萬多）、三根（美根）、神埼（加無佐岐）、宮處（美也登古呂）、凡四郷アリ。百練鈔、神埼莊、東鑑神埼御莊アリ。郷村帳、神崎郡上西郷神崎村アリ。[解書] 和名抄、神崎郡四郷に分ち、風土記玖郷とあるは疑ふべし。云云。○三行。[標] 昔者。一本往昔ニ作ル。○六行。[標] 貞幹曰。此郷現ニ郡中ニナシ。又郡中ニ川ハアレドモ、船ノ往來スベキ所ニアラズ。此文モト三根郡中ニアリシカ錯出セシナラン。然レバ此川ハ綾部川ニテ、天皇筑後ヨリ千歳川ヲ渡リテ、此邊リニ御宿リマシ、其處ヲ御琛村ト號ケ玉ヒシガ遂ニ郷名トナリ、又郡名トモナリシナルベシ。斯レバ道次モ叶ヒテ宜シキガ如シ。又郡西ノ西ハ、南ノ誤ナルベシ。【六オ】一行。[標] 貞幹曰。和名抄ニモ此郷ヲ本郡ニ收メタレド、今其名ヲ聞カズ。又郡西ニ船ヲ泛ブベキ川ナキコト、上ニ云ヘルガ如シ、此ニ西ハ南カ、南ニハ船ヲ泛ブベキ處アリ。サレバ此郷モ本ハ三根郡ノ錯簡カ、今三根中ノ北ニ船石村アリ。ソコニ雩スレバ驗アリト云フ石アリトゾ、是ナランカ。[解書] 今詳ならず。崎渡瀬などの舊名歟。○二行。[標] 擧落葉船、寬按、擧落乘船ノ誤リナルベシ。其一邑コソリテ船ニ乘レル由トキコユ。○三行。[標] 川下、一本之アリ。存下ニ乎。○四行―六行。[標] 徑。舊印本經ニ作ル、今一本ニヨル。（○標本四個處とも經を徑に改めたり。）○五行。[標] 高四尺

へ、五尺トアリ。○八行。■和名抄、蒲田（加萬多）郷。[辭書] 蒲田郷、今境原村、蓮池村等なるべし。○■郷村帳、神崎郡蒲田津蒲田村アリ。貞幹曰。郡西ノ西ハ、南ノ誤ナラン。【六ウ】二行。貞幹曰。本郡妙法寺ノ文書ニ、神埼郡蒲田社祭供免田、川埼二町、（字號ニ苦野開ニ）餘枝、尾方、一坪五段二丈（字號ニ毎木宮脇ニ）田地等之事云云トアリ。國人今泉千秋云。此書年號ナケレドモ、五百年許ノモノト見ユ、毎木宮ハ琴木宮ニテ、香推宮ヲ云フナラン。○四行■、郡。一本郡トアリ。○七行。[辭書] 宮所郷。和名抄、神埼郡宮所郷、訓美也止古呂。今城田村なるべし。神崎川の雨岸に跨り、大字姉、黒井、詫田等あり。○九行。郷の下■以下脱漏とす。○十行。■郷。和名抄佐嘉郡城崎（喜佐岐）巨勢、深溝（布加無曾）、防所（二字讀高山寺本ニ）小津（平津）、山田（也萬多）、凡六郷アリ。○驛。兵部式、驛馬、佐嘉五匹。○寺、貞幹曰。此ハ國分寺ナラン。此寺ノ傍ニ國府ノ址アリ。其處ヲ國分寺村ト云フ。[辭書] 風土記の佐嘉村は深溝郷（今春日村）にあたるごとし。佐賀の賀、今濁音に呼べど古人は淸みしならん、明治維新後專ら賀字を專用し、嘉字を停む。【七オ】二行。■蒲川山。貞幹曰、佐留志村ノ堤尾山ナルベシ。○三行。草横山、三橋氏曰、今ノ九千部山ナルベシ、此山ハ基肆郡田代驛ノ西南ニアリ。麓ヨリ頂マデ二里許ナリ。其方位モヨク叶ヘリ。○四行。■今本郡ニ上佐嘉、中佐嘉アリ。最鎭記文、三寶院文書ニ、佐嘉莊アリ。郷村帳云。佐嘉郡佐嘉上郷川上村アリ。又佐保川島郷、西山田、東山田アリ、又山内梅野山ニ下田アリ、本文ニ大山田女、狹山田女ハ　コノ山田ニヨリテ名ケタルモノナルベシ。○六行。[辭書] 山田郷。和名抄、佐嘉郡山田郷、訓也萬多。今川上村是なり。大字山田存す。川上淀姫祠あり。此神は風土記に川上荒神、又世田姫神と載せ、地方の大祀たり。○九行。■馬ノ上ニ、一本反字アリ。在ヲ有ニ作ル。馬形。雄略紀九年七月覓ニ賽田陵ニ、乃見ニ驄馬在ニ於土馬之間ニ、マタ姓氏錄、上毛野朝臣條、明日遣ニ所レ換馬、是土馬也。マタ太神宮儀式帳、背毛土馬一疋（高一尺、設立與金飾）、ナドアリ。【七ウ】■神名式、佐嘉郡ニ與止日女神社、神名帳頭注

日、人皇卅代欽明廿五年、甲申多十一月朔日、甲子、肥前國佐嘉郡與止姫神、有二鎭座一、一名豐姫トミエ、乾元二年記云、淀姫大明神者、八幡宗廟之叔母、神功皇后之妹也。三韓征伐之昔者、得二干滿兩顆一而没二異賊之凶徒於海底一、文永弘安之今者、施二風雨之神變一、而摧二幾多之賊敵於波濤一トアリ。又宇佐宮緣起、借二干珠滿珠於龍王一云云、投二此珠干海一而三韓降伏云、二珠牢レ納二于肥前國佐嘉郡河上宮一トアレド、コノ祭神ハ皇后ノ妹神ニハアラザルコト、余別ニ考アリ。〇三行。〔注〕舊印本ニ、世田姫ヲセタヒメト訓ジ、年常ヲワニトカナツケタルハ誤レリ。糸山貞幹ガ說ニ云フ。コノ注文謂二鰐魚一ノ三字ハ、一本ニヨルニ海神ノ下ニアリシガ錯ヒツルナリ。世田姫ハヨタヒメナリ。淀姫ハ卽ヨタヒメニテ、此神ヲ豐姫ト申スモ、トヨヒメニハアラズ、ユタヒメナリ。土人ハナベテヨタヒメト云フナリ、ト語リキ。此說イトヨロシ。又土人云。鯰ハ世田姫ノ使者ナリ。故ニ本社ノ産子ドモ鯰ヲ食ヘバ崇リアリ。又本社ニ祈願ノ賽ニ、鯰ヲ畵キテ牢ルコトアリト。寛按、コレ鰐魚逆流ノ故事ノ遺レルモノナラン。〇七行。〔注〕和名抄。小城郡、川上、甕調（美加豆支）、高來、伴造、凡四郷アリ。〇八行。〔注〕造堡。軍防令義解、堡高レ土以爲二保障一、防レ賊也。トアリテ、堡ハ小城ノ如キモノナレバ、ヲキト訓ムベシ。舊印本ムロト訓シハトラズ。〔注〕今小城町、コレ郡家ノ地ナラン。〇八行。〔注〕昔者。一本往昔トアリ。〇九行。小城郡の下〔注〕以下脫漏と記せり。〇十行。〔注〕郷、和名抄、松浦郡、庇羅、大沼、値嘉、生佐（伊佐佐）、久利、凡五郷アリ。【八オ】三行。〔注〕玉島小河、土佐風土記、吾川郡玉島、或說云、神功皇后巡レ國之時、御船泊レ之、皇后下レ島休二息磯際一得二一白石一圓如二鷄卵一、皇后安二于御掌一光明四出、皇后大喜詔二左右一曰、是海神所レ贈二白眞珠一也、故以爲二島名一、トアル此ニ准ヘテ、島名ノ起リヲ知ルベシ、増補名所方角抄、玉島川皇后ノ金魚釣リ給フ川ナリ。アガリ給フ石、今ニアリ。此石ヨリ三町許今モ、鮎ヲ釣ルナリ。此川ハ草野ノ大川ト云フナリ。和漢三才圖會云。浮島與二玉嶋川一中間一里許、有二松原一、神功皇后到二此處一携二鈎竿一曰、如可レ得二勝利一、魚須レ食レ餌、既多得二年魚一、皇后曰、

希見物也、號二其處一曰二梅豆羅一、今謂二松浦一訛焉。又其玉座石有二于今一、此石近處年魚多有、而女釣レ之多得、
男釣レ之雖レ得レ一、（〇一、三才圖會ニ无シ）山上憶良來此川見二釣魚乙女一有二贈答和歌一詳二于歌林良材集一〇
萬葉卷五、松浦河玉島ニ鮎ヲツルノ歌アリ併考フベシ。〇古事記、仲哀段又ハ神功紀ニモコノコトアリ。（〇以
上[illegible]）〇九行。[illegible]釣下、一本之字アリ。羅釣ノ羅、疑クハ雖ノ訛、下ノ羅一本得ニ作ル。【八ウ】一行。
[illegible]昔者。一本往昔ニ作ル。〇同行。宣化紀二年十月、以二新羅寇一於任那一、詔二大伴金村大連一遣三其子磐與二
狹手彥一以助二任那一、是時磐留二筑紫一執二其國政一以備二三韓一、狹手彥往鎭二任那一、加救二百濟一。〇三行。[illegible]土人
曰。今梶原村原村ノ地ナラン。今小城郡ト東松浦郡トノ間ニ、篠原嶺トテ、小高キ處アリ、是カ。|辭書|利久
鄉、和名鈔、松浦郡久利鄉、今久里村是なり。鬼塚村も此鄉の屬ならん、鏡村の東に接す。久里に大字原、
中原、西原などあり。風土記に見ゆる篠原村にあらずや。〇四行。[illegible]下文賀周里ニ大屋田子、（日下部君
等祖）トアリ、弟日姬子ノ一族トキコユ、開化天皇ノ後ナリ。〇六行。[illegible]鏡渡。補信曰、鏡川ハ、鏡宿ノ
西ニアリ。大川ナリ。宿ノ一里許リ上ニ鏡ノ渡トテ徒涉スル處アリ。此東邊ニ今栗村アリ。〇七行。[illegible]峰
家（〇家の誤カ）一本烽家ニ作ル。（〇家兩字の內一は家字なるべし。[illegible]印本家、標家とせり）|辭書|烽家名
（按に烽家ハ烽家にて、　此に烽火を置きたる塚歟、火振と云ふ語もありて、烽火に通じ、又褶振にも通ず。
倚考ふべし。）コノ岑今濱崎驛ノ南ニアリテ、高七八丁ナリ。〇[illegible]コノ褶振峰ノ故事ハ、古今著聞集、源平盛
衰記、八雲御抄ナドニモ見ユ、又萬葉卷五、佐用嬪ヲ詠ル長歌アリ。【九オ】四行。[illegible]頸、一本膺、マタ
匯ニ作ル、按ニ膺若クハ溝ノ訛。〇同行。[illegible]一首ノ歌意ハ、此篠原村ノ愛ヘシキ弟日姬子ヲ、一夜ニテモ
率テ寢シ時節ノアリシコトナレバ、決シテ其元ノ家ニ、タダニ降シ遣トハセジ、故ニ諸共ニココニテ死シ
テ、來世マデモ永ク夫婦ノ契リヲ結バントナリ。〇六行。志太[illegible]萬葉古義、今モ土左國人ハ、行シダ來シ
ダナド云ヘルハ、自ラ古言ノ遺存ルナリトアリ。〇十行。其墓ハ、靑柳氏曰、鏡社ノ南五丁許ニシテ、褶振

山ノ西南ノ麓ニテ、鏡村ト梶原村ノ境ニアリ。【九ウ】二行。■昔者。一本往昔。○同行。■海松橿媛、
今見賀村アリ、此媛ハ其居地ヲ名ニ負ヒシナラン。松浦廣嗣起ニ、見留加志之莊是也トアリ。■書 延喜式
に載する驛名なり。今詳ならず。蕃賀周、逢鹿、登望の三驛は筑前國怡土郡と、壹岐國を連絡せる一路にし
て、賀周は怡土郡佐尉驛と、逢鹿の間なるべし。卽松浦川の河口たること想ふべし。今浦島村の地にや。或
は疑ふ。賀周轉訛して唐津と爲れるにやと、然れども唐津は唐山韓鄕の船舶の入津せる故に其故あることな
れば、賀周の訛と謂ひ難し。○三行。■大屋田子。和名抄、養父郡、屋田アリ、國造本記、末羅國造、志
賀高穴穗朝御世、穗積臣同祖、大水口足尼孫矢田稻吉、定二賜國造一、姓氏錄、日下部、神饒速日命孫比古由
支命之後也、トアルニ由緣アリテ聞ユレド、日下部君ノ姓ヘ、其異同未ダ考ヘ得ズ。○七行。■鼻者。一
本往昔トアリ。○八行。■遇鹿。種信曰、今唐津城ノ三里許北ノ方東海ニ沿テ、逢鹿浦アリ、此ナリ、伴
ノ浦ノ南ニ連レリ。寛狩（○狩は日の誤植カ）遇鹿ト云フ言ノ例ハ、常陸風土記、久慈郡助川驛家、昔號遇
鹿一古老曰、倭武天皇至二於此一時皇后參遇、因名レ之矣、トアリ。○同行。■鮑。和名抄、本草云。鰒一名
鮑、和名阿波比、崔禹錫食經云。石決明、和名同上云云。○螺、和名抄。揚氏漢語抄云。細螺、之太太美。
○海松。崔禹錫食經云。水松。和名美流、狀似レ松而無レ葉者也。○十行。■兵部式、登望驛、今大友小友
二村トナレリ。種信曰。今呼子湊ノ東海口ヲ大伴浦、小伴浦ト云フ、疑ラクハ此地ナラン。矢野玄道曰、備
後國沼隈郡鞆浦モ、俗說ニ、神功皇后ココニテ舟楫ヲ揃ヘ、兵粮ヲ畜ヘ玉ヒ、地渡ト云フ所ニ、鞆モテ船玉
神ヲ祀リ玉フナド云ヒ傳フ。萬葉ニ、能行テ又カヘリミムマスラヲノ、手ニマキモタル鞆ノ浦マヲ、ナドミ
エテ、古ヨリ名高キ處ナリト云ヘルモ、此ニ由アリ。鞆。大神宮式、鞆二十四枚、以二鹿皮一縫レ之、胡粉塗、
以レ墨畫レ之云云。貫二緒一處ハ、用二紫革一ハ、長各一尺七寸、廣二分トアリ。萬葉ニ、大夫乃鞆乃音爲奈利、ト
ヨメリ。射ルニ左臂ニ着ル物ニシテ弓弦ノ觸レテ鳴ル音ヲ高カラシメン爲ナリ。【十オ】五行。■昔者。

一本往昔ニ作ル。○七行。■白水郎。和名抄、和名阿萬、今按日本紀云、用二海人二字一。○八行。■大家嶋、島一本郷ニ作ル、平戸ノ近傍ニ大家ト云フ島アリ。大島ト云フ。ソレナリ。○十行。■値嘉嶋。島一本郷ニ作ル。○家、一本家トアリ。○淸和紀、貞觀十八年、請令三肥前國松浦郡庇羅値嘉兩郷一更建二二郡一號二上近下近一、置二値嘉島一。【十ウ】一行。■昔者。一本ニ往昔。○同行。■志式島。未レ詳。景行紀、見二志我神一、式疑我誤乎。神名式、肥前國松浦郡、志志伎神社アリ。志式村志式浦アリ。平戸島ノ西南ニ、志自伎山アリ。○二行。■阿曇連。姓氏錄、安曇連、綿積神兒高見命之後也。○四行。■小近、大近、古事記、知訶島、亦謂天之忍男一トアリ。知訶後ニ小近大近ト云ヘルニテ、今ノ五島ノコトナリ。敏達記十二年、血鹿島、續日本紀天平十二年、肥前國松浦郡値嘉島長野村云云。申云。廣嗣之船、從二知駕島一（小近ノコト）去、歴二等保知駕島一（大近ナルベシ）、色都島矣。靑柳氏曰、平戸ノ西南ニ大島五アリ。因テ五島ト云フ。古ヘノ大近ナリ。小島數十ソノ左右ニ連レリトアルハ大近小近ナルベシ。○九行。■取木皮云云ハ、木皮ニテ種種ノ蚫等ノ様ヲツクリシナリ。■鞭蚫ハ、鞭ノ狀ニ製シタルナルベシ。主計式、鞭蚫トアリ。短蚫ハ長蚫ニ對ヘタル名ナリ。内膳式、太宰短鰒、主計式、肥前國短鰒アリ。陰蚫ハ、陰乾シノ蚫ナリ。主計式、陰蚫ミユ。羽割蚫ハ、鳥ノ羽ノ如ク小ク割テ重ネタル物ナラン。主計式、羽割鰒トアル是ナリ。【一一オ】二行。■檳榔、諸說アリ。或云。ビリヤウ毛ノ車ナドノビリヤウハ、蒲葵ト云フ物ナリ。其ヲビリヤウト云フハ、比國ノ音ナリ。比國ハ今云フシユロノ木ニテ、檳榔ニアラズ。ビリヤウハビラウトモ云ヘバ、即檳榔ノ字音ナリ。古ニアチマサト云ヒシ物ハ、實ハ檳榔カ、蒲葵カ、定メガタシ。隣際ニ檳榔島アリテ、其處ニアルモ蒲葵ナリ、檳榔ト棕梠ト蒲葵トハ、大カタ似タルモノナリ。今ニ浦志志伎村等ニハ、眞ノ檳榔ヲ産スト云フ。ナホ能ク考フベシ。（○アチマサの事は柳田國男氏の海南小記を見るべし）○四行。■當於馬牛一。■富於馬牛ノ富、舊印本當ニ作ル。今一本ニヨリテ訂ス。兵部式、肥前國値嘉島馬牧、庇羅島馬牧、生

鹿島馬牧、柏島牛牧、檍野島牛牧、早崎牛牧、トアルハ皆本郡ナリ。古牛馬ニ富メルコト知ルベシ。〇六行。[illegible]相子田、舊印本、田ノ字無シ、今一本ニヨル。（〇標註本、本文、相子とのみありて舊印本即ち久老校本と同じ。誤りて田を補ひ漏らせるか）〇七行。[illegible]美彌良久、爾一本彌トアリ、續日本後記六、太宰府馳ㇾ傳言、遣唐三箇船、共指二松浦郡旻樂崎一發行、入唐五家傳、圓珍傳、肥前國松浦縣管旻美樂崎。袖中抄三、俊頼朝臣ノ歌ニ、ミミラクノ、ワガヒトモトノ、島ナラバ、ケフモミカゲニ、アハマシモノヲ。萬葉十六ニ、美彌良久崎、貞幹云、現ニ南松浦郡ノ西南ニ、三井樂村アリ。卽美彌良久崎ナリ。【一一ウ】一行。[illegible]郷。和名抄、杵島郡多駄、杵島（喜之萬）、能伊、島見（志萬美）凡四郷アリ。〇驛。兵部式、驛馬、杵島五疋。〇二行。[illegible]昔者。一本往昔。〇三行。[illegible]磐田杵ハ今上瀧村アリ。〇同行。[illegible]和名抄云。牂牁、唐韻云。杙牁橛柯（二音）漢語抄云、加之所二以繫一ㇾ舟。トミエ字彙牂音臧、又牂音誠牁、與ㇾ牁同、牁同ㇾ戕、繫ㇾ舟杙也。前漢書地理志注、牂柯、係ㇾ船杙也。出雲風土記意宇郡此而堅立加志者、石見國與二出雲國一之堺有名佐比賣山是也。萬葉七、舟盡、可志振立而トアルモノニシテ、今關東ニ舟ヲ着クル水岸ヲカシト云フハ、是レナリ。〇四行。[illegible]自出。一本日出ニ作ル。〇六行の終より七行の孃子山までの間に脫文あり。久老仙覺の萬葉抄を引きて頭註せり。〇七行。[illegible]孃子山、伊藤氏曰。小城郡多久郷女山ナラント云ヘリ。サレド東北ノ地形ニ違ヘリ。舊印本ハハハコ山トアレドモ、八十女ヲハハコト云フコトイカガアラン。八十女ハ、名ノ如クニモ聞ユレド、八十ノ女ニテアマタノ人ヲ云ヘルニヤアラン。[辭書]孃子は褒美奈とよむか。〇十行。[illegible]孃子山の下以下脫漏と註す。【一二オ】[illegible]郷。和名抄。藤津郡鹽田（之保田）、能美、託羅凡三郷アリ。[辭書]能美郷。今鹿島古枝などの地にや。鹿島の西南に能古見村存す。能古見は能美と音相近し。轉訛したるかと疑はる。〇[illegible]驛。兵部式、驛馬、鹽田五疋。〇國造本紀、葛津立國造、志賀高穴穗朝御世、紀直同祖大名草彥命兒若彥命、定二賜國造一、藤津ハ、貞幹云、何處ナラン。抄ニ藤津郷ヲ逸セルナラン。其

郷ハ託羅郷東北海岸ニテ、今ノ七浦浦驛ノ邊カ、此邊ナラデハ、御船ヲ泊ツベキ所ナケレバナリ。又云。密嚴上人行狀記ニ、府知津莊、紀州根來寺、血臨ニ、肥前國、府知津庄アリ。〇二行。■昔者。一本往昔トアリ。巡、一ニ行ニ作ル。〇六行。■昔者。一本往昔。〇七行。■小、一本少ニ作ル。〇景行紀十二年、到二速見邑一。有二土蜘蛛一、一曰二青一、二曰二白一トアリ。此大白ナドノ名ニ似タリ。〇八行。■拒二皇命一三字、一本無。〇十行。■入、一本ニナシ。【一二ウ】一行。■郷村帳、藤津郡多良村多良町アリ。筑後風土記、昔者楠木一株生二郡家南一、其高九百七十丈、朝日之影蔽二肥前國藤津郡多良之峰一、暮日之影、蔽二肥後國山鹿郡荒爪之山一、因曰二御木一、トアル多良峰ハ、コノ託羅郡ノ山ナルベシ、糸山氏曰、多良峰ハ、此邊ノ高山ニシテ、藤津彼杵高來ノ三郡ニ跨レリト云ヘリ。又云、郡東ハ、東ノ下南ヲ脱セシナルベシ。〇五行、■兵部式。■鹽田驛。〇郷村帳。藤津郡鹽田郷鹽田町アリ。〇八行。■鹽田川、今鹽田驛ノ地ナリトゾ。〇同行。■一、一本三ニ作ル。〇九行。湯、一ニ温。【一三オ】一行。■郷。和名抄、彼杵郡大村（於保無良）、彼杵（曾乃喜）凡二郷アリ。〇驛。兵部式、大村、新分、船越五匹ト三所アリ。〇二行。■昔者。一ニ往昔。〇二行。球磨噌唹の下■凱旋二字舊印本脱ス。今一本ニヨリテ補フ。〇三行。■貞幹曰、宇佐海ハ下ニ引ク、関氏ノ説ノ如ク、宇土濱ノ誤ナルベシ。又肥前國三字ハ、後人ノ宇土宇佐ノ誤ヲ知ラズ妄リニ添ヘタル者ナルベシ。〇四行。■郷村帳、高來郡神代村アリ。〇六行。■貞幹曰、健村之里所在詳ナラズ。〇八行。■超、一本起ニ作ル。逐、一ニ遂。〇九行。健三間を■健津ノ津、舊印本闕ク、今一本ニヨル。として健津三間とす。【一三ウ】一行。便碩世記、見二篦山藥師一、寛按、宇書篦、邊兮切。叙篦竹器、又同レ箆、取レ蝦是也。トアルニヨラバ、エビヤナトヨムベキカ。新撰字鏡、篦ヲタケトヨメレバ、宇書ノ竹器トアルニツキテ、タケヤナナドヨムベキカ。舊訓ハ、世紀ニヨレルナレド、コチタキ心地ス。〇二行。固秘■に「罔レ極」に改めて云。罔極二字、舊本作二固秘一。以二臆按一改レ之。〇七行。■和名抄。伊豫國浮穴郡ア

リ。姓氏錄、浮穴連アリ。移受牟受比命之後也トミユ。此ニ由アルカ。〇八行。■關氏曰、宇佐濱ハ宇土濱ノ誤ナルベシ。和漢三才圖會に、景行天皇云云、宇土濱海人獻二頭赤魚一、マタ熊本地志ニ、宇土郡三角岳ハ、海濱ニ聳ヘ、芦北、八代、飽田、玉名及肥前島原ノ海一目ニ盡スベシトアレバ、景行天皇此岳ニ登リシ時、神代直ヲ召シテ問給ヒシナラン。三角ノ向ハ、神代村、有喜村、矢上村、日見村、阿和村ナドアレバ、神代直又浮穴沫媛ニ由アリ。又云。浮穴郷ハ、有喜村邊ヨリ、矢上驛、日見村、阿和村ナドヲ云ヘルナリ、郡北ハ、東北ノ東ヲ指シタルカ。【一四オ】四行。■一本、往昔トアリ。〇青柳氏曰、本郡松島ノ迫門ヲ出デ長崎ニ至ル海ヲ相模洋トイフ。其海ニ高十餘丈ノ巖二ツ立チタリ。其南北ニ屹立タル狀、猛夫ノ力ヲ爭フ勢ニ似タリ、此邊周賀郷ナルベシ。幸浦ト云フアルモ、此ニ由アリ。〇七行。■波、一本設ニ作ル。〇八行。救濟を■拯濟と改めて云。按、救一本拯トアリ、今之ニヨル。〇十行。連來を■速來に改めて云。舊印本連ニ作ル、今一本ニ據テ之ヲ訂ス。〇一本、北ヲ西ニ作ル。(〇在二郡西北一と云ふが郡西西と有りと云ふことか)【一四ウ】■種信曰。今針尾ノ瀬門ト云フ地、卽連來門ナルベシ。又曰。連ハ速ノ誤ナリ。今速來ト書キテ、ハイキト訓ム地アリ。是ナリ。入海ノ口ニ針尾ト云フ島アリ。島ノ東西迫門ヨリ東ヲハイキト云フ。今早岐ト云フ。西ヲハリヲノ迫門ト云フ。此處ニ據リテ考フレバ、東西ノ兩門ヲ號テ、速來門ト云フナリ。今ノ世ハ誤レリ。又曰。此松今猶速來ニアリ。枝ニ蠣海中等多クツキタリ。其木ノ色赤シ。今云フ女松ナリ。[辭書]按に此に載する地名速來は後世早岐に訛れるを知れど、其餘健村と云ひ、石岑と云ひ、川岸と云ひ、皆詳ならず。又古傳の說く所、此地方に寶玉の產せしと云ふは皆眞珠なるべし。〇三行。草生を■早生と改めて云、早生ノ早、舊印本草ニ作ル。今一本ニヨル。早生ヲ珍ラシトテ貢上スルコトナリ。〇■青柳氏曰。速來、今ハ早岐トカケリ。此ハ平戸領ナリ。漁家多シ。門ハ今針尾ノ迫門ト云フ。時津ノ海口ナリ。〇四行。■郷。和名抄、高來郡山田(也萬田)、新居(爾比章)、神代(加無之呂)、野島(乃登

利）凡四郷アリ。〔解書〕和名抄、高來郡多加久と訓し、四郷に分つ。（風土記には本郡九郷二十一里とす、和名抄、脱簡あるに似たり。然れども風土記も殘缺して、之を詳にし難し）小城郡高來郷の例に據れば、當に多久と訓ずべし。多加久と云ふは後人文字に因りて訓み訛れるならん或は高木に訛る者あり。又云。（景行紀及風土記を引きて）今按に景行紀に玉杵名より高來に渡航あらせられしとするは、熊襲國よりの還幸路程なれば、疑ふべし。風土記の所説、長渚より高來に渡り給ふと云ふ方信にちかし。長渚（今長洲）は島原半島の多比良村の東北八海里を隔つ。溫泉多良の兩嶽遠く望むべし。風土記に此郡の山と云へるは溫泉を指す。溫泉の舊名卽高來山なればなり。津座とは高來の山に居るとの義なればなり。○■。兵部式、山田、野鳥、各五疋。○五行。■玉名郡。和名抄、肥後國玉名（多萬伊奈）郡。○■昔者。一本往昔。○■景行紀十八年、自高來縣渡玉杵名邑。○六行。■長渚濱、吉山眞内曰、小代山ノ南ノ麓ノ海ニ沿ヒタル所ノ總名ナリ。○九行。■座、一本彦ニ作ル。是ニ似タリ。【一五オ】一行。■土齒池、諸説アリ。所在一定セズ。關氏曰。比遲波ハ土端ナルベシ。土ヲ比遲ト云フハ、古言ナリ。今モ島原海邊ニ、土黒村アリ。ヒヂクロ村ト云フ。〔解書〕土齒、千千石（今千千石村）に同じ。土齒池今埋沒して、村里に入る。……比遲波は濡岩の義なるべし。さて是を今は千千波と唱ふるなり。○九行。■三代實錄、貞觀二年二月、奉進肥前國從五位下溫泉神從五位上、コノ神ハ大巳貴命ニテ、小濱村ト云ニアリ。此泉ヲ守リ玉フ神ナリ。和漢三才圖會、溫泉岳、在高來郡五十町上有普賢岳、往昔有大伽藍號日本山大乘院滿明寺方、青柳氏曰、諫早東南七里高來峰アリ。肥後筑後ノ西ノ海中ニ孤立シ、隣國ヨリ能ク見ユル山ナリ。其最高キヲ普賢山ト云フ。是高來峰ナリ。■根十餘里ニ渉レリ。此山凡テ硫黄ノ氣强クシテ伏火アリ。【一五ウ】一行。■甚、一ニ其トアリ。其葉ノ其、一本ニ无シ。○二行。■喫、舊本喫ニ作ル。今一本ニ從フ。

箋釋豐後風土記

鷄鐸豐屋風土記序

地志之作尚矣哉九邱禹貢及職方氏之所掌蓋皆地志也秦之滅也蕭何先入收圖書漢高是以得知天下阨塞及民所疾苦由此觀之地志之於郡治也其所係豈不大

哉我

夫自古六十餘州亦皆有風土記屢屢兵燹今猶存者出雲伊勢豐後而已而家寫之訛往々有之好古之士慨焉豐後人唐橋君亦好古之士也躬自跋渉幽遐訪々耆老閲々舊蒐又參之

諸書伝寫錯雜豊後風土記既而予
採求脱稿遠馬就本甚門人田能
村子與伊藤吉田森三子戮力考
覈参伍及覆竟成全書將屬
剞劂氏其朋楚原早仲氏
寄乞叙文余乃曰善哉四子之
華序橋子之事也唐橋子將

贈於地下遂書之于卷首

文化改元季秋

磐水　大槻修撰

我国にはむかしの朝廷の風俗を記せる
ものをはしめてさまさまの書
支那にはこれといふものはさらにまれなり
さるに唐橋君山の翁は常に
わか国の書を読みならひ解て
かくしたのしみふかく耳にいりて いまお
きゝたまふなるを 其

皇御國はいにしへをも天あつ久
さかえみかなるき婦となふりとかはり
うへ古志てさきつ事豊後志に異
なき傳はりし文よ出物風土記は
今の世にあつまり借てあめき行はなる
為止てその保きくをも書て遍て
飛かまれとさしおけるをかき爾

為の・ともかくはすでにその学ひをも
其友西村孝憲・その始をのべこゝろ
あきらかに世にしらしめんとて猶
伊藤好古をえらひて桜木を板に
彫らしめて兄と郷しき[illegible]彼の事を
後もしると後の世までしめさん
と深く志ておのれ遂けはしあき

みと一とせを加へてとゝとふゝむるに
おのづからも若きと争ひ深きをし
ちいつまさりいちふるみえて拙なく
事いさてらかいつけしぬきふむ対い
文化十とせあまり乃年の長月
園藤孫翁大江稚汁

箋釋豐後風土記

豐後岡藩　唐橋世濟著

日本總國風土記

豐後國○國之疆域幅員、考其大槩、東抵海濱、西抵肥之後州、及兩筑二州界、南抵日向州界、北抵海濱、及豐之前州界、東西三十里而近、南北三十三里而遠、

郡捌所鄉四十、里一百十、　驛玖所路並小　烽伍所國並下

寺貳所僧寺、尼寺、

豐後國者、本與豐前國合爲一國、昔者纒向日代宮御宇、○日本紀景行紀曰、十二年、冬、十月、乗輿自美濃國還、則都于纒向、是謂日代宮、

大足彦天皇景行天皇詔豐國直等祖菟名手、遣治豐國、○按景行紀、天皇十二年秋、菟名手從車駕到于此、誅土蜘蛛之賊、而後賜豐國直、居于國前、故史稱國前祖也、國埼舊多作國前、往到豐前國中津郡中臣村、○按倭名鈔、仲津郡、郷名有中臣、今廢爲村、于時日晚僑宿、明日昧爽、忽有白鳥、從北飛來、翔集此村、菟名手即勒僕者、遣看其鳥、鳥化爲餅、片時之間、化芋草數千株、株葉冬榮、○株下一有花字、誤矣、按芋即蹲鴟、葉似荷而長、無花、菟名手見之爲異、歡喜云、化生之芋、未曾有見、實至德之感、乾坤之瑞、既而參上朝廷、擧狀奏聞、○諸本奏下有已上本三字、或云、攺

奉、本爲　天皇於茲觀喜之有、即勅菟名手云、天之

瑞物、地之豐草、汝之治國、可謂豐國、重賜姓曰豐

國直、因曰豐國、○豐國又曰豐日別國、見舊事紀、　後分兩國、以豐

後國爲名、○分爲前後、不知在何時、

日田郡○按日田舊事紀作比多、續日本後紀作日田、向倭名鈔作日高、並同、其疆域幅員、東抵玖

珠郡界、西抵筑後國生葉郡、及肥後國菊池郡界、

南抵肥後國阿蘇郡界、北抵豐前國下毛郡、及筑

前國上座郡界、東西五里許、南北八里、

鄉伍所　里一十四○按倭名鈔所載鄉名、曰夊連、曰石井、曰日理、曰夜關、曰在田、俱爲五所、夊連當作刄連、下文所載靫編是也、日理當作亘理、今稱渡里、夜關當作夜開、蓋皆傳寫所致也、五所今並儼存、

驛壹所○延喜兵部省

式曰、石井出驛馬五足、今廢爲村、

昔者、纒向日代宮御宇 大足彦天皇征伐球磨贈於凱旋之時、發筑後國生葉行宮、幸於此郡、○按幸於此郡、非凱旋之時、是巡狩取歸路也、今據史畧叙其轍跡、十二年秋、熊襲叛、王師將征之、九月、到周防佐婆、時觀南方烟氣起、必賊將在、遂遣三將察其狀、乃有土蜘蛛賊、其黨衆多、刧掠人民、其害甚矣、於是先涉二豊之地、兩月間兇賊悉平、十一月到日向國、興高屋行宮以居之、十二月、議討熊襲、十三年五月、悉平熊襲國、於是乎、雖有凱旋、復居高屋宮者三年、十七年、巡幸子湯縣、遊于丹裳野、涉野中大石、憶京都而作歌、十八年春三月、將向京師、巡狩筑紫國、四月、到熊縣、五月、從葦北發船、到火國、遥見火光、名其國曰火國、七月、到筑後國御木、有僵樹、長九百七十丈、百寮踏其樹而

渉八月到的邑十九年秋九月還京的者生葉也正與此郡接壤即此時過于此地也蓋風土記其以凱旋言者初以詰熊襲擧事故云爾

有神名曰久津媛化而爲人參迎辨申國消息因斯曰久津媛之郡今謂曰田郡者訛也

石井鄕在郡西○鄕今廢爲村在三隈川南蓋古昔此地方及弁津江莊總稱石井鄕云

昔者此村有土蜘蛛之堡不用石築以土因斯名曰無石堡後人謂石井鄕誤也鄕中有河名曰阿蘇川其源出肥後國阿蘇郡少國之峯流到此鄕

○阿蘇川有三源其一發肥後國阿蘇郡邑邊其一發直入郡九重山北二水會阿蘇郡小國峯西

至本郡五馬莊出口其一發津江莊川原北流至出口三水合流達津江莊東會玖珠川今日大山川是也即通球珠川○球珠川其源發直入郡九重大船二山間出球珠郡田野橫流郡内至本郡五馬莊西流會阿蘇川是也通猶言合會爲一川名曰日田川○阿蘇球珠二水合流西北行三里許至渡里鄉關村今日三隈川是也年魚多在○今猶多產肥大且美大者皆尺餘遂過筑前筑後等國入於西海○日田川自渡里鄉過筑前國上座郡南經筑後國生葉三池等郡西南流入海是謂筑後川世所稱三大河之一也

鏡坂在郡西○在石井鄉上野邑東阪上有南北二日路俱達筑之後州帝登覽于此蓋自生葉到日田其轍迹可知已

昔者纏向日代宮御宇　天皇登此坂上御覽國
形即勅曰此國地形似鏡面哉○今登臨于此山翠圍繞郡表其中
豁然平圓眞如斯言然因曰鏡阪斯其縁也○阪上有祠曰崇景行天皇
靫編鄉在郡東南○鄉名今廢爲村在三隈川東呼曰叉連村案叉連與靫編靫連靫部靫負國
音並同倭名鈔作父連亦同蓋靫之省文作叉又叉轉訛作叉及父耳俱轉寫所致也
昔者磯城嶋宮御宇○史曰欽明天皇元年秋七月遷都倭國磯城郡磯城嶋
仍號爲磯城島金刺宮韻學集成曰島或作嶋　天國排開廣庭天皇○欽
明天皇之世日下部君等祖○案姓氏錄曰日下部出開化天皇皇子彦座
命子狹穗彦命後而有宿祢有首有連未見有君邑阿自仕奉靫部其邑

阿自就於此村造宅居之、因斯名曰鞠負村、後人
改曰鞠編村、中有川曰球珠川、其源從球珠郡東
南山出、○球珠東南山、即上所注直入郡九重大船兩山也、流到石井郷、通
阿蘊川、會爲一川、今謂曰田川、訛是也、○一無是字、謂曰田川訛是也、其義未聞之、或云訛字行文、
五馬山、在郡南、○後世有五馬荘、管二十四村、其聚落曰五馬市、有官道、南達肥之小國也、
昔者此山有土蜘蛛、名曰五馬媛、因曰五馬山、飛
鳥淨御原宮御宇○天武天皇所都之處、天皇○天武天皇御
世、戊寅年、大有地震、山岡裂崩、此山一峽崩落、温

泉處處出、〇案戊寅者、天武帝即位七年也、紀曰、七年十二月、筑紫國大地動、地裂廣二
丈、長三千餘丈云云、温泉之出、或此時歟、蓋湯氣熾熱、炊飯早熟、但一
處之湯、其穴似井、口徑丈餘、無知淺深、水色如紺、
常不流、聞人之聲、驚慍騰沸、一丈餘許、今謂慍湯
是也、〇五馬莊東赤岩村有温泉、能療諸瘡、所謂天箇瀨温泉也、記所稱或是乎、

球珠郡〇案球珠拾芥鈔作救珠、圖田牒作玖珠、今從之、其疆域幅員、東抵速見郡界、東南至直
入郡界、西南至肥後國阿蘇郡界、西抵日田郡界、北抵豐前國下毛郡界、東西六里餘、南北九里、

鄉參所里九、〇案倭名鈔所載鄉名、曰今巳、曰小田、曰永野、俱為三所、今巳今作古後、
小田當作山田、傳寫所致也、其地今並儼存、永野蓋大隈塚脇二村之地方、
驛壹所

○延喜兵部省式曰、球珠郡出傳馬五疋、今案古後郷有古驛趾、名曰四日市、或此地方、

昔者此村有洪樟樹、因曰球珠郡、○郡南有山、名洪樟、一名斷株山、高一里許、周廻二里餘、上平如臺、相傳古昔有一大樟樹、樹高不知幾千尺、其樹自僵倒、土人伐之斷株、蟠根化爲石、即此山也、又曰、昔此山有寺名洪樟、其廢趾、土人發地、獲磁器古物者間有之、

直入郡 ○案景行紀作直入縣、萬葉集作名欲、其疆域幅員、東抵大野郡界、西抵肥後國阿蘇郡界、南抵日向國臼杵郡界、北抵大分速見玖珠三郡界、地勢廣短袤長、東西五里餘、南北十二里許、

鄉肆所 里九、○案此記載鄉二、曰柏原、曰球覃、倭名鈔載鄉三、曰三宅、曰直入、曰三宅、蓋一三宅爲衍、即二書相合得四、而後世攺直入曰入田也、

驛壹所 ○延喜兵部省式曰、直入出驛馬五疋、驛今廢爲村、稱古市、屬朽綱鄉、

昔者、郡東垂水村、村今廢、有桑生之、其高極淩、枝幹直美、俗名曰直桑村、○案、郡東有桑迫村、又七里村有桑木原、或是其遺也、後人改曰直入郡是也、

柏原鄉 在郡南、○案、在郡西南、鄉名今猶存、

昔者、此鄉柏樹多生、因曰柏原鄉、○方俗所稱柏樹者、今猶多生焉、

禰疑野 在柏原鄉之南、○案、今郡西南曰菅生邑、其里西有小塚村、村中有古塚、周圍十餘步、其上叢樹欝茂、故名小塚村、土人云、昔者殺土蜘蛛瘞之為墳、故曰蜘蛛塚、其東三百步有祠、曰禰疑野明神、奉祀景行天皇、

昔者纏向日代宮御宇　天皇行幸之時此野有土蜘蛛名曰打猿八田國摩侶等三人○一本無等三人三字似是蓋衍文耳　天皇親欲伐此賊在茲野勅歷勞兵衆因謂禰疑野是也○案以勞衆名之據史則似舊名也景行紀曰天皇到速見邑有女人速津媛自奉迎之曰於直入禰疑野有三土蜘蛛其徒強力衆多天皇惡之不得進行即次于來田見興行宮居之與群臣議則採海石榴樹作椎爲兵破其黨類于稻葉川上悉殺之此賊蓋速見鼠石窟白青等也非曰打猿等三賊故下文曰復將伐打猿徑度禰疑山時賊兵之矢流宮軍前如雨天皇更返城原而卜于水上便勒兵先擊八田於禰疑野而敗焉於是打猿謂不可勝而請服然不聽矣皆自投洞谷而死之由是觀之則聞土蜘蛛之強自速見次于來田見興宮與群臣

議完繕兵器而撃其黨類于稻葉川上此水今曰神田川與稻葉會為二水在城原祠後於是便勒兵再自城原來敗八田於禰疑野其地經過之叙當然史曰山曰野二擧禰疑其文意尤以舊名也

蹶石野　在柏原鄉之中

同　天皇欲伐土蜘蛛之賊幸於柏峽大野中有石長六尺廣三尺厚一尺五寸　天皇祈曰朕將滅此賊當蹶茲石譬如柏葉而即蹶之騰如柏葉因曰蹶石野○蹶石野未詳其所在此注曰在柏原鄉之中恐非盖日本紀曰柏峽大野故斷為柏原然柏原寇賊所屯於事理不可妄入敵地且蹶石禱神也案日本紀曰即留于來田見邑權與宮室居之仍與群臣議討賊所謂蹶石當在此地方當時所禱三神有直入中臣神其祠

在朽網中野村祭石為神稱石神明神其石大小稍相近之然則蹶石野乃其地方野而蹶石乃此石蹶其三神直入物部神在朽網社家村鶴田稱糅山八幡志賀神在大野郡志賀村稱若宮八幡與前所稱直入中臣神俱為三歲時奉祀

球覃鄉在郡北○史作來田見萬葉集作朽網此注中亦作朽網令從之和名鈔作來民誤混于肥後國山鹿郡轉寫所致也

此村有泉同　天皇行幸之時奉膳之人擬於御飲○一作擬欤於御飯令汲泉水即有蛇龗謂於箇美○案龗或作龗或作龗或作盤並非釈日本紀引此文亦從龗神代紀云援所帶十握劍斬軻遇突智劍頭垂血激越為神號曰闇龗注云龗此謂於箇美即與之符說文曰龗龍也連寸反據之作蛇龗為是於茲

天皇敕曰、必將有臭、○臭與臭同、惡氣也、莫令汲用、因斯名曰臭泉、因爲名、今謂球覃鄉者訛也、

宮處野　朽網鄉所在之野、

同　天皇爲征伐土蜘蛛之時、起行宮於此野、是以名曰宮處野、○景行紀曰、天皇即留于來田見邑、權興宮室居焉、即此此也、案其地名宮園、在朽網鄉市村、蓋宮處野宮園、方音相近、土人就其地立祠奉祀、而峯巖帝祠亦在其近、故後世相混、惟餘一祠、單稱峯巖祠、景行祠遂廢、今詳舊跡、則宮園南有一頃田、土俗相傳天皇警蹕之處、不敢糞穢、其側有泉、極清潔、名御供水、衆皆畏敬、又案日本紀所云城原、今作木原、與宮園相距二里半許、此地亦作祠奉祀天皇、後世配祭應神帝、稱八幡祠、祠宇最壯麗、

救覃峯在郡南、○案在郡北、恐傳寫誤之、球覃救覃同、即朽綱山、萬葉集所詠、盖九重太船黒嶽三峯咢峙而合、其根總謂之朽綱山、其高各一里餘、東自黒嶽下、阿蘇野嶺、西至九重山下、九住市延直五里餘、是為朽綱郷、

此峯頂、火恒燎之、○案恒諸本作垣、或人改作恒、基字屬下句讀、其義較通、今姑從之、九重山北有硫黄山、上常有火、鳴動如雷、黒烟接天、多産硫黄、甚精良、盖指之耶、基有數川、名曰神河、○今曰朽綱川、湯原下流也、東北行、三里許、為蛇生瀨、瀉入大分部、下文大分河條曰、源出直入郡朽綱之峯、是也、亦有二湯河、流會神河二、○湯河今曰湯原川、一出黒嶽東、遶湯原邑北、一出大船山西、東北行、至湯原邑東、二水相合、為神河、此水道所經、七里、田葛淵、及湯原等、溫泉處處在焉、所以名湯河也、

大野郡〇案其疆域幅員、東抵海部郡界、西抵直入郡界、南抵日州臼杵郡界、北抵大分郡界、東西十一里餘、南北十三里餘、

鄉肆所 里一十一、〇案倭名鈔所載鄉名、曰田只、曰大野、曰緒方、曰三重、是也、後世田口改曰井田、又割三重置宇目、故今為五鄉、

驛貳所 延喜兵部省式曰、小野三重、各出驛馬五疋、〇案三重者、今三重鄉三重市、小野者、今宇目鄉小野市、並是古驛址、

此郡所部、悉皆原野、因斯名曰大野郡、

海石榴市 血田 並在郡南、〇案古書殘缺、自有錯簡、所謂海石榴市血田、當並在直入禰疑野下、案今朽網鄉稻葉村有海石榴山、蓋其舊趾也、血田在柏原鄉小塚村南、水田東西二十步、南北十餘步、田水赤色、為異耳、血田北有古塚、曰蜘蛛塚、殺賊所埋、其東有禰疑野祠、菅生山、史所謂禰疑山也、皆是歷歷乎陳跡也、混之于大野者誤矣、

昔者纏向日代宮御宇天皇、在球覃行宮、仍欲誅鼠石窟土蜘蛛、○鼠石窟賊、曰白日青二人、速津媛所告、伐此二賊於稲葉川、再勒兵出于禰疑野、其餘打猨等二十賊、悉伐誅、而詔群臣伐採海石榴樹、作椎為兵、即簡猛卒、授兵椎、以穿山靡草、襲土蜘蛛、而悉誅殺、流血沒踝、其作椎之處曰海石榴市、亦流血之處曰血田也、

網磯野　在郡西南○今作阿志野、属大野郷、在郡西北、本注南字誤寫所致乎、

同　天皇行幸之時、此間有土蜘蛛、名曰小片鹿奥、謂志努汗意、○注意下一有招字、又作拘、或説曰、疑起之誤乎、小片鹿臣、此土

蜘蛛二人、擬為御膳、作田獦也、○續字彙補曰、獦獵、班固北征頌、疆獦

嶹嶹、註以嶹嶹田獵其中、其獦人聲甚讙、天皇勅曰、大囂、謂阿

那美須、因斯曰大囂野、今謂綱磯野者訛也、

海部郡○案其疆域幅員、東北至海、南至日向國、臼杵郡界、西至大野郡界、西北至大分郡界、東

西六里、南北十四里餘、鄉肆所、里一十一、○案倭名鈔所載鄉名凡十、曰佐加、曰佐

井、曰丹生、曰穂門、此四鄉即是也、其下併日田二

字、凡五鄉、皆日田鄉名、誤混于此、蓋轉寫之所致

也、後世割丹生置臼杵、莊分穂門為佐伯

莊、而穂門漸以陵夷、徒為一海島名已、驛壹

所○延喜兵部省式曰、出驛馬五疋、案丹生鄉丹生驛是也、今廢、烽貳所

此郡百姓、並海邊白水郎也、○倭名鈔曰、白水郎倭名阿萬、日本紀用

漁人或海人字輟耕鋤、因曰海部郡、所謂島蜑戸類便是也、

丹生郷 在郡西、○此郷舊境尤廣、後割此郷置臼杵莊、又割此補彼、以稱中臼杵、故曰臼杵城舊謂丹生城、野史曰、永禄六年冬、大友宗麟城于丹生島是也、

昔時之人、取此山沙、該朱沙、因曰丹生郷、○續日本紀曰、文武二年、九月乙酉、豊後國獻眞朱、案郷西北有久所村、地名赤迫、多出朱沙、蓋取于此乎、該音亥、兼也、既是取山沙兼獲朱沙也、

佐尉郷 在郡東、○案在郡之北、作東恐誤寫耳、倭名鈔所謂佐井與此同、今廢為村、稱大西小西、又有細村、蓋佐井轉訛、今呼曰保曾村、

此郷舊名酒井、今謂佐尉郷者訛也、

穗門郷在郡東○今作保戸為海島名其海崖有蒲戸崎呼曰訶摩登是亦保戸之轉訛也此地方舊是穗門郷也後割此郷置佐伯莊郷名竟廢悉入莊

昔者纒向日代宮御宇　天皇御船泊於此門○案蒲戸崎突出海中五里東與豫州相對其間才數里故稱門也經於此門而南行則到於日州之海海底多生海藻而甚美甚一作長案此郡産海蘊海苔海落諸藻倶多而美

天皇即勅曰取最勝海藻謂你那米○那一作郡案倭名鈔海藻和名迩木米或曰當作保都米不知何據便令以進御因曰最勝海藻門今謂穗門者訛也○案景行帝十一年十月悉誅豊後土蜘蛛賊十一月至日向國盖是時王舟經於此耶神武帝東征亦取針路於此門也

大分郡

○案、其疆域幅員、東至海部郡界、西至速見郡界、南至大野直入二郡界、北至海、東西八里餘、南北四里餘、

鄉玖所

里二十五、○案倭名鈔載鄉名九十、曰阿南、曰植田、曰津守、曰荏隈、曰判太、曰跡部、曰武藏、曰笠和、曰神前、蓋判太跡部笠祖、並不知所在、笠祖疑悞寫笠和、案別爲一鄉、武藏、乃國東郡內鄉名、神前海部郡中地名、並悞入于此、設除判太跡部武藏笠祖神前此五、者則阿南植田津守荏隈笠和此五鄉今僅存、案圖田牒、但以笠和荏隈判太三爲鄉、別有植田戶次高田賀來阿南津守六是爲莊、蓋此三鄉六莊相通、則此記所云鄉九所、與此相符、今土人是爲大分八莊、而其判太者、不知所在、近世野史所稱有清田者、其境幅員廣有十餘村、非鄉非莊也、不知所云判田者、相轉訛爲清田者歟、請姑充判太、以待後考已、

驛壹所

○延喜兵部省式曰、大分置傳馬五疋、驛今廢爲村、在賀來鄉、稱驛間市、

烽壹所

寺貳所 僧寺 尼寺 ○二寺俱天平十三年所創、史曰、天平十三年二月、毎國僧寺施封五千戸、水田十町、尼寺水田十町、僧寺必令有二十僧、其寺名金光明四天王護國之寺、一十尼、其寺名為法華滅罪之寺、両寺相去、宜受教戒、是也、今在賀來郷國分村、一称國分寺、堂宇衰廢、寺後一町許、有礎石、尚存、蓋言法華滅罪尼寺之故蹤也、

昔者、纏向日代宮御宇 天皇、豊前國京都郡行宮、幸於此郡、遊覧地形、嘆曰、廣大哉、此郡也、宜名碩田、碩田謂大分、今謂大分、斯其縁也、○案、據本文及日本紀、則天皇自豊前京都、先到碩田國、次到速見、遂誅直入土蜘蛛之賊、推驗其車駕經過之跡、則大分郡在速見南、與豊前國隔壤、前後混淆、蓋上世之事、其詳不可得知耳、

大分川 在郡南。○案在郡之東南。

此河之源、出直入郡朽網之峯、指東下流、經過此郡、遂入東海。○東海、東當作北、此源所上注救覃峯、條下神河也、神河東北行至郡阿南鄉、經荏隈笠和二鄉、入北海、今云堂尻川、又案神河與寒川同、國音相通、續日本紀曰、承和十五年、太宰府言、所管豊後國大分郡擬少領膳伴公家吉、於同郡寒川石上獲白亀一枚、以獻之、乃為天瑞、改元嘉祥是也、今速見郡中有亀川、相傳為神河、其側立祠祀亀、蓋與國史所言同郡寒川不合、誤矣、因曰大分河、年魚多在。

酒水 在郡西。○今呼曰柏野川、屬賀來鄉。

此水之源、出郡西柏野之磐中、指南下流。○此水南行入

堂尻川、其色如酒、水味少酸焉、用療痂癬、謂盼太氣、○案郡西與速見郡接壤、故受鶴見硫礬氣脉伏行、地中發于此、故然已、

速見郡○案其疆域幅員、東面海、西至豊前國宇佐郡界、南至大分郡界、其西南與玖珠直入二郡為界、北至國東郡界、東西四里餘、南北七里許、　鄉伍所里一十三、○案和名鈔所載鄉名、曰朝見、曰八坂、曰由布、曰大神、曰山香、是也、　驛貳所○延喜兵部省式曰、由布出驛馬五疋、又曰、速見郡出傳馬五疋、○案由布即今由布院地方是也、又有古市村、屬竈門莊、亦古驛趾、蓋出傳馬地是歟、

昔者、纒向日代宮御宇　天皇、欲誅球磨贈於、筑紫○案一本贈上有唹字、幸上有行字、從周防國佐婆津發船而

渡泊於海部郡宮浦。○案景行紀曰、到速見邑、女人速津媛、以下文與此大同小異、但言海部悞矣、速津媛之在海部也不當也、宮浦今在海部郡南濱與日州接近、於其佐婆海路遼絶、風濤急迅、其不便可思已、或云當作速見郡古浦、時於此村有女人、名曰速津媛、爲其處之長、即聞天皇行幸、親自奉迎、奏言、此山有大磐窟、名鼠磐窟。○此郡朝見郷北石垣原有石窟二區、巨石築之、以土封其上、竹樹欝蒼、土人云土蜘蛛礫居也、土蜘蛛二人住之、其名曰青白、又於直入郡禰疑野、有土蜘蛛三人、其名曰打猿・八田・國摩侶、是五人並爲人強暴、衆類亦多在、悉皆謠云、不從皇命、若強喚者、興兵

距焉、於是天皇遣兵遮其要害悉誅滅、因斯名曰速津媛國、後人改曰速見郡。○按史文、初到娑磨、南望曰、賊將在、乃遣武諸木、菟名手、夏花三將、察其狀時、有女人神夏磯媛者、聞王使至、親艤舟參向、啓曰、我之屬服皇徳、惟有殘賊者、鼻垂、耳垂、麻剝、及土折猪折等數人、皆據要害地、或屯結於菟狹御木高羽緑野等川上、以多掠人民、盖菟狹、今宇佐川、御木、筑前三池郡、高羽、今高瀬川、緑野、今緑川、其川上、悉皆在豊前諸山也、乃神夏磯媛爲之導、三將擊之、其餘黨悉捕誅之、豊前兇賊既平、而後景行帝自娑磨遂幸筑紫、到豊前國長峽縣也、故曰遂、又自京都郡行宮、到豊後國碩田、及速見也、是鳳輦所過、其叙相順、已史文可以爲正、若風土記、則於速見、乃曰、御船到海部、大抵欲使每郡必有駐蹕之蹤、故輙似于誣、雖然古書確實嚴正、何必妄意臆斷、不可以謂無斯事也、

赤湯泉在郡西北○湯今屬石垣莊野田邑其濶十餘丈純赤如朱下足便爛能熟生物時見赤魚游泳然此湯近歳大衰無舊自之觀其旁有寺曰赤湯山長泉寺

此湯泉之穴在郡西北竈門山○此山屬竈門莊内竈門村盖及後世割郷置莊始山與湯異其所屬耳其周十五許丈湯色赤而有泥用足塗屋柱泥流出外變爲清水指東下流因曰赤湯泉○今曰古市川東流入海

玖倍理湯井在郡西○今屬石垣莊鐵輪村其山多生硫黄土脉甚熱處々有温湯所謂湯井小池也濶二丈餘深二丈餘旁有小洞温泉出焉盈酒自有定候將盈則霹靂鳴動熱湯奮發炎氣特甚土俗呼曰鬼山地獄

此湯井在郡西河直山○河直山即鐵輪山也蓋國音相近東岸口
徑丈餘湯色黑泥常不流人竊到井邊發聲大言
驚鳴沸騰二丈餘許其氣熾熱不可向邇○邇近也緣
邊草木悉皆枯萎因曰温○一作慍曰伊加利讀湯井俗語
曰玖倍理湯井○或曰案久倍理者燒之俗言猶言火尓久倍留也
柚富鄉在郡西○按倭名鈔作由布今曰由布院蓋往昔置城院地是也
此鄉之中栲樹多生○爾雅曰栲山樗本草綱目曰似樗色小白葉差狹常
取栲皮以造木綿因曰柚富鄉
柚富峯在柚富鄉西○山極高峻周迴三里餘自麓至巓亦三里許嶄壁峭拔嶮巖崒盤絶頂二

峯秀出屹立相對西曰西嶽東曰東嶽其間相距數百丈屏嶂聳立數百餘仞谽谺開豁俗名媼氏所謂石室或此相傳此間時或聞有金石絲竹之音蓋游仙之境也遠望此山尖起雲表因其形目爲筑紫富士実此郡之鎭也山足林叢中有神祠稱六所權現祀由布山神延喜式曰宇奈岐日女神社一座在速見郡即此今由布山南磴口有石表榜曰木綿明神是也鐫其柱曰火男火賣神社此是謬妄以鶴見山神混爲一耳三代實録曰火男神火賣神二社在速見郡鶴見山上宜從史取正也

此峯頂有石室其深一十餘丈高八丈四尺廣三丈餘常有水凝經夏不解凡柚富鄕近於此峯因以爲峰名

頸峯 在柚布峯西南

此峯下有水田、本名宅田、此田苗子鹿恒喫之、田主造柵伺待鹿到來、擧已頭容柵間、即喫苗子、田主捕獲、將斬其頸、于時鹿請云、我今立盟、免我死罪、若垂大恩得更存者、告我子孫、勿喫苗子、田主於茲大懐怪異、放免不斬、自時以來、此田苗子、不被鹿喫、令獲其實、因曰頸田、無爲峯名、

田野 在郡西南

此野廣大、土地沃腴、開墾之便、無比此土、昔者、郡

内百姓居此野多開水田餘糧宿畝已富大奢作餅為的于時餅化白鳥發而南飛當年之間百姓死絶水田不造遂以荒廢自時以降不宜水田今謂田野其緣也○案地名田野者諸郡往々有之惟以球珠田野為最且其故事相似及荒田千頃今猶存耕之無成所以為田野也恐以球珠誤混于速見亦不可知已豈白志曰和通部藤彥仲哀帝朝人神功皇后三韓凱旋之後稱疾隱于此其孫大開土田致富呼為田野長者其後數世驕奢無狀嘗作餅數千以為地磚盛米為假山善泉數窮漸貧因且死絶水田無復耕者云相傳曰長者以女禱雨其説怪誕謬妄不可取已文安中僧行譽著壒囊抄説年始作餅之事引風土記曰天正中訓通者見其荒廢意惜之就使耕耡其苗自銷滅遂驚懼以止焉其地今名千町

蕪田方里許、畦畝儼在、春夏草離々、毎畝異色、或蒼或黄、或黄赤、成禾苗早晩之狀、其遺跡又有七

奇不贅焉、

國埼郡

○案、國崎日本紀舊事紀古事紀皆作國前、延喜式拾芥抄、並作國崎、倭名鈔作國埼、即與此同、圖田牒作國東、今同、其疆域幅員東北及西、皆面海、惟南境與速見郡相接、其西南隅與豊前國宇佐郡為界、東西七里而遠、南北八里而近、

郷陸所

○案、倭名鈔所載郷名七、曰武藏、曰來繩、曰國埼、曰由染、曰阿岐、曰津守、曰伊美、蓋津守當在大分郡中、誤混于此、若除之則是六郷也、由染當作田染、皆轉寫所致也、

里一十六所

昔者纒向日代宮御宇　天皇、御船從周防國佐婆津發而渡之、遥覽此國、勅曰、彼所見者、若國之

埼因云國崎郡、

伊美鄉在郡北、

同天皇在此村、勅云、此國道路遥遠、山谷阻險、徃還踈稀、乃得見此國、因云國見村、今謂伊美鄉、其訛也、

箋釋豐後風土記 畢

傳云、豐後風土記者延長中奉敕所進也、今世特與出雲風土記並行、有鈔本數種、好事家傳以珍藏焉、唐君山先生方撰國志之日、偶於一故家得嘉禎中鈔本、蠹食相半、先生遂手録一過、精核同異、分折是非、稽古徵今、詳施註釋、嘗謂余曰、是書盍非延長之舊、其跕往〻可見、體裁亦與出雲風土記不類、忽畧頗多、恐博古之士私据日本紀僞造者也、雖然豈鐮倉氏以降所能出耶、山川鄉里異聞遺事賴之尚存、可證者寔繁、宜公諸四方以

貽愆久矣、哀哉業未畢寛政庚申仲冬以病卒矣
於是乎與伊藤先生寛叔古田君寛齋森君仁里
謀、使後藤君子肅録爲翕志同力叅訂校讎、前後
再三、今茲文化甲子秋始得上梓、凡字渉両可者
併存、其義疑者姑闕以俟魚魯之辨、不敢妄加穿
鑿、請大方君子補其挂漏、少副君山先生之志則
亦余輩之幸也

文化甲子仲秋　田能村孝憲識

いまのをつつに殘りたるあがりし代の書等のちゞふみ八千書とおほかるなかに、いささむら竹いささけきものから、これの豐國の道後の風土記も無虚延長の往昔のにしあれば誰やし人も開花のめで愈まぬはなけれど、夫考へ正してこの花の開耶木に彫て、たくづぬの長き世までながさへむとしもおもひたらはぬはいかにぞや。ここにあが五十槻園の大人かみくだりのことわりどもは、もとゆうまらにおもほし知りおましまし給へれば、こたみおしてる難波人のこはしのまにま、うけひきまして、それのふときのひがもじ何くれとさはなるをも、かにがゆきよこしまならず、ひだ人のうちはゆるすみなはなす正しくうるはしく直して板に彫しめ給へりけり。そはみないにしへしぬぶおのらがためにとていそぎ給へるなれば、いとうれしくよろこぼひほとばしりて、おもほえずことあげしていへらく、あなめでたの所爲や、あなたふとの所作や。

風土記

寛政十二年五月　長谷川菅緒

風土記　豐後國

郡、捌〔八〕所。鄕四十。里一百十。　驛、玖〔九〕所。並小路。　烽、伍〔五〕所。並下國。　寺、貳所　僧寺。尼寺。

豐後國は、本豐前國と合て一國たり。昔者纒向日代宮御宇大足彥天皇、豐國ノ直等が祖菟名手に詔て、豐國を治めしめ給ふ。豐前國仲津ノ郡中臣村に往到るとき日晩れて僑宿。明日の昧爽に、忽に白鳥有りて北從飛び來て此村に翔集る。菟名手即ち僕者を勸て其鳥を看せに遣れり。鳥餅と化れり。片時の間に、更芋草數千許株まりに化れり。花葉冬も榮ゆ。菟名手之を見て異とおもひ歡喜て云らく。化生れる芋は未だ見しことも有らず。實に至德之感、乾坤の瑞なり。既に朝廷に參上て、擧狀に已上を奏し聞え奉る。天皇茲に歡喜おほましまして、即ち菟名手に勅たまはく。天の瑞物、地の豐草、汝が治國は豐國と謂ふ可しと。重て姓を賜りて豐國ノ直と曰ふ。因て豐國と曰ふ。後に兩國に分つ。豐後國を以て名と爲り。

日田郡。鄕、伍〔五〕所　里一十四　驛、壹所。

昔者纒向日代ノ宮に御宇大足彥ノ天皇。球磨贈於を征伐たまひ、凱旋之時、筑後國生葉ノ行宮を發て、此

郡に幸す。神有り、名を久津媛と曰ふ。人に化て參迎へ、國の消息を辨へ申す。斯に因て久津媛之郡と曰ふ。今日田ノ郡と謂ふは訛れるなり。

石井郷。郡の南に在り。

昔者此村に土蜘蛛の堡有り。石を用ひず、土以て築り。斯に因て名を無石ノ堡と曰ふ。後人石井ノ郷と謂ふは誤れるなり。郷中に河有り、名を阿蘇川と曰ふ。其の源は肥後國阿蘇ノ郡少國の峯より出で、流れて此郷に到り、即ち玖珠川に通會て一川と爲れり。名を日田川と曰ふ。年魚多に在り。遂に筑前筑後等の國を過ぎて西ノ海に入れり。

鏡坂。郡の西に在り。

昔者纒向日代ノ宮に御宇天皇、此の坂上に登りて國形を御覽して、即ち勅たまはく。此の國の地形は鏡の面に似たる哉。因て鏡坂と曰ふ。斯れ其の緣なり。

靫編ノ郷。郡の東南に在り。

昔者磯城嶋ノ宮に御宇天國排開廣庭天皇の世、日下部君等が祖邑阿自、靫部を仕へ奉る。其の邑阿自、久く此村に就きて宅を造り居れり。斯に因りて靫負村と曰ふ。後の人改めて靫編ノ郷と曰ふ。中に川有り。玖珠川と曰ふ。其源は玖珠郡の東南の山より出で、流れて石井ノ郷に到り、阿蘇川に會て一川と爲れり。今日

田川と謂ふは是れを訛れるなり。

五馬山。郡の南に在り。

昔者此の山に土蜘蛛有り、名を五馬媛と曰ふ。因て五馬山と曰ふ。飛鳥淨御原ノ宮ニ御宇天皇の御世、戊寅の年、大に地震ふりて山崗裂崩る。此の山の一峽崩落て、溫之泉處處より出づ。湯氣熾熱。飯を炊ぐに早く熟ぬ。但し一處の湯、其の穴井臼に似たり。注ぐこと丈餘。淺さ深さを知る事無し。水の色紺の如し。常に流れず。人の聲を聞けば驚きて埿を慍騰ること一丈餘許。今慍湯と謂ふは是れなり。

玖珠ノ郡。鄕、參所。里九　驛、壹所。

昔者此の村に洪きなる樟樹有り。因て玖珠ノ郡と曰ふ。

直入ノ郡。鄕、肆〔四〕所。里十　驛、壹所。

昔者郡の東、垂水村に桒生ひたり。其の高極て陵く、枝幹直く美はし。俗直生ノ村と曰へり。後の人改めて直入ノ郡と曰ふ。是なり。

柏原ノ鄕。郡の南に在り。

昔者此の鄕に柏樹多く生ひたり。因て柏原ノ鄕と曰ふ。

禰疑野。 柏原ノ郷の南に在り。

昔者纏向日代宮に御宇天皇、行幸の時此の野に土蜘蛛有り。名を打猨と曰ふ。八田、國摩侶等と三人、天皇親此の賊を伐まくおもほし、茲の野に在まし、勅て歷く兵衆を勞ひたまへり。因て禰疑野と謂ふは是れなり。

蹶石野。 柏原ノ郷の中に在り。

同天皇土蜘蛛の賊を伐むとおもほして、柏峽の大野に幸ぬ。其の野中に石有り、長六尺、廣三尺、厚一尺五寸。天皇祈たまはく。朕此の賊者を滅さむとす。茲の石を蹶まむに、譬へば柏葉の如く擧れとのたまひて、即ち之を蹶みたまふに、柏葉の如く騰れり。因て蹶石野と曰ふ。

球覃ノ郷。 郡の北に在り。

此の村に泉有り。同じ天皇行幸の時、奉膳之人、御飮を炊に擬て泉水を汲ましむるに、即ち蛇靇有り。（於箇美ト謂フ）茲に天皇勅云。必ず臭からむ。莫汲ませそ。斯に因て名を臭泉と曰ふ。因て名と爲き。今球覃ノ郷と謂ふは訛りなり。

宮處野。 朽網ノ郷に在る所の野。

同じ天皇土蜘蛛征伐と爲たまふ時、行宮を此の野に起たまふ。是を以て名を宮處野と曰ふ。

救覃ノ峯。郡ノ南に在り。

此の峯の頂、火恒に燎たり。基に數川有り、名を神河と曰ふ。亦二の湯河有り、流れて神ノ河に會り。

大野ノ郡。鄕、肆〔四〕所。里一十一　驛、貳所。烽、壹所。

此の郡の部る所、悉皆原野なり。斯に因て名を大野ノ郡と曰ふ。

海石榴市。血田。並に郡の南に在り。

昔者纏向日代ノ宮に御宇天皇、球覃の行宮に在、仍鼠ノ石窟土蜘蛛を誅むと欲て、群臣に詔て、海石榴樹を伐り採て椎を作りて兵と爲し、即ち猛卒を簡て兵の椎を授く。以て山を穿ち草を排け石窟の土蜘蛛を襲ひ悉く誅ひ殺す。血流れて踝を沒る。其の椎を作りし處を海石榴市と曰ふ。亦血流れし處を血田と曰ふ。

網磯野。郡の西南に在り。

同じ天皇行幸の時、此間に土蜘蛛有り、名を小竹鹿奧、（志努汗意拘と謂ふ）小竹鹿臣と曰ふ。此の二人の土蜘蛛御膳を爲すに擬りて田獵を作せり。其の獵人の聲甚讙。天皇大讙（阿那美須と謂ふ）と勅たまふ。

斯に因て大鷺野と曰ふ。今網礒野と謂ふは訛なり。

海部ノ郡。郷、肆所。里一十二。驛、壹所。烽、貳所。

此の郡の百姓は並に海邊の白水郎なり。因て海部ノ郡と曰ふ。

丹生ノ郷。郡の西に在り。

昔時の人、此山の沙を取りて朱沙に該ふ。因て丹生ノ郷と曰ふ。

佐尉ノ郷。郡の東に在り。

此の郷舊名は酒井、今佐尉ノ郷と謂ふは訛りなり。

穗門ノ郷。郡の南に在り。

昔者纏向日代ノ宮に御宇天皇、御船此門に泊たり。海底に海藻多に生て長く美はし。天皇即ち最勝海藻（保都米と謂ふ）を取れと勅たまひ、便御に進しめたまふ。因て最勝海藻門と曰ふ。今穗門と謂ふは訛れるなり。

大分ノ郡。郷、玖[九]所。里二十五。驛、壹所。烽、壹所。寺、貳寺。僧寺。尼寺。

昔者纏向日代ノ宮に御宇天皇、豐前國京都の行宮[より]此の郡に幸し、地形を遊覽て嘆きたまはく。廣く

大なる哉此れの郷。碩田國（碩田、大分と謂ふ）と名く。今大分と謂ふ。斯れ其の縁なり。

大分河。郡の南に在り。

此の河の源、直入ノ郡朽網の峯より出で、東を指て下り、流れて此の郡を經過て、遂に東の海に入れり。因て大分河と曰ふ。年魚多に在り。

酒水。郡の西に在り。

此の水の源は、郡の西柏野の磐の中より出づ。南を指て下り流る。其の色酒の如し。水の味小酸。用て痂癬（胖太氣と謂ふ）を療す。

速見ノ郡。郷ノ伍〔五〕所。里一十三。驛ノ貳所。烽ノ壹所。

昔者纏向日代ノ宮に御宇天皇、球磨贈於を誅むとおもほして筑紫に行幸、周防ノ國佐婆津より發船して海部ノ郡宮浦に渡り泊たまふ時、此の村に女人有り、名を速津媛と曰へり。其處の長たり。即ち天皇の行幸を聞きて、親自迎へ奉り、奏言、此に大なる磐窟有り、名を鼠ノ磐窟と曰ふ。土蜘蛛二人之に住めり。其が名を、青、白と曰ふ。又直入ノ郡禰疑野に土蜘蛛三人有り。其が名を打猨、八田、國摩侶と曰ふ。是の五人並に人と為り強暴、衆類も亦多なり。悉皆謡ひて云へらく。皇命に從はじと云へり。若強て喚ば、兵を興して距ぎまつらむ。玆に天皇兵を遣はして其の要害を遮り、悉誅滅たまふ。斯に因て名を速津媛ノ國と曰ふ。

後の人改めて速見ノ郡と曰ふ。

赤湯泉○ 郡の西北に在り。

此の湯泉の穴、郡の西北、竈門山に在り。其の周十五許丈。湯の色赤くて埿有り。用て屋の柱を塗るに足れり。外に流れ出づれば淸水と爲れり。東を指て下り流る。因て赤湯泉と曰ふ。

玖倍理湯ノ井○ 郡の西に在り。

此の湯の井、郡の西河直山の東の岸に在り。口の徑丈餘。湯の色黑し。埿常に流れず。人竊に井の邊に到り、聲を發て大に言へば驚き鳴て涌き騰ること二丈餘許。其の氣熾りに熱し、向ひ眤くべからず。緣邊の草木悉皆枯れ萎む。因て慍湯の井と曰ふ。俗語は玖倍理湯の井と曰ふ。

柚富ノ鄕○ 郡の西に在り。

此の鄕の中、栲樹多く生たり。常に栲の皮を取りて以て木綿に造れり。因て柚富ノ鄕と曰ふ。

柚富ノ峯○ 柚富の鄕の西に在り。

此の峯の頂に石室有り。其の深さ一十餘丈、高さ八丈四尺、廣さ三尺餘。常に氷凝有り、夏經して解ず。凡柚富ノ鄕、此の峯に近し。因りて以て峯の名と爲り

頸ノ峯。柚富ノ峯西南に在り。

此の峯の下に水田有り。本名は宅田。此の田の苗子、鹿恒に喫ふ。田主、柵を造りて伺ひ待り。鹿到來て己が頸を擧て、柵の間に容れ、即ち苗子を喫ふ。田主捕獲て其の頸を斬むとす。時に鹿請ひて云へらく。我れ今盟立む。我が死する罪を免し、若し大恩を垂たまひ、更存ことを得ば、我が子孫に告げて苗子を喫ふこと勿む。田主茲に大怪異と懷ひて赦免て斬らず。それより以來、此の田の苗子鹿に喫はれず、其の實を獲しむ。因て頸田と曰ふ。兼て峯の名と爲り。

田野。郡の西南に在り。

此の野、廣く大きに、土地沃腴たり。開墾の便、此の土に比へる無し。昔者郡内の百姓、此の野に居て多く水田を開けり。糧を餘し畝に宿し、大きに己が富に奢り、餅を作りて的と爲す。時に餅白鳥と化れり。發て南に飛く。當年の間百姓死に絶え、水田を造らず、遂に荒廢たり。それより以來、水田に宜からず。今田野と謂ふは其の緣なり。

國埼ノ郡。郷、陸〔六〕所。里一十六。

昔者纒向日代ノ宮に御宇天皇、御船周防ノ國佐婆ノ津より發して度ります。遙に此の國を覽して勅たまは

く。彼の見ゆるは若し國の崎かとのたまへり。因て國崎ノ郡と曰ふ。

伊美ノ郷○ 郡の北にあり。

同し天皇此の村に在まし勅たまはく。此の國は道路遥に遠く、山谷岨險、往還疎稀なり。乃此の國を見ることを得たり。因て國見村と曰ふ。今伊美ノ郷と謂ふは其の訛りなり。

一本ニ云

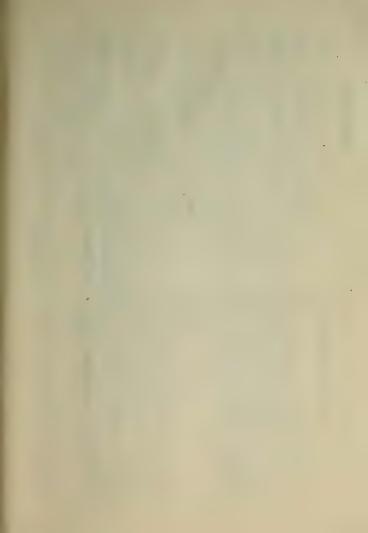
永仁五年二月十四日書寫畢。

同十九日一挍了

文錄〔祿〕四乙未年臘月三日書寫挍合等了　梵舜

これの豐後風土記の書は出雲のにつぎてふるく正しき文なりけるを、いく世にかうつしつたへしまにま、書ひがめよみひがめたる事のおほくて、いまはわきまへがたき所所のあなるを、こたみ難波人の板に彫しむとて、おのれに考正してよといふに、いなみがたく、よついつの異なるを集て、かれに依、くれにあらためて、強て訓はつけたれど、猶いかにぞやおもほゆる事のなきにしもあらぬは何とかもせむ。

寛政十二年五月都のやどりにして挍ぬ。　從四位下荒木田神主久老

豐後國風土記參考

【一オ】〔因〕風土記、豐後國とあり。〔標〕豐後國風土記、一本ニヨリテカク改メタリ。〔因〕和名抄曰。國府在大分郡田七千五百餘町、正公各二十萬束、本稻七十五萬三千八百四十二束、雜稻二十五萬三千五百四十二束。〔因〕同。曰。豐後（止與久爾乃美知乃之利）〔標〕同書曰。管八、日高（比多）球珠（久須）直入（奈保利）大野（於保乃）海部（安萬）大分（於保伊多）速見（波夜美）國埼（君佐木）○〔標〕延喜兵部式、豐後國驛小野十四、荒田、石井、直入、三重、丹生、高坂、長湯、由布各五匹。○二行。〔標〕四十ノ下、百十ノ下、一本共ニ所ノ字アリ。又每郡ノ里云云ノ下、イヅレモ所ノ字ヲ加ヘタリ。今一一イハズ。煩ヲ厭ヒテナリ。【一ウ】一行。〔標〕菟名手、景行紀、國前臣祖菟名手、國造本紀、國前國造、志賀高穴穗朝吉備臣同祖吉備都命六世手佐自命、定二賜國造一トアル手佐自ハ、菟名手ト相近ク聞ユレバ決メテ同人ナルベシ。○同行。〔標〕之祖一本ナシ。○四行。〔因〕一本作レ偏。〔標〕マタ僑宿ヲ一ニ宿焉ニ作リ。又焉宿トアルモミユ。○同。五行。〔標〕勸二僕者一〔標〕一本ニ命トアリ。又勒ニ作ル。勅トアルハ勒ト字體近キヨリ誤レルモノナリ。○同。六行。看二其鳥一〔標〕看、一本者トアルハ非ナリ。○同。六行。數千株株葉。〔因〕〔標〕數千許株花葉あり。〔因〕花、一本無レ之○八行。朝廷。擧狀奏聞〔因〕〔標〕廷ヲ庭トシ〔因〕奏聞の下已上奉の三字有り。〔因〕奉、諸本爲レ本。以二僻按一改レ之。〔標〕奏ノ下、寫本ニ已上本ノ三字アリ。然ルヲ舊印本ニ本ヲ奉と改メタレド、一本ニ擧狀奏聞とあるに從ふべし。【二オ】一行。觀喜之有。〔因〕在舊本作レ有。以二僻按一改レ之。○同。同行。云〔標〕一ニ曰ニ作ル○三行。以〔標〕以、一本次トアルハ非。○七行。里一十四〔標〕一本ニ所アリ。【三オ】三行。日田〔標〕一本ニ日高ニ作ル。國造本紀、比多國造、志賀高穴穗朝御世、葛城國造同祖、止波足尼、定二賜國造一トアル比多國ハ、此日田ナリ。豐後國志引豐西記曰。斯國鴻荒之世、衆山環二四面一、中有二大湖一濶十餘頃。百谿注焉。

洋洋水滿、有二大鷹一自レ東飛來、[illegible]二翔湖上一北面而去。俄然地震鳴動、白日如レ晦。西姬崩裂、水傾涸竭、更作二平野一。所レ餘三岡鼎立、水痕唯留二一帶川一。其南岡名二日隈一、北名二月隈一、西名二星隈一、川名二三隈一、國名二日鷹一。又其飛去之國、名二鷹羽一、蓋豐前國高羽郡也。○五行。在二郡西一。囚西を南とし、南一本作レ西と注す[illegible]石井神祠、石井鄕石井村ニアリ。日向國造止波宿禰ヲ祭ル。初メ田島ニアリ。寛平二年此ニ移ス。○七行。[illegible]阿蘇川、二源アリ、一ハ肥後與山ニ出デ、一ハ小國峰ヨリ出ヅ。合ヒテ一トナル。今大山川ト曰フ。玖珠川ノ源ハ、直入郡九重、大船兩山ノ間ニ發ス。阿蘇川ト、女子畑ニ會テ一トナル。是ヲ日田川トス。今三隈川ト曰フ。【四オ】一行。[illegible]坂上ハ、筑後ニ達スルノ地。天皇此ニ登ル。蓋シ生葉ヨリ日田ニ到ルナリ云云。○九行。仕奉叡部。囚仕、舊本作レ在。以二僻按一改レ之。【四ウ】一行。阿自囚は、阿自。久として阿自、久しくとよみて久舊本作レ玖、又作二玖珠一。以二僻按一改レ之。○二行。叡網鄕。[illegible]今抽木村ト云。鄕ノ下ニ恐クーノ鄕字ヲ脫ス。○同行。[illegible]玖珠川、源ハ直入郡九重、大船二山間ニ發し、玖珠郡ヲ經テ此郡五馬庄赤岩村ニ至リ。大島、湯山之間ヲ經テ、五馬双道ノ界アリ。下井平小淵ニ至リ、大山川ニ會フ。○六行。[illegible]五馬山下ノ聚落ヲ、五馬市ト云フ。五馬莊ニ屬ス、山ハ數山連接シテ、形皆臥馬ノ如シ、故ニ名ク。○七行。[illegible]者一本日ニ作ル。○八行。温泉囚温之泉とあり。[illegible]温之、一本之ナシ。一ニ泉下之字アリ。[illegible]土人云。山ニ泉アリ、熱沸、未ダ浴者アルヲ聞カズ。【五オ】四行。騰沸囚騰埿とあり。[illegible]埿一本ニ泥土ニ作ル。○同行。[illegible]温湯。一本温泉湯トアリ。○七行。球。囚玖とあり云云。玖一本作レ球。○八行。里九[illegible]九下、一本所字アリ。【五ウ】七行。鄕肆所[illegible]囚里十[illegible]里十、一本一十所ニ作ル。【六オ】一行。[illegible]垂水村、今三宅鄕ニ早水村アリ。本郡ノ東界ナリ。或ハ是。【六ウ】二行。[illegible]舊印本、摩佀ノ下、等三人ノ三字アリ。恐クハ衍。景行紀十二年冬十月、到二碩田國一云云。到二速見邑一。有二女人一曰二速津媛一、爲二一處之長一、其聞二天皇車駕一、而自奉レ迎之。諮言云云。又於二直入縣[illegible]疑野一有二三土蜘蛛一、一曰二打猨一、二曰二八田一、三曰二國[illegible]

侶ニ云云。並其爲レ人强力、亦衆類多之。皆曰。不レ從ニ皇命ハ、若强喚者、興レ兵距焉。天皇惡レ之、不レ得ニ進行ニ。卽
留ニ于來田見邑ハ、權興ニ宮室ニ居レ之。仍與ニ群臣ニ議之曰、今多動ニ兵衆ニ以討ニ土蜘蛛ハ、若其畏ニ我兵勢ニ、將レ隱ニ
山野ハ、必爲ニ後憂ニ。則採ニ海石榴樹ハ、作レ椎爲レ兵。因簡ニ猛卒ニ授ニ兵椎ハ、以穿レ山排レ草、襲ニ石室土蜘蛛ニ。而破ニ于
稻葉川上ハ、悉殺ニ其黨ハ、血流至レ踝。故時人其作ニ海石榴椎ニ之處曰ニ海石榴市ハ、亦血流之處曰ニ血田ニ也。復將レ
討ニ打猿ハ、徑度ニ禰疑山ハ、時賊虜之矢、橫自レ山射レ之、流ニ於官軍前ニ如レ雨。天皇更返ニ城原ハ、而卜ニ於水上ハ、便
勒レ兵、先擊ニ八田於禰疑野ニ而破。爰打猿等謂レ不レ可レ勝而請レ服、然不聽矣。皆自投ニ澗谷ニ而死之、トアル時
ノコトナリ。此時天皇土蜘蛛ノ强ヲ聞キ、速見ヨリ來田見ニ次リ、群臣ト議シテ、其黨ヲ稻葉川上ニ殺シ玉ヒ
シナリ。然レドモ流矢ノ危ヲ避ケ、復城原ニ返リ、水上ニトシタリ。此水ヲ神田川ト云フ。稻葉川ト會シ、
下ナル今城原祠後ニアリ。ココニ兵ヲ勒ヘ、再ビ城原ヨリ來テ、八田ヲ禰疑野ニ破ル。其地理經過ノ叙、當サ
ニ此ノ如クナルベシ。【七オ】三行。[illegible] 蹶石野、注ニ在ニ柏野之鄕ハ、恐クハ非ナラン。景行紀上ニ引ク文ノ
次ニ、天皇初將レ討レ賊、次ニ于柏峽大野ハ、其野有レ石長六尺、廣三尺、厚一尺五寸、天皇祈レ之曰、朕得レ滅ニ土
蜘蛛ニ者、將レ蹶ニ茲石ハ、如ニ柏葉ニ而擧焉。因蹶レ之則如ニ柏葉ニ上ニ於大虛ハ、故名ニ其石ニ曰ニ蹈石ニ也。是時禱神
則志我神、直入物部神、直入中臣神三神矣。トミユ。○五行。朕將、囚將、日本紀作レ得。【七ウ】六行。
擬ニ於御飲ニ [illegible] 擬炊ニ於御飯ニとし云く。炊字一本无シ、今ハ箋釋ニ引ク一本ニ炊ニ於御飯ニトアルニヨレリ。
【八オ】一行。敕曰。囚勅云とあり。[illegible] 一本日ニ作ル。○二行。臭泉 [illegible] 一本ニ闇泉ニ作ル。闇ノ字、クラ
オカミニ由アリゲナリ。サレド臭トアルニ從フベシ。○三行。[illegible] 宮處野、今朽網（○網と誤植せり、改む）
村、土人祠を立て景行天皇ヲ奉祀ス。後誤テ燒峨宮トス。笑フベシ。城原今木原ト云フ、相隔ルコト一二里
中、又天皇ヲ祀ルノ祠アリ。【八ウ】一行。[illegible] 救覃峰。大船山。一名大仙アリ。其山中央ニ秀デ、東ニ黑
嶽アリ、西ニ九重アリ、三嶽鼎峙ス。其根ヲ總テ救覃山ト云フ。其高各一里餘。中ニ硫黃アリ、峰上常ニ火

アリ。其下溫泉多シ、大船山上、西峰ニ■國崗アリ。平坦席ヲ展ブルガ如シ。所謂燎基或此トアレド、燎基ノ說恐クハ非。○四行。囚火恒之二字。諸本作二天垣一、以二鮮按一改レ之。○六行。囚一本數字之上有二巾字一。○■黒嶽大仙ノ間ヨリ出ヅルヲ湯原川ト云ヒ、九重大仙間ヨリ出デテ、湯原ニ合流スルヲ神河ト云フ。【九オ】二行。■十一ノ下、一本ニ所トアリ。○五行。囚皆下有二在字一。○原野の下囚■也字アリ。○六行。■海石榴山ハ、直入郡朽網郷稻葉村ニアリ。海石榴樹ヲトリテ椎兵ヲ作リシ處コレナリ。【九ウ】七行。囚網。諸本作レ網。以二鮮按一改レ之。（○編者云。網の異躰網カ又は其の訛なるべし）○同行。■國志、西南ハ按ニ西北ニ作ルベシ。其地較直入郡朽網郷ト接ス。車駕經過ノ地ナリ。■網礒野、今阿志野ニ作ル。六村ヲ管セリ。○八行。及九行。小片鹿。編者云。片は竹の誤なり。囚■ともに竹なり。【一〇オ】五行。■二（○囚■ともに一十二とあり）ノ下、一本ニ所ノ字アリ。○九行。■佐加浦アリ。日本紀ニ、其門ヲ速吸トイヒ、其浦ヲ曲浦ト云フトアリ。佐加郷下浦ニ珍彥洞アリ。珍彥ハ漁人神武天皇海路ノ導者タリ。寬按、海部郡ノ名。蓋此ニ起ル。續日本紀、文武二年九月、豐後國獻二眞朱一トハコノ地ノ產乎。此地朱沙ヲ產ス、故ニ丹生ト名ク。今郷ノ西北ニ久所村ニ地名赤迫（アカサコ）アリ。播磨風土記ニ、爾保都比賣ノ神教ニ赤土ヲ出シ賜ヒ、丹浪ヲ以テ新羅ヲ平伏ケシメ玉ヘルコトヲモ考フベシ。爾保都比賣ハ、丹生津姫ニシテ、赤土ヲ掌ラシ玉フ神ニマセリ。コノ郷今臼杵城ノ地ナリ。城モト丹生城ト云フ。【一〇ウ】四行。囚誤。一本作レ設。一本作レ誤。○七行。■郡東、舊印本ニ郡南ニ作ル、誤レリ。一本ニ據テ訂ス。【一一オ】五行。甚美囚■ともに長美とす。■長一ニ甚ニ作ル。○六行。你那米。囚保都米とし曰く。保都、舊本僞二你都一、依二或考一改レ之。囚■最勝海藻をホツメと訓ず。■小山田與淸云。保都米ハ古本ニ僞都米トアルゾヨキ。ソハ柔藻（ニコモ）ニテ郡ト訓ト米トモト通音ナリ。久老ガミダリニ改メタルハ中中ニシヒゴトナリ。ト云ヘリ。ナホ能ク考フベシ。【一一ウ】二行。■和名抄、大分（於保伊多）郡、……凡十郷アリ。サレド本文郷玖所ト合ハズ。

笠祖笠和恐クハ衍ナラン。五ノ下一本ニ所トアリ。【一二オ】二行。圖寺貳所、舊印本貳寺トアルハ例ニ違ヘリ。一本ニヨリテ之ヲ訂ス。○五行。因豐之上、疑脱二自字一乎。○六行。此郡因此郷とし、郷一本作レ郡。と云ふ。【一二ウ】二行。圖河下之字一本ニ據テ補フ。○九行。圖按、此水、柏野磐石中ヨリ來ルト云フコト、考フル所ナシ。蓋郡西ハ壤ヲ速見ニ接ス。速見ニ由布、鶴見二大山アリ。硫礬ノ氣醸滋シ、方十餘里、處トシテ溫泉アラザルナシ。【一三オ】一行。圖如字ノ下、一本酒字缺ク。○同行。圖箋注、胖ヲ胯ニ作ル。古本眹ニ作ル。字體相近シ。從フベシ。○四行。圖三ノ下、一本ニ所トアリ。○八行。因此條見二景行紀一、可二併考一。圖景行紀十二年九月、到二周芳娑婆（○諸本ハ磨）一時。天皇南望之、詔二群卿一曰、於二南方一烟氣多起、必賊將在、則留レ之先遣二多臣祖武諸木一云云、令レ察二其狀一。爰有二女人一曰二神夏磯媛一、其徒衆甚多、一國之魁帥也。聆二天皇之使者至一云云、參向而啓之曰、願無レ下レ兵、我之屬類、必不レ有二違者一、今將レ歸レ德矣、唯有二殘賊者一一曰二鼻垂一云云、屯二結於菟狹川上一、二曰二耳垂一云云、是居二於御木川上一、三曰二麻剝一云云、居二於高羽川上一、四曰二土折居（○諸本ハ猪）折一、隱二住於綠野川上一、獨恃二山川之險一、以多掠二人民一、是四人也、其所レ據並要害之地、故各領二眷屬一、爲二一處之長一也、皆曰不レ從二皇命一、願急擊レ之、勿レ失、於レ是諸木等、先誘二麻剝之徒一云云、不レ服、三人乃率二己衆一而參來、悉捕二誅之一、天皇遂幸二筑紫一到二豐前國長峽縣一、興二行宮一而居、故號二其處一曰レ京也。冬十月云云、コノ以下ノ文ハ上ノ直入郡爾疑野ノ注ニ引ケリ。併セ考フベシ。注釋云……（箋釋の說一四オ五行。蓋菟狹は以下を引く）【一三ウ】九行。皆謠因圖皆談とし因談本作レ謠。私改レ之。【一四ウ】三行。圖竈門山、竈門庄竈門村ニアリ、赤湯山ト隣ス。○七行。因按。久倍理者、燒之俗言、今猶レ云二火爾久倍留、或毛要久褒理一。【一五オ】一行。圖國志云、鬼山ハ石垣莊鉄輪村ニアリ。風土記河直山是ナリ。河直ハ鉄輪ニ同ジ。湯井ハ小池ナリ、濶二丈餘、深丈許。旁ニ小洞アリ、溫泉出ヅ。盈虛自ラ定アリ。土人鬼山地獄ト云フ。【一六オ】六行。放免因圖赦免とす。因赦一本作レ

致。○九行。因此條引二拾芥抄一、可二併考一。【一七オ】七行。一十六所因■一十六とす■云。六ノ下、一本ニ所アリ。【一七ウ】二行。■國志、今伊美村、伊美濱伊美浦アリ。